

# 池田大作全集

37

# 池田大作全集

## 第三十七卷

### 日記



# 目 次



# 若き日の日記〔下〕

昭和三十一年（一九五六年）

|     |    |
|-----|----|
| 一月  | 13 |
| 二月  | 33 |
| 三月  | 36 |
| 四月  | 48 |
| 七月  | 63 |
| 八月  | 68 |
| 九月  | 71 |
| 十月  | 78 |
| 十一月 | 79 |
| 十二月 | 81 |

昭和三十一年（一九五七年）

一月 ..... 117

二月 ..... 132

三月 ..... 135

四月 ..... 139

五月 ..... 155

六月 ..... 160

七月 ..... 163

八月 ..... 169

九月 ..... 200

十月 ..... 228

昭和三十三年（一九五八年）

一月 ..... 259

二月 ..... 282

昭和三十四年（一九五九年）

|     |     |
|-----|-----|
| 三月  | 299 |
| 四月  | 304 |
| 五月  | 316 |
| 六月  | 333 |
| 七月  | 352 |
| 八月  | 373 |
| 九月  | 380 |
| 十月  | 393 |
| 十一月 | 402 |
| 十二月 | 407 |
| 一月  | 415 |
| 二月  | 432 |
| 三月  | 440 |
| 六月  | 445 |

七月 ..... 447

八月 ..... 456

九月 ..... 460

十一月 ..... 465

十二月 ..... 470

昭和三十五年（一九六〇年）

一月 ..... 485

二月 ..... 524

三月 ..... 555

四月 ..... 583

五月 ..... 604

後記 ..... 「池田大作全集」刊行委員会 609

# 昭和三十一年

— 一九五六年 —



元旦（日）

晴後曇

六時四十五分、目覚む。感激も、なにもなき元旦。これでよいのか。

雑煮を少々……。直ちにS宅へ。父と共に、品川妙光寺へ参詣。そして、理事長、I、K、H、Iと私と父で、目黒の先生宅へ年賀の挨拶。

元旦早々、生命論の深淵なる指導あり。感銘深し。生涯忘るることなからん。

小生、昨夜の疲れか、吐き気を催す。悲しむ。

先生と共に、常泉寺へ。堀米尊能師に御挨拶。

学会本部着——十時三十分になる。

在京地区部長以上の幹部にて、慈折広布の大御本尊に読経、唱題。終わって、理事長、

先生の挨拶。

先生より、年頭の歌、発表さる。

雲の井に 月こそ 見んと

願いてし

アジアの民に

日をひかりぞ送らん

東京駅一時三十五分発の列車にて、初登山。

元旦より、疲労困憊こんぱいの、青年革命児。

真まことの信心を、堅く決意。

一月二日（月）

晴

総本山に在り。

## 第二十八回目の誕生日。

大宗門の、隆昌<sup>りゆうしょう ひょうしょう</sup>を表象する、靈山の莊嚴と活気。

“法華經とは將軍学なり”

新時代の、力ある指導者になることを、初御開扉に祈り奉る。

御目通り。猊下<sup>げいか</sup>、力強い御説法あり。前途の弥々<sup>いよいよ</sup>輝きをます響きあり。喜び深し。

午後三時すぎ下山。帰宅、七時三十分……。

心、暖かにして、家、寒さ厳しきなり。健康を思う時、新しき生活設計を考えねばと思うこと大。

一月三日（火）

快晴

正午まで休む。



幾たりかの友、挨拶あいさつに来る。微熱いねつにて、少々雑談して、帰って戴いたく。済まぬ。希望もて来たる人々に。

スペンサーのいわく、

“第一に大胆たれ、第二に大胆たれ、第三に大胆たれ”と。

信心の究極も、此の決意と実践に尽きる、と一人思う。

夕刻、文京のT宅にて、数十名の同志にて新年宴会。可愛い、第二の兄弟に、栄光あれ。

帰り、支部長宅に挨拶。タクシーで吾わが家に。妻の和服姿、美し。

一月四日（水）～五日（木）

曇後雨

朝九時発、特急「つばめ」にて大阪へ。

曇天……寒さ厳し。実にいやな陽気。いやな心身。

五時より、関西本部にて、「当体義抄」の講義。つづいて、男女班長の指導会。関西本部常住の大御本尊に、祈る。種々。

五日——十時より、個人面接——。夕六時まで。多数の指導をうける人あり。全力投球の指導をす。

八時三十分より、最後の地区部長会。痛烈なる、全力を尽くした指導をなす。

夜行、十時の「月光」にて、一人侘しく帰る。

車中、“本有無作”という事を思索。

頭の悪しき事を、悔む。“以信代慧”の肉弾の如き信心以外に、われのたどりゆく方法も、道もなき事を、深く思う。ああ、凡夫。

一月六日（金）

曇後雨

夜行で東京着……九時三十分を過ぎてしまう。途中、臨時停車多く、十一時間も席に坐す。

疲れた身に、東京駅の凄まじきエネルギーは驚嘆の限り。社会と人間と。

十一時より、全体会議。先生、非常に酔っておられる。されど、頭脳の閃きは、電撃の如し。

- ① 本年度の、目標検討。
- ② 精鋭主義のあり方。
- ③ 社会の動向と訓練。
- ④ その他。

四時より、帝劇へ、妻と弟と行く。吾が舞台に立つ日はいつか、と思いつつ。

一月七日（土）

雨後曇

朝より疲労。苦惱。

先生、お身体からだの具合悪しとの事。夕刻、本部に、お見えになる。淋さびし。何と淋しきことか。

師疲れ、吾われ疲る。宿習か。不二か。

午後より、伊勢丹へ、明日の『子供会』の幹事として、買い物に行く。

I君、H君と三人して、夕刻、会長室に、お邪魔する。

客殿の事、並びに三大秘法の事について、お話あり。また、漢字とその元意とについて、指導あり。勉強不足を悲しむ。

第一にも、第二にも、勤行を立派にやりきること、信心の出發はある。

一月八日（日）

快晴

午前中、在宅。背痛み、微熱あり。三十七度六分との事。三百六十五日、胸と背の痛み消えず。健康になりたい。これのみが全人生だ。

博正、城久、共に伸びのびと育ちゆく。二十年後は、いかなる方向にゆく人生か。健康であり、平凡であり、正義の人たることを願うのみ。自分らしく、悔いない人生を。

五時より、N園にて『子供会』。先生を中心に、昨年の約二倍の人が集まる。八時、解散。『子供会』に入れぬ子供たちが不憫ふびんに思えてならぬ。不公平はいやだ。先生の意味が分からぬ。此の会は、将来は取り止めるべきだ。

帰り、風邪で休む本家の母を、妻と共に見舞いに行く。心から喜んでくれる。母の顔。

一月九日（月）

快晴

早朝、先生と共に、三鷹<sup>みたか</sup>会館の下検分に行く。先生、非常に、お具合悪し。車中で、ぐったりと、お疲れの御様子である。困った。お話をすることも出来ず。

帰りは、そのまま自宅まで、お送りする。入獄、出獄、そして学会の再建、大闘争。生身なれば……。吾<sup>わ</sup>れは、まだ若い。

六時三十分より、自宅に、I氏、Y君、K君、N君を招待。ゆっくり「すき焼き」を御馳走する。

今日よりは、今日よりはとて

今日も暮れ。

“元品<sup>がんぽん</sup>の無明<sup>むみょう</sup>”という事を思索する。休むな。進め。

一月十日（火）

快晴

心身ともに苦し。自己の生命に対しては、自分が最も名医であるかも知れぬ。

私の胸中には、青年なれば、燃え上がる功名心もある。大岩の如き、負けん気もある。反対に、天空を羽ばたく、自由闊達かつたつの境涯もある。

現実から逃避したい、自然主義者の心境あり。名聞名利みようもんみようりの、はかなさを知る、如実知見にょじつちけんの境地も感ずるなり。複雑——青年の心理。

五時すぎ——会長室へ。一時間半ほど、先生と雑談。真実を、そのまま話せぬ苦しみ。弱さ。

“本因妙”ほんにんみょう”ということを思索する。

一月十一日（水）

快晴

嚴寒。幾十年ぶりとの事。自己の境遇も、今や嚴寒の如し。

春を待つ心、大なり。春風、春光。

一生を、どのように生き、どのように完成し、終幕とすべきかと思う事あり。

五時より、N園にて、在京御僧侶招待の新年宴会。八時閉会。久しぶりの、なごやかな会合であつた。堀米尊能師の、御元氣の姿、嬉<sup>うれ</sup>し。大幹部の不統一に、憤りを感じつつ帰る。

O宅へ。地区部長会出席。十時までかかる。

帰宅、十二時少々前。

一月十二日（木）

快晴

先生と一日中、お目にかかれず。苦しい。



『宮本武蔵』読了。小次郎の死。武蔵の剣。思うこと多々。

夜、新大久保のI宅へ。教学試験の子習勉強会に出席。皆、真剣そのもの。その中に、  
明るい瞳<sup>ひとみ</sup>。他の団体には見られぬ、精進と遊樂の世界。全課目を通じて勉強、十時三十分  
終了。

後生畏<sup>おそ</sup>るべし。自分の、実力のなきことを反省。

研鑽<sup>けんさん</sup>、研鑽。行学の二道を。

一月十四日（土）→十五日（日） 晴

東京駅十二時三十分発、特急「はと」で大阪へ。教学試験の為。

車中にて、勉強しようと思ったが、出来ずじまい。困ったものだ。始終、落ちつきのな  
い自分。修行、修行。宮本武蔵を念<sup>おも</sup>い出す。

十一時すぎまで、試験にそなえ、質問をうける。疲労過重。謗法ほうぼうか、左手、神経痛の如く痛む。

朝、在関西本部。寒さ厳し。昨年二月の、厳寒の早朝の戦い、“R寺事件”を思い出す。朝風呂に入れて戴いたく。

一時二十分より、四百二十三名の第一次試験開始。五問題。

自分の講義の善悪が、受験者に反映するわけだ。責任は、所詮しよせん、吾われにあり。

四時三十分終了。つづいて、書記会、並びに幹事会に出席。

七月の大目標に向かい、大闘争の指揮の決意を固む。

二十代の、真の大法戦の初陣か。社会に向かって――。

一月十六日（月）

日本晴

在大阪。

春近しの光あり。希望が湧く。大きく、宇宙の如く、伸びのびと、天空までとどけと、わが心に叫びたい。爽やかな青空。

本年度は、特に地方へ出張多し。上半期の予定を、一人たてる。留守がちの、わが家。矢口の家（妻の本家）近くて本当に心配なし。先生の曰く、君の家は白木の家の近くにしておき給え”の言、今になりて諒す。

一時二十分——伊丹空港へ、先生をお出迎えに行く。S氏と共に。三日間、お会いせぬ師。なんと、一年も、会わざる思いの懐かしさよ。

六時半より、中之島公会堂にて、先生、第一回の「方便品」の講義あり。参加受講者、何と七千名。真剣な眼差し。関西は益々進展してゆくであろう。東京をしのいで。

夜行、大阪梅田駅十時発「月光」にて、帰京。一人で。車中休めず。繊細な神経か、青年詩人は。

一月十七日（火） 快晴一時曇

朝の東京駅に、かね子ただ一人迎えに来てくれる。心身共に疲れきる。一旦、自宅に。十時になる。

健康第一である。——生命力と福運と——。妙法で——信力、行力で。

六時、本部。試験の採点に。終わって、青年部会（男子部）の指導へ。——豊島公会堂。帰宅、妻、美し。

一月十八日（水） 快晴

六時、本部にて、教学部長中心に教授会。第一次試験の最終決定をする厳正な会議。

皆が、試験のよく出来ることを願ったことであろう。しかし、多数の人が落ちてゆく。所詮<sup>しよせん</sup>、信心とは、信心プラス努力、プラス研鑽<sup>けんさん</sup>以外のなにものでもなし。甘き信心は、怠惰の第一歩に過ぎず。

妻、合格。よく頑張った。御本尊様に、純粋に願ひゆく姿——その勉強。力弱き者の、その栄冠。

九時より、Y君、N君と、Tへ遊びながら食事に行く。面白からず。

早く休み、早く起きゆくリズムの生活でありたし。

一月十九日（木）      快晴

先生、一時に帰京、日航機で。

お出迎えに一人ゆく。お元気の御様子。安心する。車中、種々報告。

六時三十分——隊長會議——本部。

帰り、渋谷へ、T部長、青年部幹部をつれて、映画「新・平家物語」を観<sup>み</sup>る。面白からず。

一月二十日（金） 曇

五時より、本部長室にて、最高會議招集。参院選候補、五名立つところ、一名追加が決定。K教学部長である。われ強く主張する。

一月二十二日（日） 曇（初雪）

みぞれ降る。寒さ厳し。

十一時三十分より、最高協議会。一時三十分より部隊長会。三時より蒲田支部会館の開

館式。多忙。激流の如く、時代も人も学会も流れゆく。

K支部長の驕<sup>おど</sup>りに、みな苦しんでいる様子あり。権威の先輩の横暴を、先生は御存知なきようである。嗚呼<sup>ああ</sup>。危機。

待て、純粹なる人々よ。大御本尊様が、厳正に照らす日は近い。

一人起てる時に 強き者は

眞の勇者なり。(シルレル)

一月二十四日(火) 雨

朝、疲れたる身に、鞭<sup>むち</sup>打ち、家を出る。朝の講義に遅れてしまふ。先生の真剣な、お待ち下さる態度に、ただただ頭が下がるのみ。

先生と、親子の如く、主従の如く、生活<sup>くらし</sup>するのは、いつの日までか。ふと考えてしまふ事

がある。あまりにも、尊く、劇の如き、幸せな、絆きずななれば。

所詮しよせん、自己の福運、自己の力、自己の使命、自己の確信は、如何いかん。

六時より、水滸すいこ会。本部。終わって、支部長会。共に出席。

ああ、学会大になり、次第に先生の統率ゆづるの弛みゆくを憂う。側近よ、しつかりせよ。甘えるな。責任を知れ。……と一人憂う。

〔二月〕——昭和三十一年一月一日付け「聖教新聞」で戸田第二代会長は「年頭の辞」を発表、日本が経済、行政、外交等の面でそれなりの安定を得たものの、「何となく物足りない」感じがすると指摘した。戸田会長はその空虚さは結局、「人」がはち切れるような生命力をもつて一日を送っていないところからくると述べ、「社会に信念の人を」輩出する必要を訴えた。また、当日付け青年部の紙面では池田参謀室長（現名誉会長）が青年部の使命を展望し、次代を担う自覚に立ち、一人一人が「強敵を呼ぶ信心」を奮い起こそうと呼び掛けた。

昭和二十六年、旬刊二冊・五千部の発行で創刊した「聖教新聞」が五周年を迎えた三十一年には週刊六冊・二十万部と飛躍的な前進をしていた。この年の一月から関西本部の誕生にともない聖教新聞の関西支局が開局し、地方版として北日本、東京、西日本の三版で印刷を開始し、新た



な言論戦を展開していくこととなった。さらに元日号から毛沢東（当時、中国主席）、周恩来（同外相）、ネール（インド首相）など十人の東洋の指導者へ「聖教新聞」の贈呈が始まった。

戸田会長の願業である七十五万世帯の実現に向け、昭和三十一年は、活動目標に、五十万世帯の達成、並びに地方新支部の結成、大客殿建立（大講堂として実現）への着手を掲げ、転教の駒が進められた。また、二日の本部行事事務会議では、戸田会長自ら月二回、関西で講義を行う旨、決定されるとともに、年頭からは関西をはじめ、北海道、東北、関東、九州等で、全国短期指導が行われ、着実な広布の発展のため、人材育成に力が注がれていった。

第七期教学部員候補の任用試験が、この年の一月十五日午後一時から東京、大阪、仙台など全国十六都市で行われ、千九百八十六人が受験した。大阪では池田室長が担当して実施された。また、関西本部の落成に伴い本格的な関西指導が開始され、その第一回が十六日から十八日まで、戸田会長によって行われ、会場となった大阪・中之島の大阪市中央公会堂には、連日七千人近い会員が集い、一般講義を受けた。

一月十三日、東京・中野公会堂で女子部幹部会が開催され、約千二百人の代表が集った。また、十七日には男子部幹部会が豊島公会堂で約二千人が参加して開かれた。この男子部幹部会で指導に立った池田室長は、「自分自身を研鑽していくことを自覚して欲しい。自分で動かず何で他人を指導していくことが出来るでしょうか」と語り、学会精神の根幹ともいえる「幹部率先」の姿こそ最も重要であることを確認し、この年の第一歩を踏み出した。

二月一日（水）

曇

生命の内奥——生命の一念のみに、真実の『宮殿』ありと大聖人は説かれる。永遠不變の大生命哲学なり。唯心・唯物思想を止揚しゆく、二十一世紀の大思想。

“蔵の財より身たからの財、身の財より心の財第一なり”——此の原理の實踐と証明のための一生を。

六時より、本部。教授会。先生の深遠なる哲理の大講義に感歎あるのみ。

F君、K君と、大阪闘争の打ち合わせ。深刻なる会議……。わが心知らず。二万数千世帯で約十倍の、大闘争である。意味がわからぬらしい。

二月二日（木）

晴

日記を誌しるすのが嫌いやになる。

二月七日（火） 晴

何か、書きたい時、何も書きたくない時、凡人は、いろいろだ。  
急流に流されゆく時、激流にたちむかいゆく時、青年は、いろいろだ。  
孤独が好きな時、皆と語るのが楽しい時、人生は、いろいろだ。

如来寿量品第十六

〃だ おあく どうちゆう墮だ於お惡道中 我が常じょう知ち衆生 行ぎ道よう不どう行ふ道ぎ  
ずい おうしよかど隨ずい應おう所しよ可か度 為い說せつ種しゆ種じゆ法 每まい自じ作さ是ぜ念ねん  
い がりようしゆじよう以い何が令り衆生 得とく入にゆう無む上じよう道 速そく成じよう就じゆ仏ぶつ身しん  
〃

淋さびし一日。

二月九日（木） 晴

早春の候となる。

人生の運命、前途ほど、わからぬものはなし。誰人も、感知出来えぬ未来。所詮<sup>しよせん</sup>、信仰の絶対必要性を、知る昨今。

二時、先生、大阪より帰京。非常にお元氣の姿、嬉し<sup>うれ</sup>。

大阪の牙城も、一年ごとに堅固になってゆく。

七月の、王仏冥合の初陣を、吾れ<sup>わ</sup>は戦わん。

先生の、本門の第一回戦。断じて戦って、報恩。決意、深<sup>しん</sup>にして大。

午後、本部面接。邪宗の害毒に苦しむ人々を、まのあたり見る。正法と邪教。宗教の姿は同じようなれど、その善悪、幸不幸の本源的相違を、どうして人々は知らずや。全力をあげ、個人指導。

六時——助教授会。いつも思う。自己の勉強不足を。

帰り、品川で、友らと食事をして、帰宅。

〔二月〕——一月二十六日から二月五日までの十一日間にわたって、北イタリアのコルティナダンペッツォで第七回冬季オリンピック大会が開催された。同大会で一躍注目を集めたのは、オーストリアのトニー・ザイラーであった。彼は百分の一秒を争うアルペン競技の中で、スキートの滑降、回転、大回転の三種目に圧倒的な強さで優勝し、初の三冠王に輝いた。また回転では、日本の猪谷千春選手が堂々の銀メダルを獲得し、これが日本の冬季オリンピック大会参加史上初のメダルになった。

三月二十三日（金）

晴れたり曇ったり

暖かな一日。

勤行せぬ日は、調子悪し。

文化部作戦会議——本部面接室にて。文化部の人材の刷新を心に思う。学会の進展も、消滅も、此の部の如何いかんにありと、憂いつつ。

信心と政治、社会と仏法、絶対性と妥協性、等々の本質的問題をはきちがうと、危なし。

研究、そして書きたきテーマ。

- ① 日蓮大聖人の国家観、世界観
- ② 宗教界の分析と、その未来
- ③ 文化と宗教

以上

三月二十四日（土）

晴後曇

暖かな春。

春は、われらの天下なり。

朝、先生とお会いする。嚴愛の瞳<sup>ひとみ</sup>先生も、生命を酷使、自分も生命を酷使。共に、疲れ、共にいたわるべき会見。

東京発一時三十五分、名古屋行きにて、総本山大石寺へ。妻と、博正、城久と一緒に。久しぶりの旅行である。家族で霊山の旅とは——。幸福満喫。

六時、本山着。

客殿にて、質問会あり。参加人員、二千二百との事。終わって、御法主上人<sup>げいか</sup>猊下に、お目通り。日昇猊下に、「二高寮歌」——“嗚呼<sup>ああ</sup>玉杯に花うけて”と歌い、御供養申しあぐ。猊座、最後の夜であられる。御隠尊<sup>きようそん</sup>へ。胸奥<sup>きようおう</sup>いばかりか。師と共に、万感の思いを感じる。

東洋広布の健児、健在なり、と叫びたい。美しき、偉大なる夢で、未来へ進軍だ。

幾度も、大阪へ行く事になる。大阪の人々と、心から仲良くしたい。嬉しい事だ。真実

の同志、大阪よ、と叫びたい。

三月二十五日(日)

雨

七時、起床。直ちに、先生を囲んだ大幹部会。理境坊二階の本部にて。

春雨、肅々たり。約一時間……「折伏」の事について話あり。

先生は、最後に一言、われ妙法蓮華經の当体なり、との大確信のもとに生きざる事が、折伏に通ずる義なりと。

折伏の上の授受は、<sup>しょうじゆ</sup>本山なり、即ち折伏の中に含まれた授受は、当然なりと。

財施、法施の中で、法施が真の折伏なりと。

十二時二十七分発「東海」にて、先生のお供して帰京。車中、青年部長更迭<sup>こうてつ</sup>の話あり。

又、未来の広布の構想の様々な話あり。恐ろしくもあり、面白くもあり。



三月二十六日（月）

雨

四級講義に、出席しようか、欠席しようかと、迷い、遂に欠席。弱い、不真面目な自分が、いやになる。自責にかられ、終わりごろ、文京支部の班長会に出席。少々、気が済む。

豊島公会堂に、K女史来ている。文化闘争の先駆のためか。自分も、王仏冥合の実現が広宣流布なり、との第一声を発す。必ずや、闘争の決意をしてくれたと信ずる。

帰り、O宅にて、地区部長会。全生命力を発揮して指導す。

① 阿仏房の信心

② 大聖人御在世の文化闘争と現代の文化闘争の共通性

③ 折伏精神——法施

右の項目を大綱にして話す。

H夫人と帰る。様々な境遇の姿を、よりよく知ってあげたい。信心を奮い起こし、広布

の暁まで、健康でありたい。

疲れた。しゃくだ。残念だ。

三月二十七日（火）

曇

午前中、平凡。

三時、本部にて、最高協議会。先生見えず。理事長中心では、会議の進展はかどらず。組織の位置と、信心の力の相違。いかようにもならずか。先生のお見えになる事が、唯一の私の希望であり、生き甲斐<sup>がい</sup>なのだ。

六時より、久しぶりに、水滸<sup>すいこ</sup>会。二時間、先生のおそばで、歴史観、当時の社会観、人物論等を、胸を痛めつつ聞き入る。博学なる師、深き大指導者。

信長の理想、そして将としての本質。秀吉、家康の、社会観、そして統率力。桶狭間<sup>おけはざま</sup>の合戦の、勝因、敗因の分析。感銘多々。

先生を、送り、K氏の作戦の打ち合わせ。第二応接室。

総本山在<sup>いま</sup>す、国土世間の参議院選なれば、その荣誉と自覚で、戦いゆかれたし、と激励。

おそく、目黒で、妻と会い、食事をして帰宅。

三月二十八日（水）

曇

社会との協調、大切ではある。社会への正義の挑戦、大切ではある。折伏は、慈悲の、社会への挑戦か。政治は、社会への協調の第一歩か。折伏は、その人の本質を革命させ、最大の調和の生命となしつつ、全社会、否、全宇宙の大調和をなしゆく第一歩なり。政治は、その上にあってのみ、社会秩序の、創造と繁栄と、協調が出来るのだ。

夕刻、T夫妻と夜食。少々酒を飲む。愛する文京支部の未来を語りながら。

帰り、妻に、万年筆とショールをプレゼント。給料日なれば。

## 三月二十九日（木） 雨

心身共に、疲労過重。勤行の不足か。

久しぶりに、法華経の講義あり。豊島公会堂。

先生の、真意、次第に解了<sup>げりよう</sup>。喜び多々。

夕刻、豪雨に近し。その足で、池袋の地区部長会に出席。地区幹事のなかに、よからぬ者あり。恐ろし。

今月の折伏、二万世帯にもゆかず。先生は、この根本原因は、どこにあるかと、側近に聞いていたとの事。吾<sup>わ</sup>れ苦悩す。

大阪方面は、五千五世帯と、未曾有<sup>みぞう</sup>の大発展なり。

遂に、立宗七百四年の、偉大なる歴史を飾る日が来るか。

七百年（昭和二十七年）

蒲田支部の、大建設を残す。

七百一年（昭和二十八年）

文京支部の、大発展を期する。

七百二年（昭和二十九年）

青年部の基礎の確立と大進展を終わる。

七百三年（昭和三十年）

都議選、並びに市議選の大勝利を飾る。

七百四年（昭和三十一年）

弥々<sup>いよいよ</sup>大阪春の陣に吾<sup>わ</sup>れ進む。

妙法の青年革命児よ、白馬に乗って、真っしぐらに、進みゆけ。

山を越え、川を越え、谷を越えて。

“走れメロス”の如くに。厳然と、師は見守っているぞ。

三月二十日（金）

雨

春雨――。

ひねもす降りつづく。木曾路を、古城を、歩みゆきたき心いづ。

闘争につぐ闘争のためか、色心共に疲労深し。

「唱法華題目抄」に、

「謗法と申すは違背いはの義なり随喜と申すは随順ずじゆんの義なり」云云と。

大御本尊に対し、唯一無雑の純信あるのみ。学会活動即仏道修行も又、その道理に生き抜くほかに道なし。

誠実と、勇氣と、真実に、起たち進む生涯でありたい。

感情と知性について、先哲は各別に論ずること多し。

しかして、知性の学者の、事実の人生の本質において、いかに頑迷なる感情の強きこと

よ。大慈悲、大感情の上にたつ、英知が、真実の人間完成か。

六時より、先生、奥様と共に、K劇場へ。十時まで観劇。お疲れの先生に申し訳なし。悲劇の主人公を、吾<sup>わ</sup>が若き主人公の姿として、観賞。

三月三十一日（土）

曇

春暖。

東京駅、十二時三十分発「はと」にて、一人、大阪指導へ。

到着と同時に、分隊長会、ブロック座談会、女子部教学研究会に出席。獅子奮迅。大阪の友も、本当に頑張ってくれる。謝す、心の中で。

未来、功德は山と積まれゆく事であろう。功德は、信心は、組織に非ず、役職に非ず。

〔三月〕——年頭から池田室長を中心に開始された“大阪の戦い”は、「教学の浸透を第一歩とし」『人間革命』第十巻)、その上に、できる限り一人一人の会員に会って全魂の指導を展開するという、着実な実践の積み重ねによって、未曾有の広布の上げ潮をつくりつつあった。三月四日に行われた教学部員候補採用試験では、関西は合格率で全国平均を大きく上回る千百一人の合格者を輩出したばかりでなく、三月度の弘教では大阪支部が五千五世帯を達成、二位(蒲田支部三千八百十世帯)以下の追隨を許さない進展ぶりを示した。

この年の三月二十五日付け「聖教新聞」一面に、四月一日付けで『学生部』を設置することが発表された。同部の新設に当たって、戸田第二代会長は、校舎なき総合大学を目指し、優秀な人材を輩出することが同部の使命であるとの構想を明かす。そして、翌三十二年六月三十日の結成大会へ向け準備が開始された。

また、三月二十九日に御座替わりの御儀が、続いて三十日には御相承の儀が挙行され、第六十四世日昇上人から第六十五世日淳上人への唯授一人の御相承が行われた。

敗戦の混乱からの復興も、「特需」「神武」の二度の好景気をバネに順調に進み、この年の『経済白書』は、「もはや戦後ではない」と述べた。しかし一方で、水俣病が発生するなど、急激な復興のかけで様々なひずみが生じ始めたのもこの時期である。



四月一日（日） 雨

関西本部に在り。午前中、休憩。新聞を、たん念に読む。Yのおばさんに、お世話になる。

午後一時——地区部長会。本部三階広間。根性ある人々が見えて来た。指導方針——第二段階に入る。天王山近し。追撃、前進。

六時三十分より、組長会。本部——一階広間。

- ① S支部長の功績
- ② 大阪地区の重要性の意義
- ③ 文化闘争の宣言
- ④ 広宣流布へのプロセス

等話す。

思い出の鬭争。思い出の日々。

## 四月二日（月） 雨後曇

朝、疲れて勤行せず。弱き若人<sup>わこうど</sup>。

午前中、個人面接……数十名来る。

午後、H君と共に、奈良を視察。

華嚴宗の総本山、東大寺を見る。古蹟にして、生命の息吹<sup>いぶき</sup>、全くなし。正倉院、猿沢の池、懐かしきなり。

若草山にて、二十分程、天を仰ぎ休む。修学旅行を思い出し、少年に返る。

五時すぎ、本部に帰る。六時より、班長指導。夜はH君宅へ行く。詩を作り、和歌を作る。現実と、理想の青年。

四月七日（土）

曇後雨

昨日の無理で、今朝は起床するのがやっと。

読書後の感想、鮮明に非ず。

横浜駅で、九時三十五分発の「桜」に乗車。I君、M君、I君等と。大阪二支部連合総会出席のため。共に、学会の未来、人物論を語りゆく。

八時三分、大阪着。懐かしき大阪となる。

雨——念願の大会も雨となるか。胸痛し。

四月八日（日）

雨

雨、遂に雨だった。悲し。

今日は、熱原の三烈士の刑死の日。法難の悲しき日でもある。胸打たれ、身が引き締まる。（編注・刑死の日は①弘安三年四月八日②弘安二年十月十五日の二説あり、現在は②説がもち

いられたる)

難波球場——一時、開会宣言。

二万の学会員、整然と集まる。春雨なれど、降雨はげし。

統監部長講演、文化部長講演、参謀室長講演

指導部長講演、両支部長挨拶あいさつ

主任参謀挨拶、理事長挨拶、最後に、

会長戸田先生の大講演あり。

二時少々すぎ盛会裡りに終了。

七月八日を目指し、ひとり起ちゆこう。一步も退ひかず。

二次会、面白からず。

四月九日(月)

曇後晴

燦然さんぜんと輝く、太陽を見る。昨日の風雨は夢の如し。

午前中、文化部長と種々打ち合わせ。彼も若い。われも若い。共に意見に意地がある。反省……。本有<sup>ほんぬ</sup>の慢と共に許そう。

梅田駅、十二時三十分発「はと」にて、一人淋<sup>さび</sup>しく帰る。車中八時間、読書できえず。勿体<sup>もったい</sup>なし。惜しいことをした。

断固、煙草をやめねば。身体健全の第一歩なれば。

横浜駅に、妻と弟、迎えに来ている。心慰<sup>なぐさ</sup>む。楽しい、幸福な吾<sup>わ</sup>が家に。

先生の慈悲を偲<sup>しの</sup>ぶ。側近の無慈悲を悲しむ。

四月十日（火） 薄曇

記憶が減退して来た。疲れか。

人間の社会は、複雑である。人間社会が、いやになることがある。慢、権威、策……。

福運、誠実、信念……。入り乱れた実相。青年は苦し。

東京方面の参院選、苦戦との事。信心と団結でしか、勝てぬことを忘れるな。船頭が多すぎる。首脳達よ、先生の意志を知れ。それ以外に道は開かれぬであろう。

われは、断じて関西で指揮をとる。東京の闘争に栄光あれ。

夜、先生と、選挙の全般的な展望を語る。真剣なる、先生の瞳ひとみ、忘れきれず。

## 四月十一日（水） 雨後曇

午前中、先生に一時間程、報告。朝の勉強も、随分進んだと、褒ほめて下さる。

師の下もとに、巢立つ栄光。世界一の青春。われに悔いなし。われに幸あり。

大阪の折伏、断然、群を抜いてゆく。楽し。上げ潮の関西。油断なく、美事な指揮を執とる。

りぬこう。数千世帯はゆくだろう。

早めに帰宅。妻の手料理を、おいしく戴く<sup>いただく</sup>。

思索、読書。……十二時すぎに、寢床。

四月二十日（金）

曇

朝、先生、非常にご機嫌。私共も春の如し。生命の感応の不思議。長の一念の作用。

先生と、ご一緒に総本山へ登山。東京駅より“急行”で。幾人かの先輩理事あり。久しぶりに会う。

二時より、総本山御影堂にて、御座替り奉告式に列席。荘厳なり。法華講多く、学会側は、大幹部数十名。

読経、御法主上人<sup>げいか</sup>猊下、奉告の辞。

次に、宗務総監、宗会議長、全国宗務支院長代表の祝辞。

次に、法華講講頭、創価学会会長、全国信徒代表、富士宮市長の祝辞。

先生の曰<sup>い</sup>く、

“宗門のため、広宣流布のため、戸田の生命のある限り、御奉公申し上げるものであります”と。

真実の、奥底より響く、誓いに、すべての人、襟<sup>えり</sup>を正す思いあり。

此の、山をも抜く、簡潔にして、大なる雄弁を。わが胸奥<sup>きょうおう</sup>に点火されたこの火は、生涯、消えることは、断じてない。

ああ、靈山に覚徳比丘おわし、信徒に有徳王あり。宗門の万年、興隆の法運、弥々<sup>いよいよ</sup>確乎<sup>かつこ</sup>たり。

夜、理境坊にて、大幹部会。親子の如く。



四月二十一日(土)

晴

総本山に在り。師と共に。

晴天。太陽は輝く。大法興隆の実相を表象ひようしようして。

朝、六時三十分より、先生を囲んで座談会。大幹部一同。

① 参議院選の打ち合わせ

② 啓蒙運動けいもうのあり方

③ 公明選挙の推進

④ 信心第一

の内容なり。

九時より、御虫払い。客殿……。御法主上人げいか猊下より、二箇の相承、並びに御譲状の御説法を、沁々しみじみと、お聞きする。

日興上人の讓狀に曰く、

“本門戒壇の大御本尊”――。

御聖訓の、本門戒壇の建立こそ、私の生涯の使命なりと、心深く秘めるものだ。

総本山にまします、重宝に胸躍る。御仏意。

紫宸殿御本尊。日天月天の御本尊。不老不死の御本尊。本門寺重宝の御本尊。日向常住の御本尊。御座替り御本尊等々。ほぼ百幅の当門の御真筆に、頭垂るるのみ。

正流なり、根源なり、靈山なり。富士大石寺において、末法の大白法は、いずこにもなきなり。

日本、そして世界への、真実の宗門の宣言の儀式なるか。

正午より、御開扉。

末法万年の間、次第に、太陽に開かれゆく一日。

四月二十二日（日）

曇後晴

一日中、暑し。苦しい陽気。

昨夜、遅きゆえ、朝よりぐったり。

早朝に、先生に御挨拶あいさつにあがる。

八時、先生と御一緒に御開扉。思い出の登山となる。午後三時に帰る予定を、先生より、車で東京まで一緒に帰るよう伝言あり。

ご家族と同乗して東京に。車中、楽しく、談話をはずませる。

本部に寄り、帰宅十一時すぎる。

生涯、二十代の青春の如き人生でありたいと、思う今日こんにち。

「九界即仏界」という原理を思索。

前途は多難あり、嵐あり。<sup>あらし</sup>。その中に勝ちゆく「栄光」が、真実の「栄光」か。

四月二十三日（月）

曇

人生の欲望、人生の倦怠<sup>けんたい</sup>、人生の意義、……何故、われとして生存したのか、何故、苦  
労して生きねばならぬのか。こんなことを、何気なく思う日がある。

一日一日、社会への挑戦、自身への挑戦。こんな社会では、疲れ、敗れゆく人が多いで  
あろう。

夜、文京の地区部長会に出席。厳しき指導をす。これで良いのか。

“天台山の竜門の滝”の講義をなす。二十数名の妙法の武将達、本当に眼を開き、心を  
開きて聞いてくれる。

力とは何か。——信仰のエネルギー。

四月二十四日（火）

晴

私は感情家である。いな、激情家である。正義にも、自己にも、戦いにも。これで良いのか……あやまりか。未来が、その正邪の決定をしてくれるであろう。必ずや、証拠が出るであろう。その時に決めよう。今、自分ではどうしようもないのだ。

六時三十分、参謀会議。

『世界美術全集』平凡社版を購入。嬉し<sup>うれ</sup>し。

帰り、H君等と会食。散財多し。

帰宅、十一時少々過ぎる。

四月二十五日（水）

曇

朝より薄曇り。

大阪支部、九千二世帯との報告あり。未曾有<sup>みぞう</sup>の成果なり。学会の歴史に、宗門の伝統に輝かしき、金字塔を打ち立つ。永遠の栄冠、ここに輝く。

断固、五月度も追撃だ。一万世帯の夢も可能だ。上げ潮だ、怒濤<sup>どとう</sup>の如き。不幸の人々を救っているのだ、俺達は。喜べ、舞え、叫べ、踊れ、歌え、妙法の健児達よ。同志たちよ。

五時、本部で、最高会議。先生欠席。先生がおらぬと、誠に淋<sup>さび</sup>し、悲し。

四月二十六日（木）

雨後曇

明日は大阪へ。

縁深<sup>えにし</sup>き、大阪。友多き国土世間。共に栄えゆく関西。……大苦戦の大阪地方区。学会最大の、大闘争となるS候補。その、最高責任者たるわれ。頭がぐらぐらする時がある。

夜、本部にて、第三部隊の隊長会。

「大白牛車」の講義をなす。不退転の信心の決意、学会活動の本道、社会活動の本道、等につき語る。

将来の、部隊長、参謀室に期待すること大。

帰宅、十一時を過ぎる。少々雑誌を開く。

〔四月〕——四月五日、自由民主党の臨時党大会が行われ、前年十一月の結党以来、初めての同党総裁に鳩山一郎が圧倒的多数で選出された。一方、同月の「聖教新聞」では、社会のあらゆる階層に優秀な人材をとの理念から、七月の参議院議員選挙に全国区で四人、東京・大阪の地方区で各一人の候補者を立てることが発表された。これが後に公明党を生み出すに至る、学会支援の初の国政選挙となる。折しも「常勝」への前進を開始していた関西では、四月八日、大阪、堺の二支部連合総会が、大阪球場で開催された。喜々として集った二万人のメンバーが見守る中、戸田第二代会長がグラウンドへと入場。「大阪の会員諸君の中から貧乏人を絶対なくしたい」との戸田会長の師子吼に、大阪の友は広布への実践に奮い立った。弘教の戦いも両支部でこの年の三月は五千世帯、四月も月半ばにして四千世帯を超えるなど、常勝関西の基盤は着々と築かれていった。堀米日淳上人猥下が第六十五世として御登座の慶讃法要が総本山で始まった四月二十日、広布の人間機関紙「聖教新聞」は創刊五周年を刻んだ。発刊当初は旬刊二冊建てだったが、このころ

には北日本、東京、西日本の地方版も新設され、週刊六頁建てへと躍進した。四月二十二日付けの同紙一面トップには戸田会長の寄稿文が掲載されている。その中で戸田会長は「願わくは一日も早く日本中の人にこの新聞を読ませたいものである」と訴えている。

もはや戦後ではないといわれたこの年、“洗濯機・冷蔵庫・掃除機”の家電ブームが始まる一方で、戦災孤児や引き揚げ孤児、生活苦などで捨てられた孤児は約五千人もいた。こうした孤児たちの親を探していこうと二月の全国知事会の懇談会（東京・九段の知事会館）で提唱され、各都道府県が一体となって進めた、いわゆる“親さがし運動”は、五月の児童福祉週間まで続けられた。ある新聞では千三百三十六人の孤児を紹介し、百四十九人が親に巡り会えたという。

七月十六日（月）

曇

朝、九時、会長室に招集。十一時まで、先生中心に、理事長、理事室等で、最高会議。

夜、先生のお供をして、A氏と会見。場所、N園。天下の士といわれている人と聞く。  
如何。<sup>いかん</sup>大仏法の深淵<sup>しんえん</sup>さにくらべて。



終わって、文京の地区部長会に出席。元気あらず。皆も自分も、疲れているか。

教学論のこと、指導論のこと、を中心に話す。

帰り、みなで、目白駅へ。

七月十七日（火）

晴

健康になっていくような気がする。広宣流布の、その日まで、頑張りぬきたい。

仕事、面白からず。S氏、非常によくなる。S爺、我が儘ままでよわる。恐ろしく元気よいが。

本部へ行く。先生、実に機嫌悪し。

青年部会、午後七時。出席……元気なし。

私は憤激す。青年は可愛い。その青年をいじめる権威主義の、最高幹部達に。

学会の前進を知れといいたい。先生の恩を忘れたかと怒る。恐ろし、恐ろし。われ淋し。

強く生きぬこう。学会の未来のために。

七月二十一日（土）

晴

一日中、先生と、お目にかかれず。

淋しい。朝夕、考える胸は、先生の面影で、いっぱいである。

師弟の仲とは、親子とは、これでよいのか。誰人に聞くわけにもゆかぬ。

夕刻より、四年ぶりにて、博正と三人にて熱海へ行く。F旅館に休む。粗末な部屋に驚く。本年最高といわれる暑い街を、伸びのびと三人にて遊ぶ。

熱い夏に、熱い温泉には、来る人少なく、街静か。

三年後の自己の姿——学会の全貌<sup>ぜんぼう</sup>——日本の潮流——を思うのみ。

生命長遠——生涯——思索——実践。

理と事、智と識、静と動、善と悪。

七月二十二日（日）

晴れたり曇ったり

九時まで休む。いつも疲れる。疲れが出るのか、疲れていくのか、自分ではわからぬ。

朝食をなし、午後より遊覧船に乗る。三人にて、錦ヶ浦、巖岸のまわりを快走。

錦ヶ浦は、朝日（太陽あがる）のとき、また、夕日のとき、巖に波打つ、その銀波、金波に、錦の模様の虹ができる云々と。

その手前、洞窟<sup>どうくつ</sup>。石橋山に敗れし、頼朝の、真鶴<sup>まなづる</sup>を経て、安房に逃<sup>のが</sup>れし、途中の、かく

れ場所なりと。

なお、本年に、六十幾体の、入水じゅすいの悲劇あると聞く。

六時四十八分——東京へ向かう。

『新・平家物語』、『ナポレオン戦史』を読了。

此の三年間、歴史書に、全力をあげる。

「えんぽうふえにん依法不依人」——これ、信心の根源なるか。

〔七月〕——年頭より池田室長を中心に展開された“大阪の戦い”は、五月に一支部で一万一千百十一世帯という未曾有の弘教を達成し、広布史上に永遠不滅の金字塔を打ち立てた。この戦いこそ“常勝・関西”の輝かしい歴史の淵源となるものであった。また、学会支援の初の国政選挙となつた七月の参議院議員選挙には、学会推薦の六人が立候補。大阪地方区では大方の予想をくつがえす勝利を収めるなどして三人が当選した。

八月二十八日（火）

小雨

体力は、人生行動、人生活動の本源である。体力のある人は幸せである。体力なき人は、不幸であるか。

午後、先生より、経済の講義。

夕刻、先生を案内して、T氏の常住御本尊入仏式に出席。先生、お疲れの様子。

新聞の読み方、人物の見方等の指導あり。偉大なる師匠の言を、皆、真摯<sup>しんし</sup>に聞き留めねばならぬ。

ふざけ半分、その場限りに、軽率に相槌<sup>あしづち</sup>を打っている幹部を、情けなく思う。

八月二十九日（水）

雨

小雨……秋立つ。

猛暑の夏も、矢の如く過ぎぬ。ああ、青春期を大切にせねば。

先生と一日中お会いできず。淋しい。

支部幹事の問題起こる。H理事、T支部長と嚴重なる注意をなす。学会の乱れは、幹部の、酒、女、金より起こるか。恐ろし、恐ろし。

文化部員の横暴を心配す。自分の力で議員になったに非ず。社会、そして、会員から信頼され、尊敬される議員になれ。民衆のための議員ではないか。

先生の生命のみが、私の希望であり、生き甲斐であり、一切の人生である。

Z理事、私宅に来る。弱き人よ。自分には、広布の情熱がある人しか、用はないようだ。

八月二十日（木）

雨

今日も小雨。

身体の調子悪し。定根<sup>じようこん</sup>なきか。四大順ならざるか。

六時、先生を中心に全体会議。

曰く、<sup>い</sup>“自己の生活に帰れ。一兵卒になって働け。陣笠の兵、進まずして、何の将か”。幹部の權威主義を叱咤<sup>しつた</sup>せしものなり。

われ、永遠に、此の師と共に、生死、生死と。

帰り、友らと共に「日本かく戦えり」の記録映画を観賞。——新宿。

戦争は悲劇である。戦争は絶対に避けねばならぬ、断じて。思うこと多し。

〔八月〕——各地で大躍進を遂げたこの年、七月度本部幹部会で秋谷男子部長（現会長）が誕生し

た。さらに八月には大阪支部が一举に七支部へと発展し、関西総支部が設置されるなど、広布進展に大きな一歩をしるすことになった。全国では旭川・小樽・函館・秋田・新潟・大宮・浜松・豊橋・名古屋・京都・大阪（三支部）・岡山・高知・福岡の十四都市で十六の支部が結成され、従来の十六支部に加えて、合計三十二支部という陣容となった。

八月三十一日には、八月度本部幹部会が豊島公会堂で開かれた。席上、戸田第二代会長は九月から実施される組座談会の根本精神と幹部の在り方について指導し、組単位の座談会にこそ学会の伝統精神があることを述べるとともに、形式主義や官僚主義を排し、信心の脈動する地道な仏道修行を重ねていくところに真実の人間革命も広布の進展もあることを訴えた。青年部も会合を極力減らし組座談会に全力をあげた。なお同本部幹部会は初の入場整理券制の会合となった。

九月五日（水）

晴

気温三十二度に昇る。残暑、厳し。

先生と種々懇談。

先生、<sup>いよいよ</sup>弥々事業引退のお話あり。名実共に、学会、広布の会長指揮。



来月より、山口県、全面折伏の指示あり。小生、総司令……。義経の如く、晋作しんさくの如く戦うか。歴史に残る法戦。

夜、一年半ぶりに、相模原・橋本に指導。正継寺へ。土地柄か、指導者の責任か、性格か、I宅に、集まれる人、七十名、信心の歓喜なし。

帰宅、十二時を過ぎる。全く疲れた。

愚癡ぐちは断じていな。

九月七日（金）

薄曇

残暑、厳しきなり。

身体だるし。

夕六時三十分より、水道橋の労政事務所にて、教学部講義。『六卷抄』並びに「弥三郎殿御返事」。受講者七十名。遅れる者多し。叱る。

帰り、品川にて、夜食。

火星が、五千六百五十四万キロに近づきたるとの事。天文学は最も好きである。その天空を見、銀河系を思索する余裕なし。現実の葛藤かつとうの社会は。

もっと、自然を、思惟できる、高尚こうしょうな、人生でありたい。

九月八日（土） 晴

すがすがしき朝であつた。

先生より戴いたきしバッジ、置き忘れたとの事にて、妻を厳しく叱る。

十時、先生と共に大石寺へ参詣。

一時半、総本山着。暑い。

夕刻まで、先生と語る。今のうち、あらゆることを教えておかねば、と無言の中に、そのような先生のご様子あり。

質問会——二回にわたる。千数名登山との事。

堀米<sup>げいか</sup>下<sup>うしとら</sup>の丑寅<sup>うしとら</sup>の勤行に、初めて出る。

清く、力強き生命を、ひしひしと感ずる。信仰の<sup>よろこ</sup>歓び。使命感ある者の崇高さを、深く感ずる。

H理事と二人して、そばを食し、午前二時の天空を仰ぎつつ、理境坊にもどる。

毎月の登山を、意義あらしめながら、必ず参加しよう。

九月九日（日）

小雨後晴

秋の爽快そうかいさあれども、暑し。

大石寺在。末法においては、大日蓮華山即大石寺。大石寺即靈鷲山りょうじゆせんである。

丑寅の勤行に出席のためか、非常に疲れる。信心修行の、浅かりし自分を自覚する。

十時、御開扉。題目の功德……身に沁しみてわかる。特に、御開扉後の生命力の不思議さ。

御隠尊貌下に、お目通りする。

その際、先生より、功德論、並びに供養の誠心の事につき、厳しき指導あり。

十二時、堀米日淳貌下に、お目通り。慈悲あふるる、お姿を懐なつかしく思う。

午後、先生より直接、二十六箇条の講義を、お受けする。理境坊の本部で。

二時三十分、下山。沼津にて、乗り換え。

自宅着、十時近くになってしまった。

## 九月十日（月） 晴れたり曇ったり

朝疲れて起きることできず。怠慢か。

自分自身との戦闘——自分自身の弁解。

風の日——塵<sup>じん</sup>あいの嵐<sup>あらし</sup>の日、灰色の社会。灰色の風。

台風去り、秋晴れの、爽快<sup>そうかい</sup>な季節が待ち遠しい。最も愛する季節よ。

午後、会長室にて、先生に面談。ご機嫌よし。何を考え、何をなさろうとしているの

か。偉人の心は、秘密の室にみえる時がある。

六時三十分より、部隊長会議。本部。

一、体育大会の事

一、学生部指導方針の事

一、異体同心の事

自宅、少々改築をする事に決める。

〔九月〕——この年の九月十八日、牧口初代会長のクマ夫人が八十歳の天寿を全うまうされ逝去された。故クマ夫人は、学会創立以来、陰の力として会員の世話に当たられ、牧口門下生の育成はもちろん、広布進展に最後まで尽力された方である。その報恩感謝のために、九月二十九日、東京・池袋の常在寺において学会葬が、しめやかに執り行われた。これには、戸田第二代会長をはじめ、三千人を超える会員が参列し、遺徳を偲しのび別れを惜しんだ。

十月一日（月） 雨

終日、雨天、鬱陶<sup>うつとう</sup>しい。入梅の如き天候がつづく。

山陽方面の派遣闘争日程を決める。二週間にする。歴史的、先駆の闘争だ。誇り高き、前進を。

### 自覚要項

- ① 沈着なる行動
- ② 納得しゆく折伏
- ③ 徹底した指導

青年部部隊長会——第二応接室。新たなる目標指示。

八時三十分、S君の嚴父の通夜に。十一時過ぎまでH兄と話す。大人に祝福あれ。

〔十月〕——十月九日から翌三十二年一月にかけて、全国三十二支部から有志が参加し、学会史上にその名も高い「山口指導」が実施された。池田室長は四カ月間に三回、通算三十日間にわたって山口県を訪れ、総指揮を執った。その結果、百世帯の学会員が点在するだけだった山口県で六千世帯が入信し、山口広布の基礎を築いたのであった。

社会では、十月十九日、モスクワで「領土問題は継続審議」として日ソ共同宣言が調印され、日ソ間の国交が回復した。一方、二十三日にハンガリー動乱が起こり、二十九日にはスエズ戦争が始まるなど、世界は戦雲に覆われていた。

十一月二十九日（木）

快晴

秋深し。天高くわれも体重肥えゆく。十六貫五百匁にと。

二時より、「聖教新聞」新年号の座談会。

『富士五山を語る』と題して。五時近くまでかかる。

本六、新六、富士五山、七山の由来等の内容なり。そして、現在の姿をもって終わる。



教学力、歴史観の必要を沁々しみじみと反省。

おそく、Y君、N君、K君等と、新宿にて映画「静しずかと義経よしつね」を観みる。面白からず。しかし、男女の信頼の姿は美し。

帰宅おそし。天上界に満ちた、吾わが家は楽し。永遠なれ。

〔十一月〕——一日、東京・後楽園球場で第十五回秋季総会が開催され、全国から代表約六万人が参加した。戸田第二代会長は「物質文明と同時に生命の根本問題が解決されねばならない」との講演を行い、体験の重要性を強調した。十一日には第八期教学部員候補の任用第一次（筆記）試験が全国三十一都市で実施され、第二次（面接）試験をへて、新たに千四百四十七人の教学部員が誕生した。これにより教学部は一躍三千六十二人の陣容となった。

世界では、ハンガリー、スエズで動乱の続くなか、十一月二十二日、オーストラリアのメルボルンで南半球初のオリンピックピックが開催され、日本は小野喬が鉄棒で優勝したのをはじめ、金四、銀十、銅五のメダルを獲得した。

十二月一日（土）

快晴

昨日——三十日は定例本部幹部会。

先生の訓話少々あり。

本年三大目標の、五十万世帯の達成は出来ず。嗚呼、学会の前途を憂う。無念なり。

来年度の任用試験を中心に、私も真剣に勉強しよう。

教学力なき指導者は、必ず将来、苦しみ、退歩してしまうであろう。勉強は人のための見栄でなく、汝自身のためである。

早目に帰宅。読書。

楽しみに満ちた家庭。福運にみちた家庭。ただ、信心の功德を思うのみ。

本日より、更に、信、行、学の自覚を。

十二月二日（日）

快晴

恐ろしき夢で、六時頃、目を覚ます。限りなき苦悩。悟うちつつに戻れしも。生命の不思議、自己の内在の世界の、妙法湧現のあらざる証拠。まさに悪夢。死後の生命の地獄界を憶おもう。妙たえなる夢でありたい。

午前中、ひとり大衆風呂へ行く。

夕刻まで横になりながら読書。

妻の母、来る。いつも優しき母。実家の母を恋う。

母と妻に、帯を買う約束をする。ぼくの最高の贈りものである。美しくあれ、幸せであれ。そして、愉たのしくてあれ。

夜、指導部運営会議に出席——本部。十時過ぎまでかかる。

理事室の、聡明を期待すること大。利己主義、權威主義を憂う。未来のため、有為な人材の意見を、謙虚に聞け。それが、先生の意思だ、指導だ。

おそく帰宅。「流浪の民」「美しき天然」等を、妻と共に聴く。

十二月三日（月） 晴

一日一日が速くなって来た。特に師走は――。

体力と精神と頭脳の三者が揃わねば、偉業は達成できないようだ。色心連持――「生命は、所詮、一念に過ぎず」だ。その一念は唯心でなく、色心不二の一念である。これを妙法という。

午後、先生と三十分ほど、お話をする。厳しき師、優しき師――。

六時三十分――本部――部隊長会議。

① 五十万世帯の推進

② 青年部総会の式次第決定

③ その他

十二月四日（火）

晴後雨

自己の修養に、努めねば、大器の將軍になれじ。

一日一日、信心に依り、行学に励め、而して見識の人に進まねばならぬ。

家康の訓話に、また惟う。

“人間の、その一生に三段の変り目あり。よく心得べし、まず十七、八歳の頃は、友人により悪く染ることある。三十歳頃は、物事に慢心出でて、老功者をも、尊敬せぬようになるものだ。四十歳の時分は、物事退屈し、昔を述懐するようになり、心弱くなるべし”

吾人の身を、よくよく反省すべし。而れども、又面白し。

父より「慢ずる者 久しからず」と訓さとされ、これに莞爾かんじとして「慢ぜざる者、又久しからず」と答う。

これ又、頼もし。

七時——青年部、本年最後の幹部会。

「進まざるを退転と申す」の金言を中核に、自身も、部隊も、青年部も、進展しゆく事を指向する。

参謀室と、本部第一応接で懇談。

ひとり侘わびしき思いで帰る。

人は皆、唯我独尊ゆいがどくそんなり。

十二月五日（水）

快晴

二時より、国会へ、日ソ交渉批准の決議を聞きにゆく。約二時間となる。妻と共に。未

来、広布の舞台を、思いつつ。

中野にて『折伏教典』の講義。割り合いに調子よし。終わって、多くの人の相談にのる。

豈<sup>あにみよう</sup>冥の照覧恥かしからざらんや地獄の苦み恐るべし恐るべし慎むべし慎むべし。

(持妙法華問答抄)

『太閤記』——読了、二回目か。小説を書く時の参考と憶<sup>おも</sup>いながら。

十二時過ぎまで、妻と語る。美しく輝く、静かな家。

十二月六日(木) 晴後曇

先生と、久しぶりにお会いする。

父(妻の)に、先生持参の、金時計と、金鎖<sup>いただ</sup>を戴く。誠に、もったいない。私より父に

届ける。

暖かな、平和な一日であつた。

十日より十六日まで、折伏強化週間と決まる。

先生、折伏の師ならば、われも折伏の弟子である。学会が、折伏の唯一の宗団なら、折伏の戦士が、最高の名誉の戦士となる。此の本質の大道を決して忘れるな。

夜、自宅にて、H君等と「御義口伝」の講義の勉強をす。寿量品を終わる。

三年後の自分の姿は、と思う。そして、どうせねばならぬか、を考える。

十二月七日（金）

快晴

一日中、調子悪し。体力なきことを悲しむ。くやし。淋<sup>さび</sup>し。こんな調子では、未来の偉業が、達成できるか。幾歳にて死する運命なるや。



“一身一念、法界に遍す”の原理なれば、信心の一念が、此の生命、肉体の世界を、自由  
に改革できぬわけがない。

夕刻、東京駅の理髪店へ。その足で、常在寺の組長会（文京支部）に出席。終了、十時  
近くなる。

帰り、細井先生に、二、三の話を伺う。

一、佐渡始願の本尊全くなし。

身延山では、明治八年に之れを焼失。その写し此れありと、強く主張しているなり  
と。大聖人の文証には、全く之の事実之れ無し。

田中智学の我見、我執の根拠、全く之れ無しと。

二、日蓮大聖人の、花押かおうは、文永、建治、弘安と三種之れあり。同じようなれども、時  
代で之れ相違あるなり。本尊の花押、此れ又同じ。但し御書の花押は、少々違ふもの

も之れありといえども、三種の段階に違いなきなり。

三、日蓮大聖人の御真筆は、総て<sup>すべ</sup>「釈提桓因<sup>しゃくたいかんにん</sup>」を使用せり。これ梵語<sup>ぼんご</sup>の原語にして、之れを、漢語になおせしものなり。之れを、日興上人以来の法主が、日本の「帝釈」との語に、なおせしなり。

五反田駅まで、妻と、博正、迎えに来てくれる。三人にて、楽しく帰る。永遠にかくあれ。

十二月八日（土）

晴れたり曇ったり

女子部の総会。——午後六時。場所——川崎市民会館。終了、八時三十分なり。

一時より、種々打ち合わせのため、会場へ行く。開会の時には全く疲れきってしまふ。愚か。

盛会……参謀室長挨拶を、約五分なす。

“鳳凰は木を択んで住む、人も師を選んで人生を生きるべきなり”という主眼なり。

帰り、女子部長達と少々語り、蒲田にて、T、U等とコーヒーを飲み、侘しく帰る。

疲れ、すぐ休む事にする。

過去、それは、雲の如く、夢の如し。本有。

## 十二月九日（日） 曇後雨

朝六時少々前に起き、登山。心身共に疲れ、やっと起きる。十一時少々過ぎ、総本山着。

大奥にて、先生と共に、御法主上人猊下にて、お目通り。二か月ぶりである。つづいて、御隠尊猊下に、御目通り。蓮成坊にて。

小雨あがり、もったいないぐらいの上天気となる。

二時、御開扉。苦しき難行が、終了と共に、暗雲、晴れたる心地。一念か。いな、大御本尊の偉力を、ただただ感ず。不思議な力。事実の力。

三時三十五分——富士宮——身延線にて——富士——四時五十七分発にて東京へ。

十二月十日（月） 快晴

私の生涯に、忘れ得ぬ日となる。十二月十日、午後八時三十分、父死去。享年六十八歳。死因、心臓老衰。皆が、テレビを見ている間に死との事。

私を、これまで育ててくれた、厳しき、優しき父が、死んでしまった。嗚呼。大なる親孝行できず、残念。われ、二十八歳。旧き、実直な父。封建的な、誠実な、スケール大なる父。

無口の中に、一度も、叱られしことなきを反省す。嗚呼。静かな、安祥とした遺体を前に、御守御本尊様を奉戴し、読経、唱題、回向を一時間。

残されし、悲しげな母の姿に涙す。父と母との愛情……父と子等との父子の情。久しぶりに会う、兄達。そして兄弟親戚。

先生より、種々の御配慮を戴く。<sup>いただ</sup>感謝。

T氏、並びに同志の方々来て下さる。感謝。

近所、隣人の方々の多数来て下さる。感謝。

貧しき一軒の海苔製造業者の死であるが……。

十二月十一日（火） 快晴

十年ぶりに、実家に泊まる。兄弟、親類の者、十数人にて。やはり、家には度々<sup>たびたび</sup>来なくてはならなかった。痛感。過去は止むを得ぬ。これからだ。

午前中、父の遺体を横に、御守御本尊に唱題三時間。最高の親孝行ができたと思う。

二時、入棺……。母慟哭<sup>どうこく</sup>す。五十年の父との旅。母の心情は、心境は誰人にもわからぬであろう。長い、楽しい、苦しい、旅路であつたことであろう。英知、地位、財産、虚栄、すべてを超越した、真実の愛の妻の涙であろう。

ああ平凡の中の、偉大なる母、そして父よ。

愛別離苦。南無妙法蓮華經。

此の永劫<sup>えいごう</sup>の離別の苦しみ。この絶対の解決こそ、仏法以外になき事を、唯々<sup>ただただおも</sup>念う。

先生、二時五十分羽田発の飛行機で大阪へ。あい間をぬって、空港へ。妻と共に、お見送りす。

“自己のことは、自己が解決、開拓せよ”との無言の指導あり。強き信心。強き強き戦  
う。

十二月十二日（水） 晴

朝、空虚を感じる。父の告別の日だ。

永遠の別れか。方便現涅槃ほうべんげんねはんか。仏法を学する者の重大事である。

白木の父と、妻と、私と三人にて、最後の方便寿量、題目の追善供養をなす。私の最大の味方、決定せり。

出棺、十二時丁度ちやうど。学会からも、多数の方々が参列して下さる。有り難い。

桐ヶ谷の火葬場へ行き、大森の墓地へ。そして、本家に。四時になる。八時まで、親戚等と夕飯を共にす。この三日間は、あまりにも苦しかった。

九時、帰宅。久しぶりに、よく休む。

父の夢を、ありありと見る。ひとり風呂に入り、顔、紅潮させ、楽しそうに、臨終しゆく姿を。あまりにも明確なる画面にて、忘るること出来ず。

十二月十三日（木）

快晴

初七日を営むため、墓地の寺院に、来るよう連絡あり。日本の封建的、無駄と伝統の、非文明的行事に、憤りを感じる。

十一時三十分——大森の墓地へ。誰人も来たらず。墓前にて、ひとり読経。

十二時三十分——皆、集まって来る。母の元気の姿に、安堵す。<sup>あんど</sup>嬉しい。

六時、会長室へ、妻と共に、一切の報告と御挨拶<sup>あいさつ</sup>に参上。

一首脳、側にいて共に挨拶。実に権威主義の、生意気な幹部になってしまった。先生の



心も知らず。先生の力と、組織の力で偉くなったことを、忘れゆくピエロになること勿<sup>なか</sup>れ。

いくら偉くなっても、威張るな。人生は、先輩、後輩の姿を、慈愛と道理で築かねばならぬ。さなくんば、所詮<sup>しよせん</sup>、人材は出<sup>い</sup>でず。

早目に、床につくようにしよう。明日の為に。

十二月十四日（金）

快晴

再び建設、前進、自己の。元気を出して。止まるな、弱き自分よ。

昼、会長室にて、先生より食事を御馳走になる。有り難い。

夜、池袋〇宅にて、地区部長会。皆元気あり、折伏の準備、万全。

「上野殿御返事」の講義をする。

逆即順の法華經の“妙”の一字の功德に結しゆく意義。

帰宅、十二時になる。月光、吾が家に入る。丈夫の心洗う。歴史の流れ、今、盛んなり。

十二月十五日（土）

快晴

先生、お身体からだ悪し。お疲れのところ、お寒いことと、心配する。上野より仙台へ行かれるとの事。ああ、われ軽率であった。お止めすればよかった。ああ、われ若かった。別に代理をいかせればよかった。

巖然と高熱の身で、広布に進みゆく師の姿……。

夜、橋本の正継寺へ行く。相模原方面の指導。頭の中、嵐あらしの如し。

此の地も、信心の息吹いぶきが涌出ゆじゅつ。結局は、汝自身の総在一念で、対境は決定されるものか。

十二月十六日（日）

快晴

よく休む。実によくねむる。ここ一週間の心労、全く癒いゆ。妻……よく面倒をみてくれる。心から感謝。あとの世界は、嵐どとうと怒濤の戦塵である。

妙法に生き、妙法の革命児と共に尽くす、妻。御本尊も、微笑、照覧の事と信ず。

地位が何だ。役職が何だ。名誉が、人氣が、何だ。

午後、S宅へ行く。仲人なこうどとして。御馳走になり、七時、失礼す。妻と共に。

帰り、白木宅へ、暮れの挨拶あいさつ。弟達に、自分の背広や、オーバーを、歳暮として贈る。

少々、両親と雑談して、自宅に。

子らの、寝顔の、なんと可愛い。

十二月十七日（月）

晴

好天がつづく。

初七日、父の事を偲ぶ。

よく、子供のことで、母と喧嘩けんかした、口べたな父。子供のことが心配で、東上線で、子供を迎えにゆく父。子らの入営、出征にも、ただ笑って送り出し、黙々と、荒仕事にいそしんで来た父。強情といわれ、正義一本で生きぬき、損をして来た父。不動の熱心な信者であった父。馬上の青年時代を誇っていた、背の高い、どこか大人たいじんの風のあった父。

子宝の両親。兄達の出征。苦勞してきたことであろう。胸が熱い。しかし、晩年数年間

の、仲良しと、安穩は、大王よりも、幸福生活（精神的）であつたと、僕は信ずる。

父に題目をおくろう。如来の使いとして。

夜、金沢文庫へ。文京支部、第五方面組長会に出席。集まれる人、約七十名。二時間ほど、真剣に指導。此の地に栄光あれと祈りつつ。

帰宅、十二時近くになる。寒さ厳し。

十二月十八日（火） 快晴

先生と、先生宅にて、食事を戴く<sup>いただく</sup>。有り難い。石橋湛山論になつてしまった。決選投票の作戦等。先生の洞察力<sup>どうさつりよく</sup>に驚嘆。ああ、不世出の師。

われも弟子として、孔明に負けぬ、世界広布の智勇兼備の将になりたや……と思う。十年後、幾千万の指揮をとる運命なれば。

夜、参謀会議開く。全員出席。

① 来年度の行事決定

② 東日本、東京、西日本と三分割して、総会並びに体育大会を催す事

帰り、Z君らと、新宿にて会食。

十二月十九日（水）

快晴

朝寝坊。

一日の人生の闘争のスタート、遅れる。決意と、生活設計を、考慮の事。我が儘<sup>まま</sup>な自分。

生活費が少々足らぬとの事。自分の小遣いを考える必要もある……。

夜、理事会。部隊長会。参謀会議。多忙。

① 全部隊長に、手紙を出してあげたい。

② 先輩達が、後輩を心から大切に。

③ 妙法根本の指導であれ。

④ 部隊員の生活、経済を心配する事。

三十にして起<sup>た</sup>ち、四十にして不惑、五十にして天命を知る、と。

日蓮大聖人の弟子は、……年齢にて、区切りをつける必要はなからう。因果俱時<sup>いんがくじ</sup>である。一念三千である。使命感である。異体同心であれば。

ともあれ、信心による人間革命だけは、生涯必要。これ、絶対に、根本なり。

十二月二十日（木）

晴

日記を誌<sup>しる</sup>すことは、自身の片鱗<sup>へんりん</sup>を、刻むことか。歴史を残すことか。自由の対話か。ともかく書こう。

しかし、真実の境地を書ける時と、書けぬ時がある。ずるいものだ——人間は。

朝——早起きしたい昨今。惰性になる生活。

夕刻、部隊長、揃<sup>そろ</sup>って会長室へ。先生“帰れ”と叱<sup>しか</sup>る。意味わからず。困った。しかし自分は誠心で進むだけだ、どうでも良し。

石橋湛山氏、内閣の首班に指名さる。時代は、厳しく動きゆく。

自己を磨け。学会も進め。

帰り、矢口へ寄り、“そば”を御馳走になり、帰宅。

十二月二十一日（金）

晴

一日中、頭が重い。青春の心境は、変化が激しいものだ。



日々、寒さ増す。しかし、身体強くなりゆくを知る。嬉し、嬉し。

御書を、拝読することを忘るな。

小説を、読むことを忘るな。

経済、政治の勉強も、そろそろ、本格的に。

先生の事を、一日中念う。師弟の厳しさ。

六時、本部幹部会。場所、豊島公会堂。

五万八千六百九十四世帯の折伏完遂。本年の最後を飾る。これで、五十万世帯の人々が、御本尊様を受持したことになる。ただ、恐るるは、御本尊の流布の乱雑なり。

常在寺にて、宴会。

帰り、お母さんと、Fさん、自宅に寄る。ゆっくり、雑談。楽し。

十二月二十二日（土）

快晴

明日は青年部総会。

午前中、二軒、歳暮。

夕刻、一時間、先生と懇談。常に深く、厳しい、師匠である。

東京体育館へ、予行の練習に行く。寒き晩であった。喜々として励む、青年たち。輝く瞳<sup>ひとみ</sup>。十年先を、じっとこらえて待つのだ。

いかなる総会にも、いかなる大事な闘争にも、誰人にも認められず、誰人の喜びも考えず、誰人の感謝も欲せず、いつも、ただ陰にて全魂を傾け、指揮と、楔<sup>くさび</sup>を打つ自己——その宿命に、微笑を浮かぶ。

妙法の照覧を、私は堅く信ずるようになった。ああ。

遅くまで、読書。横になりながら。来年は、来年は、必ず、勉強しよう。誓う。自身に。

十二月二十三日（日）

快晴

第五回男子青年部総会、遂に来る。

俺は待った、此の総会を。東洋一を誇る殿堂——東京体育館。未来の、世紀の若人<sup>わこうど</sup>に、ふさわしき場所なり。

九時三十分——会場へ到着。恐ろしきほどの“動”を感じる。

午前中——大レクリエーションの名称のもと、体操、音楽等を催す。

整理に十一時過ぎまでかかる。信心なき青年もある模様、直観す。大信力で指揮をとるのみ。

戸田先生——一時到着。

御法主上人げいか猊下も、最後に御到着。

結集人員——二万名。

先生、"アジアの民は君等を待っている"との講演。登壇者、みな張り切っている。ともかく——盛会裡りに終わる。学会の歴史の、一ページを飾りゆくにふさわしき、立派な総会であつた。

四時——「五丈原の歌」を合唱しながら、感慨無量の心情に包まれ、閉会す。

五時より、Nにて、先生より、中華料理を御馳走になる。疲れきつたせい、あまり、食べられず。

平坦な道を悠々と歩むより、峻しき山を登ろう。革命児は。

十二月二十四日（月）

快晴

身体の具合悪し。微熱あり、三十七度七分。風邪、腹痛、胸痛等。

常楽我浄の人生を、信心を、満喫できるのは、いつの日ぞ。

罪も、罰も、業も、たしかに、此の生命にはあるものだ。

Mさんに、大変お世話になった。Iさんと、二時間ほど談合。いつも変わらぬ人だ。偉い人だと思う。

夕刻、目黒の先生宅へ、お歳暮にあがる。

身体の具合、夜まで悪し。

十二月二十五日（火）

快晴

一日中、心身共に不調。悔しい——淋しい。元氣になりたし。皆は元氣なのに。

一昨日の、Nにての会食の事で、先生は厳しくお怒りとの事。私は驚く。何が原因でお怒りなのか。——考えてみれば、事実、その原因はありそうだ。いつも、いつまでも、厳しき師。反省せねば。所詮、師の意中のわからぬ自己の浅はかさか。師の意中にまで、弟子を、引きあげて、境智冥合させて下さる、大愛か。ああ。

夜、目黒のお宅へ、お邪魔する。お叱りを覚悟で。

十二月二十六日（水）

快晴

一日中、身体の調子悪し。死を感じず。いやな運命——。信心だ。自己と断固戦うことだ。本年最大の病苦か。

さあ、自分との、真実の闘争を、来年から開始だ。自身の病魔に勝てるか、負けるか。栄えゆく青年になるか、滅びゆく自身に終わるか。

六時——M宅へ、妻と御歳暮にあがる。

帰宅、十一時をまわる。思うこと多し。疲労困憊こんぱいの身に、部屋、寒し。

明日は、全体会議。種々思索。

十二月二十七日（木）

快晴

無理して、今日も出勤。責任上、一日たりとも休んでいられない。無理が、いい悪いは別として、“生命”は実に不思議なものだ。全く無理もきくし、休んでいる時より、調子がよくなる場合もある。

先生より、演繹えんえき法と帰納きのう法の話あり。

西洋哲学のリッケルト——新カント学派の認識論と、東洋仏法の唯識論ゆいしきは、正反対である。西洋哲学は“六識”より認識が発する。そして、“七識”“八識”“九識”にいたる。これに反し“九識心王——真如の都”を出いでて、“八識”“七識”“六識”にいたるを、『仏法』なりと。

演繹的——民族。帰納的——民族。いずれが、勝るか。その中道が、必要か。未来は——。

全体会議中、先生の、少年時代、青年時代、そして牧口先生に、お仕えされたお話に、感銘多々。胸中に、脳裡のうりに。

師を守り、師に仕え、広布の楔くさびを、鋭く深く打った、先生の、言々句々、満足そうなお顔。

来年は—— 勤行を、真剣に。  
心身を、鍛える。



境涯を、磨こう。

教学の、実力を。

来年こそ、来年こそ、じたいけんしょう自体顕照を。

十二月二十八日（金）

曇

先生の、お身体からだがお悪いとの報告を、秘書室より聞く。心配す。二、三日、自宅にて、ご静養するとの事。そうして戴いたきたい。

激越な一年の、お疲れがお出になったのであろう。師も病やみ、己れも病む。悔くし。何故、内外の人々は、健康なのか。

歳末の経済、心配していたが、不思議に何とか、年を送れそうである。冥益みょうやくなり。

先生からの、電話を待てど、来たらず。淋さびし。明日は、必ず――。

〔十二月〕——「映画の日」であるこの年の十二月一日、東京の渋谷と新宿で六館、また、この月だけで上野、池袋などで計十六の映画館が相次いでオープンした。いずれも収容人員が千人近くと大型で、スケートリンクやプラネタリウムなどの施設も併設しているものもあり、大型化、多目的化が目立った。これは、テレビの普及に伴って、日本における「ハリウッドの悲劇」を避けるためだったが、戦後日本の急成長を物語る一つといえよう。

十二月四日、十二月度男子青年部幹部会が東京・豊島公会堂で行われた。席上、指導に立った池田室長は、『太閤記』に描かれた秀吉の指導者像にふれ、参加者に対し、大勢の後輩に慕われるリーダーになっていくべきことを要望した。また、この年の三大目標の一つである五十万世帯の達成について、戸田第二代会長の弟子として大いに心配していることを述べつつ、青年部が中軸となって戦っていこうと訴えた。

五十万世帯を目指し広布の前進を重ねていたこの年の十二月八日、第四回女子部総会が、神奈川県川崎の川崎市民会館で開催された。七月に発足した鼓笛隊も十一月の秋季本部総会に続いて文化の調べを奏でた第四回総会は、運営のすべてを女子部が独自で推進した画期的なものでもあった。席上、戸田会長は、御本尊を信じ、純粋に信心に励むことによって、一人残らず幸せになってほしいと指導、激励した。

十二日、東京で日ソ共同宣言の批准書交換が行われた。領土問題が未解決であったため、平和友好条約締結までにはいたらなかったが、これにより、日本とソ連との国交が回復した。この共同宣言をうけ、ニューヨークで行われていた国連安全保障理事会では、日本時間の十三日、ペルーから提出されていた「日本の国連加盟に関する決議案」を全会一致で採択し、十八日の国連総

会での正式な採決を前にして、日本の国連加盟を確定的にした。

十八日、総本山大石寺では大講堂の起工式が第六十五世日淳上人の大導師のもと厳肅に執り行われた。これには日亨・日昇両御隠尊猊下をはじめ僧侶方、また学会から会長代理として理事長らが参列した。学会の真心の御供養でこの日起工された大講堂は、鉄筋コンクリート七階建てで、三、四階は吹き抜けとなつて七百余畳の広さを持ち、音響効果にも工夫がほどこされた内容、外観とも画期的なもので、二年後の昭和三十三年三月に建立された。

二十一日、豊島公会堂で本部幹部会が開催された。席上、十二月の折伏世帯数が二十日までに五万八千六百九十四世帯であることが発表され、三十一年度の目標である五十万世帯の突破が確認された。学会では九月以降、組座談会中心の活動を展開し、全幹部が組に入つて弘法を重ねるとともに、人材の育成、第一線の指導に力を注ぎ、着実な前進を示していた。戸田会長が就任してわずか五年にして、七十五万世帯達成の日もはや目前に迫っていた。

暮れも押し詰まつた二十三日、東京体育館で男子青年部の第五回総会が開催された。早朝まだ暗いうちから、参加する部員は会場前に到着し、正午までの入場者は二万人を超えた。席上、池田室長は、仏法の法理の卓越性を述べ、青年部こそ、その実践の担い手であると語った。戸田会長は、東洋で平和を貫く勢力として日本が立つことが待たれており、この推進力となるのは青年の力以外にないと指導し、青年の成長に期待を寄せた。

昭和三十一年——。この年は、学会が草創期の激闘を土台にして、いよいよ未曾有の大発展へと飛躍していった年であった。大阪を中心とした大折伏戦の展開をはじめ、三十二支部への組織の拡大、組座談会の実施、山口県への開拓指導等々。十二月には、年頭の目標通り五十万世帯の達成をみ、いよいよ戸田会長の願業である七十五万世帯へ、前進の息吹がいやますなか、昭和三十三年を迎えようとしていた。

# 昭和三十一年

——一九五七年——



## 元旦（火）

曇後晴

六時少々前、起床。

元氣なし。昨夜一晩中、眠れず。勤行。

心身共に、疲労あり。元旦の計、一年に通ず……わが元旦、希望重し。

齡、<sup>よわい</sup>数えで三十にして起<sup>た</sup>つ自身となる。われは、俊英<sup>しゅんえい</sup>なる後輩のためにも、決意を固めるべきだ。

八時過ぎ……目黒の会長宅へ。その前にS宅、そして妙光寺に参拝す。先生宅に集まりし人、理事長、理事室と私——九人であった。

先生、飲み疲れとのこと。何もかも、虚飾なき、大人<sup>たいじん</sup>の風格を感じず。

奥様、風邪とのこと。

八時三十分——三台のタクシーに分乗して、常在寺へ。題目を、先生と共に、少々あぐ。

十時——学会本部着。次第に、晴天となりゆく。

方便品、寿量品長行、自我偈じがげ、唱題、そして御観念文——先生の、祈りは、学会の慈折じしやく広布の大目的達成——日蓮正宗代々の法主の謝徳等——神通之力じんづうしりきの大信心の一端を知覚する。

本年初頭の歌——青年部に。

荒海の 鯨しやちにも似たる 若人わこうどの

広布の集つどい 頼たのもしくぞある

嬉し。青年を、誰よりも愛する、先生の心情、嬉し。

「本年は、大阪にも、九州にも、最高幹部は、応援出動せよ」との厳しき指導あり。

東京駅——一時三十分発、長崎ゆき急行にて、師と共に初登山。

晩、先生と共に、法主上人げいか猊下より、年賀の馳走を戴く。いただ

静寂な、本山にて、夜遅くまで、未来を念う。おも春は、遠く、寒、厳しきなかで。

一月二日（水） 晴

満二十九歳の誕生日。

信心ここに十年。

嵐雲と、怒濤に、挑むが如き十年であつた。

あと十年先——三十九歳の時は、いかなる運命の、自身となれりや。

野口米次郎の「元旦の詩」を思い起す。

南極から北極に亘る大海の胸に流れる智の沈黙よ、

太陽が接吻する東から西に立並ぶ山に愛の沈黙がある。

おお、今日一月元旦の沈黙よ……

……

今日一月元旦を祝賀せよ、

声なくて語る、

『時の年取つた心から新しい王様が生れる、

人々は壮大な悲哀の苦痛から生れる王様を見ねばならない、

……』

八時三十分——初御開扉。先生の真後ろまうしろにて、様々のことを願ひ、祈る。

午前中、会長中心に、理事会。皆、真剣。一年の方針の決定なれば。



午後二時三十分——妻と共に下山。思い出多き一日であつた。反省多き一日でもあつた。

一月三日（木）

晴後曇

遅くまで、よく眠る。

近所の子らの、騒ぎで、目を覚ます。食・衣・住、低きこの街。子らは、王者の如く、振る舞う。幸福な低地。平等の子ら——快活の子ら。

西田幾多郎の論文「叡智的世界」と「直覚的知識」を、少々読む。

午後より、文京支部の幹部たち、来る。純真な人たちだ。よく飲んで、三時過ぎ帰る。大幹部の、力ある建設を、一人念う。

鯢部しやちと水象部すいぞうを結成——健闘を期す。本年の、中堅幹部の成長を、深く念願。

支部と支部との間で、少々、仲が悪いところがある。幹部は、全体観に立って協調し、調和を図っていくべきだ。支部員が可哀想ではないか。私は、青年部の進展に、全力を、傾注している。

年賀ハガキ、多く来る。

一月四日（金）

曇後晴

われには、毎年、酒宴なき正月なり。

朝、十時近くまで、床に。微熱あり。弱き生命を、悲しむ。健康な人が、うらやまし。不死鳥の如く、ありたし。

坊、博正と、二人して、朝湯に行く。この子を、遺児にさせたくはない、と念<sup>ねが</sup>いつつ。真白き、新しき、生命の姿――。

二時、家を出る。I宅にて、教学部任用試験の勉強会。皆、真剣なれば、敬服の心、自然に湧き出づるなり。

「三世諸仏総勘文教相廃立」の前段を、五時間、講義ならびに質疑応答をなす。

本年は、講義の仕方、講演、演説のあり方に、深く、研究の要あり。痛感。種々培養せねば。

八時より、O宅にて、男女青年部有志にて、新年宴会。清浄、清純、清香の人なり。また、青雲、正常、誠実の人たちなり。

帰り、二軒、年賀の挨拶に回って、疲れ果てて帰宅。十二時を回る。

嫦娥の光……無限の、静寂あり。小さな、貧しき、暖かなわが家を、黄金の光で、照らす。

一月五日（土）

晴

今日も、晴。嬉し。

午前中、休息——読書。群雲の如く、種々、未来への思念湧く。

二時より、I宅にて「三世諸仏総勘文教相廃立」の後段を講義。無力なれど、全力を傾注。

夜、本年最初の、志木支部の幹部会に出席。真心こめ、指導をなす。人々の幸福を、希う時もあり、その気持ち、湧かぬ時もあり。不思議なる、凡夫の思念。

蒲田駅に、妻、迎えに来ている。十二時過ぎる。小さな、静かな途に、清月に名曲、名吟の、惜する念いあり。

疲れてなかなか眠れず——友らに、ハガキを数葉。

先生の、お身体を、心配する。  
からだ

一月六日（日） 晴

四回目の子供会。十二時、第一回、G園。第二、第三、第四回はN園。数组の子供会より、二十数组の子供会に発展。多数になるにつけ、どんよりと、複雑を感じず。清水の溪流と、暖かな、強き団結の要を痛感。遅刻する者、また多し。先生の怒り、厳し。

三時、解散……「男度胸の歌」……「ソーラン節」を舞うなり。

六時まで、妻と城久と三人にて、後楽園に遊ぶ。帰り、電気蓄音機を、八千五百円にて購入。遅くまで、子らと遊ぶ。明日より、いよいよ出勤。生活設計の確立を。

一月七日（月） 快晴

午前中、先生より、種々指導あり。

他国侵逼たこくしんびつの難ありて、必ず仏法興隆す、との話あり。

末法、大聖人の時は、まさしく、蒙古襲来、元寇げんこうの役えきこれなり。

末法、化儀の広布の時代は、これ太平洋戦争であつた。仏法は、苦悩の民衆を救済するところに、大使命がある。

先生、非常にお疲れの様子。最後に「青年は、諂へつらう人になるな」と。

夜、支部長とA君と、三人してN宅に寄る。

小一時間ほど、種々懇談。日蓮正宗の「鶴」の紋のこと、大御本尊の「輪宝」のこと、日興上人の「亀」の紋のこと、日日上人の「松竹梅」の紋のこと、等の話をする。

先生と、お会いした日は、嬉うれし。お会いせぬ日は、淋さびし。わが人生の、生命の響き。

T君、早く帰れ、と心より祈る。

一月十日（木）

快晴

身体の調子、全く悪し。快方にむかわず。悔し。

午前中、北海道指導のため、日航券を、一人、買いに行く。

先生より「日銀券の発行高、手持ち外貨高、流通速度の調査をするように」と話あり。

六時三十分より、会長室にて、男女青年部最高幹部会議。本年度の基本方針、予算等の発表あり。

駅より、疲れ果てた身体を、引っ下げて帰る。疲れ果てた青春。途中、夜店の、おでん屋にて、一皿食す。

先生のことを思う。先生のことを、唯、思い巡らして、早十年が過ぎたり。

一月十二日（土）

曇後晴

一日、寒し。

無理に、無理を、重ねゆく人生。わが宿命の、止まらざる流転<sup>るてん</sup>。厳しき、怒濤<sup>どとう</sup>にたゆま  
ず、挑<sup>いど</sup>みゆく師弟。新大陸に、たどりつくまでは、断じて、死することは、できぬ。

夜、妙縁寺へ。第三部隊の幹部会に臨<sup>ふ</sup>む。旧<sup>ふる</sup>き友あり。新<sup>あらた</sup>なる友あり。これらの友に  
も、未来、輝く民衆の勝利の日まで、辛<sup>しん</sup>勞<sup>ろう</sup>をかけることになるう。

N君は、良き友である。善良な友人でもある。

明日は、独<sup>ひと</sup>り北海道だ。風寒し。そして、経済もまた。

福智の建設の、一日一日に、栄光あれ。



一月十三日（日）～十六日（水）

北海道指導……雪の夕張……広野の札幌なり。<sup>たの</sup>うれしい、有意義なる、思い出深き、旅であつた。

一月二十八日（月） 曇

一月十九日（土）～二十日（日） 大阪市で指導、講義。引き続き、地方指導へ。

” 二十一日（月） 岩国市、指導。

” 二十二日（火） 徳山市、指導。

” 二十三日（水） 防府市、指導。

” 二十四日（木） 宇部市、指導。

” 二十五日（金） 下関市、指導。

” 二十六日（土） 広島市、指導。

” 二十七日（日） 大阪市、講義。

” 二十八日（月） 特急「つばめ」にて帰京。

宿命打開と、広布の布石に、全力傾注の闘争せり。その実証、いつの日に出づるや。

一月三十一日（木）

曇時々雪

一月も早過ぎ去りぬ。戦いは長く厳しい。しかし、結果は全て瞬間だ。

朝夕、法華三昧の、勤行をしたい。禅定なき、わが生命を、猛反省す。

一日も早く、大海を渡り、大空を飛び、海外の広布に、征きたくなる衝動に、かられる時あり。神秘的な、開発途上の——東南アジアに。文明先進の——アメリカに。激動、新興の——共産主義国に。キリスト教民主主義の——西欧諸国に。二十一世紀の開発途上国——アフリカ、南米に。そして、未来の大地——豪州に。夢よ、消えるな。

夜、教授会。本部広間。

一、御書を拝読することを続行のこと

一、良き小説を読む習慣をつけること

一、「大白蓮華」に執筆のこと

右、再び決意する。

帰り、理事長らと一緒に。非常に、疲れる。

室に、<sup>へや</sup>沈<sup>じん</sup>丁<sup>ちやう</sup>花<sup>け</sup>の、香あり。嬉<sup>うれ</sup>し。

〔二月〕——昭和三十三年元日付けの「聖教新聞」で年頭の辞を発表した戸田第二代会長は、前年十月、ソ連軍の撤退や自由選挙などを求めるブダペストの市民が起こしたハンガリー動乱について言及。地球上に思想的対立があるが、もし釈尊やキリスト、マルクス等が集まって大会議を開いたならば、決して相争う協議にはならないだろうと述べ、地上から「悲惨」の文字をなくすことが先哲の願いであり、仏法を弘めるのも真の民衆救済を実現するためであると語った。

一月十七日、男子部は豊島公会堂で約二千五百人の代表が集って男子部幹部会を開催。また、女子部では同日、中野公会堂で約千七百人の代表による幹部会を開催。生命力をみなぎらせ、堂々と信心していくことを約し合った。男子部幹部会に出席した池田室長は、「男子部がいれば末頼もしい」とみられるような青年部を共に築いていこう」と指導した。こうして学会は八十万世帯を目指して新年を出発した。いよいよ戸田会長の生涯の目標であった七十五万世帯が射程に入ったのである。

前年秋より、中東では領土紛争が絶えず、「世界の火薬庫」の様相を呈していた。米アイゼンハワー大統領は五日、中東特別教書を議会に提出。後にアイゼンハワー・ドクトリンと呼ばれる、この政策が実施されることはなかったが、社会主義諸国の勢力伸長と植民地地域の独立による、西側諸国の焦りが大きく反映していた。

二月十三日（水）

快晴

教学力の、足らざるを、反省する昨今。不断の努力の、必要あり。これからの指導者の、第一義の問題たり。この一年——読書の年でありたい。

T君の問題で、頭を悩ます。先生の、指導通り臨もう。

Mさんには、大変、お世話になった。感謝。

夕刻、会長室へ、U氏と共に、挨拶<sup>あいさつ</sup>に行く。

帰り、先生に、新宿の“T”で、天ぷらを御馳走になる。思い出の日、また一つ。

帰宅、九時少々前。K氏、Z氏、来る。種々懇談。

静かな家——暖かな家——福運に溢<sup>あふ</sup>れた家——清潔な家——青春譜の家。これ、小さいながら、誇り高きわが家。

## 二月十七日（日） 曇後晴

昨日より沼津指導。T館に、疲れ果てた、身体を休憩。

寒い。身も心も。九時十六分発の列車にて、東京に向かう。正午、東京着。

即座に、教学部任用の第二次試験の打ち合わせ会へ。続いて、講師より助教授への、昇

格試験開始。

わがグループは、S氏、Z氏と、私の、三人の試験官。約三十名の、試験をなす。

会長室にて、八時まで教授会。新たなる助教授、多数の誕生決定。

Y著の『政治家と事務家』を読む。面白からず。少々、本棚の整理を。わが子の如き本――。

〔二月〕――二月二十一日、この日、戸田第二代会長を中心とする教授会が学会本部で開かれ、昭和二十九年四月に増刷、配布されながらも、希望者が多く品不足になった御書の新組み再版が決定された。校正の完璧を期するため、全教授が二十三グループに分かれ、各二人の助教授の協力も得て、校正作業を開始することになった。また、助師・講師昇格試験合格者が決定した。新たに助教授四十八人、講師三百七十人が誕生し、教学部の陣容は教授二十七人、助教授百十六人、講師七百八十一人、助師二千百九十三人となった。

二十二日午後六時から、豊島公会堂で二年度の本部幹部会が開催され、地区部長、地区幹事以上の約二千人が集い合った。席上、戸田会長は、学会は純粋な信仰の団体であり、信心をもって構成・運営するべきであると強調。また学会内の位置を利用して会員に対して権威的に振る舞う行動を厳しく戒めた。

社会では二月二十三日、石橋内閣が首相の病気によって総辞職。わずか二カ月の短命であった。臨時首相代理であった岸信介外相が首相に就任し、二十五日に組閣した。

三月六日（水）

快晴

寒風、しきりなり。冬去り、春よ来たれ。早く。

風邪<sup>かぜ</sup>気味。微熱<sup>かぜ</sup>続く。

『歴代内閣総理大臣論』『人の統率法』を読む。面白からず。

阿部<sup>あべ</sup>伊勢守<sup>いせのかみ</sup>正弘<sup>まさひろ</sup>は、二十五歳にして老中、英国のウィリアム・ピット（小ピット）は、二十四歳にして首相なり。国難の解決にあたるか。青年の力。

信心即人間革命、人間革命即社会革命の原理が、沁々<sup>しみじみ</sup>、知覚される昨今。

善人、悪人の基準が、解せぬ矛盾<sup>むじゆん</sup>。妙法を基準に、深く、鋭く、見極めゆく自分にならねば。人を指導するに、過ち<sup>あやま</sup>を作らざることが大事だ。公正に、性格の短と長、心、行動を見極めて……。

可哀想な人を、護<sup>まも</sup>りたい。善人を、盛り上げたい。正義の人を、支えたい。

最後の勝利……。

三月十九日（火）

晴時々曇

昨日の、夜行列車の疲れ、多々なり。  
身体、だるくて、苦し。一日中……。

平凡な日は、嫌<sup>いや</sup>だ。宿命の打開とは、難題である。



新しき、生命の胎動<sup>たいどう</sup>で、立派になった姿を、先生に、見ていただきたい。

午後より、先生と共に、A君の結婚式に、出席。諸天も、祝福あれ。

式後、大阪参院選のことで、種々、厳しき指導あり。厳父の、叱責<sup>しつせき</sup>にも似て。

帰り、Z氏らと映画「花は嘆かず」を観<sup>み</sup>る。渋谷にて。あまり面白からず。

静かにして、豊かな、幸せの、わが家。

唱題に……力湧<sup>わ</sup>き出<sup>い</sup>づる思いあり。

一、弁解せぬ、人生であれ

一、堅実なる、人生であれ

一、健康なる、人生であれ

今日も、青春の日、一日終わるか。

三月二十七日（水）

快晴

朝、腹痛にて、起きられず。妻、大變に心配し、医者をと……。午後より、出勤。病魔……先生に、心配かけ、申し訳なし。

四時より、先生と、B店の、落成式に出席。終わって、T君の結婚式へ。品川の妙光寺に臨む。淋しい、式典であつた。

帰宅、八時少々過ぎる。横になりながら、大阪の参院補欠選の、作戦を、じっくり練る。

統計的には、落選間違ひなし。〃石に立つ矢の例あり〃の、闘争しかなし。  
祈ろう。戦おう。開こう。拓き進もう。

〔三月〕——三月二十九日、豊島公会堂で三月度本部幹部会が開かれ、戸田第二代会長は「社会が

繁栄してゆけば、同時に個人が幸せにならなければならない」と、語った。

昭和三十二年に入って次第にテレビ、冷蔵庫などの電機製品は家庭の中に普及していった。また、例年になく、女性に対する求人が多くなったが、これは、中小企業が、好景気の波に乗って、女性社員の採用を積極的に推進したことが大きな要因である。しかし、こうした活発な経済活動によって国際収支はバランスを崩し、三、五月の公定歩合の引き上げをきっかけに「なべ底不況」を迎えることになったのである。

海外では、三月六日にガーナ共和国が独立し、エンクルマが大統領となった。二十五日には、フランス、西ドイツ、イタリア、ベネルックス三国（ベルギー、オランダ、ルクセンブルク）が欧州経済共同市場（EEC）・原子力共同体（ユーラトム）両条約に調印し、昭和三十三年一月から正式に発足することになった。一方、ハンガリー政府は三月二十八日、ソ連軍の恒久的駐留を承認している。

五月一日（水）

曇一時にわか雨

暖温……一日あり。早、<sup>はや</sup>緑の五月。

麦の緑、蓮華草、懷かしき、わが季節。

二十九歳の春。静思に非ずして、動思の昨今。

四月三十日、先生倒る。重大なる、学会の前途。

今年は、悲しきことばかりなり。三障四魔の、嵐の年である。大阪・参院補欠選の、大敗北。

幾度か 戦の庭に 起てる身の

今日の悲しみ いつぞ忘れん

既成の腐敗勢力に、勝つ日は、いつぞ。必ず、必ず。

午後、S工業所の、竣工式に列席。平凡な一日。

五月二日（木）

曇後雨

先生のお具合、良好の由。<sup>よし</sup>安堵。<sup>あんど</sup>

午後より、小雨あり。自己の幸福について、“病氣と悔恨”<sup>かいこん</sup>は、悪と断じた——トルストイの心情を、思わずにいられない。

夜、八時より、東京・国際スタジアムにて、第十六回春季総会の予行。十時過ぎまでかかる。

この偉大なる、大河の如きエネルギーよ。

皆に、希望あり、確信あり、歓喜あり。自己の弱さを、沁々<sup>しみじみ</sup>感ず。

五月三日（金）

晴

父と妻と、三人して、東京・国際スタジアムの会場へ。雲の如く、湧き出づる、地涌<sup>じゅう</sup>の

戦士の、この力。

先生、お元気なり。安心する。十年、二十年、生きて、生きて、生き抜いて戴いたきたい。  
胸中祈る。広布のため、我らのため、人類のためにと。

十二時ちょうど——入場式。三時、終了。

非常に充実した、満点の、総会であろう。

終わって、目黒Gにて、二次会。二百名による、盛大なる、宴会。

青年部最高幹部たちと、遅くまで、打ち合わせ会……。

蒲田駅の近くで買い物のため、妻と駅で落ち合う。時間を約束せるも、二時間以上も待たせ……悪いことをする。

五月四日（土）

曇

午前十時より、Nにて、緊急支部長会議。

十二支部長等、定刻に、全員揃うそろ。

一、御書発刊の件

一、大講堂落慶記念総登山の件

一、市・区議會議員選出の件

以上——議題なり。先生、真剣な眼差まなざし。

昨日、買い物できず、そのため、夜、再び、妻と、時間を約束……一時間以上も、寒い所で待たす。さすがに怒っていた……可哀想になる。これからは、気をつけよう。

Y親子、遅く、自宅に来る。善人。

あらゆる国土世間に、立派な人が、出てほしいものだ。

遅くまで……読書……思索。

## 五月五日（日）

曇

子供の日。快活な子供。天真爛漫てんしんらんまんな子供。人類の天使であり、現在より未来にわたっての宝である。

午前中、城久らと、楽しく遊ぶ。

午後——御書の校正、あまり自信なし。

平和なる一日、一日。刻々、変転しゆく社会。また、明日も、頑張ることだ。肉弾で。

## 五月六日（月）

曇

一日中……色心共に憂ゆううつ。今朝、勤行せぬ因果か。猛省。



信心、学会、人間、未来、現実……経済、政治、文化、科学、教育……さまざまなことを、徒然<sup>つれづれ</sup>に、考える時がある。

「御義口伝」の講義……再開。先生の名講義に、胸打たる。大哲学の、達観の力。悟達の境涯よりの言々句々。われを恥じ、わが力を、嘆くのみ。

大幹部らと、共に帰る。淋しき思いをしながら。信心は、感傷に非<sup>あら</sup>ずだ。

四条金吾の信心、鏡とせねば。否、それ以上の指導者にならねば、広布はあらず。

負けるな。断じて、障魔に負けるな。自身に挑戦。

五月七日（火） 雨

一日中、小雨。

水星が、太陽表面を、通過したとのこと。

苦しい、悩める一日、一日である。

夕刻、会長室にて、先生と懇談。種々、指導をうける。先生の慧眼けいがんには、恐れ入るのみ。

七時より、第二回学生部総部員会に出席。

三点について指導。

一、学会先駆の自覚を

一、学業と学会活動とに関する具体的方針

一、広布と学生の将来

Mさんらと、語り合いながら帰宅。

阿部次郎の『秋窓記』を読了。

五月八日（水） 雨

雨……今日も雨。

電車混み、体力消耗しきる。車中にて、新聞も読むことができず。ゆとりなき、社会、人生。

株、暴落。

“川中島”の歌を、口唱する昨今。

六時より、B支部長更迭こうてつのため、新橋にて、送別会。先生と共に出席。十時まで、宴は進む。M君は、骨のある人物か。

批判しあう人生に、あきあきする。毅然<sup>きぜん</sup>たる人格を、作り上げたいものだ。

友もなく、淋<sup>さび</sup>しく帰宅。

## 五月十一日（土） 雨

大阪での講義を、急ぎ中止し、名古屋に止まる<sup>とど</sup>。大阪地検の、様子が、おかしいのとこと。F弁護士ならびに、大阪の最高幹部らと懇談。

五年ぶりの、中京である。偉大なる、田舎<sup>いなか</sup>の感じの名古屋。名古屋に、深き、指導の手を入れねば。S君が、同行なり。偉い人だ。

T支部長宅にて、質問会を、二時間。疲れる。終わって、青年部の幹部会——出席者は二百名。

雨しきり。障魔の感、強くあり。

駅前旅館に泊まる。大阪の幹部、数名と。

先生……第一回北海道総会に、ご出席。大阪行きの、私のことを、非常にご心配であつたことを聞く。胸が痛む。ありがたき師。

T支部長は、善良な人だ。

戦い、向上、教学、人格、同志の絆……きずな。財力、権力、派閥力……。

五月十二日（日） 雨

八時、起床。

在、杉田屋旅館。

雨……入梅の如き、憂うつな雨。我が心中の如し。

弁護士らと、種々、打ち合わせ。

大事な時に、人々の善悪が、わかるものだ。大事な、事件の時に、立派な、態度でありたい。

夕六時より、皆で「荒鷺の翼」の映画を観る。皆、久しぶりにと、大喜び。わが心境も、知らずに。

早暁<sup>そうぎよう</sup>、二時二十三分発「月光」にて、帰京。寒い、車中であつた。一睡もせず、様々なことを考える。瞑想<sup>めいそう</sup>。

今年もまた、苦難との、戦いの、連続か。

五月十三日（月）

曇

先生のことを思う。千々に思う。特に、学会の前途を、憂えずには、おられない。先生のご心境、誰人も、知らずか。

朝、九時二十三分、東京着。

東京の、〇弁護士とも、種々、打ち合わせ。希望を抱いて、前進だ。信心、本格的な信心なり。

先生の奥様の、招待で、妻と私、芸術座へ。

“暖簾”……大阪根性の、昆布職人の、一生の歴史劇。一道に徹しゆく、真剣なドラマに、美しき涙を、さそわる。

心身共に疲れ果てる。……妻と、ハイヤーで帰る。

日記を、記すのも、つらし。字、乱れゆく。

五月十四日（火）

晴時々曇

身体、非常に悪し。三十七度八分の熱。

弟の職が決まり、嬉しい。努力せずして、偉き人なし。彼も、努力さえすれば、優れた人物であるのに。

先生——北海道より帰京、二時十五分上野着。奥様と共に、お迎えに行く。非常に、お疲れの様子。われわれは、疲れたと連発するのに、師は、一言もいわず。

会長室にて、一時間、様々のご報告をする。先生の、何か決意されるを、直覚す。恐ろしくもあり、淋しさも感ず。

夕刻、部長会に出席。茲に、十三部隊誕生す。女子また、五部隊誕生せり。青年部よ、盤石たれ。



背の痛み、激し……何の謗法ほうぼうか。健康でさえあれば……。

自体顕照じたいけんしょう、人間革命。

少々、御書を拝読。難解、難解。

五月十五日（水）

快晴

初夏の暖。

四季ある国は、ありがたし。民族の特質も、四季の変化で、大なる違いあるべし。

午後、参考のため、日本国際見本市を、Z氏、博正、私と、見学に行く。多数の人に驚く。

科学は急速に、時代をリードしている。人間自身も、遅れてはならぬ。

時代を知り、時代に生き、時代を創る——このことを忘れては、大変なことになるぞ。オートメーション時代の到来を、今日ほど、痛感したことはなし。

先生に、見学の模様を、ご報告する。科学者でもある先生は、興味ありげに、聞いてくださる。

「科学と宗教」について、考えていくんだなあ」と、一言指導あり。

〔五月〕——前月の四月七日、大阪球場に五万人の会員が参加して関西総支部の第一回総会が開かれ、続いて二十一日には九州・福岡スポーツセンターに約二万八千人の会員が集って第一回九州総会が開催された。戸田第二代会長は九州総会で、「九州こそ東京、大阪に続く大拠点となるように」と激励した。

激闘につぐ激闘が続けていた戸田会長は、五月三日には、東京・国際スタジアムで開催された第十六回春季総会に出席し、「時にかなう信心」について講演した。五月十二日には北海道に総支部が結成され、札幌・中島スポーツセンターに二万三千人の会員が参集して第一回北海道総会が開かれ、戸田会長は「個人の幸福は正しい信仰による以外にない」と指導した。五月七日、学会本部で第二回学生部総部員会が開かれ、約百五十人の俊英が参加した。出席した池田室長は「学生部の発展に協力し、思う存分学問のできるよう守っていく」と激励した。

五月十九日、東京で開かれていた第十七回炭労定期大会の最終日に、炭労の行動方針のなかに「階級団結を破壊するあらゆる宗教運動には組織をあげて戦う」という一項が入れられた。これによって学会員の活動に組合幹部が感情的な反撃を企てるという「炭労問題」が火を噴いたのであった。

岸首相は、五月二十日から六月四日にかけて、東南アジア六カ国を歴訪した。戦後初の首相によるアジア訪問であった。

イギリスは五月十五日と三十一日の二回にわたって、クリスマス島で水爆実験を行った。日本はこれに反対し、三月に立教大学松下総長が岸首相の特使として渡英して中止を要請したり、全学連はイギリス大使館に抗議デモをしたが、実験は阻止できなかった。

## 六月一日（土） 晴時々曇

今朝も、熱あり、三十八度近くとのこと。

激闘、死闘の十数年であった。身体を、なんとかせねば……。

いよいよ、夏に入った感あり。本年も、あと半年。成長せねば……強盛なる信仰。

夜、東横地区の指導。尊き、庶民の集い。信心の世界が、最高に愉しく、美しい。指導に行くことは、結局、自身が、指導を受けに行くようなものだ。

先生……自宅にて、休養とのこと。淋し。明日は日曜日。月曜日は、お目にかかれるであらう。祈る。

## 六月二日（日）　曇

十時過ぎまで、休む。よく寝る。

妻が「よく休めて、よかったわ、よかったわ」と、嬉しそうであった。

『日本史』『世界史』の本を、応接間にて、広げる。妻の出すお茶が、ことのほか、おいしかった。

夕刻、新宿の支部の、指導会に出席。会合に出たあとは、何と爽やかなことよ。

学会も、第二の、建設期でなくてはならぬ。新しき人材、新しき組織、新しき息吹いぶきが、必要なり。一部の評論家は「曲がり角にきた創価学会」と、しきりに批判。自分も、そうは思う。しかし、深き妙法のリズムを知らぬ、評論家を笑うのみ。

六月三日（月） 晴後曇

一日中、心臓の圧迫感あり。難儀なんぎ。

肉体年齢が、極度に、老いているのか――。心配なり。

先生、午後より、本部においでになる。お身体からだの具合悪く、苦しそう。大切な生命なれば、皆して、先生のことを、もっと心配すべきだ。側近よ、何をしているのだ。先生の苦衷くちゆうを、察しているのは、われのみか。情なさけない。

夜、「御義口伝」の、講義あり。先生、無理をおして、全力をあげての講義。身の浅学を恥ず。

帰宅、十時少々過ぎる。

六月四日（火）

曇後快晴

今朝は、少々、熱下がる。これでよしだ。広宣流布の日まで、断じて、倒れまい。否、倒れたくないのだ。使命あれば。否、使命を信ずればこそ。

午後——本部にて、御書の校正。学生部結成大会のことについて、部長と懇談。

岸首相——東南アジアより、夕刻帰る。戦争責任者の言、空し。民衆よ、どうしたのだ。賢なのか、愚なのか。

学会の青年よ、断じて、征こう。妙法広布に——アジアへ。我らのみに、その使命あり。アジアの民は、待っているのだ。

夜、先生と、お会いする。嬉しきこと、無量なり。

〔六月〕——六月二十七日には北海道炭労が「学会締め出し」を指令したばかりでなく、さらに「弾圧三か月計画」まで流して、組織的な学会員弾圧を始めた。だが、北海道・夕張には二千数百世帯の会員が信仰に励むとともに、労働組合の活動にも積極的に参加していた。したがって、炭労の方針は、明らかに信教の自由を侵す不当な弾圧だった。学会の同志は、労組の幹部から学会脱退を迫られたり、クビ切りの脅迫を受けたりしたが、理路整然と反論し、固く団結して一步も退かなかった。

炭労問題の最中、六月三十日に、東京・麻布公会堂に五百人の大学生が集まって、学生部結成大会が開かれた。一年間にわたって準備を進めてきた学生部が、嵐の中に勇躍船出したのであった。戸田第二代会長は「全員が次代の指導者に育て」と激励し、北海道で戦っている池田室長からも祝電が寄せられた。

社会では、六月九日に多摩川上流の小河内ダムが完成し、貯水が開始された。ダムの完成により奥多摩湖が誕生したが、水没する集落が出るため、その移転が社会問題となった。六月十六日に訪米に出発した岸首相は、十九日からアイゼンハワー大統領と会談を開始し、二十一日に会談を終えて日米共同声明を発表した。岸首相は、これによって「日米新時代」が到来したとうたった。一方、二十七日に立川基地拡張のため砂川町で強制測量がなされたが、翌月には反対派が警察官と衝突するなど、大きな事件へと発展していく。

七月十七日（水）

雨

七月三日は、戸田先生の、出獄記念の日。

この意義ある日の、午後四時——私は、大阪府警に入る。

戸別訪問の、容疑なり。十五日間、検事の調べのため、警察の雑房に数日——拘置所に、十日あまりいる。

無実なることは、明瞭<sup>めいりょう</sup>なり。下部の責任をとることも、已<sup>や</sup>むを得ぬことだ。ただ、K支部の、N君らの買収や、支部長らの無責任な態度には、怒りをおぼえる。先生の精神も、崇高なる学会の伝統も、忘れて。悔<sup>くや</sup>し。

この日、十七日——午後の十二時十分——出所す。大阪の同志数百名が、迎えに来てくれる。嬉<sup>うれ</sup>し。学会は強い。学会は正しい。学会こそ、美しき団体哉<sup>かな</sup>。

大阪の友のこと、また東京より、心配して、馳<sup>は</sup>せ参じてくれた友のことは、生涯、忘れ



まいぞ。Mさん、Wさん、Bさん、F兄等も。H、M……大阪のM、S、T、Y氏等々。

午後一時三十分、伊丹空港<sup>いたみ</sup>へ、先生を、お迎えに行く。師匠の慈悲に、胸臆<sup>きょうおく</sup>で泣く。この間の、先生のご心配の胸中、海よりも深きことを知る。このご恩には、断じて、生涯かかって、お応え申し上げねば。

六時——中之島の中央公会堂にて、臨時の大阪大会あり。

二万の同志、結集。万雷の拍手に迎えられ、更に広布の前進を、決意す。

生涯の、記念の日となる。

諸天の加護に、感謝す。

七月十八日（木）  
雨

大阪——在、関西本部。

疲れ、重々。様々な人あり、様々なことを、漠然<sup>ぼくぜん</sup>と考える。

先生の力強き講義を、久しぶりに聞く。

先生の寿命を、一人、心配しながら。

先生、先生、ただ、ただ、広布まで、お元気で、あられますように。

私は、先生を念<sup>おも</sup>った。学会本部を念<sup>おも</sup>った。自己を、犠牲にしながら。

今回の検事の調べは、あまりにも謀策<sup>ぼうさく</sup>である。次第に、憤怒<sup>ふんぬ</sup>の情が、湧<sup>わ</sup>いてくる。必ずや、われらは、真実が勝利する時代を創<sup>つく</sup>らん。事実を、明確に記<sup>しる</sup>さん。

〔七月〕——炭労の不当な弾圧に対応するため、学会青年部員は地元北海道の青年部らと力を合わせて、七月一日、札幌の中島スポーツセンターで札幌大会を開いた。席上、池田室長は、「炭労がこのような方針を打ち出すことは民主主義に反することで理解できない」と、学会の立場を明らかにして炭労に反省を迫った。二日には、男子青年部約二百人が夕張市内を行進したあと、同市の若菜劇場で夕張大会を開き、炭労の暴挙を衝いた。夕張炭労の幹部らも大会を傍聴し、終了後、真谷地炭労側は、「学会の主張はよくわかった。われわれは浅はかなまねはしない」と挨拶した。こうして対決を宣言していた炭労側は対決を取り消さざるをえなくなり、この問題は学会側の勝利となって事件は決着がつけられた。

北海道で炭労問題の解決にあたっていた池田室長のもとに、大阪府警から突然、出頭命令が届いた。選挙違反の容疑であった。池田室長に無実の罪を着せて逮捕し、学会躍進の動きを封じようとする不当な権力の発動であった。池田室長はただちに大阪へ向かった。七月三日、奇しくもこの日は、十二年前、戸田第二代会長が時の権力と戦って出獄した日でもあった。

こうした権力の横暴に対し、真実を知る学会員の憤りの声は、大阪地検に抗議し、池田室長の即時釈放を要求する東京大会（十二日）、大阪大会（十七日）となって爆発した。池田室長は十七日正午、二週間ぶりに大阪拘留所を出所し、大阪大会に出席した。雷雨の中、大阪市中央公会堂で行われたこの大会の参加者は約二万人を超え、場外にも数千人があふれる大結集となった。この事件は、四年半後の昭和三十七年一月二十五日、無罪判決が下り、学会の正義が証明された。

この月、世間を騒がせたものに、谷中・天王寺の五重塔が放火心中により全焼した事件があった。この五重塔は、幸田露伴の名作『五重塔』のモデルとして知られていたものだった。

九月二十五日（水）

曇後雨

出獄して——二か月余。貴重なる体験を、沁々しみじみと、味わう昨今。いつの日か……このことを、未来に残さんと思う。そのために、少々、記憶をメモに止める。とど

二十二日——本年最後の、体育大会（関西）を終了。

二十三日——在、大阪。

二十四日——輸送会議のため、熱海に一泊。

二十五日——正午に出発し、東京の本部に、五時到着。先生の所へ、種々、ご報告に伺<sup>うかが</sup>う。

夜、葛飾ブロックの会合に出席。

参加者、千数百名。体当たりで指導。

疲れきった身体を、引っ下げて帰宅、十時二十分……すぐ横になる。

九月二十六日（木） 雨

一日中……うつとらしい小雨。

微熱とれず、身体の調子、また、頗<sup>すこぶ</sup>る悪し。

Sさん……夕刻、本部で待つも、遂に來たらず。残念。

信仰、茲に十年。次の十年の、運命は如何。

人生は、勝負だ。新たな荒浪が、待っているように思われてならぬ。

夜——文京支部の、班長会に出席。

一、人間関係について

二、読書について

三、御供養の精神について

M君のことで、S家で家族会議。皆、嬉しそう。来春は、M君も、結婚の運びになるか。春到来の喜色あり。

九月二十七日（金）

曇後晴

身体具合、全く悪し。熱、三十八度を、少々越える。半日、休養をとる。

十年、一剣を、磨かねばならぬ——それにしても、根本は身体だ。強健なる体力だ。

午後、先生に、種々、指導をうける。先生にお会いすることが、所詮、第一の根本指導である。

品川公会堂にて——「常忍抄」の講義をうく。終わって、青年部最高会議。

帰り、大井町駅で待ちし妻に、冬のため、レイン・コートを、買ってあげる。三千五百円なり。子供の如く、嬉しそうであった。

二人して、楽しい、静かな、わが家へ。大聖人様のご生活を、胸に浮かべながら。

九月二十九日（日） 雨

トルストイは、不幸とは、悔恨を残すことなり——と。

今日。一日一日を、せめて、有意義に送る努力をすることだ。唱題の歡喜を、沁々しみじみと、知る昨

人生の基盤、指標、生活の設計……思索すべきである。

富士駅まで——友らと、元気に帰る。愉たのしき、登山会であつた。皆と別れて、四時より、沼津方面の指導に寄る。非常に明るく、発展したのに驚く。

組長会、班長会、地区部長会を終え、午前零時過ぎに帰宅。精進の姿で。

九月三十日（月） 雨

雪ハ笠檐二灑ギ 風ハ袂ヲ捲ク

呱呱 乳ヲ索ムルハ 若為ナル情ゾ

他年鉄拐峯頭ノ嶮

三軍ヲ叱咤スルハ 是レ此ノ声

好きな人物——源義経——を詠じた詩。

戦記物を、読むこと、しばしば。

明日より、空澄みゆく十月。

一日中小雨……M君のことを、本部へ、先生に、お願いに行く。先生、快諾してくださる。嬉しい。

六時十五分より、品川公会堂にて、本部幹部会。目覚ましき前進の真相。

帰り、堺支部長、T夫妻、自宅に来る。楽しく、未来の支部の建設を、語り合う。種々、作戦を教ゆ。

妻、三児の母となるか。身も重く、責任も重し。子らを、立派に成長させながらの——社会革命、宗教革命。



〔九月〕——九月八日、横浜・三ツ沢競技場で開かれた青年部の第四回東日本体育大会の閉会式で、戸田第二代会長は五万人の会員を前にして、歴史的な「原水爆禁止宣言」を発した。世界の恒久平和を希求し、一個の人間生命を最も尊極なものとするこの声明は、人類共有の叫びとして注目を浴びた。これは池田室長によって受け継がれ、永遠に後世に伝えられることになる。

二十二日には、青年部で初の西日本体育大会が大阪市立運動場で開催され、約一万二千人が参加した。これには、戸田会長も池田室長も出席し、戸田会長は「日本の民衆を救い、東洋の民衆に平和を与える者は諸君ら以外にない」として、青年の成長を望んだ。

科学の世界では、九月二十日に、東大の糸川英夫教授らが、秋田海岸で国産ロケット一号機カッパ―C型の発射に成功している。

十月一日（火）

曇

秋に入る。理想的な陽気。静かで青き空。深く爽さわやかな大気。秋の朝の一瞬、生きとし生ける物への愛情を実感す。

月々の経済を、確立する必要迫る。

子供の教育の、指標を考える要あり。

夜、今月第一回の、講義をなす。本部広間にて。

「三重秘伝抄」の、「一念三千の数量を示すとは」の段。先生より、指導をうけしところなれば、確信ある講義となる。

帰り、M宅に寄る。早く帰ればよいのに――。人のためとはいえ、自分のお人よしに、あきれる。

妻と、遅くまで、生活設計等について、懇談。静かな、幸福な、わが家。

十月三日（木）

快晴

“K氏をかこむ青年の夕”の様子を知るため、東京体育館へ。六時四十五分開会。場内、雑然たり。老人の集い<sup>つど</sup>とした方がよし。

中途にて退場し、杉並での、青年部幹部会に出席。同じ“青年の集い”なれど、前者は、名誉と利害と、虚偽と退嬰<sup>たいえい</sup>のなんと浅き会合か。後者は、信念と、理想と太陽の力の、清浄の集いか。

帰り、新宿のDにて、青年部最高幹部と会食。

十二時少々前に、タクシーにて帰宅。

子らは、すやすやと、寝入っている。その顔の、可愛きことよ。若き父——若き母。あまりにも。

長命を願う。

十月五日（土）

晴

上野発、午前九時三十分、急行「佐渡」にて——新潟指導へ向かう。

秋晴れの、快適な旅行である。妻と城久、二人で、見送りに、来てくれた。身重みおもの妻の姿が、可哀想に見える。

長岡駅で——“歓迎池田室長”と記入した、大きな“のぼり”あり。苦笑す。その無邪気な、誠実さに、面白さを感じず。

三時十五分——新潟駅着。〇宅へ向かう。ただちに、男子、女子、壮年の、幹部の面接をす。小さな、小さな支部であった。これでは、皆が、伸びのびできぬ、と思った。これでは、学会の大理想は、わからぬであろう、とも思った。

七時——寺院にて、男女合同の、指導会を催す。

二時間近く、真剣なる質問会。自身の、下手へたな弁舌に、反省の要を、痛感。

終わって——〇宅にて、地区部長、支部幹事らと懇談。幹部少数と、一泊。三重秘伝等の話に夜の更<sup>よ</sup>けるのを忘れて。

## 十月六日（日） 雨

朝、八時、起床——勤行。

寝不足のため、背痛し。午前九時の列車にて、長岡へ向かう。

青木荘に入る。——ただちに、宿舎にて、指導会となる。

雨、激しく降り始む。

班長クラスの人のために、小宴会を催し、黒田節を久々に舞う。善良な人々だ。生涯、忘れざる同志。

長岡駅発、午後二時十六分の列車にて、上野へ向かう。雨、雨……。車中、M君らと、

「十法界事」「顯謗法抄」等を、拝読。有意義な、車中であつた。

七時、上野駅着——妻、一人で、迎えに来てゐる。影の身に添う如く、そつと、我の出発と、帰京に、馳<sup>は</sup>せ現る人。雨でも、雪でも、早朝でも、夜半でも——。

十月七日(月) 曇

色心ともに、一日中だるし。

インドのネール首相来日中。

慶応義塾大学と早稲田大学にて、「青年は『明日の世界』だ」と呼びかけ、世界平和と人類愛についての演説あり、と。

仏法発祥<sup>はつしよう</sup>のインドに一日も早くゆきたし。

「御義口伝」講義——本部——六時三十分より。「提婆品」「勸持品」「安樂行品」の三品であつた。客観視して生活に約し、主観視して生命に約してゆく、先生の見事なる講義。

妙法を抱きしめ、ありのままに、人生を生きぬくことが、真実の安楽なり、と。

早目に帰宅。妻、蒲田駅まで……。

第五回の“男子部の歩み”を執筆。

十月八日（火）　曇時々晴

一日中、先生にお目にかかれず。こんなにも淋さびしいものか。

総本山へ、日昇御隠尊げいか下のお見舞いに。

「ソ連で、人工衛星の打ち上げ成功」との報道あり。科学の進展とともに、指導者は、常に高き次元に着眼点をおき、思考していかねばならぬだろう。

勉強だ。勉強だ。理想の道のために勉強だ。

午後三時より、本行寺。W君の結婚式。盛大に送ってあげる。

六時三十分——青年部首脳会議。

- ① 北海道の青年部指導について
- ② 九州、関西の幹部指導について
- ③ 音楽隊の件
- ④ 三月総登山の件
- ⑤ ブロック組織とその運営について

帰宅、十時少々過ぎる。半年ぶりで、妻と二人して、語りながら夜食。  
狭き庭に出て……数歩の散策。

十月九日（水）

晴時々曇



身体を大切にせねば。未来まで、力を蓄積できぬ自分。

午前中——後楽園競輪場に、秋季本部総会の準備にゆく。

会長就任——七年目の僭聖増上慢の嵐あるを、感ずる昨今。

八時より、本部にて、御書研究会あり。「観心本尊得意抄」「聖人知三世事」。

先生と、今日も、お会いできず、淋しい。日昇御隠尊猊下の御容体、芳しからず、とのこと。

若き後輩と共に帰る。楽しい連中。

秋の夜、静かなり。妻と共に、遅くまで縁側で語る。笛でも吹きだし。琴でも聞きたし。

「男子部の歩み」の執筆完了。

十月十日（木）

快晴

今夜は、満月であつた。人工衛星、飛ぶとはいえ、なんたる詩情深き夜であつたか。

疲れた身に、幽玄ゆうげんにして無限の妙たえなる曲を聴ききし念おもいあり。

生の歓よろこび。一生の胸奥きようおうよ。いつもかくあれ。

御書を拝読す。

いかなる大善をつくり作法華経を千万部読み書写し一念三千の觀道を得たる人なりとも法華経の敵かたきをだにも・せめ責ざれば得道ありがたし。

（南条兵衛七郎殿御書）

折伏の精神、折伏の生命のみが、所詮しよせん、最大最強の生命力の源泉なるか。

戸田先生に、今日は、お会いできた。嬉うれし。慈悲に包まれながら、種々お話を受ける。

青年部幹部會議に、少々出席。終わって池袋・振興會館にて男子部指導會。皆、元氣なし。寢不足の様子。青年の指導の要諦ようてい、ここに知る。この簡単な、日常生活のリズムを察知せねば、皆が可哀想だ。われは、指導をうけた思いなり。

蒲田駅に、妻、迎えに来ている。子らの待つ楽しいわが家へ。

十月十一日（金）

晴後曇

無理な一日。そのためか——心身の調子、芳かんばしからず。

夜、豊島公會堂にて、會長講義あり。自由自在の、偉大なる講義と、振る舞いの師に胸打たるなり。“自我得仏来”じがとくぶつらいの境涯であられるか。

帰宅して、原稿を書く。未来、大いに書けるよう、雑記帳につれづれに誌しるす。静かなる夜。いつまでも、思索す。

十月十二日（土）

快晴

東京駅——午後一時三十分発、急行にて総本山へ登山。

先生と、I部長、T支部長、妻と私。

この日になると、奉安殿にまします、一閭いちえんぶ浮提だいそうよ総与の大御本尊様のことを思いかえす。

広布の総仕上げの、第一歩たる、正本堂に、お出ましはいつの日か、と。

——夜、客殿にて質問会——先生の名回答。終わって、杉並支部の宿坊へ。また、客殿にて、男子部の会合に出席。

「五丈原の歌」の解説をまじえて指導。遅く、大阪、堺の支部にも出席。皆、喜んでくれる。友は嬉しいものだ。

霊山りようぜんより仰ぐ、月光。この瞬間の幸福感——生涯に忘れざらんと止とどめておく。

午前一時——丑寅うしとらの勤行。元気で出席。

昼、日昇上人のお見舞いにゆく。ご立派な御徳のある上人であられる。私も、大変可愛がって戴いたいてきた。せめて、お見舞いできたことは、生涯の喜びである。

十月十三日（日） 晴

爽快そうかいなる、秋晴れ。

朝、八時三十分——御開扉。

裁判が十八日である。無罪を祈念し奉る。一切を大御本尊に、お任せ申し上げる以外にないのだ。自己の真の宿命打破。

帰り——沼津の組長会に出席。

支部長と共に全力をあげ、人材の育成に尽くす。太陽の輝くところは、草木繁茂す。指導あるところは、必ず人材の輩出することを確信しながら——。

疲労、日々に重なる。妙は蘇生そせいの義なれば、必ず、再生の生命やあるらん。

我が此の土は安穩あんのんにして

天人常に充滿せり

園林おんりん諸の堂閣どうかく

種種の宝をもつて莊嚴し

宝樹ほうじゆけ華果か多くして

衆生の遊樂する所なり

(法華經壽量品)

十月十四日(月)

快晴

Nさん、結婚の由、お目出たい。しかし、先方のことを聞くと、信心もなく、幸せにな

れるかどうか、まことに心配。

夜、F君宅の入仏式に出席。帰り、T尊師と横浜まで帰る。

遅くまで——原稿整理、妻に手伝ってもらう。

窓に——月光キラキラ。嗚呼、青年の心情は、さらに清く輝く。妻の顔、また、美し。共に若く、共に、若さを忘れまい。

十月十五日（火）→十六日（水） 晴

昨日、日昇御隠尊<sup>げいか</sup>院下……御遷化<sup>ごせんげ</sup>なさる。

本日、夜、御通夜の連絡あり。先生は、大阪より、私どもは、東京より、直ちに大石寺へ登山。

先生より、すべての連絡悪しと、厳しく叱<sup>しか</sup>らる。その通りと反省。

七時——蓮葉庵<sup>れんようあん</sup>にて御通夜。感無量なり。先生の、日昇上人を、お慰<sup>しの</sup>びする姿に、ただただ感泣。

丑寅<sup>うしとら</sup>勤行にでる。

十六日——午前十時より、御密葬。十一時、御出棺。日蓮大聖人様の、御入滅の当時が連想できるようだ。

最後に、上人のお顔を、拝することができた。ご立派な、仏様の、御相に、尊くもあり、驚きもする。

三時過ぎの汽車で——先生と共に帰京。車中——宗門と学会の将来について、深い指導あり。

十月十七日（木）

曇後小雨



少々小雨。

東京駅、午前九時発の特急「つばめ」にて、大阪へ向かう。明日は、裁判の日。大阪の方々への挨拶のため、妻も同行。三等車なれど、一生の思い出の旅か。

その夜、A宅の見舞い。T宅、S宅、Y宅に挨拶。

権力の魔性——裁判の公正——弁護士の正義——すべてを、克明に脳裏に刻もう。

寒さ厳し。十二月の如しと聞く。

遅くまで、同志と語る。生涯、忘れざる人々なり。

一人して、会長室に休む。二時近し。

十月十八日（金）

快晴

生涯、忘れえぬ日。

二時より、初裁判。人定尋問にて終わる。

夜、神戸方面に指導に走る。二千数百名の結集とのこと。遂に戦いは始まったのだ。

今こそ、信心の前進の秋と<sup>とき</sup>知れ。

友よ、次の勝利に、断固進もう。

俺も、戦うぞ。

十月十九日（土）

曇

在、関西本部。

早く目が覚める。

大阪駅十時二十五分発にて京都へ向かう。Hさんたちと宇治方面の見学。記念写真をとる。

特急にて、再び関西本部へ。

男子部幹部会、女子部区長会に出席。

更に、船場せんばの地区部長会等に出席、指導。終わって、青年部の個人指導等——多忙の一夜となる。

信心なれば、惜しみなく、真剣に、汗を流しゆくことだ。

遅くY宅訪問——。

疲労困憊こんぱいの、関西の夜となる。将来、幾百千の同志が、ここより、堂々と巣立ちゆくことであろう。

二時近く、ぐったりと床につく。心配そうな、妻の顔。

十月二十日（日）

晴

午前中、神戸の友らと会う。皆、功德を受けている姿に安堵<sup>あんど</sup>。

午後、宝塚で「秋のおどり」皆して、観<sup>み</sup>る。若く、美しき見事な踊りに、自己の励ましを感じず。文化の乱舞を夢みる。

夕刻、関西本部にて、幹部と、種々打ち合わせ。

夜、九時発の急行「明星」にて、車中の人に。

親しき、見送りの人々に、敬意を表す。

京都着——九時三十九分——多数の女子部の人々の見送りに驚く。本当に可愛い。皆

に、幸いあれと、祈りつつ、寝台車の人となる。

妻、上台にのる。初の三等寝台に、疲れを忘れ……。

十月二十一日（月）

曇後晴

朝、七時三十分——東京着。結局、夜行列車は疲れる。妻も、疲れきったことである。

朝飯を共にする。初の思い出の四日間。

朝の先生による勉強——『日本歴史』に入る。藤原時代より。

先生に、種々報告。悠然<sup>ゆうぜん</sup>たる師の姿に、勇氣百倍。真実と、正義の人となり、一生を送りたし。

夜、本部第三応接室において、渉外部員会。第七回の総会を、意義あらしめんと、真剣

に立ち向かうことを決議する。

早目に帰宅。蒲田駅に、城久ら、迎えに来ている。可愛い。楽しい。

十月二十二日（火）

快晴

朝、先生より「F君の仕事を、面倒みてあげよ」と注意うける。

車中、『第三の眼』を読了。先生より、たびたび、「読書せよ」と注意あり。「あの本も読め、この本も読んだか」と――。

来年は、三人の父となる。責任ますます重大。様々のことを考えてゆく。忍耐。時期。

夜、先生より、法華經方便品の幼児の砂の塔、華の功德による成仏の原理を教えて戴く。<sup>いただ</sup>釈迦仏法の、歴史、思想と、大聖人様の、唯、<sup>ただ</sup>南無妙法蓮華經の大哲理との相違を深々と伺う。<sup>うかが</sup>

おそく——支部長宅へ。幹事および地区部長任命について、打ち合わせ。

帰宅、十二時過ぎる——。

十月二十三日（水）

晴一時曇

ああ五丈原——（八月）二十三日は、諸葛孔明<sup>しよかつこうめい</sup>の命日。

先生の好む孔明——その心境や、誰ぞ知る。われも、生涯、孔明の如くありたし。

“健全ナル 精神ハ 健全ナル 身体ニ宿ル”至言でもあるか——その知恵と行動を  
フィットさせねばならぬからには、色心不二の原理は正義である。

今日は、先生とお目にかかれず。やはり淋<sup>さび</sup>しくてならぬ。

夜、葛飾のブロックに出席。大変な地区だ。最初、第一ブロックの座談会に、次いで、

K宅の大ブロック長会に出席。親しみすぎて、感激がない。残念なり。

上野駅より、ひとり疲れ果てて帰る。心奥しんおうの理想と、情熱パッションは別として。

蒲田駅に、遅くとも、妻、迎えに来る。心がなごやかになる女性。

明日は“国連の日”なりとの記事。一日も早く、国際社会の檣ひのき舞台へ。同志よ。

### 南無妙法蓮華經

十二時過ぎに、休むことにする。

十月二十四日（木）

曇

日昇上人の御通夜——総本山。

東京駅——十二時発にて、文京の人々と、出発。先生は、奥様方と、一時三十分発の急行にて、お見えになる。



理境坊（本部）にて、幹部会。先生の私に対する、思いやりに、深く感動。先生の偉大さを、沁々<sup>しみじみ</sup>と知る。嬉し<sup>うれ</sup>し。率直な青年でありたい。

夜、七時より——客殿で御通夜の儀式。日淳御法主上人の出仕。一時間ごとに導師が交代——明朝、五時まで、勤行回向<sup>えんこう</sup>とのこと。

参加者——千五百名。地区担当員以上。

青年部首脳会議を——寂日坊にて開催。青年部が主体となる次代のために。時代を見極めゆく、洞察<sup>どうさつりよく</sup>力を欲す。

理境坊……先生のそばで休む。

十月二十五日（金）

小雨

朝、先生より、厳しく叱<sup>しか</sup>らる。

孔子は「九思一言」というも、われは、そうはいかぬ。しかし、自重せねばならぬか。

十二時十分——客殿にて、御出棺の儀。つづいて、御経藏前において、本葬の儀あり。古式にのっとり行われた、二時間余の儀式に胸打たる。

先生と、奥様の、涙して、日昇上人とお別れする、純粹な姿に、胸、はりさける想いあり。真の大聖人の子供。

富士駅は大変に混雑とのことにて、沼津まで車——大幹部と。

ああ、流転<sup>るてん</sup>。凡夫には、なべて諸行無常<sup>しよぎようむじよう</sup>に映る。それが、妙法では、常楽我淨<sup>じようらくがじよう</sup>といえり。この身も、この妻も、この師も、この友も、幾十年にして、皆、この世から去りゆくとは。無常。

十月二十六日（土）～二十七日（日） 雨

朝寝坊して——急ぎいそぎ、上野駅へ走る。妻と、博正と、城久と。

初の、金沢、高岡、富山方面の講義指導。第三グループとしての信越、北陸の旅なり。

午後七時十五分——金沢着。ただちに、指導会。参加者……三百名。

二十七日——午後一時より、高岡の指導会。参加者……三百名。六時三十分より富山の指導会。講義のできなかったことが、返すがえすも残念。

如来の使いだ。誇り高くあれ。慢心にならず。決して威張らず。  
水の流れゆく、心境と忍耐で。

車窓から——千曲川の旅情を想う。

川中島のつわものどもの夢をおもを念う。

金沢に——前田藩、十四代の歴史を思う。

詩人を、將軍を、武將を、政治家を。

北陸にも、広布の響き始まる。

十月二十八日（月）

曇後晴

朝、七時三十一分、上野着。

誰もいないと思ったら、妻の姿あり。三等寢台はいいものだ。必ず、今後はこれにしよう。

午後、本部へ——先生に、種々報告に伺<sup>うかが</sup>う。お元気そうなれど——根本的には、相当の覚悟あるを感じずる。最後まで、立派に先生にお仕え申し上げたい。

「人事等を、理事長らに任す」との話あり。いい方程式でもあり、悲しき思いもするなり。

夜、青年部指導会に出席。

皆、顔色がわるい。よく休息を与えねばならぬ。将来の闘士なれば。指導者なれば。

帰り、首脳達、理事長らと、目黒で会食す。

十月二十九日（火） 雨

朝寝坊する。

前日の夜行列車の疲れか——身体のふしぶしが痛む。

朝の勉強……先生、「待ちぼうけだよ」と厳しき瞳ひとみ。

弟子として、全く申し訳なし。猛省。

山崎の合戦かつせんにおける、一浪人の武勇伝をお聞きする。先生の心境を、たとえとしての指導か。

四時より、常在寺。M君の結婚式に出席。多くの、青年の結婚を、真剣に考えてあげねば——先輩として。大切な人生の第一歩。

終わって、白蓮院へ。班長会。皆、明るく元気あり。この中核の力が、広布の力だ。

駅より、途中の屋台の店で“もつ焼き”を十八本食す。胃が痛む思い。食欲もほどほどにせねば。

## 十月三十日（水） 曇

午前中、腹痛にて困る。途中、家に帰りたかった。

午後——Nにて、首脳会議。総会の件等、打ち合わせをする。身体の調子わるく、面白からず。

夜、N君の自転車をかり、葛飾のブロックを回る。一か所——「佐渡御書」の講義。も

う一か所——ブロック長指導。立派な——幸福なブロックにしたいものだ。

今月、生活費——赤字とのこと。

いつも、休む時間おそし。

〔十月〕——十月十三日、福岡・九大ラグビー場に約三万人が参加して、九州総支部結成大会が開かれ、出席した戸田第二代会長は「民衆を救ってもらいたい」と講演した。

翌十月十四日、第六十四世水谷日昇御隠尊猊下が御遷化された。享年七十八歳であった。戸田会長は滞在中の大阪から急遽登山し、理事長、池田室長らとともにお通夜に列席した。

日本は、十月一日に開かれた国連総会で、安保理事会非常任理事国に当選し、国際社会で次第に認められ始める。

インドのネール首相が娘のインディラ・ガンジー夫人を伴って初来日したのは、十月四日のことであった。ネール首相は五日に首相官邸で岸首相、藤山外相と会談を行い、核実験停止問題やインドの現状などについて話し合った。また七日には早稲田大学、慶応大学を訪れ、両大学から名誉博士の称号を贈られた。このとき「青年は明日の世界だ」と呼びかけたことは日記にも記されている。同じ十月四日、ソ連は初の人工衛星であるスプートニク一号の打ち上げに成功した。

十一月一日（金）

晴

晴天——。

横浜駅より、特急「つばめ」に乗る。

和歌山方面の指導。

『太閤記』読了。徳川家康の秋霜しゅうそうの如き軍紀と組織。秀吉の大氣の如き家族的明朗さを  
思い浮かべる。自分は後者か。しかし、秀吉は一代、徳川家は十五代。両者の美点を忘却  
できず。

五時の特急にて——難波より、和歌山へ向かう。六時十分着。三十分ほど休み、和歌山  
中学校の講堂へ向かう。参加人員一千八百名なりと聞く。

立派な支部の素質あり。寺院の建立の必要もある。



国立公園——あこがれの和歌山の海浜の一旅室に休む。一泊。幹部らと、親しく会食。明るい、爽やかな一日であつた。

十一月二日（土） 晴

朝風呂に入る。

秋晴れの、大海原に、太陽の光。

神々しき、金波、銀波の絶景に、しばしみとれる。

海岸線に沿って、一船かりて、一周する。皆も、本当に楽しそうだった。われも嬉し。

帰り、T家による。また、M君宅による。二人とも、和歌山になくはならぬ人物だ。

A支部長と、田辺と、白浜による。日本最古の温泉地と聞く。……田辺にて、七時より、質問会。千数百名結集とのこと。

只今臨終の思いで——全力を傾注して指導を。

終わって——白浜に一泊。多数の幹部が、遊びに来る。

十一月三日（日） 快晴

文化の日。

見事なる秋晴れ。朝、白浜海岸を、散歩する。爽快なり。

九時三十分——水上飛行機に乗るため、海岸栈橋へ。十分後、離水。操縦士を含めて、六人。雲一つなき上空より見おろした紀伊半島の緑と、海は、さながら絵葉書であった。

十一時少々前か——堺さかいの着陸地につく。多数の同志のいるのに驚いた。恐縮。

直ちに、関西本部へ。夕刻まで多忙。

講義、面接、男子部、女子部、京都支部の指導等——多繁の日程。

夜、七時より、中之島公会堂にて、大阪支部の、大会に出席。旧式なる話、運営に、腹が立つ。

九時の夜行列車「明星」にて、名残り惜しくも、関西をあとにする。

十一月四日（月） 曇

東京駅に、七時三十分着。

やはり、夜行列車は疲れる。M君、N君と、東京温泉の朝風呂に入り、朝食。次第に、疲れおぼえ、困った。眠たくて――。

三時より、先生、日航機にて関西に飛ぶ。妻と共に見送りに。

本部、何となく淋<sup>さび</sup>し。新しい、強靱<sup>きやうじん</sup>な、機構にせねばならぬことを痛感。今は、誰もでき得ずか。

夜、幹部達と、新宿にて会食。企画会を兼ねながら。

今日も、蒲田駅に、妻と、城久、迎えに来ている。感謝。

十一月五日（火）

晴後曇

先生、関西にて、非常にお疲れとの報あり。申し訳なし。あまりにも激動のご生涯であられる。

われら弟子は、もったいない。こんなに自由で。

私は、師の恩を、必ず、必ず、報ずるであらう。

午後——M君の結婚式。常在寺にて。大いに、祝福してあげる。

夜——講師会。「末法相応抄」四悉ししつの例文より。皆、真剣。

終わって……常在寺にて、城北の地区大会に出席。愉たのしい一日でもあった。

健康になるには、睡眠をとることが第一なり。

今日は、早目に、休もうか……。

十一月六日（水）

晴時々曇

毎日が、無理。生命力を、旺盛おうせいにするには、五座、三座の勤行と、題目が根本。自己の信心は、はたして、真の自行化他に、わたっているや否いなや。それは、残念なりの一言か。

朝の勉強……鎌倉時代に入る。一生勉強を忘るな。

先生、午後の便で、帰京。お疲れの、ご様子。学会も、日増しに、重大な時に入っている……。誰も知らず、皆、呑のん気なものだ。

私に……雑言、悪口する人が多いようだ。しかし、われは、われの確信と、指標ありだ。已<sup>や</sup>むを得ぬ。あとになって、わかるらむ。

十一月七日（木）

曇後晴

午後六時より——秋季第十七回の本部総会の予行あり。後楽園競輪場にて。

月影に、美光あれど、それを仰いで、詩を詠<sup>よ</sup>むいとまなし。

無限の大宇宙のことを思うは、楽しいものだ。

ソ連が、革命四十周年記念に——人工衛星を発射するとか。大自然も偉大、人工衛星を作り上げた人間の力もまた、偉大。

十一時過ぎ帰宅。寒くなる。

M支部長の、失敗につき、H氏と、共に叱る。<sup>しか</sup>已むを得ず。<sup>や</sup>変毒為薬を、<sup>へんどくいやく</sup>必ず、されんことを。

思索もなく、つれづれの雑記帳（大学ノート）——一冊、これで終わる。

十一月八日（金） 快晴

第十七回秋季本部総会。東京・後樂園競輪場。

正午——開始。開会宣言、入場式——。男子部、女子部、本部旗、支部旗の順。

入場人員、約七万人。大成功なり。

先生、非常にお疲れの様子。顔……青し。われも、また疲労激し。背の痛み、焼けるが如し。

四時より、Nにて、第二次会。御僧侶、大幹部出席。

終わって……女子部隊長会、男子部隊長会に出席。皆の元気、天をつく。頼もし。色心共に、飛躍しゆく、この青年たちが、未来を創造するのは当然の理。刻々と見事な成長。

月光、清し。風、凄まじ<sup>すさ</sup>。一瞬のわが最極、生命のキャンバスに描かれし、妙の原画。家、静かなり。

学会は、決して、特権階級を生んではならぬ。特に、文化部と、婦人部には。平等大慧。

十一月九日（土） 晴

日本晴れ。

強靱<sup>きやうじん</sup>に生きたしと思う、わが人生。



東京駅、午後一時三十分発の急行にて、先生と共に、富士大石寺へ。世界最大の指導者と、共に生き、共に語り、共に生涯をおくる世界最高の幸福者——われなり。

列車内にて、T氏と会う。先生、「紹介せよ」と。

「あなたは道路博士なれば、日本のみの道路では未だ少なり。東洋がある。朝鮮、中国、インドへの道路を一本引くように」と先生、泰然と主張せり。

T氏、「形而上<sup>けいじじょう</sup>のことは、あなたに頼みます。形而下のことは、われはやるなり」と。先生のいわく「しかし、形而下のことも、形而上の上にたちて初めてなせる」と。

総本山における質問会……全然、元気です。風邪。文京、築地、大阪、堺<sup>さかい</sup>支部の会合に出席。

凡夫の有限を沁<sup>しみ</sup>々知る。先生の、広き、深き生命力の未知数は、驚くばかり。

就寝……理境坊。十二時、床に。丑寅勤行は欠席。

## 十一月十日（日） 雨

起床——六時四十分。身体、熱っぽい。

先生と、理境坊にて語る。先生の慈愛に泣かぬものがあるうか。

ああ、五丈原、秋の夜半——。

八時三十分——御開扉。先生の真後ろより勤行。日淳猊下、関西方面へ御親教の間、細井日達師が代理。将来の不思議なる姿を、強烈に感ず。われ、広布の大人材に育たねば。

大講堂の屋上にあがる。壮観。

日昇上人の墓に詣ず。おなつかし。

昼の食事を中心に——先生より、再び理境坊にて、一時間、お話を戴く<sup>いただ</sup>。

永遠の生命。十方国土に住するとの原理。妙法の力で、いずこたりとも出生できうる法理。

帰途……鶴見第三十五部隊会に出席。会合、十時となる。疲れて、帰宅。勉強だ。勉強をすることだ。

十一月十一日（月） 雨

朝、微熱あり。妻、大変に心配そう。

将来を考えると、全く苦難多し。

一時——本部前より、伊東網代<sup>あじろ</sup>に向かう。秋季職員旅行。皆、愉し<sup>たの</sup>そう。われ、苦痛。先生は、本山より、熱海に静養。一緒のバスにあらず。

伊豆海岸の景觀。ミカン畑、美の光景なり。大自然の鮮かさあざや。策にあらざ、人工にあら  
ず。無作、本有ほんぬ。

五時少々過ぎ……到着。七時より会食。クイズなどもあり、皆、楽しそう。

久方ぶりに温泉に。部屋の下は、怒濤どとうの海。

……あくる日。

東京着、夜の八時になる。途中、ミカン狩り、写真を多数撮とる。うまく撮れたら皆にあげよう。

車中、昨夜の宴会の先生の舞い——今朝の先生の、お姿——全くお元気なし。  
心配なり、心配なり、来年の今ごろは……。『更賜寿命きやうしじゆみやう』祈る。

十一月十三日（水）

晴後曇

朝、勤行せず。疲れ多し。

先生と、お会いできぬ。先生、一日中、第一応接室にて、お休みの由——お聞きする。一層、ご衰弱の様子。淋<sup>さび</sup>しさ、悲しさ、あまりある。

将来の学会を考えると——胸がつまりそうだ。断じて、学会だけは発展させねば。信心第一で、突進することだ。強盛<sup>ごうじょう</sup>な信心。行力。

五時——本部へ。先生と、すれ違いとのこと。実に淋しかった。

夜、葛飾のブロックに出席。

二か所の会場を飛び回る。生命力なき指導は、人々に感動を与えず。信心の指導は、学問でも、知識の教授でもなし。生命の姿勢、生命の躍動、それ自体が根本だ。

身体を大事にせねば、使命いよいよ多大なれば。

十一月十五日（金）

晴時々曇

午後——本部第一応接室にて、先生に親しくお目にかかる。

① 教主釈尊論

② 資本論

③ 共産主義論

④ 未来政治論

をうかがう。先生の指導が、次第に不思議に思えてならぬ。

先生のいわく「二年間の牢獄生活にわれ勝てり。七十五万世帯を達成せり」と。「大作の未来は」と。

最後に、先生のいわく「戦いに負けるは男の恥なり」と。

葛飾のブロック闘争の最終日。

第一ブロックと第二ブロックを回り、青年部員と、記念写真を撮る。帰り、荒川より家

路へ。帰宅十二時をまわる……。

矢口の母、来ている。共に、将来のことを、語る。優しい母。

先生は「獄中にて、私がいる限り、富める者なれば、母よ落胆らくたんしないで呉くれ」と書面を送る」と。

私も、先生の弟子である。

十一月十六日（土）

晴後曇

先生、お身体からだの具合悪し。私の色心も憂うつだ。春風の、湧わき立つ日はいつぞや。

夜、女子部の組長会、男子部の幹部面接。青年と共に生き、戦い、暮らす一生でありたい。この人生こそ、黄金の道であろう。求道と創造と清純の若人わこうどと共に。

実践。勉強。

帰宅、一時近し。博正も、城久も、すやすや眠っている。いかに育ちゆくことか。  
十年、二十年先……。誰人が知ろう。ただ、御本尊様のみが知る。

「自我偈」にいわく、

方便現涅槃ほうべんげんねはん 而実不滅度にじつふめつど 常住此說法じようじゆうしせつぽう

十一月十七日（日） 雨

朝、胸痛し。早く目覚む。

五時とのこと。また休む。

食事をとらず……。原稿執筆。煙草の飲みすぎか……。吐き気あり。

人生五十年の、生き方を、考えたりする昨今。日々、月々、活いき活いきと、生きぬくこと



の、むずかしさ。

二時過ぎまで……原稿のつづきを書く。

妻、身体の具合、悪しとのこと。心配。

十一月十八日（月）

雨後曇

牧口先生の第十四回忌のご法要。於・池袋の常在寺。先生のお身体、とみに悪し。ご自宅に、お見舞いにゆかぬことを後悔す。

午後、聖教新聞にて……ブロック活動をテーマとする“座談会”に出席。学会の本流に生きている人。それている人。よくわかるものだ。

先生の力で、われらはこれまで育つ。

先生の力で、妙法の境涯を開く。

先生の力で、われらの力は発揮できた。

先生の師恩は、山よりも高し。海よりも深し。

忘れじ、われは。偉大なる師の歴史を世界に示さん。誓う、堅く。

常在寺の帰り、矢口の家に寄る。明るい、一家。わが心境、知られざるとも。

自己を磨くことだ。自己と闘うことだ。

十一月十九日（火）

曇

師のお身体<sup>からだ</sup>、極度に衰弱。

病魔か死魔か。おやつれ、甚<sup>はなは</sup>だし。

午後、本部へ急行……先生にお目にかかる。広島の寺院の落慶入仏式にゆかれることを、心よりお止め<sup>と</sup>する。

先生、毅然<sup>きぜん</sup>として、お叱<sup>しか</sup>りになる。

「御本尊様のお使いとして、一度、決めたことを止められるか。男子として、死んでもゆく。これが、大作、真実の信心ではないか」

厳しき指導に、涙あふるる。

「げいか猥下もゆかれ、四千人の同志も待っている。大、死んでも俺をゆかしてくれ。死せばあとはみなでやれ。死せずして帰れば、新たな決意で、新たな組織を創る。あとは御仏智あるのみだ」と。

人來たり、師弟の話、涙して止む。

夜、常在寺にて、第四十部隊の部隊会に出席。元気出ず。「ただ、青年の苦衷は、誰よりも理解している」と語る。それは、経済問題、時間のこと等。あと五年、頑張りをたまえ——と、切々と指導す。

帰宅、十二時少々前。静かな家。

十一月二十日（水）

晴時々曇

冷えこみ厳し。いよいよ冬か。

先生、ご自宅に休まる。広島ゆきは、重病にてゆけず。先生のご心境はいかばかりであろうか。

否、私はこれでよいと思う。しかし、先生の毅然<sup>きぜん</sup>たる指導は、私の生涯に残りて消えぬであらう。

H博士が、昨夜、診察に来たとのこと。嬉しい。

御本尊様に、先生の長寿を祈るのみ。

夜、『近松門左衛門全集』を読む。

あまり、好まぬが、名文と、その描写に驚く。日本に出でし大文豪といえるか。

生涯に一つ、戸田先生の一生を書き留めゆくことに、生命の奥底に、使命と希望とが湧く。

頭脳、冴えたり。複雑になりたり……。

静かなる夜半、妻の和服、美しくして、茶をはこぶ。時計……一時十五分を指している。

十一月二十一日（木）

快晴

終日、先生のことを心配する。

自分も、学会の将来を念い、神経も肉体も疲労のどん底。

夕刻、理髪店へ。多少、爽快<sup>そうかい</sup>。

人間革命の闘争の一日一日。肉弾の如く、今日を戦い進み、生きぬくことだ。題目をあげつつ。これこそ、全人生だ。信心の究極だ。

午後六時三十分——青年部幹部会。豊島公会堂にて。

- ① 来月の青年部総会を目指して
- ② 部員増加の推進
- ③ 中堅幹部の育成

青年部は、意気熾<sup>さか</sup>ん。未来は健全。学会は正義。

この青年たちと、生涯、嵐<sup>あらし</sup>に向かおう。嵐を恐るるな。

十一月二十三日（土）

快晴

女子部総会。川崎公会堂。

午後一時、開会。先生のご出席なし。淋<sup>さび</sup>しい、悲しい総会であった。学会も重大なる段階に入った証拠か。

式進行中、堀日亨<sup>にちこう</sup>御隠尊<sup>げいか</sup>親下の御逝去の報あり。御年九十一歳なり、と。

原水爆廃止宣言を——中心テーマとした総会であった。

私も、原爆について話す。来年の総会こそ——東洋一を誇る神宮外苑の東京体育館にて、先生をお迎え申し、開会する決意を。

三時四十分……閉会。

夜、遅くまでFにおいて首脳会議。

妻、目黒のお宅へ先生のお見舞いに。先生のご様子、芳<sup>かんば</sup>しからず、と。心配、重なる。

先生宅へ、ご報告にゆかぬことを、深く悔ゆ。疲れてならぬ。

十一月二十五日（月）

晴

朝の勤行がつらい。心身共に。

先生より「留守をしつかり守れ」と連絡あり。

先生、広布まで死なないでください。私も断じて死なぬ。深く強く決意す。

静かに……先生の指導が自然に映る。時を観<sup>み</sup>る目、人材の育成法、人物の鑑定法等々。

信長の指導主義、秀吉・家康の功罪等々。

夜、文京支部幹部会。見知らぬ人の多くなつたことよ。驚くばかりなり。個々の面接指導の重要性を沁<sup>しみ</sup>々と知る。

帰り、T宅へ。かわらず明るい家庭。十年後には、功德の華の咲き香ることであらう。御書を一冊差しあげる。



十一月二十七日（水）

晴

昨日三時より、畑毛へ。

堀日亨御隠尊<sup>にちこう</sup>猊<sup>げいか</sup>下御密葬の儀に参列。高橋旅館に一泊。煙草ののみすぎか……腹をこわす。青春の建設か。しかし、生命の破壊をしてはならぬ。

午後一時——雪山荘にて、日淳<sup>にちじゆん</sup>猊下の御導師により勤行。つづいて、細井総監の導師により、勤行・唱題。二時——御出棺。

九十一年のご生涯——大仏法の奥底を、究め<sup>きわ</sup>尽くされし、世紀の大哲人の大往生の尊顔を拝す。感無量。巖然たる仏法の実証。

前に、日昇上人にお別れ申し、今、日亨上人ともお別れとなる。広布の準備なり。大舞台が、回転してゆくのか。

私は希<sup>こいねが</sup>う。広布達成の日まで叱咤<sup>しつた</sup>してくだされ、幼稚な私を、臨終のときは、手を取り、お迎えください、と。

六時、東京着。葛飾の青年部会に疲労のため出席せず……帰宅。欠席を悔い、沈みし心で……床に入ることにする。

十一月二十八日（木）

晴

朝、九時より、浦安のN宅の告別式へ。母の死。立派な成仏の相。

午後、K氏来る。今まで批判せるも、非常に好意を示すようになってきた。幾十万人、過去、敵なれど、今、味方となる。未来も、また幾百万の批判の人、必ず、味方に変わり、広布の陣列に連なりゆくことよ。大宇宙の法則——。

夜、隊長会、幹事会、部隊長会に出席。青年部も脱皮の時来る。次期の、組織の発展について、深く思索することを決意する。

青年部幹部自身の成長が止まっている。その原因の一つは、指針がない。二つには、師

との対話がない。三つには、先輩が自信を与えぬ、等々なり。

師のお身体<sup>からだ</sup>、具合<sup>かんば</sup>芳しからず。先生の重体なること、誰人も、憂えず。必ずよくなると考えているのみ。浅はかにおもえてならぬ。来年のこと、広布の展望のこと、人事のこと、行き詰まりを感じてならぬ。恐ろし、悲し。

先生の指導、われ夢寐<sup>むび</sup>にも忘れじ。

十一月三十日（土）

晴

月例本部幹部会。品川公会堂。

先生、遂にお見えにならず。いよいよわれらは、大使命に立たねばならぬ。先生の灯<sup>とも</sup>した広布の松明<sup>たいまつ</sup>を掲げて。断じて幹部らは学会を私してはならない。

帰り、目黒のお宅へ、お見舞いにお寄りする。お元気なお姿に安心す。しかし、大地を揺さぶる、生命力の衰えゆく姿。悲しみ深し。

奥様の渾身こんしんの看病に、胸打たる。先生宅の質素にも、心打たる。

帰宅して、妻とともに、先生宅のことを、おそくまで語る。清らかに、子供らしく。

〔十一月〕——十一月八日、東京・後楽園競輪場で第十七回秋季総会が開催された。戸田第二代会長は、無知な批判に紛動されることなく、信心をつらぬくよう指導した。

十一月二十三日、不世出の学匠といわれた第五十九世堀日亨御隠尊院下が、静岡・畑毛の雪山荘で御遷化された。二十六日のお通夜には理事長ら幹部十人が参列し、二十七日には日淳院下の導師にて御密葬の儀が執り行われ、池田室長も参列した。

十二月一日（日） 曇

関西へ講義のため、特急「つばめ」にて、東京駅より出発。

H氏等数名と一緒に。皆なにも語らず、あじけなし。

私たちの一行は、京都の幹部会に寄る。皆、心より、喜んでくれる。大好きな京都。

終わって、S宅にて、レコードを鑑賞する。皆の顔に、生き生きとした希望があり、青春がある。

十二月二日（月）

曇

朝早く、目が覚める。神経が休む日なしか。責務と激務の連続なれば、いたしかたなしだ。

京都の幹部、九時ごろより来る。善人ばかりだ。品格のある婦人ばかりだ。Yさんも、実に善良な人だ。真剣に対談を。

一時少々前、関西本部へゆく。

本部広間にて、「末法相應抄」を講義。幹部に厳しくあてて解釈させる。幹部、狼狽ろうばいせり。

夜、堺支部の幹部会に出席。引きつづいて、尼崎の幹部会。終わって、総ブロックの会合へ飛んでゆく。今日も悔いなき法戦。

会合後、宴会の用意あり——学会の会合には、絶対、いかなる幹部たりとも、もてなす必要なし、と厳しく叱る。青い顔になりし、幹部と婦人の顔が可哀想でならない。

来年は「勝利の年」にしたい。学会を批判する人、多し。

ヒルティはいった。

「高慢は、つねに相当量の愚かさに結びついている。高慢はつねに破滅の一手手前であられる。高慢になるひとは、もう勝負に負けているのである」と。

革命に生きる青年は障魔の嵐を恐るるな。

一人して、関西本部に泊まる。

十二月三日（火）

晴後曇

一日中、微熱あり。色心とも陽気になれず。今日の帰京の特急は、ことのほか疲れた。

先生のご容体、全くよくならずとの報あり。心配である。心配である。

六時より、一般講義。「大白蓮華」の解釈と相違あり、と抗議あり。解釈も、慎重を要す。活字はこわいものだ。

寒くなる。本部も、街も、わが家も、冬の彼方<sup>かなた</sup>には陽光<sup>さん</sup>燦たる春が待つ。人生は常に北風に向かい、そして春を待つことだ。

人生も、社会も、複雑である。しかし、長い人生であり、大きな社会だ。失敗を恐れず、大いに北風にあたり、色心を鍛えることだ。

歩みながらも、車中でも、諸行無常しよぎようむじようということ——常楽我淨じようらくがじようということを思索する。

先生、先生の回復を、待つのみ。

今日もまた、明日も雄々しく、戦えと、

己おのが心に、おのがむち打ちて進め……と師の声あり。

就寝——一時をまわるか。

十二月四日（水）

晴後曇

先生のお声をお聞きしたい。しばし、お会いできず。なんと淋さびしきことよ。

先生と共に戦い、進み、生きぬくこと以外に、私の人生はない。師ありて、われあるを知る。

夜、本部にて、会議。学会のテンポ遅まる感じ。これでよいのか。



十歳まで……平凡な漁師（海苔製造業）の少年時代

二十歳まで……自我の目覚め、病魔との闘い

三十歳まで……仏法の研鑽と実践。病魔の打破への闘い

四十歳まで……教学の完成と実践の完成

五十歳まで……社会への宣言

六十歳……日本の広布の基盤完成

いろいろに思う。未来の指標。

今、三十代になんなんとし、今世の指標、いずこまで完成できたと、一人思索する。

十二月五日（木） 雨

微熱あり、暗い憂うつな日であった。一日中、自身と戦い、広布と戦う。

原稿が滞り、非常に困る。大学者、牧口先生、戸田先生の、お偉さを、沁々と知る。自

己の力なさを悲しむ。人間革命あるのみか。

夜、男子部班長会に出席。帯広の開拓者・依田勉三の話をする。

ますらおが 心定めし 北の海

風吹かば吹け 浪立たば立て

われらの宿命を語りかける。終わって、女子部の幹部会に出席。「女性は、四十代で、その人生の幸・不幸の勝負あり」と話す。

帰宅、十一時少々前。二時まで原稿執筆。自分の忍耐のなさを嘆く。

教学と雄弁は、最大の武器なり。

十二月六日（金）

曇

暖かな一日であつた。春の如し。

学会も、大きな曲がり角にきた感じあり。

重大なる方向を、誰人が知るや。

夜、文京支部の地区部長会に出席。皆、元気。頼もし。学会の重鎮を大切にせねば。

「上野殿御返事」を講義。皆、真剣。

今夜は、早目に休もう。よく休もう。闘争の準備のために。

十二月九日（月）

晴時々曇

寒い日であつた。

先生の動かざる学会は、なんとなく静か。これでよいのかと自問。題目で生命力を。

“妙とは蘇生<sup>そせい</sup>の義なり”だ。

午前中、「聖教新聞」の「座談会」。「立宗七〇六年の展望」と題して。

夜、Y宅へお歳暮。遅くまで語る。

十二日は、総本山にて、堀日亨<sup>にちこう</sup>上人の御本葬。本年最後の登山である。心より靈山<sup>りようぜん</sup>にお  
おくり申し上げたい。

心豊かに勤行。読書。

十二月十日（火） 快晴

愛親覚羅慧生、大久保君の心中、社会を驚かす。共に十九歳と。多情にして、多感の青  
春の末路は悲し。可哀想に。

朝、先生のお宅にお寄りする。一時間半ほどお邪魔する。H博士が来たところであつ  
た。博士いわく「非常に良好」との由。嬉<sup>うれ</sup>し涙。

北海道のお餅を二つと馳走になる。質素なる師の宅。先生の鋭き瞳<sup>ひとみ</sup>、先生の生きぬかんとする生命力、恐るる感じあり。

午後、品川の妙光寺へ、父の一周忌の塔婆<sup>とうば</sup>供養にゆく。兄と、妻と、子供二人をつれて。

夜、第六回青年部総会を前に、本部にて、部隊長会を催す。八時過ぎまでかかる。有意義な会合であった。本末<sup>ほんまつくきよう</sup>究竟して等しければ、今日のこの真剣さの延長として、総会は大成功となるはずだ。大切な勝利の因は、まず企画の足並みで決まる。

帰宅、十一時少々前、静かなる、わが家。疲れも自然に消えゆく、暖かな、わが家。

十二月十一日（水）

快晴

夕刻より理事会。

来年度の行事、財務の件、および除名者復帰の件。

帰り、目黒にて、理事長、理事たちと焼き鳥屋に入る。面白からず。飲んで、調子に乗るものは、私はきらいだ。

帰宅、十時少々過ぎる。Z氏来宅。遅くまでいる。疲れる。読書の時間がなくなり、困った。

中共の戦術を読む。

敵進我退      敵進めば我退き

敵駐我擾      敵とどまれば我みだし

敵疲我打      敵疲れば我打ち

敵退我追      敵退けば我追う

就寝、三時近し。体力がほしい。ほしい。

十二月十五日（日）

晴

十二日——午後一時三十分、東京発の急行にて、総本山大石寺へ。日亭上人にちこうの御本葬列席のため。

午後七時より、御本葬の儀。

十三日、十四日——在、総本山。午後一時三十分より御開扉を受ける。戸田先生の健康のこと、青年部のこと、一家のことを祈念。

十四日夜、静岡県吉原市の文京支部関係の会合に出席。活気全くなし。力ある指導者を派遣の要あり。

深夜、帰宅。妻、縫い物をしながら待っている。美しき一夜。

誰人にも、侵害されず、誰人にも頼らぬ、家庭の建設でありたい。

さあ！ 明日よりまた、一糎<sup>センチ</sup>、二糎と進むぞ。

十二月十六日（月） 快晴

先生とお会いできる日、少なくなる。淋<sup>さび</sup>しい。苦しい。

午後、先生より厳しき電話あり。先生は、いろいろの報告を待っておられるのだ。

六時より——第六回青年部総会。

遂に先生のお姿見えず。残念、無念。

東京体育館に、二万の青年結集。会場は、われんばかりの坩堝<sup>るつぽ</sup>であった。次代を背負う、青年部の前途はここに。八時三十分——終了。

この青年を、見守りゆく責任を更に感ず。疲れる。



今日は、遅いので、明朝、先生にご報告にゆくことにする。

社会で、また、先輩に、いじめられている青年に、サインをして、本を贈呈し、激励す。明るい顔に、安心。闘争力を強く、彼らを護るために。

帰宅、十一時。

十二月十七日（火）

晴時々曇

朝、理事長来宅。犬を連れながら。

八時、目黒の先生宅へ。一時間、談合して戴く。いただ。昨日の総会等のご報告を申し上げる。  
イチゴをご馳走になる。

先生のいわく「大作、あと七年で、二百万世帯まで闘たたかいたい」と。「勇気百倍、断固、

闘います」と申しあぐ。

しかれども、私の内奥には一抹いちまつの淋さびしさあり。悲しみは消えず。先生の寿命、先生の境地は。ああ、悔くやしいでありましょう。苦しいでありましょう。残念でならぬでしょう。

先生、私はよく知っております。私は。

夜、Hにて、青年部の首脳たちと会食。ご馳走してあげる。

幸福な、静かな、わが家に。早く、読書をしたいと思いつつ、急ぎ、三通、返書を。

十二月十八日（水）　しぐれ後晴

『太閤記』再読完了。現代社会にも、その機微、通用ありか。

一日中、熱あり。

病魔との闘いの日々。

今日より『ガモフ全集』を再読することにする。

過去の先入観による仏法観を、超越し、下種仏法の偉大さを次第に知る。

「科学が進展すればするほど、この大仏法の奥義の証明は楽になる」と、師は常にいう。

夕刻より、自宅にて幹事会。支部長はじめ、真剣に会議。疲れる。実に疲れる。

- ① 来年度の基本方針を語る
- ② 幹部は自信をもつこと
- ③ 瞬間瞬間、変化する生命の不思議
- ④ 会長就任七年にして、学会の大きな変化の必然性

以上のことにつき、懇談的、感想的に語る。善人ばかりの、尊き同志。

十二月十九日（木）

晴

今日も熱あり。心身だるし。咳きこみ。大事にせねば。

御書を拝読。

鉄は炎打てば剣となる賢聖は罵詈訾して試みるなるべし。

（佐渡御書）

こんなことを書いてある本あり。

「人生七十年・働く年数十九年・睡眠二十三年間・病氣四年間・娯楽九年間・着物の着替二年間・食事の時間三年間——」と。思う！ “実質的、価値ある人生、何年間なり”と。

夜、東横地区の座談会へ。美しい、神々しいほどの夜である。

地区員に、決して無理せぬよう注意する。「人生、決して、疲れては、全てに勝てぬ」

と。

可愛い、地区員に幸あれ。

就寝、十二時近し。

十二月二十日（金）

快晴

夕刻、目黒の先生宅へ、お歳暮のご挨拶あいさつにゆく。妻とともに、御飯を頂戴する。先生、神経がいらいらしておられる。秘書部長の報告が、かえって、先生の身体に悪いと思う。

微熱下がらず、早目に帰宅。

ゆっくり思索を。読書を。

十二月二十一日（土）

快晴

午後、M宅へお歳暮のご挨拶。妻と共に。大変にご馳走になる。

夕刻、池袋、常在寺にて、第三十七部隊会に出席。

- ① 部隊長を中心に清い団結を
- ② 御書の一節を色読するように
- ③ 長く、忍耐強き信心で幸福な人生を、と。

来年は、全精魂を傾けて、青年部の発展に尽くす決意をする。それ以外に、学会の未来の発展はない。

楽しい、明るい家庭に帰宅。十一時。

十二月二十二日（日）

曇・濃霧

朝、Hさんのお母さんの葬儀に出席。馬込<sup>まごめ</sup>のお宅へ。少ない人に驚く。「四十九日には、多数出席してあげたい」と話す。

午後、本部にて、個人面接。

先生の休みし本部のもの静けさよ。水に波動のある如く、生命にも、躍動、一念の波動というものがある。先生のいない今日は、それが無い。不思議。

夕刻、少々、横になる。体力つく。やはり休養をとることも必要。体力が闘争の源泉だ。

勝ち負けは 人の生命いのちの 常なれど

最後の勝をば 仏にぞ祈らむ

先生より贈られた和歌を、生命に刻みつけ、忘れまじ。

夜、妻と二人して、来年の生活設計を語る。希望わ湧く。未来開く。

十二月二十三日（月）

快晴

皇太子殿下、二十四回目の誕生日。新時代の夜明けの表徴であれ。男子部の歩みにも似て。

夜、文京支部幹部会。

- ① 現実ということについて
- ② 力ということについて

終わって、K支部会館の忘年会に出席。騒々<sup>そうぞう</sup>しい雰囲気<sup>ふんいき</sup>に、いや気がさす。

清冽<sup>せいれつ</sup>たる青年と共に、語り、食し、悩み、生きゆくことが、自分の最大の歓び<sup>よろこ</sup>だ。

十二月二十四日（火）

快晴

今日も、身体の調子、芳<sup>かんば</sup>しからず。



夕刻、七人の幹部と、Dにて忘年会。野戦に生きぬく侍たちである。愉しく語る。

本部に帰る。青年部の首脳、来宅との由、至急帰宅。

誠実こめて……遅くまで語る。未来の戦士、信頼の勇士。なんで、いいかげんのがいえようか。抱きしめてあげたし。この青年たちを。

先生より、遅くお電話あり。本山の土地購入等のことについて。

十二月二十五日（水）

晴後曇

本部幹部会。於、豊島公会堂。先生ご欠席。

遂に七十五万世帯達成さる。輝く目標完遂。戸田城聖先生の確信は、まさしく実現されたのである。仏法の厳しさを、生命の奥底より知悉する思い、多々。

来年度の指針を先生より伝言。

① 一家和楽の信心

② 各人が幸福をつかむ信心

③ 難を乗り越える信心

堂々たる宗教革命の前進。

終わって、常在寺にて、支部長・部長会。忘年会を兼ねて。

九時三十分、終了。家路に。

ひとり、御書拝読。

勉強不足は、幹部の恥なり。

われ、求道者として、如何<sup>いかん</sup>。慢心の人には断じてなるな。師の瞳<sup>ひとみ</sup>、厳しく叱<sup>しか</sup>る。

十二月二十六日（木）

曇後雨

先生の病<sup>やまい</sup>、深し。

小生も病む。残念なり。自宅よりタクシーで。所詮、タクシー代も、身体を大事にする医療代と思いつつ。

新宿Kにて、男子部隊長会。自分の、第一部隊長時代、男女部隊長会の新年会に、新宿Sにて、先生より厳しく叱られしことを話す。

先生の、激烈な指導の時代であった。いまは懐かし。

来年は、六十五部隊の結成を決意。

会長就任——七年にして、七十五万世帯の完遂は成れり。青年部の目標はいかに。第一段階、「国土訓」の如く、十万名の結集をなす宿命あり。われに。

それまで、断じて、病魔と闘う。先生のご再起を祈るのみ。

冬枯れに 春の若芽は 因果俱時いんがぐじ

池田蔵書がふえゆくのは、最高に愉たのし。並ぶ本は、吾わが子の如し。  
子らの健康な寝顔。未来は、いつまでも、いつまでも、つづきゆく。

十二月二十七日（金）

濃煙霧後にわか雨

午後、本部応接間にて「大白蓮華」の「座談会」。“堀日亨上人を偲しのんで”と題して。

疲労のためか、声出ず、話しづらかった。

人の言語に色心あり。その言語に生命の力あり。大事なことだ。人の言語を奪う悪鬼、鬼神あり、と古書にあり。医学のみにて解決できず、生命全体より考える問題なり、と思う。

新聞紙上にS会長逝き、また、この日、Y氏倒るとの報道あり。老人の時代より——新

しき青年の時代に変遷<sup>へんせん</sup>しゆく前兆か。

青年は、「明日は俺たちのものだ」と胸を張って、進軍することだ。常に、山を越え、谷を越え、颯爽<sup>さつそう</sup>と、どこまでも、どこまでも。

風邪、ふたたび。咳<sup>せき</sup>がこまる。

先生、少々お元気になられるとの報を受く。安心。嬉しい。

十二月二十八日（土）

曇一時雨

二十九歳も、あと数日となりゆく。

来春は三十歳だ。いつまでも甘えた子供というわけにいかなくなった。

勉強を、実力を、闘争を。

午後、S宅へお歳暮にゆく。

よき家族かな。模範なり。

十二月二十九日（日）

晴

一年ごとに責任を感じ、一年ごとに、先生から講義をうけ、勉強しゆく、この年末。成長の節を顧みる実感あり。<sup>かえり</sup>深く強く。<sup>みようやく</sup>冥益は正法の現証なるを。来年の新しき坂を登ろう。

午前中、休養。

午後、先生宅へご挨拶。<sup>あいさつ</sup>実家へ、兄宅へ、理事長宅へ、お歳暮に回る。

おそく帰宅。ゆつくり一家で勤行。

十二月三十日（月）

快晴

午前、午後と、在宅。

午後、読書。御書も……。

午後六時より、I氏宅を、青年部最高幹部、夫妻ともども、訪問。皆して、遅くまで語る。

帰り、新宿に寄り、妻と二人で、正月の装飾品を求む。

十二月三十一日（火）

快晴

二十九歳よ、永遠にさようなら。

三十代の人生に、栄光あれ。

本年は、苦難の年であつた。負け戦であつたかもしれぬ。

来る年は、断じて勝ちゆく、晴れの人生の出発を。

昭和三十三年よ、さようなら。

巖風に、富士の勇姿は、かわらずに。

〔十二月〕——十二月十六日、東京体育館に約二万人が集い、第六回男子部総会が開催された。昭和三十三年度の指導方針として、「十万の結集」目指し部員の育成をはかることが打ち出され、席上、池田室長は男子部の重大な使命を強調した。

十二月二十五日に行われた十二月度本部幹部会で、学会の総世帯数は七十六万五千世帯となったことが発表された。戸田第二代会長が会長就任のおり、生涯の願業として掲げた七十五万世帯を見事に完遂したのであった。そして、①一家和楽の信心②各人が幸福をつかむ信心③難を乗り越える信心、の三指針が発表された。

社会では、十二月六日に日ソ通商条約が調印され、昭和三十三年五月九日に発効することになった。この日、山下汽船の貨物船竜宝丸が、ソ連向けの第一船として横浜港を出発した。

この年流行したものは、ラジオ・ドラマでは「赤胴鈴之助」、歌謡曲では「東京だよお母さん」「俺は待ってるぜ」「夜霧の第二国道」「港町十三番地」「バナナ・ボート」など、映画では邦画の「喜びも悲しみも幾歳月」「幕末太陽伝」「蜘蛛巣城」ほか、洋画では「道」「戦場にかける橋」「昼下りの情事」など、ベストセラーになった本は原田康子の『挽歌』で、芥川賞は菊村到『硫黄島』と開高健『裸の王様』が受賞した。



# 昭和三十三年

——一九五八年——



## 元旦（水）

晴後曇

七時、起床。心身共、疲れている。しかし、三十にして起つ年の自覚、脈々たり。

妙光寺で初勤行。朝日、祝福するが如し。

九時、目黒のお宅へ、先生をお迎えにゆく。師と共に新年を迎えた青年部幹部の歓喜、名誉、これ以上なし。

先生、お元気のお姿であられた。生涯、先生と、絶対はなれない信心でありたい。それしか、私の人生はない。

十時、学会本部へ。

本因妙、本果妙、本国土妙、と三妙合論の講義あり。甚深々々。終わって新春に歌三つ賜る。青年部には、

若人わこうどの 清き心に 七歳ななとせの

苦闘の跡こそ 祝福ぞされん

一時三十分発の急行にて初登山。先生に、お供させていただく幸せ、たと譬えるものなし。

一月二日（木） 曇後晴

三十歳の誕生日である。

八時三十分、初御開扉。

先生、一日中、理境坊。私も一日中、理境坊。種々お話をうけたまわる。

生まれて二度目の写真機を使う。廊下にお出ましの先生を、二、三枚撮とらせていただく。

一月三日（金）

快晴

多宝富士大日蓮華山が、世界最高に清く美しい。最良の住所だ。しみじみと感ずる。

「法妙なるが故に所尊し」——一閻浮提いちえんぶだい総与の大御本尊が、実在する所なれば当然だ。

午後の御開扉に、再び先生と共に。さらに本年の決意を祈念する。感激、胸に迫る。

先生と、理境坊にて、将棋しょうぎをする。一勝一敗であつた。深き思い出となろう。

夕刻、大阪関係の座談会に出席。生命力を奮い起こし、同志のため、後輩のために、真剣に尽くさなければならぬ。さなくんば、師のもとにいる価値がない。

一月四日（土）

曇後晴

正午、下山。四日間、総本山で過ごしたことは初めて。嬉うれしくもあり、将来のことも考える。

一時八分発の「西海」に乗る。首相一行が同車しているとのこと。熱海で降りた様子。

現今の政治を同志と語る。王仏冥合おうぶつみやうごうの新社会が実現せずんば、真実の政治も、平和も幸福もあり得ぬことを、深く訴える。妙法に照らされぬ権力・財力の魔力を、沁々しみじみと思う。

久方ぶりにわが家。客と応対。一つも面白からず。所詮しよせん、学会活動が、いちばん楽しいのか。菩薩界、仏界の世界なれば。

一月五日（日） 快晴

一日中、熱あり。困る。三十七度七分とのこと。どうして、いつもこんなに熱が出るのか。悲しくなる。妻には、いつも心配のかけ通しだ。

夜、支部の新年宴会に出席。終わって、男女青年部幹部の新年宴会に出席。帰りに、荒川ブロックのT宅あいさつへ挨拶に。

帰宅、十二時を過ぎる。

身体を大切にせねば。この一年で、鉄の如き丈夫な色心にしたものだ。身体の建設。  
肉体の建設。

この一年、動か、静か、激か——ともかく運命の連続の一年か。わが瞳ひとみ——一直線。

一月六日（月） 快晴

六時、文化部の新年宴会……Nにて。

招待を受けたので出席。祝辞をのべる。K氏、私と反対の意味の挨拶。  
小心な人だ。

十時近く帰宅。

勤行を真剣に。早目に休もう。

明日より、教学だ。勉強だ。負けるな。勉強せぬものは、必ず負ける。勉強しゆくものは、必ず勝つであらう。

レコードを聞く。就寝、十一時五十分。

一月七日（火）

煙霧

夕刻、本部へゆく。先生に、ちよつと、お目にかかる。お身体からだの具合、非常にお悪い様子。おいたわしき限りである。

時代は、変わってきた。残念だ、無念だ。しかし、広布実現まで、長い人生である。

先生、見ていてください。成長して、必ず青年部が、あとに続きます。

夜、御僧侶招待……Nで。先生のお姿、全くお元気なし。御僧侶十六人。大幹部三十名。

先生、お帰りのあとは、まことに淋さびしい。弟子一同に、一段の奮起を望みたいほどである。

早めに床につく。疲れては、闘争はできない。法戦のみ面白し。

一月八日（水）

晴時々曇

本年度の予算——一兆三千億、と。時代は漸次<sup>ぜんじ</sup>インフレか。経済中心の政治・社会の感  
深し。

夜、会合あり。先生のご様子、心配。遅く、お元気との報あり。安堵<sup>あんど</sup>。

興廃移り 悲喜まじる

一人の跡 一国の跡

笑の蔭に 涙あり

暗のあなたに 光あり

——土井晩翠「暁鐘——萬里長城の歌」——

十時過ぎ、学会本部を出る。



一月九日（木）

曇

少々、健康をとり戻す。

世界一の心の故郷——総本山大石寺。

一閻浮提<sup>いちえんぶだい</sup>第一の大御本尊<sup>ましま</sup>在す処なれば……本門の靈鷲山<sup>りようじゆせん</sup>……生命の宮殿……仏界……  
九識心王真如<sup>くしきしんのうしんによ</sup>の都。

世界一の実践の城——学会本部。

広布の電源所……地涌<sup>じゆ</sup>の大鷲の所住……妙法流布の攻防戦の年輪……世界広布の名将・  
人材の本源地。

本年も前進だ。妙法に照らされ……最高に有意義な歴史を創<sup>つく</sup>ろう。

一月十日（金）

晴

輸送会議に出席。大講堂落慶記念総登山——登山者二十万名の輸送の件。関係会社、その他の打ち合わせを遅くまでする。

## 一月十六日（木） 快晴

一月十一日 京都支部講義……「四条金吾殿御返事」。質問・指導会。

〃 十二日 舞鶴の指導。

〃 十三日 大阪支部幹部会、並びに男女幹部会に出席。

〃 十四日 堺支部、並びに船場支部せんばの指導会へ。

〃 十五日 岡山へ、講義および質問会を。

〃 十六日 特急「はと」にて帰京。

いずこにいても、教学熱の盛んなのには、驚く。勉強せねば遅れていくこと早し。

Yさん、Sさんに、お世話になる。人の心ほど、美しきものなし。また、醜みにくき心も、ま

た人の心。妙法は、善悪一如と説くか。

車中、マックス・ウェーバーの『宗教社会学』を読む。ドイツの思想家と、フランス・イギリスの思想家たちの相対的性格を思索しながら。

御書の一節をわが生命に刻む思いで——この書に誌しるそう。

当世の習いそこないの学者ゆめにもしらざる法門なり、と。

(草木成仏口決)

一月十七日(金)

晴

梅の花は……。

真黄の連翹れんぎょうの花は……。

朝、注射を。先生と、久しぶりに、じっくりお会いする。本部にて、「大」久しぶりだね……」と、おっしゃられた。師匠の暖かな眼差まなざし。懐なつかしい。大愛の師に、感動あり。

青年よ、一切の邪惡の権力に抵抗せよ。

明日より、時間を決め、読書することに決意。

一月十八日（土）      快晴

午後二時より、輸送會議。最高首脳（理事）は、その実態を知らず、現場の青年のやりにくきことを心配する。

先生の、おられぬ間の責任は、理事長であり、理事だ。怒りたい思い、激し。

夕刻、先生とお目にかかる。

「やりづらくとも、君たちが、学会を支えてゆくのだ」と、厳しき指導あり。先生の胸中……。

夜、幹部達と、H宅の新築祝いにゆく。遅くまで語る。雑然たる雰囲氣――。  
帰り、K支部会館に寄る……全く面白からず。

K支部長等、幹部の傲慢ごうまんさにあきれる。支部の他の人々が可哀想なり。

早々に帰宅して、読書。

一月十九日（日）

晴後曇

午前中、休養。身体を大切にせねば、と常に思う。

矢口の母、来る。子供の教育のこと、生活設計のこと等々、妻と三人で語る。静かに、  
そして、暖かく。

明日は、先生宅に、お邪魔せねば。

夜、子らを連れて、銭湯へ。

原稿執筆……一時まで。

一月二十日（月）

晴

目黒の、先生のお宅に、お邪魔する。一時間半ほど、親しく、談合して下さる。将来への、先の先まで、お考えくださる慈愛に、ただただ、感謝申し上げるのみ。

総登山のこと、文化闘争のことなど、公私共に指導あり。先生のご指示を、更にさらに、力強く感じ、実践せねば、証明せねばならぬ。

来年は、三十一歳。三十五年は、三十二歳。三十六年は、三十三歳。三十七年は、三十四歳。三十八年は、三十五歳。三十九年は、三十六歳なり。

われ、青年なり。青年なり。

本年第一回青年部幹部会を品川公会堂にて。

三月総登山を中心に、充実した幹部会であった。

毎月、必ず幹部会に出席したい。

支部との関係を心配する。私の指示行動によって、すべて決まってしまう。信心中心に。目的中心に。御本尊様の照覧を得て。

一月二十一日（火） 晴一時にわか雨

平凡な一日。朝、体温三十七度八分あり。

本も読まず。書きもせず。無意義な一日を恥ず。

午後、H君の結婚式に出席。常在寺にて、大いに祝ってあげる。

帰り、新宿にて映画館へ……面白からずして、すぐ出る。

身体だるく……早く帰宅。

先生と、お目にかかれず……淋<sup>さみ</sup>し。不思議なぐらい淋し。

一月二十二日（水） 晴一時曇

人生には、三種の人生の生き方がある。

過去の人、現在の人、未来の人。

学会にも、社会にも、政界にも、この道理は同じなり。

青年は、すべて未来の人だ。ゆえに、理事は、現在の人として活躍をすると同時に、未来の青年を、見守るべきである。

午後より、理事会、青年部首脳と連合で。議題……三月の総登山について。延々四時間もかかる。



論議は大切。結論も大切。その実行や、更に大切。それをするのは誰人か。首脳達は、それを知れ。

帰宅、十二時近し。

途中、屋台のおでん屋に寄る。人間の味、庶民の味あり。

一月二十三日（木）

快晴

朝、注射。

先生のお体も、芳しかんばからず。

「闘争の源は、鉄の肉体であり、生命力であり、健康体である」と、つねづねいいし、その師も弟子も、つねに病弱とは、運命のいたずらや、にくし。

M君、W君、本部職員にすることに決める。大局からみて、已むを得まい。健闘を祈るや大。

本部の帰りに、新宿Fにて、妻と二人きりで、新年宴会をする。

寒き夜であつた。万光の星辰がきらめいていた。数年前にも似て。

驚も、師子も、休む時あらん。休まざる者は、蛮勇に似るか。

関ヶ原の合戦に、家康は休み、三成は休めず、といいし人あり。

帰宅、十二時近し。

一月二十四日(金)

快晴

朝、熱あり。無理して家を出る。

妻、「病人の姿」という。

午後、首脳会議、Yにて行う。新年宴会も兼ね、招待してあげる。

- ① 三月の総登山の具体的な方針
- ② 次期部隊長の検討
- ③ 文化部員の決定、等

夜、本部に戻り、一人、たまっていた先生の指導をメモする。

帰宅、十一時少々前。

一月二十五日（土）

快晴

南無と申すは、敬う心なり。  
謳<sup>うた</sup>う心なり。

心豊かに、勤行・唱題できず……猛省。

夜、文京支部幹部会に出席。「南部六郎殿御書」を中心に、講義・指導を。身体だるく、思うように、指導できず。申し訳なし。

帰り、支部長らと、次期地区部長の任命を語る。十年後には、どれほどの人材が出るかとやら。誰人も、考えていまい。

目白駅より山手線に乗車。車中、数名の青年部員と会う。品川駅まで語りゆく。革命の青春譜。

一月二十六日（日）

晴後曇

朝、疲労深し。微熱あり、三十七度八分とのこと。注射を打つ。午前中、床の中で、本を軽く読む。

午後、O君の急死の報をうく。驚く。自転車に乗って電車と衝突とのこと。いたまし、  
厳し。至急、現場へ、病院へと走る。先生に報告……非常に心配さる。不思議に、傷もな  
く、眠れる如き遺体……。

厳しい一日であった。いやな天候となる。刻々と変化する天候と、人の心の葛藤<sup>かつとう</sup>。誰人  
も、久遠<sup>くおん</sup>も、未来際までもか。

一月二十七日（月） 快晴

寒椿の花の色濃し、忍耐の女性の花の表徴<sup>ひょうちよう</sup>か。

午前中、先生のお宅に、お邪魔する。O君のご報告等々のため。先生の包容・慈悲に驚  
くのみ。“横死と宿命”についてお話あり。

午後、学会本部にて、首脳会議。

① 青年部幹部から革命の先駆を

② 指導の具体性

③ 学会中核の方途、等々

夜、豊島公会堂にて、組長会に出席。皆、元気なし。終わって、地区部長会に出席。皆、疲れているのであろうか。

寒い寒い夜であった。

厳冬……われらの宗教革命、文化革命の姿にも似て。

帰宅、十一時少々前。北風の戸をたくこと激し、わが黄金の貧家。

少々、御書を拝読。……勤行。

天地水火風は是れ五智の如来なり一切衆生の身心の中に住在<sup>じゆうざい</sup>して片時も離るること無きが故に世間と出世と和合して心中に有つて心外<sup>しんげ</sup>には全く別の法無きなり故に之を聞く時立所に速<sup>すみ</sup>かに仏果を成ずること滞<sup>とど</sup>り無き道理至極<sup>しごく</sup>なり。

(三世諸仏総勘文教相廃立)

一月二十八日（火）

曇後雪後雨

朝、先生のお宅に、お邪魔する。二時間余、暖かなお話を戴く。いただ感謝深し。心奥に、いつか、いつか、厳肅なる日の来たることを直覺してならぬ。胸はりさける悩み出づ。

○君の通夜に、先生より哀惜の言葉くださる由……弟子を思う師の姿に涙す。それを夕刻頂戴し、ちようだい大森の○君の通夜に参列。

幾人もの同志集う。つど同志や有り難し。私が中心になり、ねんごろに読経・唱題す。子供なく、夫人の姿、はじめて見る。

最も、○君と関係のある、F君、遂に通夜に来たらず。無慈悲な男よ。彼の行動に、憤りを感じ、彼のために悩む。人の心は、大事のときに、明確になりゆく教訓を知る。

寒い日であつた。寒い暗い夜であつた。

一月三十日（木）

曇

午後三時より、池袋の常在寺にて……本門大講堂落慶大法要に関する、本山側僧侶と学会側代表との連絡会議をする。

広布の歴史に残る、大行事なれば、真剣に、事故なく、完了せねばと誓う。

会議終了後、本部に帰り、原稿執筆。

妻に、十時に蒲田駅に来るよう電話をし、その約束、忘れてしまう。

妊娠の妻を、寒い中、一時間以上も待たせてしまう。悪いことをした。

途中、寒いので、二人して、屋台の「もつ焼き」を食し、身体を暖める。

〔二月〕——戸田第二代会長は、元旦に行われた本部の初勤行に出席して、「三妙合論」について講義し、また年頭の和歌として一般会員には「獅子吼して貧しき民を救いける 七歳の命晴れがましくぞある」「今年こそ今年こそとて七歳を 過して集う二百万の民」、青年部に「若人の清き心に七歳の 苦闘の跡こそ祝福ぞされん」の三首を贈った。

一月一日から五日にかけて、総本山大石寺への初登山が行われた。一日には全国男女合同部隊



長会および男女別部隊長会が開かれ、年頭活動大綱を決定した。二日には戸田会長をはじめとして各会員が御開扉をうけた。

一月十六日、学生部は支部単位にグループ編成をすることになり、在京関係の男子学生部の組織を、従来の五グループ編成から、原則として一支部一グループの組織に改めた。

日本は一月二十日にインドネシアとの平和条約・賠償協定に調印し、経済開発借款に関する公文書を交換した。これにより、十二年間に賠償金三億二千三百八万ドルを支払うことになる。

科学技術の分野では、東京通信工業（現ソニー）で研究中に、江崎玲於奈氏が発明した半導体「エザキダイオード」の理論がアメリカの物理学学会誌に発表され、大反響を呼んだ。

社会では、一月二十六日に定期旅客船「南海丸」が、徳島から和歌山へ向かう途中、最高二十五メートルの風雨のなか、淡路島南方で消息を絶ち、乗船員百六十七人全員が遭難するという事件が起こった。

二月一日（土）

晴時々曇

朝、横浜七時三十分発「東海」にて、総本山大石寺へ。

大講堂落慶式を前に、付近の土地購入の問題解決のためである。

青年部首脳と、理事長等も一緒に。

一切、問題解決のはこびとなる。夕刻、五時に。

瘦せ衰えゆく、先生を、本山にお迎えする。先生、毅然たる態度で、指揮をとりはじめゆく。

先生の指示で、遅くまで、再び、地主やM宅へゆき、土地問題の再確認をする。

二月二日（日） 雪後雨

朝、熱あり。風邪か？

午前九時、先生と共に、御開扉。万思、祈念す。

本山に雨ふりはじむ……温暖になる。

午後一時四十分——本山をあとに。品川駅で、皆と別れ、自宅へ。

久しぶりに、家族と夕食を。妻も子らも愉<sup>たの</sup>しそう。妻の父、来宅。元氣。長寿を祈る。

皆して、朗々と勤行・唱題。

子らに『童話集』を読んであげる。うまく読めず。

二月二日(月) 薄曇

朝より微熱あり。

先生、熱海にて、ご静養。種々、電話あり。

夜、六時三十分、「御義口伝」の講義。助教授会。「観音品」「陀羅尼品」等である。  
甚深じんじんの法門。

終わって、本部広間にて、男女合同の部隊長会。

- ① O君の死の報告と生命問題
- ② 三月の総登山について
- ③ 人事の問題、等々

終了後、青年部の首脳に天ぷらそばをご馳走する。十年、苦難の坂を登って来た勇士。  
“この訓練に生きぬいた人材の未来は、偉大な人生の栄冠が待つと信ず”と。

帰宅、十一時過ぎ。和服の妻の姿やよし。

二月四日（火）

快晴

朝、熱ありて、起床できず。一日中、静養。風邪、悪化の様様。近所の医者、来る。三

十歳前後の医者で、まだ開院までもないとのこと。

父、T氏、Z氏、見舞いに来てくれる。

休みながら応対。お汁粉、美味。

ひとり考える。

- ① 大阪裁判の決着について
- ② 学会の第三代、第四代会長について
- ③ 続『人間革命』の整理について
- ④ 学会本部の建設について
- ⑤ 自宅の生活設計について

以上

遅くまで、妻にレコードをかけてもらう。三橋美智也をはじめ……。

遅く、病める先生より「大作の病氣の方はどうだ」と、奥様を通じて電話あり。申し訳なし。

## 二月七日（金） 雪後雨

東京——雪。寒い。

東京駅——十二時三十分発の特急にて、関西指導。東海道……一直線に、雨、雨。

熱っぽい身体で、無理しての旅。御書を開くも、頭に沁みこまず。ぼんやりと、窓外を眺めつつの、一人旅に終始する。

大胆な、太い神経が勝つ乱世か、繊細な暖かい神経が、真の人間性か、青年は迷うなり。

強盛なる信心、純粹なる信仰、ということをし惟する。「革命」「不惜身命」……常識、英知についても考えてみる。

「順縁広布」「化儀の広布」についても、重々、方法論とビジョンを、思索する要あり。

大阪に、多数の暖かき友と語りつつ、一泊。

二月八日（土）

曇

大阪より、姫路へ急行。

①指導会 ②班長会 ③地区部長会

初指導なれば、全魂を尽くす。「皆、〃自信に満ちた〃と語っていた」と。嬉しきことよ。

姫路城（白鷺城）を見学。

「源平の昔、安徳帝とともに逃れゆく姫達の路なり」と。美しく、哀れ多き白鷺城。その威容、戦陣にあらずして、詩情の姿と思えるなり。天正の秀吉、慶長の輝政、元和の<sup>げんな</sup>本

多、寛永の松平、寛延の酒井忠恭……つわものどもの夢のあと。主なき時代の恐ろしき推移。

姫路に一泊。遅くまで眠れず。去来するもの、胸に多し。

二月九日（日）　　快晴

朝、八時二十七分発（姫路駅）の列車にて、大阪に戻る。

S氏はじめ、幹部と、関西本部にて食事をしながら雑談。  
先生の病状を心配しながら。

一時、本部にて「末法相應抄」講義。むずかしい。

夕刻、S宅にて、青年部幹部会。真剣な質問多し。関西は、ますます伸長の本質あり。



本部前の暗闇で、一青年部員が、二、三人の者と喧嘩。<sup>けんか</sup>「小さなことで尊い生命を、傷つけては絶対にいけない」と、注意。

青年に、一冊の本を贈る。

多数の友と、大御本尊に、勤行。

## 二月十日（月）　曇後にわか雨

朝、九時二十三分——東京着。

寒い、灰色の東京。妻、一人だけ、迎えに来ている。寒そうに。

明日は、先生の、満五十八歳の誕生日。Nに、大幹部招待してくださる。私に、青年部を代表して、挨拶を……とのこと。

先生なき本部に、一日在。

理事長、理事、青年部首脳と、種々打ち合わせ、雑談。原稿執筆等。

春遠からじ。

二月十一日（火）

曇

朝、九時、先生宅へ伺候<sup>しこう</sup>。お元気のお顔を見、安心する。五十八歳のお誕生日である。

赤飯に、お汁粉を、先生とご一緒に頂戴<sup>ちようだい</sup>する。一生の思い出であり、名誉である。経済のこと、株のこと、政治のこと、および、新時代へのあり方等についてお話をうけたまわる。

夕刻、五時三十分より、Nにて、先生の全快祝いに出席。大幹部、数十名。

先生は「一高寮歌」「白虎隊」の歌が好きであられる。お身体<sup>からだ</sup>のおやつれ方が心配でならなかった。しかし、歌を皆に歌わせ、厳然たる指導に、心嬉<sup>うれ</sup>し。一同、心新たになっ

たことであらう。よかった。嬉しい。

特に、仏法哲理の「源遠ければ、流れ長し」の御金言を引かれ、「幹部の自覚が根本である。一般会員の責任ではない。幹部の信心、成長で全ての組織の発展が決定されるのだ」との、厳しい指導が胸に残る。

二月十二日（水）

曇後晴

朝、先生のお宅へ、昨夜のお礼に参上。

先生、二階の床の上で、喜んでくださる。

- ① 中部の次期部隊長の件
- ② 人材の鑑別法
- ③ 唯物史観を勉強しておくこと
- ④ 労働組合の動きを知悉ちしつしておくこと。

大要、以上の指導あり。

先生のお顔色すぐれず。しかし、毅然きぜんたる姿勢に、力溢あふれる言語。

寒。春、いまだ来たらず。梅一輪、二輪。

夕刻より、御書研究会。真剣な求道者の姿に、胸打たる。この後輩達、必ず先輩達を、見事に、追い抜くことであろう。「後生畏おそるべし」とは、師の口ぐせの言。

帰宅、十時過ぎ。

「教機時国抄」を拝読。

四に国とは仏教は必ず国に依つて之を弘むべし国には寒国・熱国・貧国・富国・中国・辺国・大国・小国・一向儉盜国・一向殺生国・一向不孝国等之有り、云云。

妻、甘酒をご馳走してくれる。桃の花咲く、弥生やよいを楽しみつつ。

二月十三日（木）

晴一時曇

部隊旗、返還授与式。豊島公会堂。

○君の急逝きゆうせいにより、W君へ。理事長等出席。七時より。

夜遅く、先生宅へ、報告に参上。

- ① 学会青年部の未来性への指示
- ② 学会幹部の指導原理
- ③ 仏法と社会への指向
- ④ 学会の究極の使命

以上

帰宅、十一時五十分、思うこと多し。妻より「顔色が悪いです」と注意あり。熱、少々あるようだ。

先生の指導を、遅くまでメモ。

風呂、湯が漏<sup>も</sup>って、家中入ることができず。

二月十九日（水）

曇後晴

昼、暖。夜、寒。

午前中、先生宅へ。

- ① 少々、元気になったようだ
- ② 十年間、苦難の道を歩みゆけ
- ③ 君の本部入りは天の時だ
- ④ 理事室に、弥々<sup>いよいよ</sup>、新風を入れる
- ⑤ 生活と経済について

以上の、ご注意、指示、指導をたまわる。

決意、強し。覚悟、堅し。

帰路、寒風厳し。

今日も、熱あり、三十八度三分。胸苦し。

二月二十二日（土）

快晴

十二時発にて、大幹部と登山。

暖冬、春の如し。

了性坊、寂日坊の落慶式。先生もお元氣にご出席。無理をなさっておられる。少しお休みになっていたいただきたいことを、胸の中で思う。

「大幹部に、この一年で、十年間のことを指導し、指示する」と、嚴然たり。

「阿諛諂佞あゆてんねいの輩やからは全部切る」と。しかり。かつ「組織を乱しゆく者、信心利用の者も、

また同じ」と。また、しかなり。

終わって、大講堂引き渡し等、種々の準備。

二月二十四日(月) 雨

熱とれず。疲れてならぬ。

夜、六時三十分より——本部にて輸送会議。十一時過ぎまで。H君をはじめ、青年部は、実によくやった。頭がさがる。必ずや大御本尊様の称賛あることを。幾十年の先に、この人たちの因果の実証、疑いなし。

- ① 本日で大講堂落慶式の準備完了
- ② 明日、バス会社、鉄道関係に書類を回すこと
- ③ 役員人事も決定す



これで、自分もほっとする。先生も安心してくださるであらう。

帰宅、一時少々過ぎ。風呂に入る。

飲めぬウイスキーを少々口にして休むことにする。時計、二時少々前。充実した、使命感に、誇り高し。

〔二月〕——関西総支部は、二月一日、大阪市中央公会堂（中之島公会堂）で関西総支部幹部会を開き、関西、四国、中国の幹部約五千人が参加して、関西広布七年目に向けて新出発をした。二月九日には、第二回関西男子部幹部会が大阪市立労働会館で開かれた。二月七日から十日にかけて、関西指導に赴いていた池田室長は、関西男子部幹部会に出席し、「一人一人が広布推進の主体者としての強い自覚に立ち、常に未来をみつめ、日々、真剣に信心修行に取り組んでいってほしい」と要望した。

二月十一日、戸田第二代会長は満五十八歳の誕生日を迎え、健康を回復し全快を祝った。

二月二十二日には、総本山大石寺で了性坊・寂日坊の増改築落慶法要が行われた。これには日淳上人猊下をはじめ、宗務役員、僧侶と、理事長ら学会幹部が出席し、寂日坊での法要のさいには、着山した戸田会長も参列した。これによって、昭和三十年から始められた総本山塔中の十二カ坊の新設・増改築工事は全部終了した。

スポーツの世界では、一月場所で優勝した若乃花が、二月三日に四十五代横綱に昇進し、栃若

時代が始まった。

二月二十四日、文部省南極統合本部は南極本観測隊の越冬断念を発表した。第二次南極観測隊を乗せて昭和基地へ向かった観測船「宗谷」は、厚い氷の海に四十六日もの間閉じ込められたあと、ようやく脱出して越冬隊員を收容し、次の越冬隊を基地へ送りこもうとしたが、天候の激変などにより第二次観測を断念せざるをえなかった。このとき、昭和基地には十五頭のカラフト犬が残されたが、翌三十四年一月、極寒の地を生き抜いたタロとジロの二頭を発見した。

三月十九日（水）

晴後曇

一か月にわたる大講堂落慶記念登山の輸送指揮に、神経と体力、実に疲れた。あと約十日間、更に決意を新たにして、立派に、悔いなく、使命を果たしたい。正法に目覚めた人を、誠心こめて指導することは、人生最高の尊き仕事である。

先生のお身体からだ、非常に悪い。二十二日に重要会議として、最高首脳部を招集さる。

将来の学会と、自分の活躍を、真剣に考える。よし、所詮は、大御本尊様に祈念し、大御本尊様にお任せする以外に道なし。

三月二十九日（土）

雪後晴

先生、お身体からだの衰弱はなはだ甚し。

「あと、二、三日です。何も事故は、ございません。ご安心しておってください。大幹部も、だんだん来ております」と、申し上げる。

先生、ご安心しきったお顔で、「そうか」と申される。

その時、「追撃の手をゆるめるな」と、毅然きぜんたる語調でお叫びになる。大將軍の指揮に頭垂こうべたれるのみ。

三月二十日（日）

快晴一時雪

午前十一時五十分発の列車にて下山する。I支部長と共に。満員列車にて、品川まで、立ち通しであった。暖かい一日であったが、胸奥きようおうは苦しい、疲れきった、闇やみの如き一

日であつた。

二時過ぎ、目黒の先生宅に、お邪魔する。先生の入院について、御子息、奥様とお話する。奥様は「自宅に帰ってもらいたい」と。御子息は「入院」と。私どもも入院をおすすめ申し上げる。しかし、胸奥は「本部に帰る」との先生のご意思を、そのまま、お通しすることが、私の責務であることにも迷った。

どん底に落ちゆく気持ちである。弟子として、力弱き自分をなげく。ああ、一生取りかえしのつかぬ自己を、厳しくみる。これに報いるは、先生のご精神を、生涯、貫き通す以外にない。

先生宅にて、七時過ぎまで、種々、入院の準備に苦心する。疲れる。全く心身共に疲れた。

久しぶりに自宅に帰る。

法戦に——戦場に生きゆく運命を思う。

三月三十一日(月)

快晴

午前中、先生宅へ。さっそく、奥様と共に、タクシーにて駿河台の日大病院へゆく。あまり良くない部屋にて、再三、交渉。弟子として、せめて、最善の部屋(病室)をと頼みしも、通らず。全くくやしい。H博士も「応急的の段階なれば、了承されたし」とのこと。

やむを得ず決める。しかし、治療に対しては、全力最善を尽くされるよう、篤<sup>とく</sup>と頼む。

一時三十分「西海」にて、再び登山。五時少々前に着く。ただちに、理事長、理事室に報告。

先生のご容体、すこぶる悪し。帰京を延ばしたい。H博士は「よろしい」という。

一晚中、休まず。階下にて、先生をお護<sup>まも</sup>り申し上げる。「五丈原の歌」を思い出す。

理事長、理事等、最高首脳と、ほか青年部同志数人、同座。皆、口数も少なし。

〔三月〕——三月一日、法華本門大講堂落成慶讃大法要が総本山大石寺で挙行された。本門大講堂の寄進は、戸田第二代会長の七十五万世帯達成に続く最後の願業であった。この日、学会からは戸田会長はじめ、支部幹部約二千人、男女青年部員約四千人が晴れの慶事に参加した。挨拶に立った戸田会長は、会員の協力に謝意を表するとともに、「信心第一に、今、自界叛逆の難に陥っている日本の国を、御本尊の力によって救わなければならない」と力説した。この日を皮切りに二十万を超える人々の登山が三十一日まで連日続けられた。三月十六日、戸田会長の要請で男女青年部六千人が総本山に結集し、広布の記念式典を挙行した。

三月二十三日、関西にも学生部組織が確立し、関西本部に約五十人が参加して、関西で初の学生部員会が開かれた。以来、関西の学生部は続々と人材を輩出することになる。

三月三十一日、大講堂落慶記念総登山が無事故で終わった。期間中は好天に恵まれ、とどこおりなく一切の行事を行うことができた。この間、戸田会長は病をおして総本山にとどまり、最後まで厳然と指揮を執ったのであった。

世界では、三月十七日にキューバのカストロがバチスタ政権に対して全面戦争を宣言し、三月二十七日にはソ連首相ブルガーニンが辞任し、フルシチョフ党第一書記が首相を兼任することになった。

四月一日（火）

晴

午前一時四十分、先生を東京におつれ申す準備をする。丑寅うしとらの勤行の最中であつた。

日淳にちじゆんげいか猊下のご心境、先生のお心、いかばかりか。今世のお別れとなられるか。恐れ多くも、猊下には、勤行を、早目に終えられ、お見送りに来られたとのこと。

今日の大宗門の繁栄に、心を砕くだいてこられた日淳猊下、猊下をお護まもり申し上げて、身命を捧げて戦つてこられた地涌じゆの菩薩ぼさつの総帥、戸田城聖先生、三世につながるお二人の深き縁えにしを、深く尊く、考えずにいられない。

嗚呼ああ、玄妙なり、合掌たり。

理境坊の二階より、午前二時ちょうど、出発。

フツンのまま。「先生、お供いたします」と申し上げると、「そう、メガネ、メガネ」とおっしゃった。メガネを、お渡しするいとまもあらず、心残りなり。階下より、担架たんかに

て、車におはこびする。二時二十分。

奥様と医師同車。続いて、理事室、私共の車。最後に青年部の車であった。

月おぼろにして、静寂なる田舎道<sup>いなか</sup>を、沼津駅へ。三度、四度、車止まり、先生の容体<sup>うか</sup>を伺い、また注射をなす。

三時四十五分、沼津駅に到着。

四時十五分発急行「出雲」に乗る。「先生、これで安心です」と申し上げたところ、「そうか」との微笑は、永久に忘れることはないだろう。

早朝、六時四十五分、東京駅着。一睡もせず、沈痛な気持ちで、担架でお降ろし申し上げ、ただちに、駅側の配慮により、エレベーターにて寝台車におはこびする。ただちに、私どもは、日大病院前にて、お待ち申し上げる。

お疲れと、重体なるお顔に、胸がせまる。



ああ、世界の大偉人の最後のご帰京となられるのか、心で題目をあげるのみ。全快を祈るのみ。

ただちに、K医師、H医師の手当てあり。九時過ぎ、一切の手続きを終わらせ、ご家族にお願いし、会社に戻る。

万感、ただ、平癒を祈るのみ。弟子、皆同じ。

一日中暖かな日であつた。されど、弟子一同の心、暗雲の如き気持ち、いかようにもなし難い。

われらは、更に、自己の信心を磨くべきである。自己の建設をなすべきである——無数の偈<sup>げ</sup>、去来して一日を送る。

四月二日（水）

曇

朝、緊急に、部隊長会議を招集する。心急ぐ感あり。先生のご容体非常に悪し。

一週間、部隊長全員にて、本部にて勤行することを決意する。

午後、本部にて、秘書部長より「先生の経過良好になる」との報を聞き、われは狂喜。

五時より、理事室、青年部首脳と、連合会議をなす。

六時四十五分、管理部のH老より、真剣な表情で、私に「病院から子息、喬久君より電話」とのこと。風の如く、管理室の電話を受く。喬久君より、落ち着いた語調で「ただ今、父が亡くなりました」との悲報を受く。

この一瞬。われ、筆舌に尽くし難し。愕然<sup>がくぜん</sup>たる憶念は表記でき得ず。永劫<sup>えいごう</sup>に、わが内証の座におく以外なし。

ただちに、重大会議になる。

先生のご遺志は、清らかに水の流れの如く、広布達成まで流れゆくことを祈る。強くなれ、と自分に叱咤<sup>しつた</sup>。

早速、日大病院の病室に、理事室、青年部首脳のみ、馳<sup>は</sup>せ参ず。

静かな永眠の姿に、はたまた、微笑したお顔に、感無量。滂沱<sup>ぼうた</sup>。

嗚呼<sup>ああ</sup>、四月二日。四月二日は、学会にとって、私の生涯にとって、弟子一同にとって、永遠の歴史の日になった。

ただちに、日淳<sup>にちじゆんげいか</sup>猊下へ電報、細井尊師へ連絡、ご親戚へ連絡。

先生のご遺体にお供して、目黒のお宅に帰る。小雨、少々降る。

細井尊師おみえくださる。読経・唱題。

理事室、青年部首脳にて、死水を。

妙法の大英雄、広布の偉人たる先生の人生は、これで幕となる。しかし、先生の残せる、分身の生命は、第二部の、王仏冥合実現おうぶつみごうじこうの決戦の幕を、いよいよ開くのだ。われは立つ。

四月八日（火） 曇

先生のご遺言により、ご遺体を、一週間、お護りまも申す。今日が、最後のお別れ。

悲しい、くやしい。「在在諸仏土常与師俱生」ざいざいしよぶつどじょうよしぐしやうのご金言をかみしめる。

朝、先輩が迎えに来る。私は断る。

師匠との最後のお別れの日である。私は私なりに、一人して先生宅にお邪魔したい。最後の先生とお別れに、誰人よりも淋さびしく、悲しい弟子は、私である。

厳しい父であり、やさしい父であり、今日の私あるは、全部、恩師の力である。  
瞻仰。せんどう

三十の遺弟、青年、八時三十分、師の宅へ。

九時より、細井尊師の導師により、読経、出棺。十時、目黒のお宅を出発。棺の前を、  
I 理事と共に抱く。必ずや、先生は、喜んでくださっていることを信ずる。

「先生、お休みなさい。お疲れだったことでしょう」

私も、御遺命を達成し、先生のもとに早く馳はせ参じたい。默念。もくねん

十一時、池袋の常在寺着。

当日の焼香者、十二万人。誠心の人であり、先生を、心からお慕い申し上げる方々である。

今後、この方々を、更にさらに、無量に指導し、幸福にしてあげねばと決意。父にかわって。

十一時四十分。日淳<sup>にちじゆんげいか</sup>猊下御出座。読経、歎徳文、遺族喬久君<sup>あひさつ</sup>挨拶、最後に葬儀委員長挨拶。僧侶約六十名、大幹部、部隊長、ご親戚、友人等、計約三百名での焼香、順次終了。

三時十分、最後のお別れの出棺。“一週間”の遺言を全うす。

最後まで、先生のおそばで、お供する。必ずや先生は、喜んでいてくださると信ずる。

三時三十分、青年部幹部を先頭に、僧侶二台、遺族の車、そして先生、ご親戚、大幹部、理事室と、落合火葬場に向かう。

常在寺、最後の細井尊師の読経の際、一陣の強き風吹けり。火葬場にても、また天空に真っ赤な色彩を強く強く感ず。

二日より今日まで、曇天続く。

四月二十九日（火）

薄曇

季節は緑に。

桜散り、木蓮落ち、水仙の花、黄金色に開き、夢の色濃く高し。

二十五日……特急「つばめ」にて、神戸並びに関西の教学試験へゆく。恩師逝去後はじめてなり。師亡くも、伸びのびと潑刺<sup>はつらつ</sup>たる学会っ子たち。前途たくまし。

S 夫妻に、厳しく指導。

幾千、幾万の真面目な受験者に、胸打たる。盤石なる学会の底力を示すか。無事。安心。

二十八日——一切の試験、口頭試問、採点を終えて、四時三十分、東京駅着。

師子座なき本部に、淋<sup>きん</sup>しく帰る。十時まで会議。打ち合わせ会。

二十九日……午前中、休養。健康にならねば。一段と、大切な身体となる。恩師の遺業達成のために。くやし。

意義深き五月三日、目前に迫る。実質的——学会の指揮を執<sup>と</sup>る日となるか。

胸苦し、荷重し。「第五の鐘」の乱打。

戦おう。師の偉大さを、世界に証明するために。一直線に進むぞ。断じて戦うぞ。障魔<sup>どま</sup>の怒濤<sup>どとう</sup>を乗り越えて。本門の青春に入る。

夕五時、Gに、妙光寺、K尊師の招待。妙光寺第二代住職大慈院二十三回忌のため、僧侶、幹部、数十名出席。

熱のため、八時過ぎ早目に帰宅。静かに、美しく待つ妻。



レコードを、久しぶりに聞く。横になりながら。

四月三十日（水）

晴後薄曇

微熱つづく。一日中、だるし。この一年で、健康にならねば、大変なことになる。真剣勝負の人間革命。

先生の「巻頭言」を読む。出版のため。その一節にいわく、「他人の利するものを、汝施せ」と。その利する最高のものを与えゆくを折伏というか。妙法なりと確信するか。生涯、言行一致の師であられた。

本陣、日一日と多忙になる。死するまで、妙法の革命に戦う一日一日でありたい。

午後五時、会長室にて、理事長中心に、新任部隊長の面接。

女子部……五十部隊に発展

男子部……五十六部隊に進展

可愛い青年部、必ずこの人達を護るぞ。まも

六時三十分……四月度幹部会。常に学会は前進するのだ。

帰路、ひとり二十年後の学会を、考えゆく。心労あり。苦衷あり。くちゆう

帰宅、十時を過ぎる。春風、暖。

〔四月〕——四月一日早朝、戸田第二代会長は総本山を發って東京に向かい、日大病院に入院した。明けて四月二日、午後六時四十分過ぎ、一切の願業を成就した戸田会長は静かに息をひきとった。享年五十八歳であった。戸田会長逝去の知らせが学会本部に入ったのは、理事室および参謀室の連合會議が終了した直後であった。この時、全男女部隊長は学会本部に集まっていた。

翌三日、三月度本部幹部会が豊島公会堂で開かれ、冒頭、理事長が戸田会長の逝去を告げた。続いて池田室長らが臨終までの経過、遺訓の報告ならびに今後の決意、方針などを発表した。池田室長は、各自が戸田会長から受けたさまざまな薫陶を生かし弟子の道を前進していこうと語った。同日、戸田会長の納棺の式が執り行われ、式終了後、通夜が営まれた。

八日には告別式が日淳上人猊下の導師により莊嚴に執り行われ、常在寺の門前で会員約十二万人が焼香した。落合葬祭場で火葬の後、学会本部で初七日法要が営まれた。さらに二十日には、東京・青山葬儀所で学会葬がしめやかに举行され、全国から二十五万の会員が焼香に参加した。

一部の評論家は「戸田会長亡き後、学会は『空中分解』するだろう」との憶測を述べたが、学会の歩みは一歩たりともとどまることがなかった。戸田会長逝去から四日後の四月六日には、教学部任用第一次試験（筆記）が全国約六十会場で実施され、一万六千三百三十六人が受験した。また十三日には助師・講師昇格第一次試験（筆記）が全国二十七会場で実施され、約二千六百人が受験した。

社会では、四月二十五日、自民・社会両党首の意見一致にもとづいて、衆議院を解散するといふ「話し合い解散」が行われた。

五月十二日（月） 雨

五月三日の大総会を終え、学会は第二段階に入る。

「『広布実現を目指して』と題する講演は、明確なる学会の指針を示せり」と、幹部より

感謝さる。

私の闘争は始まる。先生、ご照覧を。祈る、加護を。正義のわれを。

死を覚悟できるようになる。広宣流布といいし、崇高なる人類の平和の花道に。

昨十一日は、雨の大阪大会であった。

“関西の学会員に望む”と題して講演。

熱あり。心身かんば芳しからず。残念。

休養、健康……前進、価値。

「太田入道殿御返事」を拝す。

大涅槃經に云く「世に三人の其の病治し難き有り一には大乘を謗ほうず・二には五逆罪・三には一闍せんだい提是くの如き三病は・世の中の極重なり」云云、又云く「今世に悪業成就し乃至

必ず地獄なるべし乃至三宝を供養するが故に地獄に墮<sup>だ</sup>せずして現世に報を受く所謂頭と目と背との痛み」等云云。

生命の究極の革命……唱題のみか。

五月十三日（火） 晴

朝、熱あり、健康になりたし。

午前、在、本部。午後、T君の結婚式に出席。夜、中野の組長会。皆、元気、われのみ元気なしか。

本部に戻り、先生の講義を整理。

「三大秘法抄」の意義

① 釈迦仏法にはないか

② 戒定慧<sup>かいじようえ</sup>との関係

③ 小乗・権大乘・迹門・本門の現代的解釈

④ 受戒者の資格について

⑤ 祇園精舎ぎおんしやうじやの意義

⑥ 戒とは

⑦ 戒体

⑧ 年齢と受戒

⑨ 破戒について

## 大聖人の三大秘法について

① 民衆の教育高く、知覚できる

② 内容……因果の二法で誰人も納得する

③ 本因・本果・本国土に約す

④ 本門の戒壇の意義

⑤ 戒壇論（世界中の戒壇なり）

⑥ 正法と時代の流れ

⑦ 外国流布の推移

⑧ 田中智学等の誤り

⑨ 日我・日進等の過ち

⑩ 本因妙抄論（日有上人）、等々

「松野殿御消息」拝読。

昔し徳勝童子と申せしを幼さなき者は土の餅を釈迦仏に供養し奉りて阿育あそか大王と生れて閻浮提えんぶだいの主と成りて結句は仏になる。

就寝、一時を過ぐるか。静。

五月十四日（水）

曇

今日も無理して家を出る。微熱あり。心身つらし。

太陽でありし師、今はなく、指標まったく暗し。自己の建設が、指標とならねば。

午前・午後……本部会議室に。小一時間、指導部長、秘書部長と語る。視野の狭きこ

と、驚くべし。悲しむべし。

誰人も、先生の遠大なる目的を解せぬことか。われに憂い出づ。

恩師の道を切り拓くのは、われの使命か。重責の感、厳しき日々。

五月十九日（月）

曇

十六日……特急「つばめ」にて関西指導へ。

十七日……大阪地裁にて第三回公判。

十八日……九時五十分発の日航機にて九州指導へ。午後一時……久留米くろめの会場へ到着。

二千名の女子部幹部の総会。盛大。はちきれんばかりに。

五時より、同会場にて、男子部千五百名の幹部総会。偉大なる革命児の息吹いぶき高し。歴史的な一ページとなるか。“九州男子よろしく頼む”との師の言に、応える姿なるか。頼もし、嬉しうれし。



九時少々過ぎ、博多のT館に一泊。

十九日……十二時四十分発の日航機にて、東京へ向かう。天候悪く、気持ち悪くなる。

師の四十九日を前にして、午後七時より御逮夜<sup>たいや</sup>、本部広間にて。

支部幹部全員集合。九時、解散。

夜半まで、一人、師の指導を整理。

帰宅、十二時五十分。

一人の、戸田門下の青年は進む。一人、凜然<sup>りんぜん</sup>と、北風と嵐<sup>あらし</sup>に向かつて。

五月二十日（火） 雨

『吉野朝太平記』を、読み始む。あまり面白からず。

夕刻、五時より、七時まで……四十九日の法要のため、理事室、青年部幹部にて、恩師の目黒のお宅へ。

細井尊師の導師にて、読経・唱題、焼香も。懐かしき玄関、なつかしきお部屋。なつかしき楠公のガク。立正安国のガク。

喬久君より、種々の話あり。

肉親の親・仏法の師。

帰宅、十時。

自宅にても、師の法要を妻と二人でなす。

遅くまで、先生のことについて、妻と語る。

休む前、御書の一節を拝読する。

陰徳あれば陽報ありと申して云云。

(陰徳陽報御書)

五月二十一日(水)

曇

“福運”、信心ある人、信仰なき人——共に、福運のある人生、福運のなき人間——あるものだ。不可思議の人生の、本質。

努力、才智、学歴、世襲、等々——と、福運との関連を、思念することあり。

正成<sup>まさしげ</sup>には、正行<sup>まさつら</sup>、正時<sup>まさとき</sup>、正儀<sup>まさのり</sup>の、三人の子あり。今、私も、三人の父となる。博正、城久、尊弘と。この三人、いかなる運命の道をたどるや。父として、思わずにはいられない  
昨今。

午後五時三十分より——本部にて理事室、青年部首脳との連合会議。

一、文化闘争の打ち合わせ

一、本部機構の点検

一、その他

自分は、部署をもたず、総括的に、指導、運営の中核になる。先生の、ご境涯を知る人、少なし。淋<sup>さび</sup>し。残念。自分が、しっかりせねば。

“先生、どうか見<sup>み</sup>護<sup>まも</sup>っていてください。私が、先生の偉大さを、必ず世界に顕<sup>けん</sup>照<sup>しょう</sup>し、先生のもとに帰ります”ひとり誓う。

帰宅、十時。女子部企画室来宅している。適切に指導し、早目に帰す。

真剣な、乙女らの健康を祈りつつ。

五月二十二日（木）

曇

健康、少々とり戻す。

K宅に——A子さんの死を弔<sup>とむら</sup>う。キリスト信者の淋<sup>さび</sup>しそうな両親の姿に、幼き時のことを、語り合う。大変嬉<sup>うれ</sup>しそうであつた。若き娘の、急逝<sup>きゆうせい</sup>に、親としての落胆は、誰人も同じだ。

新橋駅——午後三時三十分発の列車にて、支部長と共に、沼津の会合にゆく。車中——熟睡。

五月二十三日（金）

曇後雨

沼津の指導終え、支部長らと、熱海に一泊。全く眠れず、読書三昧。

結局、わが家が、いちばんの休息場だ。

衆議院議員選挙終わる。次第に関心をもちはじめ。

錦糸町に——登山会の陰の推進者・輸送班の労をねぎらう。皆、心から喜んでくれる。嬉しいことだ。

理事長を送り、自宅へ。

一日一日が、責務ある行動に入る。

五月二十四日（土） 晴

午後三時より——国立競技場にて、第三回アジア大会を観<sup>み</sup>にゆく。青年部幹部二、三人を連れて。将来の、学会青年部の体育祭、文化祭の参考にとも思い……。

二十か国の若人<sup>わこうど</sup>の姿……アジアの夜明けになりゆくか。政治も、国境も、思想も、超越

して——の理想はよし。されど、その理想の恒久的実現はいつの日か。絢爛たる、若人の熱と力と技。五時三十分まで観て、本部へ。来年は、必ず、青年部で開催してみたい。

久しぶりに、本部近くの、理髪店にゆく。さっぱりして帰宅。

自宅の態勢も、次第に整う。安心して、闘争ができるぞ。嬉しい。

読書……。

五月二十五日（日）

晴

朝、七時に起床。博正を残し、城久と妻と三人にて、二か月ぶりで登山。

先生、逝去以来、初めての登山である。多繁な数十日であった。苦しい日々であった。しかし、弟子は、いつまでも、感傷的になっておられぬ。再び、嵐の中を突進するのだ。

御開扉——真剣に、祈念。

登山参詣者——一万余。時代の偉大な流れ。

多数の幹部たちは、先生の死を忘れたのか、と憤りを感じることあり。くやしい。

帰り……数人の幹部と、横浜に降り、種々打ち合わせ。皆、頑張ってもらいたい。

Kより、電話あり。可哀想な人だ。

五月二十六日（月）

曇

自宅の経済逼迫ひつぱくとのこと。なんとかせねば。とにかく、出費を、最小限にすることだ。

頼みの綱——柱——である先生は、最早もはや、この世におられないのだ。私が、皆をみなくてはならぬのだ——夢ではない。現実だ。自己に鞭打むちつ。

理事長と、学会全体のことを打ち合わせ。長時間かかる。首脳は、一支部に固執せず、



公平に、平等に、全学会を、全学会員を、見守ることだ。

偏狭な、指導者では、後輩が、可哀想でならない。

疲れきって帰宅。室の花……鮮か。

少々、自宅前の自動車の響き、激しくなる。家も、揺れる感じ。

五月二十七日（火）

晴

一日中、不愉快な日であった。

疲れきっているせいか、朝、悪夢で、目を醒ます。何者かに、責められ、叱られている夢。“大作の意気地なし”といわれていそうだ。

夕刻——常在寺。新住職就任の祝賀会。理事長、理事室、青年部幹部、出席。全く面白からず。先生がいなくなつて、威張る人多し、情けない。

われ思うこと多し。

われ憂<sup>うれ</sup>えること多し。

日記を誌<sup>しる</sup>すことが、夢の中にいるようだ。わが先生が、脳裏に焼きついて離れぬ、生きておられるのが——真<sup>まこと</sup>か、亡<sup>な</sup>くなられたのが——真<sup>まこと</sup>か、混線する夜中。

五月二十八日（水）

曇一時晴

午前……本部にて、A文学博士と会う。傲慢<sup>ごうまん</sup>なる人。価値論の話になる。本部第一応接室。

夕刻……葛飾のブロックに出席。久しぶりなり。「佐渡御書」を講義。御書は、実践のたびに、信行深まれば、また深く読みゆけることを痛感。

全く、身体を無理している。大切にせねば。しかし、われは戦う。

帰宅、十二時少々過ぎ。

思念……。

御書に「鳩<sup>きゆうとうさんし</sup>二枝の礼あり行雁<sup>こうがんつら</sup>連を乱<sup>みだ</sup>らず・羔羊<sup>こうよううずくま</sup>踞りて乳を飲む・賤き畜生すら礼を知る」と。

われも、先輩も、兄たちも……社会の人々も――。

〔五月〕――戸田第二代会長を喪<sup>うしな</sup>った深い悲しみを乗り越え、学会は異体同心の団結をもって、新たな前進を開始した。五月三日、東京・両国の国技館で第十八回春季総会が開催され、三万二千人の代表が集った。壇上正面には戸田会長の遺影と「団結」の二字が掲げられた。池田室長は、学会創立の昭和五年を起点に七年を周期とした「七つの鐘」の指針を示し、全会員に勇気と確信を与えた。

「団結」と「前進」を合言葉に、各地で総会が開催された。五月十一日には大阪球場に八万人が結集して第二回関西総会が開催され、十八日には第一回九州男子部・女子部総会が久留米市で開かれた。

五月二十二日、第二十八回衆議院総選挙が行われ、新議席は自民党二百八十七、社会党百六十六、共産党一、無所属・諸派十三、となった。社会党は得票率でも三三・九パーセントを獲得し、ともに戦後最高水準となった。

世界では、五月十日にレバノンのトリポリで反米武力反乱により内戦が起こった。これが引き金となって、六月二十五日にはペイルートで市街戦が行われ、七月十五日に米海兵隊がレバノンに上陸、七月十七日にはイギリス軍のヨルダン派兵と発展したが、八月二十一日に国連総会で中東平和共同解決案が可決され、米英軍は撤退した。

六月一日（日）

曇

昨三十一日、東京駅午前十時発の、急行「雲仙」にて、九州本部総会へ向かう。K女史ら八人と共に。長い旅でもあり、皆と心を合わせる、よい機会でもあったと思う。

午前八時少々前に、博多駅着。

ただちに、旅館Tへ。

正午——入場式。五万の会員結集。香椎<sup>かしい</sup>球場にて。

立派な総会であった。九州よ、よく頑張ったと褒めてやりたい。

私の話は「学会の歴史と、戸田先生の雄図」と題して。

夜、九州の幹部首脳と、会食。東京より派遣されたK幹部のいばりちらすのに、皆が迷惑していた。先生がいないのだから、後輩を特に暖かく包容する時だ。心配。

よき指導者をもたぬ人びとは、不幸になってしまふ。

真に学会員を思うのは、誰人か。

真に先生の死を悼むのは、誰人か。

真に広布を考えているのは、誰人か。

六月二日（月） 晴

午前十時発の特急「かもめ」にて、京都指導へ向かう。

長い旅であった。飛行機ならもっと早く、楽であると思った。経済力の必要性を、深く

感ずる。

夜、S宅にて——講義。京都の友が、一段と成長したのには驚く。

疲れて、旅館に行くのをやめ、そのままふとんを借り、休ませていただく。雑誌を読みながら。

六月三日（火）

曇

早朝に起床。五座の勤行を、心ゆくまで。

お世話いただいたことを深く謝す。

京都駅、午前九時三十分発にて、舞鶴へ向かう。

午後三時まで——T宅にて、質問会。皆、突然であっただけに、喜んでいた。

三時二十分発にて——京都に再び戻る。京都幹部大会のため。

公会堂に集まる、喜々とした人びとに反し、疲れのため元気なし。残念。  
学会歌の指揮を、久々にとる。

「威風堂々の歌」は、京都からの歌声だ。

六月四日（水）

晴後曇

京都駅、午前一時七分発の特急にて、東京へ向かう。三等車。心身ともにくたくた。思索も思うようにいかない。

八時少々前、東京に着く。

ただちに、本部へ直行。朝の勤行。

先生の眼鏡メガネのまなざしが、厳しく浮かぶ。大きな温和な顔が、激励にと変わる。瞬時、自己につきまとう先生の面影。

さあ、元気を出し、今月も、戦おう。

さあ、断じて、今年も、闘<sup>たたか</sup>おう。

帰宅、十時を過ぎる。

『走れメロス』を、再読。

## 六月七日（土） 曇後雨

横浜駅、午前九時三十分発にて、関西の講義へ。

車中、読書。頭に入らず。

午後四時三十分、大阪駅着。友の出迎えをうける。感謝。

本部にて『折伏教典』の講義、指導。

関西は——第二の故郷<sup>ふるさと</sup>。



六月八日（日） 雨

午前中、休息。

暑かった。大阪は、緑が少ない。

午後——「文底秘沈抄」の講義。

法本尊の章、終了。

後生畏るべし。

夜——船場支部の班長会に出席。

庶民の熱情。

帰り、Y宅へ挨拶による。いつも明るい、堅実なる家庭。

遅くまで、幹部たちと雑談。関西本部に於て。

六月九日（月） 晴

午前中、休息。

女子部幹部……皆、遊びに来る。雑談。若々しい乙女らの十年後は。

夜、韓民会館にて——M女子部長と共に、関西女子部幹部会。明るい。  
終わって、北摂地区の組長会に出席。なじみの人びと多し。

進展しゆく関西。

## 六月十日（火） 曇

在関西本部。お世話になってしまう。

暑い。暑さは、疲れを倍増する。

大阪駅へ、先生の奥様をお迎えに。夜、ご一緒に、会食を。

六月十二日（木）

曇

昭和二十八年六月十二日。

常住御本尊様奉戴ほうたいして、ここに五年。  
自己の信心を振り返る。厳しく。

一日中、涼しい日であった。

先生との、約束を破りしK氏のこと——忘れられず。われ、広布を実現し、先生の無念を必ず果たすぞ。

待て。じっと待て。忍耐だ。

先生が、先生が、じっと見ておられる。

先生、先生、わたくしを見守っていてください。

来年の戦いの作戦会議。大変だ、歩調を合わせるのに。

H君、真剣。雪辱戦なれば、凜然と指揮をとり、戦おう。

“勇将の下に弱卒なし”そして“団結”だ。

六月十三日（金） 曇

勤行を真面目にしている人は、必ず良くなっている。

毎日の指導面接が、楽しくなる。

六月十五日（日） 曇

十四日、十二時三十分——職員たちで軽井沢旅行。

皆、<sup>たの</sup>愉しい姿。しかし、私は疲れた。学会の前途をただ考える。

熊谷と、高崎にて小休止。

午後六時に、<sup>しおつば</sup>塩壺温泉着。アルカリ性とのこと。胃、皮膚病に効用あり、と。

皆、トランプしたりして夜半まで遊ぶ。喜々として。いつの日か、この恩師の思い出の地を、<sup>すがすが</sup>清々しき心境で訪れることができるのは……。

十五日、午前十時三十分——旅館出発。

つつじが原を経て——鬼押出にゆく。鬼気迫る感あり。浅間の噴火で一村全滅とのこと。<sup>しょうねつじごく</sup>焦熱地獄とはこれか。

昨夏、先生と共に、この地を訪れたことをなつかしむ。否、あまりにも厳しき一年の<sup>るてん</sup>流転、夢のごとし。あの日の先生は、もはや疲労深く、歩むこともできなかった。弟子のため、わざわざ再度の見学であられるのに、私どもを案内してくださった。

午後七時——東京着。思い出多き一日となる。

帰り、よく先生にご馳走になりし、新宿のTにて、皆に天ぷらをご馳走する。

六月十六日（月）

曇

S社の全体会議に出席。親しき、友の会社の願いにより。友らの苦闘を見るにつけ、順調なる会社になってもらいたし。それにしても、大資本主義の欠陥をつくづく思う。中小企業の血のかよった育成が、政治になくはならぬ——と、しきりに思えり。

帰り、M宅による。応援してあげたい。遅くまで話し合いをする。

一、学会の使命を語る

一、生活の設計について

一、M君の結婚と将来について

一、事業への信用について

六月十八日（水） 雨

午前十時、旧華族、本部にみえる。

近所なればと、挨拶あいさつにこられたとのこと。理事長と共に、お会いする。秘書は、もっとゆっくり話しあいたかった様子。

午後一時より、連合会議。

青年部首脳たち、真剣。理事室の真剣さを欲する。時代に、目を開いてもらいたいものだ。遠大なる長期計画に。

夜、先生の指導つづを綴る。幾人かの心ある後輩と共に。遺品のことも含めて。

今こそ、仏法に説く弟子の道を。ひとり、立派に決意。

六月十九日（木） 晴時々曇

恩師の百か日、いまだ終わらず。

混沌<sup>こんとん</sup>たる、心境の毎日。皆の心境は、いかなるか。勝たねば、恩師が泣く。

午後、本部面接。悩める人びとのために、闘おう。

最高に尊き信心の結晶――。地味にして着実な努力をやりぬくのだ。限りなく、どこまでも。これが、われらの革命の軌道なのだ。

夜、文京支部の会合、青年部会等に出席。瞳<sup>ひとみ</sup>、未来に輝けり。

帰宅、十二時をまわる。

明後日は、雄大なる天地、北海道行きだ。

職員に給与を……いちばん大切な生活の源泉。法戦への原動力。



六月二十一日（土）

晴

羽田空港、午前十時二十分発の日航機にて、北海道へ飛ぶ。理事長と共に。

風なく、雲なく、静かなる、千歳ちとせの空港にすべるように着陸。

午後二時三十分——M旅館に着く。種々、現地幹部と打ち合わせ。

大自然の北海道。青年の大地、北海道。詩と小説の北海道。恩師らの生きた、歴史の北海道。わが父の開拓事業の、思い出の北海道。ぼくは大好きだ。

夕刻、テレビ塔にのぼる。展望台、九十メートルの高さとのこと。

札幌の街——一望なり。

六月二十二日（日）

快晴

第一回北海道女子部総会。二千名。

第一回北海道男子部総会。三千名。

潑<sup>はつ</sup>らつとした、愉<sup>たの</sup>しき総会であつた。

牧口先生、戸田先生の遊びしこの曠<sup>こうや</sup>野の地は、北海道の人びとの誉れであらう。

夜、深思。

一、恩師の百か日、一周忌、三回忌、七回忌までの、学会の方向づけ

二、学会の中心を、誰に、どのように託していくか

三、ご遺族のこと

四、最高幹部の指導のあり方

思索は限りなく続く。

六月二十七日(金)

晴

三十度を越す暑さ。

昨年の炭労事件を思い起こす。先生のこと、大阪事件のことを思い返す。

午後、本部にて面接指導。身体の具合、良好。身体さえ丈夫になれば、なにも恐るるものなしだ。

夜——会議。真剣勝負。

帰り、月光の松の並ぶ皇居前広場を、友らと漫步して、帰宅。

六月二十八日(土)

曇

学会批判、しきりなり。

「追撃の手をゆるめるな」の決意、胸に高鳴る。正義の戦いなのだ。七年間の構想を、じっくり考察。

今日も、三十二度に上昇。本年最高を記録したとか。実に暑かった。

青年部首脳たちに「厳然と本部を護ろう」——と厳しく指導。……終わって、会食。

## 六月二十九日（日） 曇

午前中、床の中で『水滸伝』を読む。

限りなき想像の発現に……自分の心身をすり減らす思い。悠然たる日々を送りたいと思うが、激務と激動が、所詮、真の悠然たる境地になっているのかもしれない。

水不足、深刻となる。三災の年である。

午後一時——目黒公会堂にて、第一回学生部総会。

出席者、八百人。

祝辞を述べる。第三回男子部総会での、先生のご講演の趣旨を、皆は、いかに受け取ったことか。

恩師の精神を、ただ叫び続けて、この生涯を送ろう。先生、それでお許しください、と——自問自答。

六月三十日（月）

曇

今日も激務。苦しい一日であった。

来客多数。ご遺族とも共に将来のことについて語る。

多くの幹部の指針なきを残念に思う。自分のことで精いっぱいなのだろう。

勇氣と理想に生きる、純真なる信仰者で生涯を、ただただ貫きたい。

〔六月〕——六月一日、福岡・香椎球場に五万人が参加して、第二回九州総会が開催された。池田室長は、「学会の歴史と戸田先生の雄図」と題して講演し、戸田第二代会長は日本の楽土建設、さらに東洋の平和、世界の平和を實現しようと世界最高の平和主義を唱え、構想していた大指導者であつたと語つた。

二十二日には、札幌で第一回北海道女子部総会と第一回北海道男子部総会が行われた。池田室長は、女子部総会では「宿命や死など人生の諸問題を解決できるのは、三大秘法の御本尊を持つ以外にはない」という確信強き人生であつてほしい」と語り、男子部総会では「願わくは昭和の宗教革命の闘士はこの北海道の地から出ていただきたい」と激励した。

二十九日、東京・目黒公会堂で第一回学生部総会が開かれ、年間活動方針として、①一九五九年の第二回総会までに二千人の部員を結集②学生部員は全員教学部員に③学問の研究に一層精進、の三項目が発表された。池田室長は祝辞を述べ、「御本尊様を信じた基盤の上に立つて学問をもつた者こそが時代の最高の指導者であり、諸君が青年部や支部で中心幹部になつた時こそ広宣流布の爛熟期です」と激励した。

六月三十日に東京・豊島公会堂で行われた六月度本部幹部会で、本部機構の改革が発表された。池田室長は新設された総務に就任し、全学会の実質的な指揮を執ることになった。

五月に行われた総選挙をうけて、六月十二日、第二次岸内閣が発足した。閣僚は藤山愛一郎外相、佐藤栄作蔵相など、岸、河野、大野、佐藤の主流四派で主要ポストを独占して批判を浴びた。また自民党は、衆議院正副議長、十六常任委員長を全部独占した。

社会では、二十日、原水爆禁止を訴える広島―東京間千キロ平和行進が広島を出発した。この行進は、八月十一日、東京に到着した。

## 七月四日（金） 曇

もう七月。

今年の七月は、大阪拘置所。身の不自由。

本年は、身は自由なれど、心は不自由。

去年は、法戦なりとも、先生がおられて、喜。

本年は、広布の戦いは進むが、先生がおられず、悲。

歯痛の昨今、歯医者にいかねば。

午後二時四十分発の日航機にて、北海道総会へ飛ぶ。A君と共に、N氏、O氏、出迎え

に来る。

札幌支部にて、指導会。後輩に慈愛なき先輩たちの、反省をうながす。

七月五日（土）

晴

暑い、暑い一日であつた。

北海道も東京と同じか。

午前中、U部長と、語りながら理髪店へ。

午後、I宅にて、指導会等。勤行。

咸皆懷恋慕

而生渴仰心

衆生既信伏

質直意柔輒



いっしんよつけんぶつ  
一心欲見仏

ふじしやくしんみょう  
不自惜身命

夕刻、まるやま円山グラウンドにて、予行演習。

戸田門下生は、真剣。先生を迎えての会合なりと思って。それを、先輩らは、自分たちを迎えてくれていると、増上せるか。

愚かや、愚かや。

夜半まで、青年部首脳と、ゆっくり語る。

明日を夢みて……本年二度目の北海道だ。休もう。ゆっくりと。

先生、お休みなさい。

七月六日（日）

晴

第二回北海道総会。十二時少々前、開始。

暑い一日であつた。

私は「広布実現を目指して」と題し、講演。

私の一生は、戸田先生の遺言ともいふべき構想を、叫び、戦い、達成することだ。これだけが、私のこの世の使命だ。

笑う者は笑え。怒る者は怒れ。<sup>いか</sup>

私の信念として、弟子として当然のことだ。その使命に生き抜くことが、絶対、間違いない信心だ。三世十方の仏、菩薩の照覧もあれ。

鉄道事務所にて、祝賀会あり。

北海道の風、月、緑を、私は愛する。恋する。

七月七日（月）

晴

今日も、暑い北海道。

午前八時に、札幌駅へ、御法主上人げいか下を、お見送りに行く。お元気そうで、安心。  
午前中、ロープウエーに皆で乗る。完成したばかりのようだ。

U宅により、夕刻の日航機で帰京。

七月八日（火）

曇

身体の調子、全く悪し。午前中、休む。旅の疲れか。若いくせに残念。三十七度八分と  
体温計。

いかなる社会も、複雑であり、思うようにいかぬものだ。人間世界の葛藤かつとう模様。人間の  
世界ほど、美しくもあり、醜きものもないようだ。

諸行無常しよぎようむじようを常樂我淨じようらくがじようの世界に轉換せしむる仏法。

涼しい一日であつた。

十年、二十年と生き抜こう。そして、恩師の実証を、巖然と示して死にたい。

為説種種法いせつしゆじゆほう 每自作是念まいじさぜねん

七月九日（水）

曇

微熱、三十七度八分。内臓、少々苦し。  
ひたすらの信心で進む以外に方途なし。

午後一時三十分発の急行にて、総本山へ。戸田城聖先生の百か日忌法要。納骨。

五時少々前、総本山着。ご遺族らと。

七時より、大講堂にて、追善大法要。

御法主上人のご導師をたまわる。

追憶談あり。われ、新たなる決意を深く、静かに固む。

七月十日（木）

晴

総本山に於て。

百か日忌法要終了。納骨の式完了。

先生の全生涯、ここに終わる。先生は、この世におられぬのだ。嗚呼。<sup>ああ</sup>

生死不二<sup>しやうじふに</sup>なれば、先生、今ここにあり。お見守りくださいと熱涙。

納骨の墓前にて「先生お休みなさい」と申し上げる。線香、五本供<sup>そな</sup>う。私と、妻と、博正と、城久と、尊弘の分として。

七月十二日（土）

曇

特急「つばめ」にて、関西総会へ。

本年の、地方拠点最後の青年部総会。

横浜駅より乗車。部長、青年部首脳らも同乗。

関西に近づくにつれ、暑さ、いよいよ増す感。

青年部首脳たちの、立派になったことよ。I君がもう一歩。

関西本部、総会準備で大変。本当にご苦労なり。この修行の因——必ず果の人材と飛躍してゆくことと確信。

七月十三日（日）

晴

第一回関西青年部総会。

会場……大阪府立体育館。

女子部……正午開催。

男子部……午後四時半開始。

女子部、七千人。男子部、八千人。

実に立派な総会であつた。あっぱれだ。関西はよくやった。

終了後、首脳たちと“すし”を食う。美味。

生涯、青春の生命で乱舞をしたい。

七月十六日（水）

晴

午後、本部応接室。ご遺族と半日語る。非常に喜んでくださる。これほどの喜びなし。淋しさを越え、私の心境が、わかってもらえることは、最も嬉しいことだ。人の心を、わかる人間になりたい。

五時より、連合会議。人間なれば、議論沸騰の会合となる。それもよいだろう、新建設の途上なれば。ただ、先生の本丸を護るまものはわれしかない。

唯ただひとり、家に帰る。暑い日であつた。

七年先を目指して、不自惜ふじしやくしんみよう身命の覚悟で、起たち上がれ。

七月十七日（木） 晴

次の法戦に、決意盤石。

一日中、興奮……若獅子わかじしのごとく。

ご遺族、明るい顔で本部へ挨拶あいさつに。嬉しい。

午後より、面接指導を。全魂を傾けた。



終わって、遅くまで、I君と語る。小生の心情が、なかなかわからぬ人。美しき友情よ、生涯につづけと唯々ただただ祈る。

M宅へ、お中元に行く。

乱戦には、革命児は、毅然きぜんたる態度が、最も必要。

七月十九日（土） 曇後雨

今朝も、熱三十七度を越えている。

Mさん、お元気になる。午前中、本部に見える。

本当に結構なことだ。あとは、自身の信心だ。

午後一時三十分発の急行で、新潟行き。高崎あたりから雨。涼風を感じず。全く助かる。

七時三十分、新潟着。T氏らと共に。ただちに寺院にて、支部幹部会。元氣<sup>はつ</sup>潑<sup>はつ</sup>らつの越後の友ら。

明日は、新潟支部の初の運動会。

七月二十日（日）～二十一日（月） 雨

雨。残念。皆も。

午前中、再度、寺院にて指導会。

結局、運動会中止を宣言。

大波のなか、十二時発の汽船にて、佐渡島に渡る。多数にて。船揺れ、気持ち悪くなる人続出。四時間以上、波しぶきを船体にうけつつ、佐渡に着く。われわれの船のあとは、全船欠航のよし。忘れられぬ一日。

旅館にて、疲労のため熟睡——驚き起きて、幹部指導会へ。

生老病死即金銀銅鉄につながる、生命論の話をする。

「御義口伝」にいわく、

金銀銅鉄とは金は生・銀は白骨にして死なり銅は老の相・鉄は病なり此れ即ち開示悟入の四仏知見なり。

翌二十一日——塚原三昧堂、一の谷等を見学。史実とは相当の違いあるを知る。ともかく、大聖人様の歴史を偲びつつ漫步する。有意義な半日。

生まれて初めての佐渡——再度、ゆっくりの視察を心に秘む。

## 七月二十三日（水） 雨

台風十一号、本土上陸。

午前八時ごろより、東京をはじめ関東を荒らしまわる。本部への出勤、大いに困った。  
豪雨——凄まじいぐらい。大型台風の来襲、九年ぶりと報道。

午後より、本部応接室にて、理事室と連合会議。

① 八月の行事

② 人事の決定

③ 各支部の分析

一日も速やかに責任指導者の出現を望む声あり。集団指導よりも、と。

夜、葛飾のブロックに出席。

自己の止まらぬ廻転。

「星落秋風五丈原」を歌いながら帰宅。夜半。

妻の明るい、静なる顔。

七月二十四日（木）

曇

天候悪し。蒸し暑い一日。

午前——「大白蓮華」編集会議。扇風機きかず、皆、汗ばんでいる。早く冷房設備をと、ひとり考う。

機関誌は、一人のためでなく、全学会の指導書なることを忘るな、と。

終わって、H理事と語る。のん気な人だ。

強くゆけ、皆よ。

夕刻、H弁護士宅へ。墓地問題、その他の打ち合わせのため。正義の弁護士、少なし。これでは、弱者は可哀想だ。力の論理の世界では、庶民の苦しみは、徳川時代と変わらずか。

宗教革命——社会革命。自分たちの社会を創るために、民衆が起ち上がることだ。その起爆剤とならねば。

七月二十五日（金）

曇

七月度本部幹部会。豊島公会堂。午後六時。

先生という、柱なき幹部会の淋しさ。終わって常在寺にて大幹部会。足並みそろわず。

所詮、自己保身が、人間模様か。戸田門下生よ、いずここにと嘆く。

私は戦います。先生、見ていてください。

私は闘います。愚人に褒められず。

批判の嵐のなか、先生に褒めていただくために。

池袋駅より、帰宅。雑踏のこの駅にも、友の姿、多し。

七月二十六日（土） 雨

憂うつな一日。

本部応接室にて、K女史と、学会の将来について、種々語り合う。

一日、一日、心配とのこと。牧口門下生の団結を力説。

午後五時三十分より、G園にて、総本山の所化さんをご招待。宗門の鳳雛——。  
途中より（六時二十分）河口湖へ出発。K館に十時着。

水滸会……戸田先生を、追憶しながら、百名の同志と一泊。広布の人材にと誓い合う。  
全員に“実践”ということについて、指導。

会員の顔、決意を秘めて喜々。

第一期生の名簿を、久しぶりに見る。

七月二十七日（日）

曇

早朝、起床。

朝食後、皆でモーターボートに乗り、湖を一周。心爽やか。

午前中——ドッジボール、相撲等を、力いっぱいやる。

正午、出発。山中湖による。乗馬、競輪等を、愉しむ。

本部着、夕方六時。

K氏と共に、矢口の実家による。食事をこ馳走になり、早目に帰宅。



妻、ずいぶん陽に焼けたという。

七月二十八日（月）

曇

夜、中野会館へ行く。住宅街にあり、隣近所のことを心配する。神経を使わないで、伸び伸びと使用できる会館を、たくさん建設してあげたし。

青年部会。地区部長会。われより求道の人びと。尊敬す。

八月より、教学を一段と深めてゆく決意をする。このスランプのごとき時代に、教学を真剣にやった人と、やらぬ人とは、数年後、大変な違いを示すことであろう。恐ろし、恐ろし。

帰り、新宿で食事。

帰宅、十一時少々前。

静かな、ふくよかなわが家……。

七月三十一日（木）

晴

午前八時五十分——K氏と会見。小一時間。

名刺を渡す。ただちに、池田君の名前は戸田会長から聞いておりました、とのこと。  
先生の先手には、ただ驚く。

時代よ——急激に変わりゆけと願いつつ、本部へ。

二十年後を見よ、と。

七年後……大客殿建立。また七年後……正本堂の建設。そしてまた七年、昭和五十四年……広布への大前進。そしてまた七年……いかなる波浪が前途にあることか。

思惟<sup>しゐ</sup>、限りなし。思索、止まるところなし。

## 夕刻、男女部長らと懇談。

〔七月〕——七月六日、第二回北海道総会が札幌・田山まるやまグラウンドで開催され、二万人の会員が参加した。池田総務（現名誉会長）は「広布実現を目指して」と題して講演を行い、「宗教革命にその全生涯を捧げ尽くした歴代会長の正義を貫く烈々たる気迫こそ学会精神である」と訴えた。

九日、戸田第二代会長の百か日忌法要が総本山・大講堂で執り行われた。これには在京の幹部を中心に約三千人の代表が参列した。翌十日、戸田家の墓地への納骨が行われる一方、五重塔では日淳猊下の導師により戸田会長の分骨を塔の北側に埋葬した。全幹部がこれに参列した。

十三日には第一回関西女子部総会と第一回関西男子部総会が大阪府立体育館で行われ、女子部は六千八百人、男子部は七千六百人が結集した。池田総務は、男子部に対しても女子部に対しても「勇気を持ち堂々と、学会の組織に生きよう」と指導した。二十六日には、山梨県河口湖畔で水滸会の野外訓練が行われ、百人の精鋭が参加した。

このことから、各地で学会員の墓地埋葬を拒否するという、いわゆる「墓地問題」が続発しはじめた。これは学会の発展にともない、檀信徒数の減少に衝撃をうけた既成宗教が、信者の離檀防止をねらって策謀した違法行為であった。

世界では七月十四日、イラクのフアイサル国王のヨルダン、レバノンへの進攻命令を兵士が拒否し、青年将校グループによる軍事クーデターが起こって、国王、皇太子らが殺害された。親欧政権を失い、世界的に石油不安が広がった。

八月十日（日）

晴

八日——特急「つばめ」にて京都へ。三等車、またよからずや。

幹部と種々打ち合わせ。

終わって嵐山へ。鮮かなる風光、詩情あふるる日本人の心の故郷、京都。

九日も暑し。早くから目覚む。在京都。

午後七時十分発の「雲仙」にて、九州へたつ。

K女史らと一緒に。車中………教学のことなどを研究し合う。

十日朝——八時少々過ぎ、博多駅着。暑い。

九州本部の落成入仏式のため。

防塁跡の名所。松に強風を偲<sup>しの</sup>び、石塁<sup>せきるい</sup>に防人<sup>さきもり</sup>の奮戦<sup>おも</sup>を想う。

ボタ山に、まのあたりに現実社会の貧を思い、玄海のアサリとり<sup>あさりとり</sup>に、羽田の少年時代を偲ぶ。

雑然たる会合であつた。師なき今、学会に、いま巖然たる指導者、おらざる所以<sup>ゆえん</sup>か。

## 八月二十日（水） 曇

十六日からの——長野方面、諏訪方面の指導より帰る。

本日、特急「つばめ」にて、一転——関西へ、そして九州へ。先生とのお約束だ……私は遂に戦い始めたのだ。

鹿児島、桜島——宮崎指導へと、いよいよ師子奮迅<sup>ししふんじん</sup>の力を発揮。とくに青年部の嬉し<sup>うれ</sup>しうな顔、顔、顔……。この純粋なる後輩のためにも、われわれは闘うぞ。

暑き九州に、汗の歴史あり。

八月二十七日（水）

晴

夕刻四時三十分——東京駅着。

文京の友、葛飾の友ら、迎えに来てくれる。妻と子供も。

本部へ直行。理事長らに、報告。本部、相変わらず。

暑い日であった。

夜、葛飾ブロック大会に出席。

十一時少々過ぎに、帰宅。

休む前、『法華経』を開く。

諸子等に告ぐ 我に種種の

珍玩の具 妙宝の好車有り

羊車鹿車 大牛の車なり

今門外に在り 汝等出で来れ

吾汝等が為に 此の車を造作せり

意の所樂に随つて 以つて遊戲すべし——と。

(法華経譬喩品)

八月二十八日(木)

晴

一日中、疲れきつた日である。

突進をはじめた、荒れ狂う自己の心境をどうしようもなし。怒りは、善惡に通ずる——  
法戦なればやむなし。

師子王なき今、われは、若獅子として、吼えざるをえない。

北海道のN、蒲田のR、そしてSを、激しく指導。可愛いゆえにだ。

十年後の、宗門と学会と広布の進展はいかにと縁先で——ひとり侘<sup>わび</sup>しく思索。

妻の出す茶、香味。

八月二十九日（金）

曇

定例の、八月度本部幹部会。豊島公会堂。

真剣な幹部あり。情性の幹部あり。

調子にのっている幹部あり。忍耐に生きゆく幹部あり。

因果の二法なれば——その証左はいつの日か。

大幹部会——常在寺。一人の傲慢<sup>ごうまん</sup>な幹部の存在が、どれほど多くの人びとを伸び悩ませ



ていることか。親なき可哀想な子らよ。

帰り、すしを食す。友を連れて。

帰宅——十一時過ぎる。

八月三十一日（日）

曇

昨日からの歯痛なおらず。熱っぽい一日。

歯医者に、ついに半年も行かず。一体どうなっているのか。

午後四時より、大森海岸にて、青年部幹部の面接。理知の人あり、情熱の人あり。明るい、若々しい後輩たちは心より可愛い。

六時三十五分——大田区民会館へ行く。

蒲田支部、十万世帯達成記念大会。班担当員以上とのこと。

早目に帰り、休むことにする。

読書を——真剣。静思の秋——読むぞ。

〔八月〕——八月一日から五日間、前期、後期合わせて約七千人が参加し、総本山大石寺で第十三回夏季講習会が開かれた。戸田第二代会長亡き後、初めての夏季講習会だったが、男子部、女子部が独自の行事を組むなど、新しい息吹に満ち、意欲に燃えた講習会となった。

八月八日、鹿児島市に学会寄進による西大宣寺が落成したのをはじめ、続々と学会寄進の寺院が落成していった。九日には熊本市に涌徳寺が、十二日には和歌山市に妙海寺が落成した。九月に入ってから、十日には釧路市に興徳寺が、十一日には帯広市に法広寺が、十二日には室蘭市に深妙寺が、十四日には弘前市に東大宣寺が落成し、以後多くの寺院が落成していった。

八月十日には、東京、関西につづく三番目の地方本部として福岡市に九州本部が落成し、会員三千人が参列して入仏式が行われた（昭和四十五年一月、福岡会館と改称）。これにより広布の牙城は全国三大拠点となった。

八月二十九日、八月度本部幹部会が行われ、折伏成果は四万六千二百二十三世帯と発表された。学会の総世帯数は九十五万世帯となった。蒲田支部は、単独で十万世帯を突破し、記念大会を大田区民会館で開いた。

社会では、グラマン疑惑が火を噴いた。防衛庁では、四月に次期主力戦闘機にグラマンF11F

—1Fの採用を内定していたが、八月十四日になって自民党総務会長の河野一郎が防衛庁長官に機種選定の再検討を申し入れ、ロッキードF104Cを推薦した。八月二十二日、衆院決算委でグラマン社から二億四千万のリベートが流れたのではないかとの疑惑が追及され、二十五日、防衛庁は機種正式決定を中止した。翌三十四年三月、衆院決算委はグラマン疑惑に確証なしとして審議を打ち切り、十一月ロッキードF104Cが正式決定された。

九月二日（火）

曇

朝夕、涼しくなる。

炎熱すぎ——秋深まりゆく。

春秋幾たび流転<sup>りてん</sup>して、一生を終わるか。

今、青春を乱舞している人びと、十年後、二十年後は、いかなる姿になりしか。

無常が、本質か——常住が、本質か。

読書せよ。思索せよ。身体を鍛えよ。

三時間にわたり、理事長と、第一応接室にて語る。終わって、理事室首脳と会食をしながら、懇談。

多忙。帰宅、十二時近し。

九月三日（水） 晴

明日、都知事会見の申し込みあり。一応、会うことにすると理事長の返事。

学会批判の報道多し。偏見、無認識のもの多し——されど、われらも反省の要ありと思う。

不合理な社会に挑戦しつつ、社会を大切にする道理をわきまえねば……。これ仏法なり。宗教革命なり。

午後五時三十分——本部にて、全体会議。

嵐<sup>あらし</sup>の来年の闘争に、決意深む。共に進み、戦う者のみを信じて、われは指揮をとる。

今夜の会合も歩調あいし会議にはならず。

九月八日（月） 晴

昨日は、神戸市にて——関西青年部主催の、体育大会に出席。進歩ある若人<sup>わこうど</sup>の姿。

午前七時三十分——神戸のA旅館出発。特急「つばめ」に乗る。

昨日より涼し。秋爽<sup>きわ</sup>やか。

本部にて——男女各幹部の集<sup>つど</sup>い。遅くまで本部で指導する。

帰り、蒲田支部会館へ。理事長らと、将来のことで、雑談。  
疲れる……後輩の道を盤石につくらねば。

九月九日（火） 晴

戸田先生、逝<sup>ゆ</sup>いて五か月。

長かった。本当に苦しかった。これから一生の道……死闘が運命か。

午後七時より、男女青年部合同会議。本部に於て。  
体育大会等の意義を話す。

今、共に戦<sup>いく</sup>ってくれる青年たち……生涯、忘れまじ。

若人には、必ず思想を与えること。

若人には、必ず約束を果たすこと。

九月十二日（金） 雨

竜たつの口法難がたの日。

「大聖人の昔に還かえれ」と、叫びし恩師の心境が、わかるような昨今。

夜、青年部体育大会の役員会議。自己は、意見をいい過ぎていいのかもしれぬ。青年の独創性を、もっと信じ、出してあげねばならぬか。

本部狭せまし。新しい、堅牢けんろうな、本部の建設はいつの日か。

未知数——学会の前進、自己の未来、青年幹部の力と前途……。

九月十七日（水） 雨

豪雨しきり。台風二十一号とのこと。

朝、理事長の新宅を捜しに、ともに見に行く。皆の面倒をみてあげねばならぬ自分。

午後——本部にて、連合会議。

道理もなく、理性もない幹部をみると全く困る。

本末究竟ほんまつくきようして、まず幹部養成に力点をおかねば——と思う。

新支部等の決定を。着々と、軌道に乗りゆく、学会丸。嬉うれし。

心身共に、無理の連続。

## 九月十八日（木） 雨後曇

朝——台風二十一号荒れる。

八時前後、最も激し。大気の阿修羅あしゅら。

やがて晴天。爽さわやかなる秋深まる。



夕べの……天空は厳かにして、最極尊美の絵のごとし。

台灣問題……国連総会で取り上げる。世界情勢も、刻々と不安高まるか。人類未曾有の激動の世界に入る——二十一世紀の世界に向かう、われらの使命——いかに重大なるか。

本部、久しぶりに静か。先生の本部。われらは、護る。

目黒のお宅（先生宅）へ、体育大会の案内状を、M君、A君と、持参。

蒲田駅に、妻、迎えに来る。

秋風しきりなり。静かに、深く生命、胸中にも浸透。

九月十九日（金） 晴

T氏次女の告別式。常在寺。午後四時終了。

K氏、H氏と、打ち合わせをと思つて、本部で待つ。……皆、どこかへ行ったとのこ

と。われ待ちぼうけ。のん気な人びとよ。

やがて、K氏より連絡あり。私は、連絡の密なることを願うとつけ加える。一人行くからと返答。

九月二十日（土）

晴

残暑——暑い一日であった。

目標が、明確でないと、人びとは次第に真剣味が薄らいでいくことを心配。ひとり。

指導する人が、指針を与える人が、いかに大事であるかを憂える。ひとり。

遅くまで——本部に常住。幹部、会合のためか少なし。

帰り、タクシーにて、五反田まで。国電に乗り帰宅。駅前に、学会の批判組が歩いてい

た。何を考え、いずこにいくのか――。

## 九月二十三日（火）

曇

二十一日の日曜日――国立競技場にて、総合練習。遅くまで、真剣な姿に胸うたる。猛練習とはこのことか。未来の力、力、力。この青年あれば……と深く心によろこびの決意湧く。

二十二日――一日、多忙きわむ。青年部首脳たちを、慰勞す。

二十三日――七時起床。

先生ご出席と信じ――体育大会。

青年の祭典。観衆、実に七万余名。壮観、圧巻。

先生のおられぬことが、非常に淋<sup>さび</sup>し。

われら青年たちを、慈愛の眼差しまなざしで見守ってくださいだったのは、戸田先生お一人である。  
われらは、本当に生きがいを知り、幸せであった。

疲れる。明日は裁判のため、大阪へ。

九月二十四日（水） 雨

夜九時、急行にて——大阪へ出発。

裁判のため。幾人かの友と、二等寝台。

車中、陽気にすれど、疲労重なる。

友らの誠意に感謝。

九月二十五日（木） 曇

朝、七時二十七分、大阪駅着。

親しき幹部の出迎えをうける。同志は嬉しいものだ。さっそく関西本部へ。

大阪地方裁判所で、午前十時より午後四時まで、公判。一口もしやべることなく、終わる。ただ、非常に不利の感じを受く。

帰り、聖教寺へ、お祝いによる。さらに、T支部長宅へ。

夜、A君の入仏式に出席。成長を祈る。

夜半、ひとり、先生のお部屋に休む。

九月二十六日（金） 雨

遅くまで休む。出発時間に間に合わぬぐらい、休んでしまう。

大阪発、午前九時の特急に、飛び乗る。

車中、ひとりで読書したり、休んだり。小雨降る。寒いぐらいの車内。

富士駅、午後二時二十分、台風二十二号のため、停車。発車の見込みたたずとのこと。

……本行寺関係の信徒——総本山に納骨の、帰りとのこと……四十名ほど駅に待っていた。懐かしくもあり、可哀想でもある。……いなりずしを買い、一緒に食べる。……皆、喜んでくれた。嬉しかった。

自宅と学会本部へ、遅延の電報を打つ。

本部より、富士駅に電報あり。幹部会、中止とのこと。

夜半には、車内も、駅にも、食べ物、全くなくなる。豪雨しきり。たいくつではあったが、思い出の一夜。

人の心は、移りやすいものだ。信心という、目的と実践のあるところにのみ、人を信じ、人を頼ることができるものだ。

人生の勝利とは……。

人生の正義とは……。

〔九月〕——戸田第二代会長が「精鋭十万の結集」を呼びかけてから七年たった昭和三十三年九月、男子部の部員数が十万人を突破した。青年部は、九月二十三日、新装なった東京・国立競技場に七万人を結集して、第五回青年部体育大会「若人の祭典」を開催した。スローガンは「広布への堂々たる前進」だった。男子部の一五〇〇メートル競走、一万メートル競走、体操、棒倒し、女子部のダンス、婦人部のスプリンリレーなど、熱戦が展開されたほか、音楽隊、鼓笛隊が出場して華麗なパレードを行った。

狩野川台風と呼ばれた台風22号が、伊豆半島から関東地方を縦断した。九月二十六日、伊豆半島南端をかすめた台風によって、中伊豆温泉街を流れる狩野川が決壊し、死者三百三十一人、行方不明五百七十三人、全壊流失千四十四戸の被害が出た。台風は二十七日朝、江ノ島付近から関東地方に上陸し、東京を通過して福島県南部をとおり、金華山沖へ抜けた。東京では三十万戸が浸水し、戦後最大の被害となった。

十月七日（火）　　雨

秋、深まる。静かなる一日。

読書の秋。今日より『日本文学全集』を読み始む。

M君の入仏式に出席。皆、喜んで参集。文京の人びとの心は美し。

感謝の気持ち深し。

十一月度より、支部の組織拡大編成となる。再び、歩む途<sup>みち</sup>は、険しくなろう。私には。

信心深く。一念強く。題目の数か。

十月八日（水）　　晴

朝、元気——夜、疲労こんぱい。



小さな境涯になる時あり——大きな境涯となりゆく時あり。

確信に満ちみちた時あり——不安に戦<sup>おの</sup>く時あり。

夜、本部にて——「秋元御書」の講義。予習少なく、名講義といえず。講義は、事前の研究が最第一。軽々しき、安直な研究なぞ、絶対にあつてはならぬ。猛反省。

理事長らと帰る。

われ、戸田先生の弟子なり。この道を断固、一生涯。

十月十日（金） 晴

本部職員の秋季旅行。昨年は、先生と共に伊豆の網代<sup>あじろ</sup>であつた。最後の旅。あの病軀<sup>びようく</sup>をおしての先生の振る舞い——。

本日は、総数七十名。多数になったものだ。先生を偲<sup>しの</sup>び網代のK旅館に一泊。ダンス、

舟遊び等——皆、愉<sup>たの</sup>しそうであつた。私は不安な一日。責任者とは、こんなものか。

十月十一日（土）

晴

午前中、休息。

十一時三十分、旅館発——途中、熱海のK旅館とやらで昼食。文京支部の友だちのとこ  
と。

午後二時三十分——全員を送り、理事長をはじめ青年部首脳らと、K旅館に一泊。全体  
会議のため。

映画をみたり、風呂に入ったりして、結局会議できず。

十月十二日（日）

晴

日食。次は五年後との記事あり。

七時、起床。朝風呂に入る。

九時三十分——小田原へ。バスの華陽会員を待つ。皆、元氣なし。疲れて寝ていたのであろうか。

芦の湖——十一時着。総数八十名。午後二時三十分まで、ボート、卓球等で愉<sup>たの</sup>しむ。終わって集合。

一幹部は、難に負けるな——と。

青年部長は、誇りをもて——と。

私は——学会の流れ、中心を知れ。

多数の人びとに、指導を受けよ——と。

全員にて、遊覧船に乗り、芦の湖を一直線。

対岸よりバスに乗車。東京へ向かう。

全員元気——私は疲労。晴れて、本当によかった。

日々、信行学で、心境を開かねば——。励むべし、ただ信心。

十月十四日（火） 晴

十三日——。

国会乱闘。十年後のわが同志を見よ——と一人秘かに待つ。

ご遺族のため……滋賀県に松茸狩りを。喜んでくださる。愉しんでくださる。

晴れやかな、秋の日射し。

帰りの車中も、子供のごとく満足の姿。

遅くまで——青年部首脳会議。

十四日——。

午前中——聖教新聞社。文化活動のことにつき……理事長、K理事と座談会。

午後、本部面接。悩める人びとの多きことよ。忍耐と、親切と、確信ある指導を、皆は待っている——。

夜、連合会議あり。皆、遠慮しているようだ。将、愚かなるところ、会議は独創性を失う。新しき時代よ、早く来い。

十月十五日（水）

晴

一日中、暑い日であった。

朝、ゆっくり勤行できる。生命安定。不思議な作用。

元気に食事をし、元気に家を出る。

帰宅、十時少々前。

御書拝読。読書二時まで。

十月十八日（土）

曇

十七日――。

快晴。

特急「つばめ」にて京都へ。

ご遺族と共に。Y荘に一泊。

十八日――。

九時まで休む。皆で釜風呂かまに入り、夜は、Tにて、水たきをご馳走する。

京都の方々に、本当にお世話になる。

京の街、京の緑、河、山、紅葉、庭、人……皆、舞台のごとく、劇のごとし。

十月二十日（月） 晴

一日、一日が大事。一日、一日が決戦。

本部を護ることだ。今の使命は。

学会員を厳然と守ることだ。私の使命は。

難よ来れ。われは恐れない。たじろがない。

真の指導者になりたし。智勇兼備の。

S宅へ、結婚のお祝いを。自分として、最大のことを尽くす。兄弟たちと、二時間ほど語る。

某老大家の作品を読む。この文、われはおもしろしと思う。しかし、老いたる人よ。過去の人よ。……とみずからも老境の年代になることを……考う。

〔十月〕——十月六日、百五十人のメンバーによる「女子部合唱団」が誕生し、学会本部で発足式を行った。やがて大きな広がりを見せることになる文化活動の一翼を担うものであった。池田総務も出席し、「雪のような信心を貫き、体験を通して確信をつかんでほしい」と指導した。

十月三十一日、東京・豊島公会堂における十月度本部幹部会で、学会の総世帯数がついに百万世帯を突破したことが報告された。これによって、昭和三十三年度の三大目標だった、①落慶総登山の成功②地方寺院の建立③百万世帯の達成はすべて完遂されたのであった。

短期断行を唱える岸内閣は、安保条約改定の日米交渉が始まった十月はじめ、第三十臨時国会に警察官職務執行法の改正を提出した。警察官の権限を拡大して、取り締まりを強化しようとするもので、激しい反対の声が巻き起こった。四日間にわたって審議がストップし、自民党秘書・院外団による委員会への強行突入、抜き打ち会期延長など、十月半ばから十一月二十二日にかけて国会は混乱したが、結局、審議未了で廃案となった。

この年の日本シリーズは、巨人三連勝のあと西鉄が三連勝して十月二十一日に第七戦を迎え、西鉄が6対1で圧勝して、日本シリーズ三連覇を果たした。稲尾投手は、七試合のうち六試合に登板し、四十七イニングを投げて大活躍した。



十一月九日（日）

曇後雨

第十九回総会。後樂園競輪場。

戸田先生——最後の師子吼ししうの場なり。

正午開始。七万の会員集合。

支部長代表抱負のところより、雨となる。思い出の総会の一つ。

支部……十支部誕生。青森、福島、川崎、静岡、豊橋、高松、長崎、熊本、宮崎、鹿児島である。支部の拡大もよし、しかし、先生の精神の拡大が大切だ。

今日ほど、疲れた日は、最近になし。

終わって、常在寺にて男女青年部幹部の合同会議。

戸田先生直結の弟子の未来を話す。わかる人あり、わからぬ人あり。

青年部首脳たちと会食。帰り、雨しきりなり。前途に厳しいものを感じる。

ご遺族、理事室のことを考えながら、帰宅……。

十一月十日（月）

曇

恩師の慈悲が、生命に脈々と流れている感じの毎日。

優秀なる人材を欲すること——万感。

夜、妙光寺にて、I君、Mさんの結婚式に出席。幸せになってもらいたし。虚栄高き二人の前途、あまりにも心配。信心の崩れゆくことを感じてならず。

早々に帰宅。

ゆっくり題目をあげる。読書。

恩師の胸中を知り戦う人、多く出でよと祈念。

ご遺族はご多幸あれと祈念。

十一月十一日（火）

晴

秋晴れ。

先生の獄中当時のことを記録。将来のためにと。

先生の指導を記録。後輩のためにと。

法難による入獄の模様に、涙あふれてならぬ。権力の天魔、がんくつおう巖窟王の先生を……。

夜、遅くまで本部。

ひとり、先生の指導を整理。瞬時、胸が熱くなる希有けうの大指導者……いつの日か、世界

に宣揚する日は。

諸天よ、仏、菩薩よ、われに長寿を、と祈る。恩師の正確なる、広布の記録を書き留<sup>とど</sup>め、永遠に残すまで……。

そのために、健康に留意したい。そのために、更賜<sup>きようしじゆみよう</sup>寿命であれ。

帰宅、十二時少々過ぎる。

静かなる部屋に、豊饒<sup>ほうじよう</sup>の香り高し。

十二月二十五日（火） 晴

一昨日は、総本山に参詣。

他宗教との問題しきり。断じて負けられぬ。法を下げることはできぬ。

一日一日、暴風雨の学会。肚<sup>はら</sup>を決め、死を賭<sup>と</sup>して、指揮をとる以外に道なし。

夜半まで、読書。つれづれに書を。

虚偽<sup>きょぎ</sup>ノ友ハ、公場ノ敵ヨリモ劣ル。真ノ友ガホシイ。

〔十一月〕——十一月九日、東京・後樂園競輪場に、約七万人を結集して第十九回秋季本部総会が開催された。ここで新しく十支部が誕生し、青年部も男女各部におのおの二十八個部隊、計五十個部隊が新設された。全会員が歓声をあげてその発展を祝った。

十一月二十七日、宮内庁は皇太子と正田美智子さんとの婚約を発表した。民間から初の皇太子妃が誕生するとのニュースは、大きな反響を呼び、「ミッチー・ブーム」が起こった。

十二月十日（水）

快晴

微熱あり、三十七度八分。

宿命の生命、運命の人生との闘争。

遅くまで本部に。職員の給与等を心配する。

来年は、一段と苦難が予想されてならぬ。全責任もち、誉れ高き法戦に戦う人は幾人ぞ。前途、厳し。

昭和二十五年冬……十二日、日本正学館の苦難の最中に、先生の詠<sup>よ</sup>みし歌を思い出す。

雪ぞ降る 雄猛<sup>おたけ</sup>ぶなかを 丈夫<sup>ますらお</sup>の

嬉<sup>うれ</sup>しきことは 友どちの愛

私も、今夜、色紙に一詩認<sup>した</sup>む。

今日よりは 如来の使と 奮<sup>た</sup>い起て

恩師の誓い 果たし死すまで

先生の慈顔、慈瞳が、永遠に見守っておられる。私には……。

十二月十二日（金）

快晴

朝、注射を。

一日中、身体の具合悪し。悔<sup>くや</sup>し。

午後——女子部総会を明日にひかえ、会場見学。

若あゆのごとく、躍動する若人<sup>わこうど</sup>。この人たちのため、自分は一生戦おう。犠牲になって  
もよい。恩師がそうであった。

H君宅へ、お祝いに参上。水入らずで、会食。この姿が、幾年、続いていくことであろ

うか。

諸行無常しよぎようむじよう

是生滅法ぜしようめつぽう

常樂我淨じようらくがじよう

慧光照無量えこうししようむりよう

十二月十三日（土）

快晴

第六回女子部総会。

場所、東京体育館。

人数、二万名集合。

盛大。大成功。見事なる進展。これで未来の勝負は決まった。



この人たちが、やがて婦人部に、大幹部になったときは。

子らが、学会の後継になりゆけば。

女子部の未来は——必ずや、幾十万、幾百万の結集となりゆくことであらう。

経二曰く、

譬<sup>ハ</sup>如下<sup>下シ</sup>大師子吼<sup>スルニ</sup> 小師子聞<sup>テ</sup>悉<sup>ク</sup>皆勇健<sup>シ</sup> 一切ノ禽獸遠<sup>ク</sup>避<sup>クルハ</sup> 竄伏<sup>スルガ上</sup>。

遅くまで……經典を開く。

子らのぐっすり休む顔、顔。

〔十二月〕——秋季総会での部隊新設によって、八十五個部隊十万の陣容となった男子部は、十二月七日、東京・日大講堂に三万五千人を結集して、第七回男子部総会を開催した。この席上で、「男子青年部歌（黎明の歌）」が発表され、男子部員の血を沸かせた。池田総務は、「日蓮大聖人の仏法は世界の宗教であり、一人一人が信頼厚い社会人に成長し、恩師の構想実現に真一文字に進もう」と呼びかけた。

女子部も、十三日に、東京体育館に約二万人が参加して第六回女子部総会を開催した。池田総務は、自由、平等、尊厳の民主主義の原理を仏法の立場から展開し、仏法が流布した時に真実の民主主義の開花があることを述べた。翌十四日には、東京・労政会館に約二百七十人が集って鼓笛隊初の全国大会が開かれた。池田総務も出席し、「信心からほとばしり出る情熱を、笛に太鼓に託して、どんな人でも動かしていつてほしい。広布の夜明けの“ひじりの鐘”を連打しているつもりで」と激励した。

十六日、山梨県甲府市で法晶山正光寺の落慶入仏法要が行われ、地元会員約千人が参列した。これによって年頭目標に掲げた寺院建立十二カ寺が達成されたのであった。

十二月二十五日に豊島公会堂で開かれた十二月度本部幹部会では、この年の三大目標がすべて完遂されたこと、総世帯数が百五万となったことが発表され、昭和三十四年度の方針として、①年間百三十万世帯の達成②北海道本部をはじめ各支部会館および寺院の建設などの三大目標が打ち出された。

社会では、十二月一日に一万円札が発行されたのをはじめ、二十三日には東京タワーが完工した。東京タワーは、アンテナを含めた塔の高さが三百三十二・六五メートル。“テレビ時代”の幕開けとなり、東京の代表的な観光名所の一つとなった。また、神戸の「主婦の店ダイエー」開店などが話題を呼んでいた。

# 昭和三十四年

— 一九五九年 —



元 旦（木） 雨

立宗七百七年。

「黎明<sup>れいめい</sup>の年」にしたい。

午前七時——自宅出発。S宅へまわり、妙光寺に挨拶<sup>あいさつ</sup>。さらに、常在寺に参詣。

十一時——学会本部。恩師より頂戴<sup>ちやうだい</sup>したモーニングを着る。晴れやかな一年の出発。

本年こそ、若き将として、指揮をとらねばならない。不退不動の決意で。……戸田城聖先生の直弟子なれば。

方便品・寿量品の、読経・唱題を終わって、恩師の昨年元旦の初講義の、録音テープを聞く。深く、厳しき、三妙合論の不思議な講義。

東京駅午後一時三十五分発にて、大幹部と共に総本山へ。

駅も車中も混雑をきわむ。

元旦の雨は九年ぶりなり、と。元旦の雪は二十八年ぶりなり、と。

本山に集合せし、全国の友の顔、顔。幾千万の人間のなかで——幾千年の時代の流れのなかで——今、宿世にあいみる友。決して、おろそかにすまいぞ。

一月二日（金） 晴

満三十一歳の誕生日。

初御開扉。新たなる決意を。

「わしの死んだあと、あとは頼むぞ」「お前が、わしの葬儀をしろ」との遺言が……胸奥きようおうに轟とどろき、響きわたる。

午前十時より——五重塔前の恩師の墓前にて、音楽隊、合唱団と共に「五丈原の歌」合唱。新たなる男子部歌をご報告。

十一時——青年部幹部と共に記念写真を。

一日一日が、激務なればなるほど、貴重な歴史となる。この一年は、輝く足跡でありた  
る。

帰り——ご遺族と共に下山。明るくなられた。安堵。あんど

車中思う——本年は、教学と読書を、十年分ぐらいやりたし——と。

今年からの——この日誌は、遺言の思いなり。黄金と試練と、歴史の一日一日。  
その記録を……。自身の人生は……。今日以後。先生——必ず見守ってください。

黎明れいめいのごとき希望もあり、決意もあり、苦悩もありの、正月。

一月三日（土）

晴

心豊かに勤行・唱題。家族一同で朝食。

年賀状を見る——返書を三十通書す。

午前中——多数の人びとが来宅。多忙の応対。生涯、誰人に対しても、同じ心で接した  
いものだ。

午後——読書。『財界人物論』。

結局、恩師の十年間の、教育、指導、行動、思想、人格、人間性、英知に勝るものな  
し。万書に超越し、万人の指導者に勝るか。

一日、一日が身の引き締まる思い。

自己の運命の——人事が着々と準備されゆくことを感ずる。広宣流布への宣言の人事。

内奥の響きに呼応して——何か動き始めゆく——御本尊にお任せする以外の何ものものなし。

わが子ら、近所の子らと、たいへん親しく遊んでいる、と妻より。

夜——多数の来宅。疲れる。妻の顔も。

皆、満足して、帰ってもらいたいと念ず。皆、服装が立派になってきた。嬉しいかぎり。

一月四日(日)

晴

生涯で、最も静かな正月。

午前中、子らと団らん。

正午より——荻窪のM宅へ挨拶に。



帰り、青年部首脳たちと、新宿にて会食、別れる。

夜、読書——和辻哲郎著『倫理学』。

二時過ぎるか——就床。

一月五日（月）

晴

午前、在宅。

三日と同じく、来宅の人びとと談合の日と決める。一步も外に出ず。定根じようこんの修行か。

午後、少々横になる。思索——大石良雄（内蔵助）と大石良金（主税）のことを思う。  
父の性格——良金の純情。

彼らは主従の仇——一つの首に生涯を散らす。悲し。あさまし。われらは、万人救済による生涯。百千万億倍優れた——法戦。

先生の墓前に——広宣流布が終わりました、とご報告できるまで、私は闘う使命があるのだ。

夜、昨日に続き読書。

一月六日（火）

晴

身体を、静養させてくれた正月。

職員と、初顔合わせ。皆、元気。一人の職員に、頭痛める。

午後——新橋のRにて、新年宴会。ふぐ料理を食す。おいしかった。

終わって六時より——皆で東京タワーにのぼる。東京の夜景を見る。寒風しきり。面白からず。

理髪店による。さっぱりして、文京の青年部の会合に出席。厳しき宗教革命についての指導を――。

男女青年部企画室のメンバー――一緒に自宅へ。信頼しあうこの人たちは、必ずや大人材になりゆくことだろう。

「マウルヤ王朝の最大の意義が、チャンドラグプタの孫アショールカ（阿育）によって創り出された独特なインド的帝国にあるとすれば、われわれは右の見方に賛同せざるを得ないであろう。アショールカ王は、マウルヤ帝国の巨大な権力を傾けて、ダルマ（法）の支配を打ちたてようとした。その法は特にブッダによって説かれたもの、慈悲の理想を原理とするものである」

（和辻哲郎著『倫理学』）

妻とともに、ラーメンを食う。美味。

就寝、一時三十分を過ぎるか。

一月七日（水）

快晴

午後三時から——本年初の連合会議。

学会建設の寺院を——全部、総本山に御供養することに決定。当然のことであり、これが本筋でもある。

帰り、老いたる理事長、理事らと焼き鳥を食す。進歩的な話題全くなし。若き、よき友がほしい。未来の清新の友が、側にほしい。

一月八日（木）

曇

午後六時より子供会。N園にて。

先生ご在世からの定例。

三十一組の先生指名の子らに加えて——集<sup>つど</sup>いし人数七十六名となった。

無意味な会合であってはならず——子供会の指針ともいうべき考えを話す。

一、恩師は父である。父の遺訓を護り、実践することが根本である。

一、全学会を指導していける、努力と責任感をもて。

一、真の兄弟、姉妹となり、全学会を死守せよ。

一、主・師・親の後継を護り、広宣流布を実現しゆく人であれ、と。

帰り、青年部首脳たちと語りながら帰宅。

はやくも、満三十一歳となる。

人生——生涯にとって——最重大の年代に入るか。

一月九日（金）

曇

明るい家、わが家。新春のごとき生命、わが家族。妙法即蘇生そせいの生活。

『法華經』——「法師品」に曰く、

合掌して我が前に在って 無数の偈を以て讃めん

是の讃仏に由るが故に 無量の功德を得ん

持経者を歎美せんは 其の福復彼に過ぎん

午後二時より——本部に於て、社友会を。

新春放談のごとく、その会、終了。

夜、遅くまで在本部。今日も悔いなき一日。帰宅、十二時を過ぎる。

一月十日（土） 曇

昨秋は大風あり。黒日あり。本年、また二の日出づ。自界叛逆の、いよいよの瑞相なり。

また、黒き雨降りりと報道記事あり。今年の秋、彗星出づとの記事もあり。太陽の黒点は、最大になりゆく、と。

われら凡人は、社会の現象のみを追い——天体の不思議の作用を深く知らず。法眼よりみれば——大聖人様ご在世と、厳しく類似<sup>るいじ</sup>せる時世か。在世と今日——その本質は一つ。その未来現象の方程式も、また確信せざるを得ず。

正法流布の時——いよいよ来るか。

地涌<sup>じゆう</sup>の菩薩の使命——ますます重大な行動に入るか。

日本の前途——社会——世界の動向——動かしゆく大信心でありたし。

分別功德品に曰<sup>い</sup>く「悪世末法の時 能<sup>よ</sup>く此の経<sup>きやう</sup>を持たん者は」と。

夜半まで——先生の指導を整理。

一月十五日（木）

曇

成人の日。

自室に——バラの花、数本。

午前十時二十分発の日航機で、羽田をたつ。午後一時三十分——千歳<sup>ちとせ</sup>空港着。多数の同志待つ。申しわけなし。われよりも、喜々たる顔。

黎明<sup>れいめい</sup>の七百七年——第一步の闘争は、恩師の故郷から、と決意。

六時より——思い出の小樽市公会堂にて、御書講義と質問会。「日巖尼御前御返事」。参加の数——千人なり、と。

一月十六日（金）

晴

午前八時三十五分発にて——小樽より、旭川へ向かう。健康状態もよい。嬉<sup>うれ</sup>しかった。



午後一時三十分——旭川着。多数の同志待つ。

二時三十分より——大法寺にて、御書講義「西山殿御返事」ならびに質問会。超満員。

六時三十分より——N宅にて、再び御書講義「妙一尼御前御返事」と、質問会。

終わって——男女青年部幹部会。

北海道の冬景色を、心ゆくまで味わう。

忘れ得ぬ、雪と清氣と牧歌調の街——旭川。

一月十七日（土）　曇

旭川駅——午後零時三十五分発にて、夕張へ向かう。

北海道は、実に雄大だ。世界の冠たる——精神界の大開発を決意する。

いつの日か、この大地よりあまたの指導者が輩出するのは。

夕張駅——五時三十分着。

大歓迎をうける。ありがたい。これらの強き同志あれば——これからの闘争に、断じて敗れまい。この人びとのために——私は起<sup>た</sup>たねばならぬ。時は……刻一刻と近づいて来た。どうしようもない。時の流れか、要求か、宿命か。

夕暮れの——小雪ふるなか——T支部長宅へ。

夜——映画館を借り、御書講義「四条金吾殿御返事」と質問会。

立錐<sup>りっすい</sup>の余地なき、この熱と力を、求道の姿にと——ますます決意堅む。

炭労事件の発祥地。

恩師の、若き青春の教鞭<sup>きょうべん</sup>をとりし地。

文京の友らが、築きし歴史の地。

夜半まで、T宅で幹部たちと、過去のこと、現在のこと、未来のことを、語る。懐かしい、懐かしい地、友、時であった。

一月二十一日（水）

快晴

朝、M君来る。女性問題で自殺まで決意の様子。可哀想でならなかった。因果の厳しさ。——真剣に人間革命の指導を。

午後、K君の結婚式に出席。

夜、本部幹部会。豊島公会堂。元気に指導する。

帰宅、十時三十分。

シュヴァイツァーの『バッハ』（辻莊一・山根銀二訳 岩波書店）を開く。

暖かな一日であった。

天皇機関説を提唱し、天皇主権を厳しく攻撃した美濃部達吉は、弱冠<sup>じやつかん</sup>二十七歳よりこの提言を三年間で確立した、と。青年期のみ、偉大な創造と勇氣と、正義の闘争ができるものか。

〔二月〕——昭和三十四年は、「黎明の年」と発表され、その名の通り、人間勝利への黎明を告げた年となった。一月一日の元旦初勤行は、学会本部に加えて、関西本部、九州本部でも実施された。学会本部では代表約二百人が参加して、池田総務、理事長の挨拶の後、戸田第二代会長の「三妙合論」の講義を録音したテープを聴いた。

一日から四日にかけて、総本山大石寺で初登山が行われ、全国の代表約一万人が参加した。一日には青年部の男女合同全国部隊長会が総本山・理境坊で開かれ、方面別体育大会をはじめとする年間行事大綱と、具体的な活動の進め方を徹底した。席上、池田総務は「青年は確信強く自己の主張を堂々と述べるとともに、絶えず謙虚に学び、思索していくことが大切である」と指導した。

二日には音楽隊、鼓笛隊、合唱団の約三百人が五重塔前で演奏した。

池田総務は、十五日から十八日にかけて、厳冬の北海道指導に赴き、小樽、旭川、夕張、札幌で御書講義および質問会を行った。一月二十三日には東京・江戸川区に小岩支部会館が落成し、入仏式が行われた。これは在京で初の新築の支部会館であった。

二十五日には、総本山・御影堂で寺院献納式が行われた。昭和二十八年五月、橋本の正継寺の寄進以来、学会名義になっていた二十四力寺を、正式に総本山に御供養する儀式であった。

世界では、一月一日、カストロの指揮するキューバ革命軍がバチスタ政権を打倒した。翌二月十六日、カストロはキューバ首相に就任することになる。一月三日にはアラスカがアメリカ四十九番目の州に昇格し、八日にはドゴールがフランス第五共和制大統領に就任し、アンドレ・マルローは文化相となった。

二月十一日（水）

快晴

二月一日——関西七周年記念幹部会に出席。中之島公会堂。超満員であった。東京・関東をしのぎゆく潮流あり。栄えゆく関西に幸あれ。

二月二日——裁判所へ。すぐ終わる。関西本部において、中心者会議。夜、講義をす。五年後の人材、十年後の人材を考えて、体当たりの指導、講義をす。喜々として、忍耐強くついてくる後輩は、成長している。心で尊敬。心で満足。心で喜々。

二月三日——高松指導。四日——高知指導。六日——特急「つばめ」にて帰京。

二月十一日——第五十九回目の恩師の誕生日。懐かしい。

妻、赤飯を朝出す。師を思う、美しき一家。満願の財物より勝れ、輝く、黄金の心。

この佳き一日……青年部首脳と会議。

色紙にわれは誌す。

返らじと 兼て思へば 梓弓あずさゆみ

なき数にいる 名をぞとどむる

(楠木正行)

このなかの幾人が、生涯、広布という革命に、生命を捧げきれるか。信……疑。

二月十二日(木)

快晴

晴れの日、続く。春近し。

本部、閑散。選挙も静か。大丈夫か。

善積もれば仏となる。悪積もれば地獄となる。一生涯を、流れゆく水の信仰で、有意義に人生を限りなく貫きたいものだ。

日興上人のごとく、峻厳しゅんげんなる信心を。

日目上人のごとく、国諫こっかんの実践者に。

僧侶もすべからく、そうあつてほしいものだ。

——と、想う。念おもう。

輝く自室、六畳間。時計の針の動く音が、耳にさわるぐらい静か。妻の出す“おしる粉”をすすり、一時過ぎ就寝。

明後日は、また旅行だ。名古屋へ。そして、関西へ再び。使命を胸に抱いだき、勇んで行く。  
う。

二月十五日（日）

曇

十四日――。

横浜駅より、特急「つばめ」に乗る。親類に挨拶あいさつのため家族全員で。名古屋駅に午後二時前に着く。

午後、夜にかけ――班長会、班担当員会を開催。

中京もまた元気。学会は堅し。関西の次は中京だ。一支部でなく、全学会で力を入れゆく国土世間だ。梶かじを誤るな。

十五日――午前中、東山動物園へ。

博正、城久の喜ぶ姿は……小鳥のごとし。

O宅に挨拶。義兄の仕事のことで。一時間ほど打ち合わせを。

四時より――愛知の会館入仏式。七時より、青年部幹部会。



子らと別れ、八時三十分——特急「こだま」に乗り、関西へ。裁判のため。

恩師の一周忌、近づく。<sup>ぎょうたい</sup>行躰即、新たな精進と、決意を。

車中、思うこと多し。限りなし。

二月二十日（金） 晴

微熱あり。朝、ゆっくり休む。

新宿の病院に、再びレントゲン<sup>と</sup>を撮りに行く。病院にて、足立支部の方という——看護婦さんに会う。びっくりしていた。

午後——本部面接。忍耐強く人間指導に頑張る。

夜、K氏らと、打ち合わせ会。ダイヤモンド・ホテルにて会食をしながら。好感のもてない人だ。

恩師の生命の叫びが、一日一日、消えゆくようにならない。断じて消してはならぬ。

組織あり、教学あり、社会の地位あり……大切なのは、慈悲だ。慈悲ある人だ。不退の求道だ。無限の求道の人だ。

わが広布の真の味方は……。

二月二十四日（火） 雪

朝、雪。

銀世界の東京を——タクシーで本部へ直行。

朝日に、宝石のごとく輝く瞬間、瞬間。

先生の、昭和三十一年十月の客殿における、講義の録音を聞く。一時間。『無量義経』

——「十功德品」。

毎日、一つずつ聞くことに決める。そして、全部、後世のため、レコードにすることに決定。

先生逝去後——次第に、幹部の精神的支柱の、減退を痛感。

公正な人事と、暖かな指導が必要と一人、憂<sup>うれ</sup>うる昨今。

恩師の信任の人が、伸びのびと闘えるようにしてあげねばならぬ。増上慢の人が、氣ままに振る舞うようでは、学会は衰退してしまふからだ。

学会家族は、いずこよりも暖かく、盤石であらねば広布はできないからだ。

帰宅遅し。疲れた。

〔二月〕——二月一日、関西発足七周年を記念して、関西総支部幹部会が大阪市中央公会堂（中之

島公会堂）で開催され、場内外に約八千人が集まった。出席した池田総務は、「新しい感激をもって建設当時の精神を揺り起こして前進していただきたい」と激励した。三日から四日にかけて、池田総務らは四国指導に赴いた。本部指導に並行して、男女青年部員に対する指導会ももたれた。三日には高松市公会堂で指導会が開かれ、席上、池田総務は、男子部には、①生涯退転しない②青年期は修行時代③有為な人材に成長、の三点を強調した。また、女子部には、①常に若々しく生き生きと②信心を根本に、尊敬し、激励しあい、団結していく③大聖人の教えを訴えきつていく先駆者に、の三点にわたって指導した。

二月四日、墓地問題に初の判決が下った。前年七月、群馬県・桐生の林照寺住職が、学会員の墓地埋葬を拒否して墓を掘り起こすという暴挙に出た事件に対し、前橋地裁桐生支部は、この住職に懲役四月、執行猶予二年の判決を下した。これによって、学会側の主張の正しさが、法廷で初めて認められたのであった。

二月十五日には、名古屋市中名古屋支部会館落成入仏式が行われた。これは地方支部として最初の支部会館で、池田総務のほか地元会員約百五十人が出席した。この会館は、同年七月に愛知会館と改称された。

岸内閣は、安保改定への始動を開始しており、二月十八日、藤山外相は「藤山私案」を発表した。これに対し、池田勇人派など反主流派は、二月二十五日、安保改定調印を急ぐなということで意見の一致をみた。

三月六日（金）

曇

広布の前進のため——生命力を湧出する信心を、と勤行。

三月一日——日立指導、「経王殿御返事」の御書講義を中心に。

三月二日——水戸指導、「此経難持御書」。

三月四日——大宮指導、「異体同心事」。

今、戦わずして、戦う時はなし。

今、全力をあげて戦うことが、後日の幾百倍にあたる価値があることを知れ。

昨、五日は——東京にて「佐渡御書」を講義（一般講義）。豊島公会堂。

弟子たちよ——総決起せよ、と心で叫びつつ、全身全霊で指導と講義を。

求め来る人びとに、最高に満足を与える自己でありたい。本当に可愛い、学会員。

三月九日（月）

晴

自己の感情は、次第に荒くなる。激情か。見るもの、聞くこと、全<sup>すべ</sup>ていやだ。悪世末法の社会。

純粹に、利害も捨て、名誉も捨てて進む、青年のみが、私は大好きだ。ここにのみ、建設の源泉がある。

なんとずる賢い、田熟の人の多きことよ。自分には、耐えられない。

先生の「種種御振舞御書」の講義の録音を、聞く。

半日——本部にて、先生の指導の整理。

遺品の整理も含めて。つい涙あり。

夕刻、遺族のMさんたちと、Hにて会食。

信心の世界と未来の話が、自分にはど馳走なのだ。今は、愚痴<sup>ぐち</sup>は困る。

夜、恩師の一周忌についての「大白蓮華」の原稿を書く。

折伏・布教を忘れたら——創価学会の存在価値はなくなる。

## 三月十七日（火） 雨

十五日——東京駅午後一時三十分発の急行にて、総本山へ。一泊登山。M君と二人で。  
夜、客殿にて「四条金吾殿御返事」を講義。

静寂せいじやくなる本山。

十六日——。

十七日——午前、本部にて、恩師の指導の記録を進める。

午後——客、応対。

夜、池袋・常在寺にて、文京ブロックの指導。「四条金吾殿御返事」の御書を中心に。

御書をはきちがえた、自己中心主義の、幹部のいるのに頭痛あり。

指導者は、絶対に頑迷がんめいと偏狭へんきやうであってはならぬ。後輩が可哀想でならない。恩師の指導・訓練が、もう消えたのか、と怒りたい。

遅くまで、デュルケム著『宗教生活の原初形態』を読む。難解。

三月十九日（木） 晴

一日中、先生の指導の、結集けっしふに奔走。

生涯、若き雪山童子せつせんどうじのごとき、清心でありたい。

悔くやむこと多し。油断して、記録少なし、残念。

夜、足立支部の幹部会に出席。御書を講義しながら指導。

帰り、腹痛。冷えか。



三月二十八日（土）

晴

昨日、地方指導より帰る。

豊橋、大津、福井、福知山、そして岐阜と。五日間の真剣勝負の日程に悔いなし。

恩師の二回忌を前にしての、せめてもの奮闘だ。先生——私を、見守り給え。

新しき時代と、社会は、われらで築くぞ。

夜、先生の指導を、全力をあげて結集。

〔三月〕——三月一日から、北海道、関東などを対象にした地方指導が始まり、池田総務は一日には日立で、二日には水戸で、四日には大宮で、それぞれ御書講義、質問会等を行い地元会員を激励していった。

「広布の記念式典」の一周年を記念して、三月十六日、池田総務を中心に青年部の代表が登山して恩師の墓前に詣でた。このとき、池田総務は「毎年、この日を忘れることのできない青年部伝

統一の一日として記念行事を行おう」と提案し、現在に至るまで、毎年、記念行事が行われている。また、三月二十二日から二十六日にかけて、池田総務の中部指導が行われ、豊橋をはじめとして、大津、福井、福知山、岐阜の各地で地元会員への激励が続けられていった。

社会では、中国を訪れていた社会党の浅沼稻次郎訪中団長が、三月九日、中国人民外交学会で「米帝国主義は日中両国人民共同の敵」と挨拶して物議をかもした。

六月二十四日（水）

曇

ソ連——中央執行委員会開催の報道あり。全世界を動かす、新たな大国。世界の情勢は、この国を一つの軸として、考えゆかねばならぬか。

親しめぬ国——しかし、民族は明るくして、純朴であるとのこと。

学会も、新理事ならびに幹部の更迭<sup>こうてつ</sup>あり。緊急幹部会開催。未来を動かしゆく根源とな

るか。

六月二十五日（木）

曇

心身共に疲れる。ただ、唱題に励む。

社会党首脳部退陣要求さる、との新聞報道あり。時代は、刻一刻と、転回されていく——。

宗教の戦国時代、そして政治の戦国時代か。これでは日本列島は危うし。<sup>あや</sup>日本国の、世界のための、広宣流布を一日も早く。

先生の偉大さを、沁々<sup>しみじみ</sup>と知る今日。誰からも信頼される、立派な力ある指導者になることだ。報恩——若き、慈悲のある指導者に。

〔六月〕——四月に行われた統一地方選挙において、市・区議選では学会推薦の立候補者二百六十

一人が当選し、東京の区議選では七十六人が全員当選した。

五月七日には、第五回参議院議員選挙が公示され、六月二日に投票が行われた。東京地方区の学会推薦の候補者は第一位で当選し、全国区の立候補者五人も全員上位で当選した。

二十八日、東京・杉並公会堂で第二回学生部総会が開かれ、約二千人の若き俊逸が集まった。三十日には六月度本部幹部会が行われ、本部機構ならびに支部組織の大改革が打ち出された。池田総務が事務局および各部を統括する立場となり、同時に理事に就任した。中部、東北、中国、埼玉に総支部が設置されて合計七総支部となり、また、在京を中心に十六支部が新設された。

この月、世間の話題をさらったのは、六月二十五日、後楽園球場でプロ野球史上初の天覧試合が行われたことであった。巨人・藤田、阪神・小山の先発で始まり、4対4の同点で迎えた9回裏、巨人の長島茂雄が阪神・村山実からサヨナラホームランを放ち、長島はヒーローとしての地位を不動のものとした。王貞治もホームランを打ち、ON時代が始まった。

七月六日（月） 晴

本部職員の旅行から帰る。疲れる。健康第一。

夕刻、久しぶりに教授会に出席。戸田先生の講義の、録音テープを中心に。師の教え実践するを、弟子というなり。

学会も、大きな急坂道に入る。大事な時に、忍辱にんじくの力をもたねば。決然として、目的のために、死を覚悟する友は少なし。同志少なし。これが、大聖人の仏法の縮図か。

七月八日（水）

晴後曇

昨日はK宅を訪問、お祝いにゆく。

師おわせぬ、創価学会の淋さびしさよ。しかし、それにかわる幹部の、強き情愛が流れゆくことのみを祈る。

広宣流布のために、立体作戦の一端として、新しい、企画をいくつか練る。

七月九日（木）

晴後曇

青年部長更迭式。本部広間において。

青年部幹部全員、重大な決意で未来に進む広布を誓う。

今、青年指導者たちが、勇敢に、突破口を開くか否かの、大事の秋となる。

夜、中野公会堂に、女子部の幹部会に出席。

いかなる会合にせよ、一人でも、二人でも信心と使命感を自覚し、起ち上がることを期してゆこう。これが偉大な折伏であることとして――。

七月十日（金）

曇

邪悪な人は、和合僧を破壊する魔の働きである。それが何であるかを見破ることだ。仏法上、破和合僧は五逆罪の一つであれば、和合僧を築き護ることは、偉大なる折伏に通ずる。

ゆえに、学会だけは断じて崩させてはならぬ。強き青年が、公平に、清純に、学会を護

りゆくことだ。そこにのみ、宗門の安泰もあるのだ。

夜、台東体育館へ、小岩支部結成大会に行く。

人びとを動かしゆく根本は、信心しかない。雄弁でも、策でも、金銭でも決してない。その信心とは、人間としての力、社会における力——あらゆることを意味する。

その信心即世雄<sup>せおゆう</sup>、信心即実相に、はじめて一切の勝負の決定がなされよう。

## 七月十七日（金） 曇

心ゆくまで唱題。いつもながら——。

師の慈悲が、次第に胸に広がる。言語に絶する父子の情。師弟の心境。絆<sup>きずな</sup>。この深き、深き不二の血脈を、誰人か知る。

夜、理事長、Z氏と、Bにて会食。善人なれど、慈愛深くなってくれと念ず。

指導者、小人なりし時は、その世界、また不幸なるか。

帰り、友らと皇居前広場を通りぬけて、広布の未来図を論じながら——帰宅。

七月二十日（月）

晴

再び身体悪化。苦しむ、一日中。

鉄のごとき、生命を、創<sup>つく</sup>りたいものだ。運命、宿命、宿業。打開、打破、転換。

戸田先生の講義・講演の、レコード完成。実に嬉しい<sup>うれ</sup>い。報恩。

帰り、理事たちに“すし”をご馳走する。遅く帰宅。

N氏が、新しい姿して、政界に出てくる。

歴史の動き——社会の動き——われらの舞台はいつの日となるか——。



七月二十一日（火）

曇

暑い日が続く。

冷房が、非常に、身体に悪いとのこと。自ら実験してみよう――。

人事、運営、共に順調に進む。

夕刻、築地支部の結成大会に出席。御書講義を、全力をあげてする。

信心は即生命の発露である。

七月二十二日（水）

晴後曇

今日も暑い。暑さが続く。

身体を頑健がんけんにすること。思考。

N代議士が来訪。図々しき人物。軽薄な政治家。学会のK氏が、つまらぬ人物とつきあわぬことを祈る。学会のために、本人のために。

夜、葛飾のブロックの人びとに、お別れする。

皆、淋さびしそうであつた。大きく、暖かく、そして深く、見守ってあげねば。

遅く、多数の人びと、来宅。指導、打ち合わせ、報告等々。

狭き思索の場——大混乱。

七月二十三日（木）

曇

今日も、また暑い暑い日。

定例幹部会のため、本部は超満員。早く、新本部の建設を考えねば。

幹部会所感——首脳たちが、もっと会員のことを真剣に思うべきである。自己を投げだして、会員に奉仕することだ。その叫びに、その姿勢のみに、皆は喜んでついてくるのだ。ずるい指導者になるなかれ。会員が可哀想だ。

一人、苦しむ。ことにあたって、先生の生存中を、思い出してならない——。

暢気のんきな人びとの多きことよ。われ、自ら死闘を決するしかなし。

前進だ。三十代の——。

七月三十一日（金） 晴

九州、中国（岡山）ならびに大阪へ、指導と講義。

昨夜、十一時帰京。疲れる。

夜、新宿のDにて、友ら数人と会食。K君、田舎いなかに行くとのこと。送別会も兼ねる。可哀想な男だ。堂々と、信心と自己の力で生きてゆけぬとは。友人たちを頼って、歩みゆく弱者の青年。ずるい、あまりにもずる賢い人間。戸田先生の怒れる表情が、目に浮かぶ。

夜も暑かった。

〔七月〕——七月二日には東京・豊島公会堂に千七百人が集って女子部幹部会が、三日には東京・台東体育館に六千人が参加して男子部幹部会が行われた。男子部は部員数が約十三万二千五百人となり、年間目標を早くも達成した。池田総務は両幹部会に出席し、男子部幹部会では、「最高の文化が広宣流布であり、その最高の文化とは色心不二の生命哲学から出発した、『第三文明』である」と訴えた。

七月二十一日、学生部は池田総務を迎えて男女合同委員会を行い、今後の活動のありかたについて協議した。池田総務は、学生祭の方向について、学会の伝統を中心に、創造性のあるもの、学生生活の楽しい思い出となり、同時に学会活動を推進するものであってほしいと述べた。

スポーツ界では、七月十二日に行われた日本選手権水上競技大会で、田中聡子が二百メートル背泳に二分三十七秒の世界新記録を出し、続いて二十六日には山中毅が、四百メートル自由形に四分十六秒六の世界新記録を出した。また、二十四日に、児島明子がミス・ユニバースに決定するなど、明るい話題もあった。

八月四日（火）

曇

一日——仙台へ出発。

二日——東北体育大会。

三日——帰京。

東北の拠点、仙台支部の様子をよく知る。

青葉城に遊ぶ、青葉城に立つ。皆で、和歌をつくる。詩の城、曲の城、月の城、草木の城に、思い出多し。

夜、理事会——本部機構、そして組織のなかで、血と汗を流しゆくことだ。冷たい、愚かなる先輩に、怒りを秘す。

八月十一日（火）

雨

総本山、夏季講習会より、五時に帰る。本部へ直行。

皆は、そのまま帰宅とのこと。本部を護<sup>まも</sup>ることは、全学会を護<sup>まも</sup>ることに通ずるのだ。学会を護<sup>まも</sup>ることは、総本山を護<sup>まも</sup>り、そして、広宣流布を推進することに通ずるからだ。これ大聖人様の御金言を、護<sup>まも</sup>りゆくことに通ずると確信。

遅く帰宅。種々、思惟<sup>しゐ</sup>——。

一、七回忌か、十三回忌かに、法悟<sup>ほうご</sup>空の名をもって、約十巻余にわたる『人間革命』を著す決意をする。

幼少のころ、新聞記者になることを決意する。これ「聖教新聞」の発刊で満足。少年のころ、文学者を決意する。これ『人間革命』の著述にして、満足するか。資料等の準備を思考。

「無上宝聚、不求自得」と。

## 二、講習会の内容――

「創価学会の歴史と確信」は「開目抄」のごとく烈々<sup>れつれつ</sup>たり。

「折伏小論」もまた、行（実践）の厳格を説けり。

「顕仏未来記」「上野殿御返事」は、全アジアへの広宣流布の宣言と、予言を実感。そして、上野殿の、最高の霊地大石寺を供養せし、不思議を感じるのみ。

八月十二日（水） 雨

涼しき一日であった。

秋よ、早く来い。

中原鹿を争う、政界、社会、日本、世界、そして宗教界。

王道、正道の途上を、強くゆける地涌の人びと。

八月三十日（日）

晴

北海道体育大会。札幌市・まるやま田山総合グラウンド。

若人<sup>わこうど</sup>たちの純粋と懸命な、マスゲームと力走に拍手送る。この力を踏み台にして、権威をほしいままにする幹部になるものは悪人だ。

戸田先生にお見せしたかった。ただ、そのみが残念。

夜、理事長を中心に会議。

青年を愛することのできぬ、侘<sup>わび</sup>しき心の人たちの多きことよ。

〔八月〕——八月二日、仙台・宮城県営陸上競技場に約三万人が参加して、第一回東北体育大会が開催された。出席した池田総務は、「不撓不屈の東北魂を堅持するとともに、広布の力ある人材を陸続と輩出していったほしい」と挨拶した。同日、名古屋・瑞穂競技場にも約三万人が参加して、



第一回中部体育大会が開催された。これを皮切りに青年部の地方体育大会が全国七カ所で開催された。

八月七日から十一日にかけて、総本山大石寺で第十四回夏季講習会が行われ、前期、後期合わせて約八千人が参加した。池田総務は、戸田第二代会長の論文「創価学会の歴史と確信」「折伏小論」および御書の「顕仏未来記」「上野殿御返事」などの講義を通して指導した。

二十一日から二十三日にかけては、夏季地方指導が行われ、全国二十六の拠点を対象に、本部から幹部を派遣して信心の細部にわたって指導を実施した。

三十日には青年部の第二回北海道体育大会が札幌・円山総合運動場で開催され、約三万人が参加した。出席した池田総務は、偉大な人材を輩出するよう激励した。

社会では、八月十日、松川事件十七被告の上告審判決公判で、最高裁大法廷は七対五で「連絡謀議について事実誤認の疑いあり」として原判決を破棄し、差し戻した。

九月一日（火）

曇

関東大震災の記念日。三十六年前とのこと。

惨、第二次世界大戦の悲惨の前相の惨か。

天災の惨、人災の戦争もまた惨。天災は妙法により、人災は人間革命による以外、解決の道なし。

勇気、理知、いずれが大事か。いずれも大切。

善、悪、その基準の重要性。

九月二日（水）

曇

本年最高の暑さ。

三十六度四分とのこと。

夕刻、久しぶりに理事会。全く惰性。暑さのせいか——自覚、責務なき故か。一日ごとに、老若の差が開かれていく——。先輩よ、牧口先生のこと、戸田先生のことを、もう忘れたのか、と激怒したかった。

自己保身、それよりも、王仏冥合、広宣流布の建設と、恩師の勝利の実証を第一義として、総て考えゆくべきだ。

九月八日（火）

曇後晴

人の悪口、批判……。

する場合もある、される場合もある。

互いに人格を尊重していくべきだ。常に自己を磨くことだ。自己を磨くことを忘れての悪口、批判は、互いに愚かである。

長い一生。信仰。そして人間建設。

金言恐れて、人語恐るべからず。

九月十日（木）

曇後晴

ご遺族と共に長々と語る。喜んでくださる。嬉しい。

最近、夢をみること多し。

O氏らに嚴重に注意。学会を利用し、かつ先生に師敵対して、今許され、再び清純な学会を濁さんとする行動に注意。

賢明な幹部よ、戸田先生の弟子たる信心一筋の幹部よ、学会を護れ。学会を蝕む連中は、断じて戦え。

恩師は、折伏の師匠であられる。されば、その弟子は限りなく、折伏行進を続行しゆくことだ。誰人が批判し、難を加えても、一步もひるむな。

学会は、指導主義である。ゆえに、大御本尊様受持の人びとが、大功德をいただけるよ

う、慈悲あふるる指導が根本であらねばならない。

〔九月〕——九月十二日、青年部の第六回東京体育大会が東京・国立競技場で開催され、在京の男女選手約二千人のほか、約七万人の観衆が参加した。これは初のナイターとして行われ、色とりどりのスポットライトをあびながら、男子部のマスゲーム、女子部のバレエなどが繰り広げられた。翌十三日には同じ国立競技場で、第二回全国体育大会「若人の祭典」が開催され、全国から約七万人が参加して一段と飛躍、成長の姿を示した。閉会式のさい池田総務は、「学会の使命は最高の文化国家、世界平和の建設にある。『この地球上から悲惨の二字を追放する』との恩師の悲願を実現するには、日蓮大聖人の生命哲理を人類社会に流布するしかない」と述べた。

九月二十六日、伊勢湾台風が中部一帯を直撃し、被災者約百五十万人、死者、行方不明者約五千人、被害家屋約五十七万戸という空前の被害を各地に出した。国や県の救援活動が遅々として進まないなか、学会本部はただちに青年部を中核とする救援隊を愛知方面に派遣し、救援活動を開始した。池田総務もボートをこいで陣頭に立ち、人々の救援にあたった。

十一月二十日（金）

晴

十七日——第六十五世堀米日淳上人ご逝去。

細井日達げいか下の新時代に入る。第六十六世、新げいか下の時代に、必ず、広布を實現せんことを決意す。

多繁な、一日一日になる。

広布の黎明れいめい、近ききにありを、実感。

十一月二十七日（金）

曇

十一月度本部幹部会。台東体育館。

秋、深し。

学会も、一日一日、暗夜去りゆきて、夜明けの幕を開く、重大な時になってきた。真実の中心がないと、これほどまでに、私は苦勞をせねばならぬのか――。

国会議事堂に、二万人のデモ隊おしかける。革新の怒濤<sup>どとう</sup>。いつの日に静かなる太平の社会に。緑の平和、青い海原、輝く太陽の――安穩<sup>あんのん</sup>楽土の国土が現出するのだろう。

われらの責務大。心身を鍛えておかねば。

戸田先生の構想を、沁々<sup>しみじみ</sup>と感ずる昨今。

味方は少なし。われ一人、恩師の姿を浮かべて、闘いゆく以外なき宿命。

この一生、妙法流布に捧げゆく命、微少の風に紛動されて何かせん。

法力・仏力、われは信力・行力。

諸天よ守れ。諸天よ飲<sup>よろこ</sup>べ。

諸天よ、われら、地涌の陣列の前途を祝福せよ。

十一月二十八日（土）

晴

自転車にて蒲田駅まで。寒い。

夜、「三重秘伝抄」の講義。一生涯、勉強せねばと痛感。まんまんかんかん慢々緩々、後悔の身になるらん。

本部、次第に落ち着く。来年は、一段と多繁にして大事な年となることだろう。覚悟。誰よりも。注意、自重。

信心——教学。人間学。

尊き真実の青春——妙法に捧げゆく、一切の躍動。

明二十九日、第七回女子部総会。正午より、両国・日大講堂。



十一月三十日（月）

快晴

一日中、心身共に疲れる。

B 前支部長の支部葬を、常泉寺にて催す。午後四時より。

幹部の出席、まことに少なし。多忙のためか。淋<sup>さび</sup>しい思いをする。老兵の最期に涙する。心より、追善の供養を。

限りなく戸田先生を思い出す。先生を利用して、保身と名誉と人気の上に、おこがましくあぐらをかく幹部あり、と。彼らの慢心の姿に、われ、学会の将来を深く憂う。

帰り、理髪店による。いずこの社会にもあるのであろう、ずる賢い、老いた先輩たちの話に、心乱るる思いなり。

ともあれ、師恩を忘るる卑劣な徒だけにはなることなかれ。師の指向する遺言に少しも動かず——自身の利己満足に終始して、これが真実の師弟といえるか。

〔十一月〕——十一月八日、東京・後樂園競輪場に七万人が参加して、第二十一回秋季総会が開催された。席上、戸田第二代会長の和歌に曲をつけた「婦人部の歌」が発表された。また、人事では新学生部長が誕生し、学生部は青年部に所属することになった。池田総務は、一般の宗教界と学会との本質的な相違を指摘して、創価学会こそ真の大衆の味方であると力説し、「広宣流布の鐘を打ち鳴らし、今後の活動にも人間革命にも、忍耐強く、また勇敢に前進していこう」と呼びかけた。

十一月十五日、日蓮正宗第六十五世堀米日淳猊下は、第六十六世細井日達猊下に法を付され、二日後の十七日に御遷化された。享年六十一歳であった。日淳猊下は、創価教育学会の創立当時から、会員に法華経や御書を教えて牧口会長の座談会運動を援助され、その後も創価学会に深い理解を示された猊下であった。

二十三日、東京・共立講堂で、第一回学生祭が開催され、全国から約千人の学生部員が集った。各部の代表も招かれて参加した。池田総務は、「この催しこそ、色心不二の哲学を根底とした第三文明、文芸復興の夜明けである」と激励した。

二十九日、女子部は遂に目標の部員十万を達成し、東京・日大講堂で第七回女子部総会を開催した。部隊数も百個部隊となり、参加者は約二万人であった。池田総務は、因果の理法について語るとともに、「まず御本尊を信じ、学会を信じて、青年らしく若々しく、純真に信心を貫き幸福になってほしい」と指導した。

社会では、十一月二十七日に安保改定阻止第八次統一行動が行われ、国会請願デモ隊約二万七千人が国会構内に入り、警官隊と衝突して約三百人が負傷した。また、三池争議が始まるなど、日本全体が騒然とした空気に包まれていた。

十二月四日（金）

快晴

横浜に一般講義。開港記念会館。

「佐渡御書」の後半。

先生のお講義の、いかに大変でありしかを、つくづくと知覚する。生命力と英知あふる、名講義をしたいものだ。

昭和三十五年、三十六年、三十七年、三十八年と、この四年間が、学会の将来を決する、最も大切な年となるにちがいない。

先輩幹部の、求道心なきを心配する。慢心に傾きゆく姿を憂う。

優秀な青年をないがしろにしては、未来の広布の進展は決してない。若き英才が、学会を発展させていくのだ。無能な先輩になることなかれ、と忠告したくなる。

十二月十二日（土）

曇

午後零時三十分発にて、仙台へ。講義ならびに指導のためなり。

大支部と思いに、さにては非ず。指導者は、決して過大評価は禁すべきである。

S 荘に一泊す。

幹部と心ゆくまで語る。皆、善人であり、東北の名将だ。嬉しい。大切にしておあげねば。

仏法の指導は、御書にまかせ、その実践は、師である戸田先生の指導を、根本としてゆくべきは当然至極である。それなのに、一幹部の売名的な指導に、皆、混乱して苦しんでいるとは――。

十二月二十日（日）

雨

東京午後一時三十分発で、総本山へ。

寒し。

小生の本年最後の、登山会の担当。

大講堂で質問会。全力投球す。

宿坊に帰り、ぐったりした身体を、横にして種々思索。

一日も早く、僧俗一致の実現を。

本山と学会で、毎月連絡会議を。

戸田先生の亡き本山もまた、淋<sup>さび</sup>し。

夜半まで、雨しきり。寒さも、またしきりであった。

十二月二十一日（月）

晴

一晚中、宗門、学会の将来を考える。眠り少なし。

八時三十分、御開扉。しかし、五分遅れる。鍵<sup>かぎ</sup>が見あたらぬとのこと。猊<sup>げい</sup>下のお留守

に、なんたる弛緩<sup>しかん</sup>。

御開扉後、先生のお墓へご挨拶<sup>あいさつ</sup>に。

読経・唱題。

晴天。雨のあとは、必ず晴天か。人生の雨のあとも、必ず、かくあってもらいまし。

午後三時過ぎ——本部着。

車中、M宅のことを、しきりと心配する。淋し。

夕刻、新宿で青年部幹部会。学会次期の、指導者の訓育を始む。皆、可愛い。黒き瞳<sup>ひとみ</sup>、  
隆々たる筋肉、清流のごとき信心。広布の総仕上げの若人<sup>わこうど</sup>たちに期待するや大。

八時三十分、帰宅。

子供、お手伝い、風邪。たいしたことなしとのこと。

遅くまで、読書。

十二月二十二日（火）

快晴

東大の助教授の奥さんと、一昨日会う。入信して、病弱が治り、懸命に折伏をしているとのこと。今日、本を一冊贈呈する。

学会批判のJ会に、戦いを挑む。

子供たちの病気、心配する。家がすき間風のため、寒いようだ。

十二月二十四日（木）

快晴

昨夜は、あまりにも寒し。自分も風邪か、三十八度の熱——午前中、休む。妻より、早速、本部に連絡を頼む。横になりながら『犬養木堂伝』を読む。

午後より、本部へ。

帰宅して、書を三枚。

“天真爛漫”  
らんまん

“天真独朗”  
どくろう

“無冠帝王”

十二月二十五日（金）

快晴

天気続く。

“デモ規制法”が、国会にてもまれる。次第に、複雑怪奇の社会にと変化、変動の感あり。

一日中、本部にて指揮——戸田会長死後、学会の弱体と、崩壊を笑っての内外の敵、日々に増加。



夜、友人らと、M宅へお歳暮に行く。

帰宅後、狭い風呂にゆっくり入る。種々、自己の将来を思索。思うことあまりにも多し。凡夫なれば、確たる決断もできず、悩むこともまた多し。

凡人の道、凡人の生活、凡人の人生なれば、これでよしか。人間というものは、所詮、しよせん愚かなるものだ。

結句は、強靱きやうじんなる信仰の道による、人間革命しかなくなってくる。ただ。

十二月二十六日（土）

快晴

快晴続く。

心身共に疲れる。

医師に、三十歳までといわれた寿命が、これで一年生きのびたわけだ。見事なる宿命の転換。

人生は、生き抜くことだ。その原動力は題目だ。そして妙法の功德を、どこまでも重ねゆく日々の持続と実践だ。……「更賜寿命」。

妙法より頂戴した寿命——大切に生きて、生き、戦おう——。

誉れ高き法王の子のごとく、毅然とした一生を、来る日も、来る日も送らねばならぬ。

夜、若き理事、青年部首脳らと会談。夕食すすまず。

十二月二十七日（日） 快晴

本年最後の日曜日。

午前中、久方ぶりに庭の掃除をする。庭の花少なし。しかれども、家中は、幸福の花園

のごとし。

大御本尊の功德を沁々しみじみと感ずる昨今。

御書にいわく「法王虚むなしからず」なり。胸中の宮殿あり、小さなわが家を包む。

二時より、池袋・常在寺において、入院式。日達げいか下ご登座により、後任としてS教学部長の着任。儀式終了後、祝賀会あり。

明日もまた多忙か。

十二月二十八日（月） 晴

朝、身体具合悪く、自動車にて出勤。もったいない思い。やむをえぬ。

本部の面接指導、多忙なり。来る人、壮年、婦人、青年ら多数。

午後七時、常泉寺にて、向島支部の幹部会。立宗七百七年の最終の学会活動である。帰り、向島会館により、同志と共に、戸田先生を慕う話で夜半まで――。

帰宅遅し。静かな、明るい家庭。

十二月二十九日（火）

晴後雨

本年も、はや終わらんとす。

悩みと、建設と、努力と、懸命の一年であつた。

先生のおわせぬのが淋<sup>さび</sup>し。毎年、大晦<sup>おおみそ</sup>日と正月に、親の子を勞<sup>ねぎら</sup>うがごとき、先生の言葉ありて、私は感動したのであつた――が。

夕刻、本部会議室にて、大幹部たちと、種々談合。善人の結束。

政治乱れ、国土、国民乱れ、恐ろしき未来と未来世を予感。

背中、非常に痛む。

十二月二十日（水）

快晴

本部仕事じまい。皆、よく働いてくれた。すまぬ気持ち。本陣の守人<sup>まもりて</sup>としては、まだまだ、勇気がないとも思う。来年より、訓練をしてゆかねば――。

立宗七百七年も、あと一日。この一年、生涯<sup>きた</sup>来<sup>きた</sup>らず。令法<sup>りようほう</sup>久住<sup>くじゆう</sup>への、絵巻物のごとくで、あつたとも思う。

先輩たちの情性を悲しむ。

先輩たちよ、元気を出してくれ、と祈念。

十二月三十一日（木）

曇

七百七年、遂に去り、

七百八年、遂に来る。

家でゆつくり休む。思うこと多々。

「味方は少なし、敵多し」の、恩師の歌が、なぜかはなれぬ大晦日<sup>おみそか</sup>。われらに、諸天の加護を信じて前進。来年もまた——と、一人決意する。

人間と平和と、広布のために、恩師の歌を涙と共に、歌いたき心境。

〔十二月〕——男子部は部員十三万を突破し、百三個部隊に達した。十二月六日、東京・日大講堂で第八回男子部総会が開催され、第二会場として設けられた両国公会堂も含めて約三万五千人が参加した。翌昭和三十五年の活動方針は「黎明より前進へ」をスローガンに、①革命児十万人への前進②人間革命への前進③折伏への前進、の三項目であった。池田総務は「今こそ順縁広布のときであることを自覚して、さえざる障魔を乗り越えて前進しよう」と講演した。

十二月二十三日には、十二月度本部幹部会が豊島公会堂で開かれ、学会の総世帯数が百三十万を突破したことが報告された。

七百八年、遂に来る。

家でゆっくり休む。思うこと多々。

「味方は少なし、敵多し」の、恩師の歌が、なぜかはなれぬ大晦日<sup>おみそか</sup>。われらに、諸天の加護を信じて前進。来年もまた——と、一人決意する。

人間と平和と、広布のために、恩師の歌を涙と共に、歌いたき心境。

〔十二月〕——男子部は部員十三万を突破し、百三個部隊に達した。十二月六日、東京・日大講堂で第八回男子部総会が開催され、第二会場として設けられた両国公会堂も含めて約三万五千人が参加した。翌昭和三十五年の活動方針は「黎明より前進へ」をスローガンに、①革命児十万人への前進②人間革命への前進③折伏への前進、の三項目であった。池田総務は「今こそ順縁広布のときであることを自覚して、さえざる障魔を乗り越えて前進しよう」と講演した。

十二月二十三日には、十二月度本部幹部会が豊島公会堂で開かれ、学会の総世帯数が百三十万を突破したことが報告された。

# 昭和三十五年

——一九六〇年——





## 元 旦（金） 雨

午前六時、起床。厳寒の朝であった。

全員で、仏前に端座<sup>たんざ</sup>。

自分、妻、長男博正、次男城久、三男尊弘、家内一同、大御本尊に厳護いただきし報恩の念、やみがたし。

恩師戸田城聖先生に、深く、新たなる本年の決意を誓う。妻、その意中を知るがごとし。

立宗七百八年、いかなる年が開けたか。いかなる年が展開されゆくか。全学会員のいよ  
いよの信心と、幸福と、躍進を、祈らずにはいられなかった。とくに、大幹部の自覚と真  
剣さを欲する——と。

七時少々過ぎ、妙光寺に参詣。K尊師より祝酒頂戴<sup>ちようだい</sup>。理事長、H、M君と。僧俗一致の一日も早からんことを、帰途、共々に語る。

目黒の、戸田先生のお宅への年始を終え——本部へ。

本部、十時より初勤行。

集まれる代表の人、約二百名。

方便品、寿量品の読経・唱題——終わって理事長の挨拶<sup>あいさつ</sup>。次に、戸田先生の昭和三十二年の、登山会のときの質問会レコードを、お聞きする。いまだ先生の精神、ここにありの感を、大幹部諸公は抱<sup>いだ</sup>いたことであろう。

最後に、簡単な酒宴あり。戸田先生の和歌の朗詠あり。会場、深々と静寂となるなり。

終了後、会議室において職員と懇談、三十分。皆して学会歌をうたい、署名して帰る。

来客多々あり。色紙に拙<sup>つたな</sup>い俳句<sup>しる</sup>を記す。

初日の出 若き心に 黎明を

元日や 朝より夜の 吾が家かな

一月二日（土） 曇

朝、ゆっくり起きる。妻より誕生日であるのに、顔色悪しと心配される。どうしてこんなに疲れるのか、見当がつかぬ。決して、病魔に負けぬから、心配するなと笑う。

三十二回目の誕生日。母のことを念う。老いゆく母のことを想う。否、老いた母のことを考える。

東京駅午前十時発の急行で、初登山。

Mさん母子、H氏と共に。

車中、亡き師のことを偲びつつ、多宝富士大日蓮華山を仰ぐ。いつ仰いでも名山である。世界一の名峰である。この山のごとく、揺ぎなく、生きたいものだ。

日蓮大聖哲の少年時代、比叡<sup>ひえい</sup>勉学への途次、東海道を歩みし折り、あの不二の山を、いかに御覧なりしか。そのご心境を、偲<sup>しの</sup>ばずにはおられなかった。

午後二時、御開扉。本山全域、清浄にして、蘇生<sup>そせい</sup>の感、深し。

六時、大講堂において「十字御書<sup>むしもち</sup>」講義。

講堂、立錐<sup>りつすい</sup>の余地なし。頼もしきかな。人類の黎明<sup>れいめい</sup>、この天地より明けゆく思い、しきりなり。

妙法の力。仏法の興隆。これは、民族も人類も、止めようとして、止めようのなき、大法則なのだ。

理事長の質問会をもって終了。大幹部一同、理境坊二階において、なごやかに夜半まで雑談。

丑寅<sup>うしとら</sup>の勤行まで、一睡もせず。寒きゆえか、朝方までも眠られず。床の中で、大客殿建

立寄進の構想を、真剣に練る。

嬉しく思う。誇り高くも覚える。ひとり、広布の陣頭で苦しみ、尽くすことは。

今年は、学会にとっても、自己にとっても、大事な年に入った感じ。ただただ、大御本尊様にお導きをいただくほかに、わが途なし。

一月三日（日）

曇

本山に在り。早朝に、日達上人猊下より御目通りくださる旨伝達あり。学会首脳にて、猊下のお元気な尊姿を拝す。

終わって、総本山境内を、青年部の有志と漫步。皆、快活であり、未来をはらんで生きている。嬉しい。頼もしい。生涯、共に苦楽を一にして弘教前進せんことを、胸奥で祈る。

共に叫んだ。われ青年たり、われ若人たり、われ青春たり、と。その声、高くして、天空に響き、その声、澄んで富士の白雪に入るなり。

午前九時三十分より、三十分間、日帰り登山の質問会に出席。全力投球で指導したつもり。

十時少々過ぎ、H兄と下山。

帰宅途中、列車内にて、戸田先生の家族と一緒にいる。喬久君と横浜駅まで、種々語る。立派な青年になられた。先生が、いかほどか喜んでおられることであろう。南無妙法蓮華経。

恩師の功德が、厳然と子に回向えこうされゆく実相を、明確にみる念おもいなり。不思議なり、不思議なり。

午後三時過ぎ帰宅。倒れるごとく、横になる。

戦い、ここに十年。法戦、これから十年を夢みて。

一月四日（月）

快晴

午前十時過ぎまで休む。目覚めても、ぐったり。妻も、博正も、城久も、尊弘も、健康、元気である。久しぶりで家族を見る感じ。

昼食を共にする。妻の手料理で。子らの旺盛おうせいな食欲に安心、満足。いかなるホテルや旅館の食事よりも幸せであるとともに美味。

夜半、ひとりで読書、種々思考。

この一年で、信心の決定けつじようと身体の健全を、本格的に計はかるを決意する。政界は、次期総裁の決定の年となるか。

宗内には、日達上人げんか猊下のご登座。政界には、池田勇人か。

また学会の最高責任者も決定せねばならぬ年か……。

広宣流布の布石は、妙法の大法則により、次第に盤石となっていることを、誰人ぞ知

る。

一月五日（火）

快晴

午前中、在宅。

一日中、身体疲れ、横になったりして読書。

子供らと、正月中ぜんぜん遊べず。やむをえぬ。

午後、信濃町の本部近くの理髪店へ行く。

学会本部に寄り、大御本尊様にご挨拶<sup>あいさつ</sup>申し上げる。

① 今年は、人材を育てゆくこと

② 今年は、組織を強めゆくこと

2



③ 今年は、目標を明確にしゆくこと

現在の体制では、いまだ弱体なる故に、堂々たる陣列を組みなおす必要大なり——と。

午後四時、第七回目の子供会。N園にて。八十名の出席者。Mさんに、皆して、銀のコンパクトならびに最上のアルバムを贈呈。喜んでおられた。

学会歌を、一人ひとり歌う。六時終了。

妻と共に帰宅。ゆっくり唱題。

一月六日（水）

快晴

昨日は、正午で二十一度とのこと。

地震等がなければと祈るのみ。天変地<sup>ちよう</sup>天のなき日本であり、世界でなくては。いかに、立派な憲法、法律、条約を作っても、大地震、大洪水<sup>こうすい</sup>の世界になつては、何かせん。宇宙の根本法の、いかに大事であるかを知れ。

午前十時、本部、仕事始め。

勤行、挨拶、<sup>あいさつ</sup>十時四十分解散。

仏壇（お厨子<sup>ずし</sup>）が、立派にできあがり、心から嬉しい。信心あれば、真実の相として、<sup>すべて</sup>全て眼前に現る。

帰宅、遅くなる。明るい、美しい妻に迎えられると、革命児の緊張がほどける。質素極まるわが家なれども、最高に幸せであり、尊さを誇る。

戸田先生あつての学会であつた。先生なくして、学会はありえなかつた。よつて、先生を中心として、全学会のことを考えるならば、しぜんに現状も、未来も、領解<sup>りようげ</sup>できうるはずだ。

先生を利用し、自己の立場を利するために主観で語り、主張することは、恐ろしいことである。女性には、とくにこのような姿が多い。

一月七日（木）

快晴

午前八時、家を出る。

混雑の電車に閉口する。正月で小遣いを使つてしまい、タクシー代なくなつてしまふ。  
無駄<sup>むだ</sup>使いは、本日限りでなくなつた。

本日より、再び本格的に、自己の仕事に熱中のこと。

午後、本部で、理事長、N氏らの裁判の打ち合わせに来た弁護士と会う。

この事件ほど、恩師を苦しめ、学会に傷をつけた事件はない。学会の清浄、正義、伝統を、裁判で立派に立証してゆかねばならぬ。しかし、Nらのいやしい出世主義と、汚れた行為は、真実の学会っ子は許せぬことではあるまいか。

二、三の先輩理事に、学会の本質、亡き先生の胸中を語ってあげる。エゴイストにならず、可愛い学会員のために、わかつてもらいたいものだ。

夜、青年部首脳来宅。共に会食。七年後、十四年後の構想を語る。わかったか、わからぬか。信じたか、信ぜずか。

一月八日（金）

晴

本年度の成就すべきこと。

- ① 大客殿建立の推進
- ② 全幹部の自覚および団結
- ③ 僧侶の宗門、広布への自覚

一年を十年に生きる人あり。十年を一年となせし人もあり。所詮、日々、価値ある人生を歩む、ありがたさよ。

午後三時三十分、常泉寺へ新年のご挨拶に。理事室全員にて。

料理を出してください。新年ぐらいいはよいか。ただ、談話中、なかなか広宣流布への、学会精神がわからぬのには困った。

人は、皆、自己が正しいと思いついでいる。これが本質らしい。これを、一人ひとりを、最高善の境地に、じゅんぜんじ淳善地に開かしめゆく戦いだから、大変な労力だ。結局、信心と確信の持続の叫びしかなくなってくる。

ますます、自身の未熟さと、けつべき潔癖さと純粋さの、弱さを思い知る。皆、わたくしを利用しているようだ。しかし、青年らしく凛然と、りんぜんわが道をゆこう。法樂を自受しながら――。

一月九日（土） 晴

暖冬である。

新安保条約調印のため、十六日、岸首相ら十二名渡米とのこと。それを阻止のため、全

学連、五千名動員とのこと。揺れ動く日本列島。アジアの小島、日本列島の命運は——十年後——三十年後。

衆生濁、劫濁の念、止みがたし。

夜、文京の幹部会に出席。

先輩たちは、自分がいちばん可愛いらしい。また、自身に最も有利なほうに動くものらしい。これと思ひし先輩の心も、後輩たちは、信用できなくなってしまう場合があるようだ。

目的観と使命感と、信義と責任感のある先輩をもたぬ後輩ほど、淋しく可哀想なことはない。

ともあれ、人のことを云々するより、自分が立派な先輩になることだ。皆を愛情をもつてみてあげよう。大きくなれ。大海原のごとき包容の人になれ。

「いかなる乞食には・なるとも法華經にきずをつけ給うべからず」の御金言の学会員に

して、はじめて、真実の信仰者たるを絶対に忘るるな。

八時過ぎ、本部に帰り、恩師の遺命<sup>ゆいめい</sup>である大客殿、正本堂の構想を語り、真剣に取り組むよう、厳しく指導する。

真剣な人あり、無責任の姿の人あり。

恩師去り、いまだ二年たるに、その精神の、はや腐りゆくを防ぐのみ。

一月十日（日）

曇後晴

午前中、在宅。ゆっくり休む。されど身体癒<sup>いえ</sup>ず。

午後、先生のご親戚の集まりに、妻と共に邪魔する。

夕刻、帰宅。夜半まで、静かに読書。

マルクス、福沢諭吉、王陽明、ならびにレーニン、ヘーゲル、バッハ伝を、ひろい読みする。

レーニンの、五十四歳での革命への生命力には、驚くとともに敬愛を感じる。その思想の善悪・高低の次元は別として。ともかく、主義主張を貫く人に見ならうべきであらう。

遅くまで起きている。思索に思索の針が止まらぬ。妻、身体のことを心配してか、早く休んだらという。

昨日より、題目を一千遍多く唱えることにした。新たな発心——次への飛躍の段階のために。

入信当時の友だちの健在を念<sup>おも</sup>う。弟のことを思う。

明日も、再び進もう。一步前進のために、自己の地表を掘り、自己と闘おう。

一月十一日（月）

曇後晴



汝<sup>なんじ</sup>一心二精進シ 当<sup>まさ</sup>二放逸<sup>ほういつ</sup>ヲ離ルベシ

(法華經序品)

大事な、三十代の船出に、わが船体のエンジンは如何<sup>いかん</sup>。

本部において、職員の給与問題の検討。

慎重に、全員の調和、家庭事情、能力等を考え、みて。信仰の世界とはいえ、現実の社会生活の裏づけを、自ら真剣に考えてあげねば――。

夕刻、N氏の関係者とKにて談合。新聞用紙の問題をば、種々打ち合わせる。いかなる会合にありとも、先生 of 精神と姿が、目に映ってならぬ。

本部の帰り『方便品寿量品精解』を読み終える。懐<sup>なつ</sup>かしきこと限りなし。

題目を一千遍唱う。

「黎明<sup>れいめい</sup>」の文字、ならびに「自受法楽<sup>じじゆほうらく</sup>」の字を、色紙に記念として書す。

床につくのが、二時を少々、過ぎてしまった。

一月十二日（火）

曇

疲れながら目が覚めた。

拙宅は、三人の勇士のために、滅茶苦茶である。城中、休むところなし。子らの潑刺<sup>はつらつ</sup>とした、元気のある証明か。頼もし、嬉し<sup>うれ</sup>。

蒲団<sup>ふとん</sup>の中で、過去の少年・青年時代を振り返る。生有、本有、死有、中有の生命の実態あり。今ここに、本有の妙法に照覧<sup>しょうらん</sup>されゆく青年時代に最高の人生を知らねば。

昭和二十二年、十九歳にて入信。その日、八月の二十四日、勤行、受戒、堀米尊能師のお話ありて、その時間、午後一時ごろより三時ごろまでとおぼゆ。

家、裕福ならず。兄弟四人まで、戦地に出征なれば、やむをえず。温厚実直なる父であ

り、母なれど、その苦勞を思わば、涙あり。

親の偉大さを、沁々<sup>しみじみ</sup>と知る昨今となる。平凡な、正直<sup>いちじく</sup>一途の親なれば、尊敬の念、深くなるばかりなり。

昭和二十二年秋より、ひとり決意して、戸田城聖先生の講義を神田にてうく。真剣なりし。この師のもととならばと、決意一段と固まる。友らは喜々とした姿なれど、わが心は、静かにして常に変わらず。

昭和二十四年、一月三日――。

戸田先生の牙城<sup>がじょう</sup>たる日本正学館に、編集員として入社。戸田先生の弟子となりし、第一歩なり。われ懸命に、お仕え申し上げる。

人生、社会、学会の厳しさ、次第に知り、勉強を真剣に始む。

昭和二十五年、八月二十二日、東京建設信用組合の敗北。戸田先生にとって、第二の難

ともいふべきか。ひとり、師と、決めたものの約束として奮戦努力する。この時期、最大なる人間革命となることを覚ゆる。

この一年の、師と共にありし死闘と因縁が、かくまで福運と変わり、宿命転換となるかを思えば、実に正法の不思議なるを知覚す。

実践なき人びと、仏法の批判の資格なきを、念<sup>おも</sup>う。

帰宅、十一時をまわる。妻、静かに、優しき瞳<sup>ひとみ</sup>で待っている。

一月十三日（水） 快晴

正月は、他の月より、一日一日が遅いような気がする。

午後三時三十分より、本年最初の理事会。

遺品の結集、登山会、常住御本尊様のこと、出版（御書・巻頭言集）等の打ち合わせあ

り。

先輩理事の大局観、情熱、次善的政策のなきことを、悲しむ。次の理事クラスは、遠慮をせず、若手より拔擢<sup>はつてき</sup>すべきだ。

仏法でも「行布<sup>ぎょうふ</sup>を存してはならぬ」——とあるから。これが、必然的な手の打ち方であろう。

六時、教授会。

「松野殿御返事」「末法相応抄」の予習。

生涯の教学なれば、深く落ち着いて勉強する必要、これあり。

題目、五千五百遍唱う。しぜんに力が湧<sup>わ</sup>いてくる。

一月十五日（金）

曇

午後零時三十分、東京発の特急にて、名古屋へ向かう。ただ一人。

講義ならびに指導をかねての旅路である。本年最初の地方指導となる。中部の同志にとっては、記念の日となろう。名古屋市公会堂において、「松野殿御返事」を講義。

寒いのに外に四千人ぐらい立っていたと知る。若造のくせに、こんなに大勢なる求道者に対し、真剣に、謙虚けんきょに指導の任にあたらねば、申しわけなし。

愛知会館において、一泊。一時ごろ、床に入る。

## 一月十六日（土） 雨

午後二時、名古屋発の近鉄特急にて、大阪へ向かう。

二層造りの電車であった。東京にもあれば、子供たちが喜ぶと思った。

Y氏、S夫人同車。二人ともお世話になった人である。生涯、忘れまい。

本年最初の関西入り。上六駅（上本町）に着く。総支部長ら出迎えに来ている。懐かし

い関西本部に落ち着く。

総支部長は善人なれど、陰の人だ。若いし、大成長してもらいたいものだ。

K夫人たち、本部より派遣指導に来ている。皆、真剣。誠実の闘争の姿である。婦人が、これほど社会の奥深くくいこんで、活躍するなんて、他の団体、社会には絶対にみられぬことだ。

世界一の婦人団体、文化の団体、婦人解放の組織、そして、主体性ある近代の人間性の団体、生活向上の団体、これ、創価学会婦人部の異名か。

偏狭へんきょうな人がいる。慢心まんしんの人がいる。自分勝手自分勝手の人がいる。戸田先生を嫌いな人がいる。その人たちを見ると、心憎い思いがしてならない。

尼崎市立公民館にて、御書講義。

疲れか、否、勉強不足か、名講義にならず。

一月十七日（日）

快晴

午前中、関西本部在。

午後、華陽会、水滸会、地区部長会、地区担当員会、総ブロック長会等、全会合に出席。

疲労のなか、奮闘。気管支炎か、胸が苦しい。声が苦しい。

午後六時——関西総支部幹部会。中之島公会堂。外もいれて、一万名以上の出席者とのこと。二度にわたり、質問会を。

原則論よりも、抽象論よりも、確信論よりも、具体的な解答指導の、最も大事なりしことを反省する。

夜九時より、T君の入仏式に出席。

就寝、二時を過ぐるか。



一月十八日（月）

快晴

大阪発の特急にて、一路東京へ。

多数の幹部が、見送りに来てくださる。寒いのに恐縮する。将来は、決してこのようなことのないよう、自分から戒めたい。

車中、静岡付近まで休む。完全に風邪をひいたらしい。

サートン著の『科学史と新ヒューマニズム』の続きを読む。いつの日か『科学と宗教』執筆の参考としたい。

横浜駅より自宅に帰る。タクシーにて。

その旨、本部に電話。

一月十九日（火）

晴

体重が減ってくる。

昨年四月より、三貫目も瘦<sup>や</sup>せるか。困ったものだ。病魔、死魔は、厳しく、恐ろしい。

妙法の信あれば、本有<sup>ほんぬ</sup>の病<sup>やまい</sup>にして、大悪これ大善にかわらぬわけがない。この一年で、必ず回復してみせるぞ。罪業の消滅ということは大変なものだ。

重い身体をして、本部へ行く。幾十貫の錘<sup>おもり</sup>を、背に入れていようだ。

登山会の会合に出席。輸送部の幹部を指導。しかし、自己自身が共に苦しまずして叱<sup>しか</sup>りしあとの、自分を常に反省するなり。

頑張れ、頑張ってくれ、若き輸送部の幹部よ。可愛い青年を厳しく訓練して、次の学会を護<sup>まも</sup>ってもらう以外に、途<sup>みち</sup>がないのだ。

午後六時より、男女の青年部幹部会に出席。

安保条約改定調印について、一応の見解を話す。

早めに帰宅。身体を休める。

題目、三千遍あげる。信心の前進即人間革命の前進。

一月二十日（水）

晴

岸全権ら、アメリカにて大歓迎との報道あり。ノーベル平和賞候補とは、全くおそれいる。世界の平均的頭脳というものが、次第にわかってきた感じ。

まさしく、日本も、アジアも、世界も、悪循環の歯車が回り始めた思いあり。

学会本部、日一日と活気を呈す。無言のうちなれど、何かを願い、何かに向かって胎動たいどうしているごとく。

戸田先生の、遺品結集始む。

長く保存し、学会精神を、後生に残したいものだ。長く。永く。

千代田劇場に、ご遺族を招待。

終わって食事。心より喜んでくださる。

最近、つくづくと想う<sup>おも</sup>。人間、一生の遠征<sup>おんせい</sup>ということは、実に大変なことである——と。少年時代、青年時代は、簡単であることも知った。とくに、三十代、四十代、五十代、六十代の人生は、責任も深くなり重大であることを——。

人生とは生存競争か。弱肉強食か。優勝劣敗か。冷酷か。因果か。なんと峻巖<sup>しゅんげん</sup>なることよ。

恩師戸田先生は、立派な人生であられた。  
人間として、事業として、総仕上げとして。

一月二十一日（木）      快晴

向島・常泉寺にて、講義。

帰り、友数人をさそい、神田にて天ぷらをご馳走す。

一月二十二日（金）

晴

羽田空港より、午前十一時発の日航機にて、九州へ。

八女<sup>やめ</sup>の講義。送ってくれる人、妻一人、静かなり。

一月二十三日（土）

曇

福岡の講義。元氣なり。

一月二十四日（日）

曇

小倉にて、福岡支部幹部会。盛会。

久しぶりに「九州男子の歌」の指揮をとる。

参加者、一万五千名とのこと。

寒い寒い三日間であつた。

“百聞は一見にしかず”か。暖かと思つた分析の甘さか。風邪ぶりがえす。この九州を、  
関西と同じく愛していこう。

一月二十五日（月）

晴

朝、幹部一同にて、俳句大会を催す。

皆、なかなか上手じょうずにつくる。

わたくしは、

前進の 東洋広布に 恩師あり

とつくる。

午後四時、日航機にて帰京。

一月二十六日（火）

快晴

旅の疲れか、今日も苦しい。

朝、題目をあげ、身体の平癒<sup>へいゆ</sup>を願う。

午後、本部幹部会の打ち合わせ。第一応接室。

理事全員、老いたる理事、若き理事、保身の理事、捨て身の理事——この姿を、否、胸の中を、胸の奥を、牧口先生、戸田先生が、厳しく見ておられる思いであった。

六時、本年最初の本部幹部会。台東体育館。

折伏の息吹<sup>いぶき</sup>に溢<sup>あふ</sup>れた、元気ある会合。

若手の戦士は真剣に叫び、自ら旗手になっている。先輩理事も次第に確信が出てきたよ

うだ。

帰り、理事たちと、神田にて食事。皆、顔が明るい。

遅く、母来る。いつも変わらぬ子を念<sup>おも</sup>う母の姿。哲人よりも、政治家よりも、大学者よりも、平凡のなかに偉大に思える母。大事にせねば、護<sup>まも</sup>らねば。

一月二十七日（水）

快晴

寒い日が続く。

寒椿が咲いた。強く、逞<sup>たくま</sup>しい、生命力がある。

昨日、母に小遣いをあげてことを忘れ、残念であった。

日蓮正宗総本山より、お代替りの儀式の発表がある。学会は、十万名の総登山を決行することにする。



隆昌<sup>りゅうしょう</sup>の正宗。

学会の現状。近く、梅の花が咲こう。桜の花が満開になってゆこう。

夜、H氏、その他数人の友らと、食事をしながら、未来の学会の構想を語る。

真剣な眼差<sup>まなざ</sup>しの、若き将たち。

今日一日も、無理をしすぎる指揮。

学会の将来も、広布の未来の責任も、自分ひとりになってしまった。

友らは、その点、まだまだ楽である。

帰宅後、ひとり、大客殿建立のことを練る。御供養の時期、御供養の精神、その指導、発表の仕方、委員のメンバー、起工式の日取り、完成の時期、設計業者等々、ひとりで考え、ひとりで雄大なる広布の、構想を考える。

因果の二法なれば、その福運も大であろう。恩師に飲<sup>よろこ</sup>んでもらいたい。

恩師が見ていてくれれば、万事それでよし。

子供たち、すすくと伸びゆく。その寝顔と鼾いびきが……。

妻、いつも寝るのが遅くて可哀想。

身体を大事にしてもらいたい。

一月二十八日（木）

晴

寒い日。

風邪気味。弱い体質が悔くやしい。

夕刻、理髪店へ。

本部に、遅くまで在。

各部の幹部を指導。

世間の人びとの悪口など、気にしていられぬ。

前に進む以外、今の学会は何もない。

証拠をつくることが大切。

結果を示すことが大事。

夜、『マルキシズムと宗教』を読む。三十年も前の本であった。

東洋哲学と西洋哲学とについて、小論文を書く。先生の教示、指導法を、忘れぬうちに。

一月二十九日（金）

快晴

午前中、先生のご遺族と談合。

夕刻、本部にて、理事懇談会。

小生、風邪気味にて、気分悪し。

九時過ぎ散会。

学会の首脳は、時を知り、時に対応せねばならぬ。

私は一生涯、学会幹部、後輩を護まもつてあげよう。若手の理事たちの健康を心配する。

「寒山詩」を読む。

貪人好聚財

貪人の財を聚あつむるを好むこと

恰好梟愛子

恰あたもか 梟ふくろうの子を愛するがごとし

子大而食母

子大にして母を食う

財多還害己

財多ければ還かえつて己おのれを害そこなう

散之即福生

之を散ずれば即ち福生じ

聚之即禍起

之を聚あつむれば即ち禍起こる

無財亦無禍

財なくして亦また禍なし

鼓翼青雲裡

翼を鼓つ青雲の裡

\*

人生不滿百

人生百に満たざるに

常懷千載憂

常に千載の憂いを懷く

自身病始可

自身病い始めて可えしに

……………

……………

(読み下しは編集部で補足)

『三隱詩集』というときは、寒山かんざんと豊干ぶかん、拾得じつとくの詩を併せていうなりと聞く。私は、杜甫ほの詩のほうをはるかに好む。

一月三十日(土)

快晴

午前、午後にわたり、本部の幹部と打ち合わせ。

指導、教示、叱咤しつた、激励。多忙しつたなり。

東京四時三十五分発の電車にて、熱海へ。父の招待。

妻、城久の三人にて。

D 荘より自宅がいいと、子供はいう。

あくる朝、熱海城へ。実に面白くなし。

四等国の遊園地かと、いえる人あり。

身体の調子悪く、自宅まで車で。

途中、吐き<sup>は</sup>気あり。子供も。

六時少々前、帰宅。すぐ横になる。

運動をせねば。少々読書。

『平家物語』……。

平家の滅亡は悲劇であった。その根本原因はいずこにありや。深く分析、思考する要あ

るなり。逆境にある人生に、美しく、端然<sup>たんぜん</sup>たる人あり。その名、薩摩<sup>さつまのかみただのり</sup>守忠度、その人か。平家一門のなかに、冴<sup>さ</sup>え映<sup>は</sup>える青年將軍よ。詩人將軍よ。激動と逆濤<sup>さかなみ</sup>にありて、われもかくありたし。

戦死、覚悟の詩人と、俊成卿との会見。一幅<sup>いつぶく</sup>の生ける絵のごとし。生ける人生劇場の縮図にやあるらん。悠々<sup>ゆうゆう</sup>たる作詩。優遊<sup>ゆうゆう</sup>たる心境。その出陣に見る毅然<sup>きぜん</sup>たる態度。和歌それ自身の姿。われ感動あり。

〔二月〕——一月一日、元旦初勤行は、学会本部をはじめ関西本部、北海道本部、九州本部、福島会館、愛知会館の全国六カ所で開催された。各会場とも戸田第二代会長の録音レコードを聴き、決意も新たに「前進の年」の第一歩を踏み出した。二日から四日にかけて、一月度登山会が初登山をかねて行われた。以後十二月まで、この年の月例登山会は月四週制で実施された。

この年から、地方指導を本部で統一して行うことになり、本部から理事室を中心に各部長など最高幹部が派遣された。一月度は、十五日から十七日にかけて、北海道、中部、関西、中国の四地方を対象に地方指導が行われ、池田総務は名古屋、尼崎、大阪の諸会合に出席して参加者を激励した。また二十二日から二十四日にかけては九州、東北の二地方を対象に地方指導が行われ、九州に赴いた池田総務は、福岡を中心に指導、激励を続けた。

社会は、「安保」をめぐる大きく揺れていた。一月十六日に岸首相をはじめとする新安保条約調印全権団が渡米し、十九日、日米相互協力および安全保障条約（新安保条約）、施設・区域・米軍

の地位に関する協定（行政協定にかわる新協定）、事前協議に関する交換公文にそれぞれ調印した。岸首相らが羽田を出発する際には、全学連主流派学生約七百人が空港ロビーに座り込み、警官隊と衝突して七十八人が検挙された。

一方、一月二十四日には、社会クラブと民社クラブを中心とする民主社会党が結成され、委員長に西尾末広氏を選出した。

三井三池では、一月七日に行われた配置転換についての団体交渉が決裂し、会社側は一月二十五日に三井鉱山、三池鉱業所をロックアウトした。これに対して、労組側は無期限全面ストに入した。この「三池争議」は十一月一日まで続くことになる。

二月一日（月）

曇

午前中、在宅。訪う人数名。

政界多難たり。新聞報道しきりなり。

刻一刻と、日本の運命は狭小きょうしょうになりゆく感あり。新たな光明の力が必然たり。



午後、本部にて理事会あり。種々打ち合わせをすれど、抜本的に柱のなき感じ。淋し。先生に申しわけない思い多々。

夜、蒲田支部幹部会。池上の大田区民会館に出席。最後に指導よりも挨拶を。懐かしい顔が多し。

身体、実につらい。宿命打開の闘争。

断じて負けてはならぬ。嗚呼。

命を知れる者は天を恨まず。

おのれを知れる者は人を恨まず。

『方丈記』にいわく、

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世中にある人と栖と、またかくのごとし。

二月三日（水）

晴

今日はいくらか元気とり戻す。

人生、一人ひとりが、自身が正しいと思っっているらしい。

夜、八時過ぎまで、理事長と二人して語る。

終わって、M宅にご子息の怪我<sup>けが</sup>の見舞いに行く。遅くまでお邪魔する。良い人たちだ。しかし、一家本位で全てを<sup>すべて</sup>決めず、人びとの真情も知ってもらいたいと念ずる。

頭休まず。就寝、三時を過ぐるか。

二月四日（木）

曇

国会低調。

社会党、党首交代の動きありと聞く。

自民党の次期総裁の動きも盛ん。

夜、両国公会堂にて「松野殿御返事」の講義。真面目な人びとに、求道者に、こちらこそ胸を打たれる。勉強不足を痛感。いつまでも増長してはならぬ。決意、再び。

帰り寒し。自宅までタクシー。

S氏来宅。元気なれど、老いは隠せぬ。

『魯迅評論集』を開く。

路とは何か。それは路のなかったところへ踏み作られたものだ。荊棘いばらばかりのところの開拓してできたものだ。むかしから、路はあった。将来も、永久にあるだろう。

(竹内 好訳)

妻、美し。子らの縫い物か、その姿は。

二月五日（金）

晴

静岡着、午後四時二十分前後であつたか。

旅館にて、種々報告をうく。多数の人が出入りし、旅館に迷惑をかけた感じ。要注意。

六時三十分、全力をあげ、幹部会を。

幹部自身が「我不愛身命<sup>がふあいしんみょう</sup>」の信仰であれば、わが学会は、永遠に上昇する。幹部自体の言語動作が、義務化、立身化されたら、学会は行き詰まるのみ。

左肺、一日中痛む。気持ち悪し。

かつて、戸田先生が、仏法を学する者が自らの生命を解決できずして如何<sup>いかん</sup>、と沁々<sup>しみじみ</sup>とわれに申されしことあり。極言、至言、宝言なり。自己のたゆまざる修練の必要あるのみ。

二月六日（土）

晴

京都駅、午後四時着か。

車中、友人らと種々打ち合わせ。

人の顔、人の洋服、着物、人の心、性格、みな違うものか。不思議でもあり、人間ほどもずかしき動物はないとも思う。

六時三十分、講義。

「松野殿御返事」後半。厳しい御書に、わが身を反省す。  
学会の骨髓こつざいの精神としての御文と、拝すべきであらう。

思索、思惟しゐする時間がほしくなった。

折伏をしている人を心より大切にせねば。ここにのみ広布の原点があるからだ。

二月七日（日）

快晴

夜行列車にて、京都出発。

途中、敦賀駅<sup>つるが</sup>等で、会員多数が迎えてくれる。H氏に、他の乗客に迷惑をかけぬよう、嚴重に注意してもらう。

社会の常識が、指導であり、折伏であり、信心であることを――。

二月八日（月）

晴

朝、六時少々前、金沢着。

午前中、旅館在。肩、頸<sup>くび</sup>の痛み多し。

午後より教学部昇格試験。助師から講師の。

午後、兼六公園を漫步。裏山をまわり、白山の雄大、秀麗澄明なる眺めに、詩作の念いあり。

前田侯の実力のほどを、強く実感する。

地区部長宅にて、班長会。疲れてならず。

早目にいったん旅館に帰る。

夜、六時から、金沢大会。

一段の飛躍を知る。

場所、金沢農業会館四階。参加者数、二千名。

「如説修行抄」の講義。

末法の法華經の行者、否、否、末法の御本仏、日蓮大聖人様の御生命、脈々たり。

恐ろしくもあり、嬉しくもあり。弟子なれば。

北陸に広布の息吹脈々たり。戸田先生の偉さを心から知る。暗い北陸であった。これ

が、妙法の力により、あれだけの人たちが、事実、人間革命の実証を示しつつあるのだ。確信、いよいよ深く。

## “妙法二勝ル兵法ナシ”

最近、私を利用する者、多い感じ。困ったものだ。自分も反省せねば。

利用価値ありといえども、実に恐ろしきことである。浅はかなる人の多きことよ。

毅然<sup>きぜん</sup>として進め。責任者らしく進め。

名将らしく、公平に進め。

仏法というものを、大基準として進め。

あとを振り向かず。

二月九日（火）

晴

金沢より帰途につく。



車中、友と語り、眠り、本を読む。

幾度も、諸葛孔明しよかつこうめいの玄德げんとくに仕えし、美しき情景が目に浮かぶ。ひとり涙する。本年も本を読まねばならぬ。最低五、六十冊は読むこと。

妻、駅にひとり迎えに来ている。優しい顔。心の疲れがほどける。革命児も。

帰り途みち、共に天ぷらを食す。高い。その理由を妻、説明す。女性の頭の良さに驚いた。

一時三十分を過ぎる……休むことにする。

身体を大事にせねば。本年は断じて体を鍛えよう。

二月十日（水）

曇

夜、O代議士、F代議士およびM代議士らと談合。

学会工作の邪よこしまなる姿に、厳しく怒る。

彼らの陰險な言語、態度に憤怒ふんぬや已みがたし。

先輩たちの、王道への奮闘を祈らざるをえない。王仏冥合に戦う先輩たちよ、生涯にわたって覇道はどうの連中と妥協せぬことを祈る。妙法の健児であつてもらいたいと祈る。戸田先生せんの、あの偉大な潔癖けつぺきなる指導を、身にうけぬ先輩たちに、怒りさえもつて帰る。

新しい時代を創つくろう。二十年、齒を食いしばって、新しい人材と組織を、必ず創ろう。二十年、営々と。

「御義口伝」を拝読。

昼夜ニ常ニ精進ス

為メノ求ニカ仏道ニ故ナリ  
タルヲモトメ

此の文は一念に億劫おくごうの辛勞しんろうを尽せば本来無作むさの三身念念に起るなり所謂南無妙法蓮華經  
しやうじんぎやうは精進行なり。

唱題の数の大事。

二月十一日（木）

晴

戸田先生のお誕生日である。ご生存なれば六十歳。還暦かんれきであられる。妻と共に、そのことを語り合う。先生の子供のごとく、娘のごとく。

先生逝いって、はや二年が近づく。早いともいえるし、全く長かったとも思える。ただ、なんとなく恐ろしき心が、頭に重い。責任、先輩、実績……。

午後、妙光寺へ、M家の結婚式に出席。

帰り、先生のご親戚宅による。

途中、寒風しきり。

帰宅、九時をまわる。妻、先生の誕生のお祝いとして、おはぎをつくる。二人して、おいしくいただく。わが家の祝いを、最大に先生は、お喜びであろうと語る。

幸せなる二人なり。美しき心なり、二人は。

二月十二日（金）

快晴

昨日の寒風をよそに、今日はやや温。

朝刊、十一日、太陽二つ出づるを報ず。

内閣の改造に悲劇を感じる。

派閥の葛藤<sup>かつどう</sup>に不幸あり。

嗚呼<sup>ああ</sup>、日本民族のための政治に非ずして、営利、派閥の政治に墮落せしか。

大衆は不幸だ。怒れ。そして新しい政治と、社会の大運動を起こすことだ。自身の幸福をかちとるために。

足立支部の幹部会に出席。浅草公会堂。

人びとは、純にして、歓喜あり。われは憂い多し。

二月十三日（土）

快晴

総本山の未来を考える。

一、僧侶が折伏に泥まみれになっている人びとを、心より護まもられたし。

一、登山会の最高責任者となる。

一、各坊の建設担当責任者となる。栄誉。

Mさんの問題のため、本日、登山の予定を、残念ながら明日とする。

大きな、大きな心で、私一人が、ご遺族を護らねば。

夜、新宿Tにて、妻、子らと食事す。

子ら、久しぶりに、はしゃいでいた。

タクシーで帰宅。寒し。

二月十四日（日）

晴

午後一時三十分東京発「西海」にて、登山。

Mさん、先生のご遺族と共なり。先生も、必ずやお喜びくださると信ずる。

夜、質問会。

理論も大事、技術も大切。しかし、生命の力ある感応のみが、真に人びとの胸を打ってゆくものか。結局、信心ということになるか。

楽しい、充実した、りようぜん霊山の一夜であつた。

うしとら丑寅の勤行に出ず。若いくせに申しわけなし。早く金剛のごとき健康体の命とならねば。

二月十五日（月）

晴

本年第二十四回の御開扉。

一閻浮提総与いちえんぶ だいそうよの大御本尊様を拝する幸せ。

一閻浮提総与の大御本尊様を広める幸せ。

一人でも二人でも、否、全人類が拝す日を、一日も早くと念ずる。

Mさんの墓所を決めにいってあげる。S氏の墓の前とは、不思議。

理境坊に帰ると、猊下げいかより電話あり。

前会長は、たびたびお会いに来てくださった。

戸田会長の遺志を継ぐ貴男が、大奥に来ないとは——不服である云々うんぬんと。

即座にお目通り。種々懇談。

わが子のごとく、信頼と、お歓びよろこの様子。

ありがたき哉かな。

帰り、雄大なる富士美し。

真白き富士、赤き富士、厳肅なる富士、雲に渦卷うずまかれゆく富士。

東京駅より、本部に寄り、帰宅。十時過ぎる。疲れる。

寝ながら読書をしよう。

二月十六日（火）

晴

日蓮大聖人の御誕生の日。

「産湯相承事」を拝読する。

日蓮は天上・天下の一切衆生の主君なり父母なり師匠なり、今久遠下種の寿量品に云く

「今此三界皆是我有こんしさんがいがいぜがう主君のごちゆうしゆじようしつぜごし其中衆生悉是吾子義なり而今此处多諸患難父母の而今此处多諸患難に唯我一人能為救護義なり師匠

の義なり」と云えり、三世常恒じようごうに日蓮は今此三界の主なり、云云。



午前中、本部にあり。

H理事、I理事らと談合。終わって理事長と談合。

午後、常在寺へ、後輩の結婚式に出席。幸福に結ばれゆく夫婦に、祝福の辞を。  
後輩よ、一人も、もれなく幸せに。

宴会にうつり、私は「威風堂々の歌」を独唱す。

新たなる、学会の前進近し。誰人が知り、誰人が喜び、誰人が待っているか。

二月十七日（水）

晴

天気が続く。

岸政権がまだ居座る様子。

学会内にも、新旧の考え方に、断層が見えてきた。幹部の進歩、保守、信心の向上性の者、怠惰たうだの者らが、私には見える。余りにも。

午後、白蓮院へ、後輩の結婚式に。

帰り、Yで、弁護士と打ち合わせのために会う。

人の弁護よりも、金の弁護の多きことよ。

夕刻、少々雨あり。爽快そうかいさをおぼえる。

夜、本部。

二月度幹部会の打ち合わせ。ともに人事の検討あり。

二月十八日（木）

晴

一つ一つ未来の繁栄のため、苦しくとも皆の陰で、構想実現への布石と実践をしてゆか

ねばならぬ。エンジン、スクリューを人びとは見ない。そのような人を、将来、私は最も大切にしていあげねば――。

夜、友らと新宿で会食、打ち合わせ。

二月十九日（金）

快晴

朝九時二十六分、横浜駅より特急に乗る。関西の講義である。ひとり静かに旅をする……。私にとって最高の思索場だ。

途中、N氏と会う。食堂車に誘う。貴君と会うと、勇気が出るといつていた。

講義後、Gホテルにひとり休む。ここにも、多数の学会員がいて聞いて、非常に心強  
し。

種々、思索する。遅くまで眠れぬ。身体を大切にせねば。

善人と共に生きゆくことだ。

二月二十日（土）

晴

大阪発午前八時十五分で、中国の防府<sup>ほうふ</sup>へ向かう。三回目である。

山口地方闘争の思い出の地なり。生涯、この国土世間に、わが生命が映っているよう  
だ。

この防府を、五月三日の本部総会で、支部に昇格させることを決意する。

午後六時三十分より、質問会。

いずこに征く<sup>ゆ</sup>も、青年は熱心。この純粹なる若人<sup>わこうど</sup>に応え<sup>こた</sup>ねば。共に、この青年たちの夢  
を、叶え<sup>かな</sup>させてあげたい。

青年——これほど尊く、強く、逞<sup>たくま</sup>しく、未来をはらんだ言葉が、どこにあるうか。

二月二十一日(日)

快晴

快晴が続く。春のごとし。春近し。

岡山に午後六時ごろ着く。

総支部本部の敷地をみる。

体育館にて、講義と質問会を。

非常に熱心であり、感じよし。この地の中心者の人柄の反映か。中心者、責任者というものは、幾百、幾千万の人びとを、いかようにでもさせてゆくものだ。恐ろしきものだ。

総支部長宅に一泊。お世話になる。

二月二十二日(月)

快晴

午後一時少々過ぎ、岡山を出発。鳥取指導へ向かう。

初めての山陰指導となる。日本列島の胴腹の横断である。春の小川、初春の山々、大地に、詩の中を走る思いあり。

雲一点もなし。車中、『三国志』を心ゆくまで読む。

人材がほしい。先輩たちにも読ませたい。皆、勉強がたらぬ。大いに、将来のために勉強をすべきだ。

夕刻、山陰の中心地・鳥取に着く。七時、体育館にて質問会、ならびに講義を。なんとなくざわめいていた。東京からみると、三年以上遅れた信心、訓練か。

この地も、支部結成を決意する。

大いに、応援してあげたい。応援せねばならない。

二月二十三日（火）

快晴

午前中、幹部と共に、大砂丘に立つ。国定公園の由。

皆で日本海を見おろし、和歌をつくる。そして、一人ひとり読み上げる。思い出なり。

午後二時ごろ発の「出雲」で、鳥取から京都へ。

四時十五分、皇孫、親王の誕生を聞く。皇室の慶事。

関西に一泊。

自宅より電話あり。

三男尊弘が、庭の井戸の囲いで造った池に落ちたとのこと。呵々かか。熱でも出ねばと心配す。面白き哉かな。

さあ、明日も希望を抱いだいて、戦いだ。

ヘレン・ケラーのことば――。

希望は人を成功に導く信仰である。

希望がなければ何事も成就しない。

二月二十四日（水）

快晴

特急「こだま」にて帰京。午後十時二十分。

一人の旅は、はなはだ淋<sup>さび</sup>し。友がほしかった。凡愚の頭、疲れてならぬ。

仏法の明晰<sup>めいせき</sup>さ、戸田先生の頭脳の鋭さには足元にも及ばぬ。嗚呼<sup>ああ</sup>。

私は善人と交わり、善人と語り、善人と生き、善人と進むことができ、嬉<sup>うれ</sup>しい。幸運児だ。

六日間の旅に、心身共に疲れる。



横浜駅に、矢口の父と母、そして妻が、迎えに来ていた。

私は、最高の幸福者である。全<sup>すべて</sup>てに。

二月二十五日（木）

快晴

一日中、本部在。

会議やら、指導やら、原稿書きやら――。

戸田先生の指導を忘れゆくことを怖<sup>おそ</sup>る。思い出せば、雑記帳に誌<sup>しる</sup>す。

夜、S宅、I宅の人びとと、銀座Oにて会食。

父も善人、長寿を祈る。

母も善人、長生を祈る。

妻も善人、幸福を祈る。

子らも善し、健康を祈る。

本部に帰り、夜半まで、H氏、M氏と学会の将来のことについて語る。H氏の真剣さを、嬉しく念う。

先輩たちも、彼の真剣さを見習う必要があろう。

先輩は、先輩としての力と使命と責任を。先輩といわれゆく所以なりや。

二月二十六日（金）

晴

岸首相、不条理と無理押しの報道しきり。権力主義者の恥知らずの傲慢と、権威主義のあらわれなるか。唾棄。

国会の頭脳狂乱せば、日本の国土、そして国民の悩乱にまで及ぶか。恐ろし。悲し。

過日、東京に風速二十一メートルの赤風、黒風あり、と。昨日また、鳥取に、同じき現

象ありとか、報道あり。凶瑞きようずいか。前途は。

われ思う。日本の前途に、不幸の災禍さいかなからんことを。

変毒へんどく為薬いやく——妙法——。

夜、二月度本部幹部会。台東体育館。

会員諸氏の懸命なる活躍に、頭が下がる。自分よりはるかに力ある人びとよ。組織の首脳としての自己を、決して過大評価してはならぬ。

また、されたりせぬことだ。

H理事の指導や良し。

帰り、妻と共に、なべ料理を食す。

二月二十七日（土） 雨後曇

午後一時より、横浜会館および妙寿寺落慶入仏法要に出席。寒さ厳し。

日達上人<sup>げいか</sup>猊下のお元気なお姿を拝す。嬉し<sup>うれ</sup>。

夜、杉並支部の幹部会に出席。全力をあげて指導をする。それぞれの使命をおびた支部の個性、特徴があるものだ。これでよし。

清貧の家へ——静かなる、仏界のわが家こそ、最高の憩<sup>いこ</sup>いの場なり。われ幸福なり。幸福たり。

三男尊弘、次第に成長。共に寝る。

二月二十八日（日）

曇

午後、全体会議。皆で語り、食し、聞き、次の戦いの準備をなす。

帰り、床屋に一人まわる。語る人物少なきとき、わが心淋<sup>さび</sup>しきものあり。

春近づく。私は春が大好きだ。今年は、狭い庭中を、あらゆる花で埋めてみたい。

新宿御苑の百花爛漫——わが家の、夜店で買いし木花の百花爛漫——いずれが、わが心の芸術なりや。大自然との対話なりや。

本有常住、常寂光土。

三月より読書を始めよう。何冊読むか。

二月二十九日（月）

曇

二月も終わる。寒い冬とお別れ。明日より春だ。生命の躍動をおぼゆ。

青年の季節。青春の譜。生きいきと生きてゆきたい。青年らしく。本当の青年らしく。

H君の奥さんの、計報を夜半に聞く。激励する。わが友よ、同志よ、強く。

吉川英治の言葉だったか――。

「民ガ峻厳ヲ求メルトキ、為政者ガ、甘言ヲナス程、愚ナル政治ハナイ」と。これが仁政、善政といえようか。大事な問題と考える。真の人材育成のためには、何かにあてはまる思いあり。

〔二月〕――伊勢湾台風のため延期されていた中部方面五都市の教育学部任用・昇格第一次（筆記）試験が、二月七日、名古屋、岐阜、岡崎、四日市、松阪の各都市で実施され、任用千五百人、助師二百六人、講師三十六人が受験した。昇格第二次（面接）試験は二十一日に行われ、七十四人が受験した。この結果、三月四日に新助教授四人、新講師四十九人が誕生した。

前年、第一回の弁論大会や学生祭を開催して、独自の活動分野を切り開きつつあった学生部は、二月二十二日に学会本部で行われた学生部員会でも新組織を発表し、グループ、班の体制をしくことになった。新グループ長には、男女三十五人が任命された。これ以後、学生部は男女青年部から独立して、急速な発展を遂げていくことになる。二十七日には、学生部第一回グループ長会が開かれ、「学生部員は全員人生の勝利者になろう」との池田総務からの伝言が伝えられた。

池田総務は、二月五日から、静岡、京都、金沢の地方指導に赴き、各地で御書講義などを行った。また二十日から中国地方の地方指導に赴き、幹部および会員を指導したほか、各幹部会で質問会などを通して参加者を激励した。

社会では、二月一日、北海道夕張市の北炭夕張二鉱でガス爆発が起こり、四十三人が坑底に閉じ込められた。生存者もあったが、五日までに三十五遺体が確認される大事故であった。二月十三日には、フランスが初の原爆実験をサハラ砂漠の中心地で行い、世界の非難を浴びた。暗いニュースが続くなかで、二月二十三日に、皇太子妃が男子を出産し、浩宮と名付けられたとの報道は人々の心をなごませた。

三月一日（火）

晴

春、春。

今夕四時五十分、東京に太陽柱現る。モロッコに大地震あり。

H氏らと、種々語る。先輩よ、元気を出されよ、という。

本部近くの土地購入を決定。嬉しい。聖教新聞社の新社屋が建設されるのだ。言論戦の

牙城。<sup>がじょう</sup>

言論戦、思想戦、これ、広布の一大推進力とならん。

H氏、A氏たちと語る。皆よき友であり、後輩である。十年先は、力ある社会の指導者として、大活躍することであろう。

三月二日（水）

晴

A商会の専務と、Nで会食。善人、骨のある人材である。長く信心と、社の繁栄とを期待するや大。

早目に帰宅。風呂に入る。爽快。<sup>そうかい</sup>

皆が真剣に戦いしとき、早く休むこと、申しわけなし。合掌。

三月三日（木）

晴後曇



桃の節句。

仏法では、一月一日を妙、三月三日を法、五月五日を蓮、七月七日を華、九月九日を經——の祭りなりと。

少年のころが思い出されてならない。平和だった。れんげ草、菜の花畑で、跳びまわっていた楽しい日々。

この日は、母の匂いにおがする。幼い兄弟の匂いにおがする日だ。無邪気な——。

午後三時、理事会。本部に於て。

恩師の三回忌大法要ならびに新支部結成の打ち合わせ。

夜、杉並公会堂にて一般講義。「上野殿御返事」。実に甚深じんじん、甚深の御書である。勉強せねば。

『三国志』中巻読了。三回目。

幹部に読ませたいものだ。とくに先輩たちに。

就寝、二時を過ぐるか。

母のことを思う。

一度、妙法の使徒として、わが家をあとにしたのだ。

そこには、母もない、妻もない――。

生涯、戦闘の陣頭に立つ以外ないのだ。

三月四日（金） 曇

夜、F君らと、麻布にて会食。

「浅きを去つて深きに就くは丈夫の心なり」を思わせる青年たち。日本の将来、世界の動向、天下の政治の話に花が咲く。

十年後、二十年後、三十年後の構想と、布石に、夜半となりぬ。

青年に、二種のタイプ、開いて四種のタイプに大別される感あり。

英知、努力、信念、感情型――。

真面目なれど調子に乗る人あり、静かなれど骨のある人あり。雄弁にして骨なき人、無口にて信義深き人等々、多々なり。

満腹にて家に帰る。静かなる幸福の家、わが家かな。

三月六日（日）

晴

五日――午前中、本部在。

日達<sup>げいか</sup>下、理事長ら、沖縄・光明寺の落慶入仏法要へ。戸田先生おわせば、ご一緒に出席をせしに。嗚呼<sup>ああ</sup>、淋<sup>さび</sup>し。

羽田空港に、私の代理として妻を。狎下のお目通りを戴く。

午後三時上野発の急行にて、高崎へ一般講義に。

「上野殿御返事」の講義を。皆、真剣である。

六日——午前中、M宅にて面接指導。午後、勝妙寺にて班長会を。中堅幹部の育成に全力をあげる。ここに楔を打つか、打たぬかで、学会の次の進展は決まるからだ。全大幹部に、この点を、胸奥から自覚してもらいたいものだ。恐ろし、空転。

帰りに、高崎山に登り、午後四時の列車にて帰京。

早めに家に帰る。食べ過ぎ。

三月七日（月）

晴後曇

春、駈け足でやって来る。

春、春、青春こそ、人生の宝である。

イデオロギーを超越し、役職、境遇、貧富を別として、青春は尊く、躍動してゆけ。

未知の世界に、戦<sup>おの</sup>く青春。経験浅きゆえ、恐れ、驚き、胸はずませゆく青春。大胆に、無謀に闊<sup>かつ</sup>歩しゆく青春。

学会も、一日一日、大事な段階に入ってきた。人びとは、何も知らず、幸せそうだ。

I君が、もう一段高い目的観にたち、相談しあうようになってもらいたい。困ったものだ。人間の性格は、注意してもなかなかおらぬものである。

妻が、昨年植えた沈<sup>じん</sup>丁<sup>ちやう</sup>花<sup>け</sup>の花が開きそうだと、机の上に、その一枝を飾ってくれた。この花々の香り。

三月八日（火）

曇後晴

一日中、本部在。

夜まで、後輩の指導にあたる。青年部より、一人でも多くの人材が輩出されんことを祈りつつ。人だ、人材だ、若き人材だ。これのみが、学会の未来性を決定するのだ。

生命を碎いて、指導に全力をあげきることだ。

批判する者はせよ。嫉妬しつとする者はせよ。笑うものよ、あざけるものよ、十年後を見よ。孤独なる、学会を背負う青年。

学会幹部は、多方面にわたり、更に、更に勉強する要あり。社会に深く、進出する要あり。

帰り、友らと、Tで会食。食事がおいしく、嬉うれしきことなり。

ひとり静かに、散歩しながら帰る。

三月九日（水）

晴

午前中、来客あり。

学会は若い。建設の息吹<sup>いぶき</sup>がある。向上がある。太陽の昇りゆくに似たり。

聖教新聞社社屋の建設、正式に決定。予算約一億とのこと。言論の城――。

『日興上人伝』を読み始む。

遅くまで、本部にいる。大幹部らと、種々語る。皆、善人である。生活が一段の向上する必要を感じずる。

『道程』

僕の前に道はない

僕の後ろに道は出来る

.....

——高村光太郎の詩である。

三月十日（木）

晴

一日中、非常に身体疲れる。

何故こんなに疲れるのか。罪障か。恐ろし。

今世で、解決できえぬ問題の多きことよ。生命の不可思議、病弱、健康の矛盾等々。この本質的な解決が、信心という実践か。

夜、教授会。真剣勝負の姿なり。学会は強い。学会は伸びる。

終わって、十時まで、青年部首脳会議に出席。



社会が次第に悪くなってゆく。新聞の報道に侘<sup>わび</sup>しき思いあり。  
家の近所に、強盗ありと聞く。

題目三唱にて、休むことにする。

疲れた、実に疲れた。

## 三月十一日(金) 雨

雨しきり。<sup>せきりよう</sup>寂寥——。

正午、T社長とNにて会食。

一日中、本部に。一日も早く、大客殿資材の研究に、アメリカ、インド、台湾に行かねば、<sup>は</sup>と思い馳<sup>は</sup>せるなり。

次の時代、次の舞台に生き、戦う青年たちよ、健在であれ、祝福あれ。

三月十二日（土）

曇後晴

職員旅行。伊豆の熱川<sup>あながわ</sup>へ。

嬉<sup>うれ</sup>しくもあり、つらくもあり。身体の調子芳<sup>かんば</sup>しからず。

第二京浜国道より、母、妻、子らに送られて途中乗車。皆に申しわけなし。

車中、皆と同化して、歌い楽しむ。

民衆と共に。庶民と共に。同志と共に。青年と共に。常に、常に。

本部職員の存在が、全<sup>すべ</sup>てにわたって、学会、広布の推進力とならねばならぬことを強調する。あとは、思う存分、一夜楽しく遊ぶようにと。

帰り、一碧湖、伊東をぬけて、五反田に降りる。

身体<sup>こんぱい</sup>の使い過ぎ。疲労困憊。

三月十四日（月）

晴

五座三座の勤行を、きちつとした日は、一日中、爽快である。不思議というほかない。

多忙にまぎれて、できえぬ昨今。自己嫌悪あり。他人に美麗の言辞をはいても、自己の内証は隠すことはできぬ。因果の理法。

われ三十代——悔いなく、有意義に送りたいものだ。

自己の自覚、使命の自覚、建設の自覚、向上の自覚は。

八正道を思索——正命、正業、正語、正見、正思惟等。

帰り、渋谷にて、妻と待ち合わせて会う。花屋より、一歳桃ならびに林生梅を買って、タクシーにて帰宅。

『三国志』読み進む。

関羽殺され、張飛死す。今、玄德六十余歳にして倒れゆく。丞相の忠誠を信じて、静寂のなかに黄泉の旅にゆくか。三十年の桃園の義——美たり、劇たり。

わが学会の同志も、かくありたし。かくあらねばならず。胸に響くものあり、胸に誓いし人ありや。恩師の慈愛、嚴愛の遺言の数々を忘れじ。同志よ、友よ、夢寐にも忘れ給う勿れ。

遺弟よ、剛毅に起て、進め。実践と達成のために、われと進め。勇敢に、今こそ勇敢に。

三月十六日（水） 快晴

二年前の今日、化儀の広宣流布の“記念式典”を、総本山大石寺にて行う。恩師の言なり。意義深し。

この日を、永久の広布実現の日の、開幕とすべきなりと、青年部幹部に残す。

陽春のこの日より、大儀式を行うことに思い深し。化儀の広布の大式典は、一日にして終了するものではない。半年間の大切な日を簡<sup>えら</sup>び、展開させてゆくべきである。

夜、目黒会館において、女子部の指導会。

本部において、男子部の指導会を行う。

情熱の瞳<sup>ひとみ</sup>あり、英知の瞳あり、信念の口もとあり、純粹なる肌<sup>はだ</sup>あり。

希望と現実<sup>おのの</sup>に戦<sup>たたか</sup>く、若き会合。尊き会合。

遅くまで、読書。少々、眼が痛し。

三月十七日（木） 快晴

午後三時より、結婚式に出席。歡喜寮。

後輩の幸福への船出。君たちに幸あれ。

青年幹部と当寺院にて『六卷抄』を読む。皆、教学の鋭く進んでいることに驚く。後生畏るべし。

「文底秘沈抄」にいわく、

夫れ本尊とは所縁の境なり、境能く智を発し、智亦行を導く。故に境若し正しからざれば、智行も亦随つて正しからず。妙樂大師謂える有り。「仮使発心真実ならざる者も、正境に縁すれば功德猶多し。若し正境に非ずんば縦い偽妄無きも亦種と成らず」等云云。

六時、本部に帰る。

青年幹部が、日夜、敢闘している。自分も休んでなぞいられぬ。この身を捨て、今こそ本陣を護らねば。

H氏より、秋田方面の報告をうく。早く指導に行つてあげたい。

東京湾より、太平洋の荒浪に進む日も近い。

人間、何かの大きな運命の波で、生きてゆかねばならぬものか。

三月十八日（金）

晴

白蓮院にて、結婚式に出席。

青年の幸福への実相は、国家の幸福への進展に似たり。

先輩たちが、もっと勉強せんことを念う。

恩師の理念と遺言を、実践せぬ者は、弟子に非ず。

本部にて、ひとり御書を拝読。

「当体義抄」――。

所詮妙法蓮華の当体とは法華經を信ずる日蓮が弟子檀那等の父母所生の肉身是なり、正直に方便を捨て但法華經を信じ南無妙法蓮華經と唱うる人は煩惱・業・苦の三道・法身・般若・解脱の三徳と転じて三觀・三諦・即一心に顕われ其の人の所住の処は常寂光土なり、云云。

甚深<sup>じんじん</sup>、甚深。

仏法の極理、信心の究極、生命の革命、生活の原理なるか。

先輩よ、真の勇氣ある人になれ。われも、平凡のなかに勇氣ある人になりたし。これ後輩に対する責任なり。

三月十九日（土）

晴

和歌山に一般講義。

「第一こだま」に、横浜駅より乗る。

車窓より、春の花美し。桃の花、緋桃<sup>ひもも</sup>の花、白桃の花……木蓮、白木蓮、辛夷<sup>こぶし</sup>あり。広々とともる黄色の三月菜、またきれいななり。

会場に七千名集<sup>つど</sup>ったとのこと。



その情熱は、想像を絶するものあり。新たなる学会の黎明<sup>れいめい</sup>を、感ずる思い多々。

夜、和歌山の旅室——富士の間にて、数人の同志と、深夜まで語る。可愛い友だ。

あくる日、和歌山の城跡に立つ。なんとなく、和歌山県は、静かな親しみのある国である。大好きだ。

三月二十日（日）

曇

和歌山の帰り、午後、阪大の教授と面談。

Y君の博士論文ならびに進学についての、相談で行く。二時間近く語る。なかなか頑固<sup>がんこ</sup>な教授である。その世界（医学・学者）にて、親分・子分のような封建性が、深くきずなになっていることを知る。

宗教に関しては、無知——ただ、どこかの新興宗教をやっているという。

一人の人物を、大成させるには、多数の人びとの援助と、年月と、忍耐を要することを

知る。

Y宅に一泊。父親と将来のことについて語る。

東西の青年部の活動、盛んなり。

新時代を創りゆくのは、青年の熱と力か。

三月二十一日（月）

雨後曇

大阪午後四時発の「第二こだま」にて帰京。

車中、読書と熟睡。

一日一日と、五月三日が近づく。人びとは平凡にそれを待つ。しかし私は、いまだ自ら口に出すわけにはいかぬ。余りにも大事な、厳肅なることであるがゆえに。

四月二日は、恩師の三回忌。この二年——何をしたか。直弟子として。何を報告すべき

であるか。勇気なきわれに、叱<sup>しか</sup>られしことのみ多きか。

もうじき、外苑の桜が咲くであろう。青山墓地の桜も——本部に近く、本部の庭のごとし。

三月二十二日（火）

晴

墓地問題盛んなり。死せし遺骨を埋葬せぬという、無慈悲な宗教やありや。末世なり。宗教本来の使命に叛逆<sup>ほんぎやく</sup>した、敗北の実体——総本山大石寺においては、いかなる宗派たりとも、墓地ある人は、埋葬は自由なりと聞く。

夜、弁護士ならびに大幹部らを慰勞す。

先生が亡くなり、自分の地位と權威を利用して、いばる人あり。その女房もまた同じ姿あり。愚かや、愚かや。皆も困っている。自分がしつかりせねばならぬを、深く心配す。二重、三重の勞あり。

風邪のためか、三十八度近く熱あり。早めに休むことにする。気分、悪し。

長男博正、幼稚園卒業とのこと。

三月二十五日（金）

晴

二十三日――。

一日中、身体の具合悪し。

午後には、三十八度四分前後になる。夕方より、更に高熱。帰宅。何も面白くなし。

木曜、金曜と休む。久しぶりに種々思索。

三月下旬か、四月二十八日ごろに、すうせい彗星出づとの新聞記事が目につく。

二、三、心配して電話ありとのこと。申しわけなし。

三月二十六日（土） 雨

午後より、本部へ行く。微熱あり。

久しぶりで電車に。車窓より、桜の花のちらほら咲きゆく感じあり。

皆、身体のことを心配してくれる。すまぬ気持ちであった。真実に思ってくれる人のありがたさ。

夜遅くまで、種々指導をする。

帰り、M君とH君と三人にて、新宿のD店にて食事。熱、再び出る。困った。

三月二十七日（日） 快晴

午前中休む。身体だるくて仕方なし。

女房の父、心配して来てくれる。年をとった。大事にしてもらいたいものだ。

九州三池炭労の騒動の報道あり。不幸なる暗い日本。いつ薫風くんぷうの国に落ち着くやら。

なぜ、日本人同士が殺し合わねばならぬのか。イデオロギーの不幸——人間本来の不幸。愚かや、愚かや。

東京発午後一時三十分の列車にて、一泊の登山。H君の身体を心配する。君こそ無理をせぬようにと。

日達上人げんか猥下げんかに、ひとり、御目通り。

総本山大石寺は静かなり。静かなり。

三月二十八日（月） 快晴

午前九時、御開扉。

一閻浮提いちえんぶだいそうよ総与・本門戒壇の大御本尊に唱題すると、なぜ生命力が湧現ゆげんするのか。不思議なり、事実なり、厳然たり。

恩師の墓に詣もつでる。三回忌を、立派に使命を果たして、迎えんことを誓う。

終わって、大客殿において、二十二人の得度式に出席。未来の宗門を背負う、日達法主の若き弟子に祝福あれ。

清らかなる法灯、清らかなる若き僧侶。

午後、皆と一緒に下山。

夜半まで、作戦会議。

次の学会の発展の推進者は、青年部のみか。それでよいのだ。時代だ。改変、流転、潮流——。

H君、真剣に奮闘。一人の立つ人あれば、万人、続くあり。

皆、疲れたであろう。お茶もなく、すまぬ思いあり。

三月二十九日（火） 晴

三月度本部幹部会。台東体育館にて。楽しい、真剣な幹部会の終了に、心、安堵<sup>あんど</sup>。

帰り、T夫妻と新宿にて会食。

生涯、大衆と共に進むこと。

庶民のために庶民と語り、庶民と生きゆくこと。

三回忌近づく。宗門の内外に、戸田先生の偉大さが次第に浸透してゆくことだろう。その原動力は、遺弟の責務である。それを忘却せしものは、真の弟子に非ず。真の弟子、幾人ぞありや。

先生を利用して、自己の保身に汲<sup>きゆう</sup>々たる者はなきや。厳しき師なきゆえに、要領と權威



に流されゆくものなきや。

三月二十日（水）

晴

本部第一応接室にて、理事長より、全幹部の意向なりと、また機熟したので、第三代会長就任を望む話あり。

初代会長牧口先生と、二代会長戸田先生の、厳しく親しみに溢れた写真の下である。

我儘<sup>わがまま</sup>なれど、きっぱり断る。疲れている。

学会の要<sup>かなめ</sup>となつて、指揮<sup>と</sup>を執りゆく責任は果たす。しかれども会長就任は、七回忌にでも共に考えてゆこう、と。

一日一日、津波に押し寄せられゆく感深し。学会をただ一人、厳護してゆかねばならぬ責任のわれ。苦し。

三月三十一日（木）

曇

夜、杉並公会堂にて、質問会。

明日は、いよいよ三回忌。九時三十分発にて登山することに決まる。

夜遅く、豪雨あり。思うこと、多々。寝返り、再三。

身体さえ頑健がんけんであれば。

〔三月〕——三月八日、厚生省は墓地・埋葬等に関する法律第十三条の解釈について、新しい通達を出した。これにより、改宗を理由に埋葬拒否はできない旨が明らかにされ、「墓地問題」に関する一連の学会の主張、対応の正しさが、法律の上でも裏付けられた。宗門においては、三月二十九日の緊急会議で対策委員会を設け、全国寺院の納骨堂の完備・遺骨受け入れ体制の整備に努めることとなった。

三月十一日、小樽法論から満五年の日になんで、男子部在京四十九個部隊の代表約千人は、身延で行進し、街頭演説を行うとともに、身延派日蓮宗の誤りを特集した「聖教新聞」を配布した。三月十六日には「広布の記念日」になんで、男子部の水滸会が学会本部で、女子部の華陽

会と部隊長会が目黒会館で、それぞれ開催された。両部の会合に出席した池田総務は、壮大な広宣流布の未来を展望しつつ、その総仕上げをすべきメンバーの使命を力説し、一層の成長と活躍をうながした。

三池闘争は激しさを増し、三月十七日、会社側は労働組合を切り崩そうとして第二組合を組織した。二十三日に第一組合と第二組合が衝突し、警官隊が初出動した。二十六日には第一組合約千五百人のデモ隊が三池鋳業所本館に入った。第二組合は会社と生産再開の協議を行い、三月二十八日、会社は第二組合だけにロックアウトを解除した。第一組合のピケラインと、これを突破しようとする第二組合員との間で乱闘となり、二十五人が重傷、九十人が軽傷を負った。ついに二十九日、ピケラインの第一組合員に暴力団がナイフをもって襲いかかり、久保清さんを殺害するという事態に至った。

四月一日（金）

雨後晴

小雨。寒い日である。

午前九時三十分、品川駅より乗車。ご遺族も共なり。

K、H、M氏も共に。

富士駅より、車にて本山へ。到着一時少々前——ただちに、大化城の落慶法要に参列。

寒きゆえか、悲しきゆえか、本山の桜も見えず。桃の花も、梅の花も、心に感ぜず。れんぎょうのみ、侘<sup>わび</sup>しく、あまりにも黄色濃く、胸を打つ。

午後四時、大講堂にて日達上人<sup>げいか</sup>猊下の御導師を戴<sup>いた</sup>ぎ、三回忌お逮<sup>た</sup>夜。

七時より、お題目講、続いて追憶談。

直弟子として、先師の大法要を、盛大に営みえたことに満足す。

七回忌を目指し、決意を新たにす。

九時より、新支部長ならびに婦人部長らの決定審議会。——理境坊において。

静かなる夜半に、ひとり思うこと多し。

四月二日（土）

晴

昨日と、百八十度転回した爽やかな一日。

先生のご遺徳を偲ぶ。宇宙の不思議なる現象を限りなく念う。昨今。

午前十時より、客殿において、再び日達上人猊下の御導師にて、読経法要。

十一時、墓参に出発——猊下を先頭に御僧侶多数、全学会の大幹部。

五重塔脇の、『大宣院法護日城大居士』の墓前にて、「五丈原の歌」に、涙あふるる。

帰り、戸田家のお墓と、牧口家のお墓に唱題、焼香。

午後一時、下山の途に。

秀麗の富士、朱<sup>あか</sup>き三門、幾百年を天空に聳<sup>そび</sup>えゆく大杉。わが胸に、一幅の絵のごとし。  
新しい時は来る感じ。仏法の責任ほど、厳しきものはなし。

## 四月三日（日） 雨

静岡へ出張。寒い。昨日とうって変わった天候なり。変化の凄<sup>すさ</sup>まじさに驚く。

箱根に雪の降りしを聞く。

まさしく二月の季節なり。

夜、品川駅に下車。東京も雨——寒さ、身にしみる。

久しぶりに『ホトトギス』を読む。

体重、昨年四月より、二貫目減となった。

四月四日（月） 雨

午前中、戸田宅に、妻と共に訪問。

喬久君の結婚式——九日に決定の由。めでたし。

先生がおられたらと——奥様もお疲れの様子。

夜、女子部幹部会に出席。台東体育館。立錐の余地なき、活気に溢れた青春の集い。そこには、葛藤も、役職も、権威も、怨嫉も、木端微塵にされてゆく。愚かな指導者は、まばゆいであらう。

四月五日（火） 曇時々雨

午後より、小平方面に土地買収の下検分に行く。

土の香、くぬぎ林、菜の花、木蓮、泰山木、桃、杏、水仙、柳、楠、鮮かな大自然の動

き尽きぬ大絵図——心の洗われる田園と、平和な風景——。武蔵野は憧れの地だ。

約一万坪余、購入を決意。将来、創価大学か、創価高校、中学校の用地のためにと。

四時半より、若手、青年部幹部と学会歌作成の指導を。

夜、男子部幹部会。台東体育館。遅しき、未来を目指し、未来を開拓しゆく、竹馬の友の青春の乱舞。

ここに力あり。日本の開幕の。誰人ぞ知らん。誰人ぞ待望せるや。

信力と、行力と、法力の、広布への三大原則を確認。

五月三日の総会も、日一日と近づく。皆の期待を念うと胸苦し。余りにも苦し。

久遠の闘争——若き広布の將軍は、矢面に立たざるをえぬ運命なのか。



四月六日（水）

快晴

午前、宗門の総監、重役はじめ多数の役員僧侶来訪。

会議室にて、約三時間にわたり、墓地問題その他の、諸問題の審議を――。

議題の解決に、真剣な僧侶あり、増上慢のごとく、ただ見おろしている僧侶あり。僧俗一致の深き連係と、水魚の思いの戦いの、一日も早きことを欲し、悔む。

終わって、理事会。流会に近し。先輩理事を厳しく叱る。

大人の世界での奮闘に、少々疲れた。五月には、広々とした、北海道の大地に立ってみたい。

博正、小学校一年生に入学。早いものだ。

戸田先生がおられたら、いかほど喜んでくださることか――。淋し。

わが家の父であり、主人であり、師匠であられた。

妻、庭のラッパ水仙を一本、机の瓶にさしてくれる。

読書することを、再び決意――。

四月七日（木）

晴後曇

豊島公会堂にて、一般講義。

「阿仏房御書」――全部なれど、難解なり。

わが身これ、地水火風空にして、宝塔なりと。ゆえに、阿仏房即ち宝塔にして、宝塔即ち阿仏房なり、云々と。

生命の本質――事の一念三千の当体――真の個人の主体性。

一日一日、重大なる使命を痛感せざるをえなくなってきた。惰性のうえに立った指導者なら楽だ。しかし、開拓と建設に邁進まいしんする運命に立つ指導者には、勇気がある。要領など

微塵<sup>みじん</sup>も考えられぬことだ。困った。

少々、風邪気味か、微熱続く。強力な身体がほしい。

わが部屋に、一輪の花あり。その名わからず、この妻の心わかるなり。

大御本尊、永久にわが家に福運の光をあたえ給え。

四月八日（金）

快晴

八時、家を出る。あわただしい朝。

国電より、春の木々がちらほら見える。八重桜、木蓮<sup>もくれん</sup>、青める柳——あとは混雑さえなければ。

諸幹部に、それぞれ自覚をうながす。われも、種々反省するあり。全幹部を心から可愛がり、護<sup>まも</sup>っていける大海のごとき人にならねば。慈悲の行為、人間性の行動が、学会の根

本義である。

午後、常泉寺へ。T尊師に挨拶<sup>あいさつ</sup>。老僧の健康を心配する。

遅くまで、青年部幹部と種々対話。厳しく叱咤<sup>しつた</sup>せねばならぬ人もあり。やむをえぬことだ。

風邪よくならず。身体、とみに疲れる。十年後、二十年後の学会の将来を、自分が思索しゆく以外に道なし。

四月九日（土） 快晴

身体の調子悪し。三十八度近くあるとのこと。

午後五時より、帝国ホテルにて、喬久君の結婚式。約百五十人集まる。嬉<sup>うれ</sup>しきことなり。ご一家のご多幸を祈る。帰り、妻と共に日比谷公園の花屋にて、君子蘭<sup>らん</sup>を一鉢買って

タクシーで帰る。

本部にて、遅くまで臨時理事会を開催。第三代会長の推戴すいたいを決定の由、連絡を受く。  
丁重ていちょうにお断りする。

胸奥きょうおうに、嵐あらしのごとく宿命が吹きゆく。全生命に、使命の怒濤どとうが押し寄せては、返していかく。宿習の太き綱が、余りにも強く、厳しく、締めまりゆく。

妙法蓮華經——戸田城聖先生——七回忌まで、余裕ある人生と闘争とを——三十二歳——若い。

七回忌——満三十六歳——数え三十七歳——日興上人様の御相伝を受けられた年であられる。

誰か——疲れ果てたわれに代わり、指揮する者ぞなきか。嗚呼ああ——。

語る人なし。わが煩惱ぼんのうを、静かに見守る妻。

四月十日（日）

曇

重苦しき朝であつた。いかにしても。

力強き勤行をいたさんとすれど、胸に鉄板をはめてあるごとし。境智冥合きようちみやうごうの……。

午後より、ご遺族の慰安のため、武蔵野方面にドライブ。K女史、H君、M君と共に。

蘭春——風塵——東村山まで往く。

桜あり、しばし心麗うららか。

山吹、石楠花しゃくなげ、雪柳、梨の花、李すももの花、枝垂柳しだれやなぎ、小手毬こでまりの花、からたちの花、楠の芽、  
縦もみの芽、胡桃ことうの芽、雑木の芽、櫟くぬぎの芽——。

愛する東京の桃源境、日本の平野。

私の憧れあこがの大地なり。

帰り、K女史の宅にて、食事をと馳走になる。

帰宅、八時を過ぎる。

夜半、二時まで休めず。強風のため、屋根のトタンうるさくて。質素な家も、困ったものだ。しかし、この家こそ、名誉と誇りの、わが巢立ちゆく、栄光の歴史の城である。喜悦きえつ、計りはかがたし。

四月十一日（月）

晴

午後三時三十分より、本部会議室にて、緊急理事会。第三代会長決定の重大会議。所詮せん、断りきれず、自分が大任を果たす運命となるか。幾度か断れど、いかにしてもやむをえず、決意せざるをえぬか。

御仏意ごぶつちとはいえ、実に苦しむ。言語に絶する緊張を念おもう。

大御本尊様は宇宙大であり、永遠無量であられる。ただ、おすがり申し上げ、指揮をとる以外の何ものもなし。

青年だ、男子だ。堂々と前進してゆこう。怒濤どとうと嵐あらしと、山と砂漠さばくを乗り越えて――。

身体疲れてならぬ。全学会員のために、大切にせねば――。

一、五月より、教学に力を入れること

二、五月より、座談会を第一義とすること

三、五月より、勤行を根本としゆくこと

四月十二日（火） 曇

身体の調子、よからず。

午後、H理事、Z理事とNにて会う。第三代会長就任への、皆の強い願望の伝言あり。  
私は、お断りをする。



胸奥<sup>きようおう</sup>には、戸田会長の紹<sup>しやう</sup>繼<sup>けい</sup>は決意すれども、形式的には、どうしても返事をできえず。矛盾<sup>むじゆん</sup>あり。わが心――。

会長は、七回忌まで延期の由を伝う。再三、再四、理事会を催している様子。皆の困惑の姿、よくわかる。すまぬ思い、多々。

夜、子供に入学祝いでもと思い、新宿にまわるも、何も買わず家路に。侘<sup>わび</sup>し。

## 四月十四日（木） 雨後晴

朝、雨降れども、次第に晴れる。予報では、一日中雨であつたが。

午前八時三十分、家を出る。足重し。

再び、第一応接室にて、第三代会長の願望をば、理事長はじめ、三理事よりうける。時、十時十分なり。断ることができえず、しぜんに承認の格好となれり。運命いかに。

皆の歡喜の波——皆の小躍りしゆく姿——。

理事長ら、ご遺族も、皆、待っているとのこと。

万事休す。この日——わが人生の大転換の日となれり。

やむをえず。やむをえざるなり。戸田先生のことを、ひとり偲ぶ。ひとり決意す。

四月十五日（金）

曇

次期決戦への、陣列の態勢を考える。

恩師の七回忌を目指して、本門の出発だ。

勝利の連続の四年間でありたい。

昭和三十九年。この年の四月二日と、そして、その年の五月三日の大総会に勝って臨みたい。

戸田会長に、直弟子として育てられたわれだ。訓練に訓練をされてきたわれだ。なんで戦いが恐ろしかろう——ご恩を返す時が来たのだ。

日本の歴史、世界の歴史を創りゆく戦いなのだ。人生にあって、男子にとりて、これにすぐる名誉はなからう。

戸田城聖先生 弟子 池田大作

五月三日、第三代会長就任式決定。  
本部内、次第に多忙になる。

大宮の講義中止。自宅に早目に帰る。

一漁師の子、池田大作、遂に広布の陣頭に起つ。一大事の宿命を知覚するのみ。諸天も、三世十方の仏、菩薩も、護れよかし。

仏の所作ということをし、今回ほど深刻に考えたることなし。重大なる今世の修行を、胸きよう奥おくから、恐懼きようくす。

所詮しよせん、大御本尊様を、持ちたもきることだ。信じ行なじきることだ。強盛な信心が一切である。この仏法の力によりて、全すべてが決定されていくのだ。

## 四月二十五日（月） 曇

二十三日と二十四日にかけて、恩師のご遺族を慰安のため、赤城山麓さんろくに旅す。

大滝あり、山に遊ぶ。自然の溪流に山魚を食す。かつては、若き兵士の訓練地と聞く。

本部、静中に動あり。

『日蓮宗門集』——半ばまで読み進む。真剣に教学に励まねばならぬ。大哲学をもたぬ

指導者やある。教学なき思想実践家やある。

薰風に吹かれつつ、蒲田駅より自宅へ。

静かにして、明るい、幸せいっぱいなのが家かな。

四月二十六日（火）

曇

身体の疲れ、重なる。

本部、静寂のなかに、緊張あり。一日一日、幹部も、真剣になっている。

これからの四年間を、全力を尽くし、勝負を決せねば——。断じて、指揮をとる。

四月度本部幹部会——台東体育館。午後六時、開始。

新会長の挨拶あいさつとなる。諸兄諸姉、皆、心から喜んでくれる。私は、人間らしく、青年らしく、今までと少しも変わらず指揮をとる旨むね、無作の境地で話す。

帰り、T夫妻と新橋にて会食。

心身を鍛えねばならぬことを、痛切に感ずる。

五月より、わが本門の活動か。

〔四月〕——日帰り登山者の休憩所として総本山に建設が進められていた大化城が落成し、四月一日、日達上人猊下が出席して落慶入仏法要が執り行われた。これには池田総務をはじめ代表幹部が参列した。一日から二日にかけて、戸田第二代会長の三回忌法要が執り行われ、一日には大講堂においてお逮夜法要がいとなまれた。日達上人猊下の導師で方便・寿量品の読経のあと、遺族、総務、理事、幹部らが焼香し、ついでお題目講、追憶談と続いた。池田総務は、追憶談のさい、①戸田第二代会長の理念を純粹に、勇敢に実行したものが真実の弟子である②内外の三障四魔を呼び起こし一生成仏、広宣流布を目指そうと挨拶した。翌四月二日、戸田第二代会長の三回忌法要が総本山客殿でいとなまれ、日達上人猊下の導師により読経、焼香のあと、墓参した。これには四千五百人が参列した。

四月九日、緊急理事会において全会一致で池田総務を第三代会長に推戴することが決定され、十一日に、理事室を代表して理事長らが池田総務に会長就任を懇請したが、池田総務は回答を留保し、十二日に辞退する旨を伝えた。理事長らは十三日に再び会長就任を懇請し、池田総務は再び回答を留保した。そして四月十四日、池田総務は理事長らより三たび会長就任を懇請され、遂

に内諾の意を表明した。これをうけて四月十九日に学会本部で緊急大幹部会が開かれ、池田総務は第三代会長に推戴された。

二十六日に台東体育館で開かれた四月度本部幹部会で、池田会長は、①恩師の教えを一筋に実践②民主主義の縮図であり、広布の最直道である座談会を推進していこう③教学を真剣に研鑽しよう、と挨拶した。

安保反対の請願は、四月二十五日までに衆参両院で二万九千通、署名者百九十万人に達し、国会史上空前の請願となった。二十六日、全学連一万数千人が行動を起こし、国会前に約六千人がデモを行った。主流派の一部は装甲車を乗り越えて国会正門に突進し、十七人が現行犯逮捕された。

五月三日（火） 晴

創価学会第三代会長に就任。

日大講堂にて十二時——推戴すいたいの総会開始。

昨夜来の疲れ、少々あり。

恩師の喜び、目に浮かぶ。肅然<sup>しゆくぜん</sup>たり。

生死を超え、今世の一生の法戦始む。

わが友、わが学会員、心から喜んでくれる。

将らしく、人間らしく、青年らしく、断じて広布の指揮を。

五月四日（水）

曇

疲れる。

第一段階の闘争の目標——。



恩師の七回忌までの四年間の構想を練る。

ただ一筋に、昭和三十九年を。

諸天の加護を、深く知覚す。われ、地涌じゆうの菩薩なり。

大幹部会——皆、嬉うれしそう。

新たに学会は回転し始めた。うなりをもつて。躍動の生命体。

薰風くんぷう。蒲田駅より、ひとり静かに。

『日蓮宗門集』——大半を読了。

五月五日（木）

雨後曇

学会本部、休み。

動中静——。

S 夫妻とわが一族で……Tに行き、帰り、横浜にて会食。疲労深し。

全学会員を、全民衆を愛しきれる、力と健康を持ちたい。

久方ぶりに和服、一日中――。

## 五月六日（金）　曇夜雨

明日より、地方指導の第一歩を。

まず、苦楽を共にした関西に決定。

同志の嬉し<sup>うれ</sup>そうな顔が目に見える。

少々、御書を開く。指導のため。

一人ひとりに、親しく接しよう。一人ひとりと語り、論じ、そして、生涯、苦楽を共に

してもらおう。これが私の信条だ。

私は進む。私は戦う。私は苦しむ。

如来の使い、大衆の味方の誉れ高き、無冠の勇者として。

五月十三日（金）

快晴

総本山富士大石寺において、日達上人<sup>げいか</sup>猓下ご招待による園遊会。

午後一時より。

青天<sup>せいてん</sup>のもと、全大幹部と共に、境内の屋台造りの店で、いろいろなご馳走<sup>いただ</sup>を戴く。

猓下の申さる——今回を第一回として、毎年春に必ずご招待してください、と。

いよいよ総本山に忠誠を誓う決意、大。

“大客殿建立地”の標識を、猊下と共に建てる。

新たなる大宗門の黎明<sup>れいめい</sup>、学会の躍進<sup>とくしん</sup>の秋、遂に來る思い、大。

〔五月〕——五月三日、第二十二回本部総会が開催され、日達上人猊下御臨席のもと、第三代会長就任式が挙行された。東京・日大講堂を埋め尽くした会員代表約二万人は、歓呼の叫びをあげて新会長の誕生を祝った。池田会長は、会長就任の挨拶で、「本日より、戸田門下生を代表して、化儀の広宣流布をめざし、一步前進への指揮をとらさせていただきます」と烈々たる広布達成への決意を披瀝し、恩師戸田城聖第二代会長の七回忌までの目標として、①三百万世帯の達成②大客殿の建立③宗教界の革新、の三方針を発表した。

五月十三日、池田会長は大客殿建立敷地に杭を打ち、日達上人猊下と共に土を盛った。終了後、日達上人猊下主催の会長就任を祝う園遊会が、総本山・蓮葉庵で開かれた。

歓喜の渦が日本全国に津波のような勢いで広がるなか、池田会長は就任早々、五月八日には関西へ。関西総支部幹部会で大阪の友を激励するや、翌九日には東京へ戻り、九日の女子部幹部会、十日の男子部幹部会に出席して共戦の決意を述べ、十六日、十七日に行われた在京支部合同幹部会で東京の各地域の友を激励した。二十二日には札幌・中島スポーツセンターで開かれた北海道総支部幹部会に出席して、再び東京へ戻り、二十四日、二十六日には在京各支部の合同幹部会に駆けつけるなど、文字どおり東奔西走の激闘を展開していった。

## 後 記

「池田大作全集」刊行委員会

一九九〇年五月三日に本全集の第三十六巻「日記〔上〕」を発刊して、ちょうど一年が経った。ここに、多くの読者諸氏から寄せられた熱い要望に応え、第三十七巻「日記〔下〕」を上梓<sup>じようし</sup>することができ得たことを心から欣<sup>よろこ</sup>びとするものである。本全集として、今回の配本は第十一回目である。

\*

本全集では「若き日の日記」を、次のように二巻に分けて収録している。

第三十六巻「日記・上」(昭和二十四年五月～昭和三十年十二月 六年八か月)

(戸田理事長経営の日本正学館入社 二十一歳～二十七歳)

第三十七巻「日記・下」(昭和三十一年一月～昭和三十五年五月 四年五か月)

(二十八歳～三十二歳 第三代会長就任まで)

なお、本編の収録に当たって、著者の了解を得て、次の諸点について改訂・整理を加えたことをお断りする。

一、御書の引用は、『新編日蓮大聖人御書全集・日蓮正宗大石寺版』（創価学会発行）に依った。

一、読者の理解を助けるために、毎月末尾に、その当時の時代背景を入れた。

一、登場する人名については、大体、イニシャルで表記した。

一、読みやすくするため、改行・行あきを整備した。

一、引用文の旧字体は新字体に改め、読みがなは適宜<sup>てきぎ</sup>ほどこした。

\*

「日記〔下〕」の時代背景を理解していただくために、簡単に解説しておきたい。

昭和三十一年（一九五六年・二十八歳）——著者は、当時、すでに創価学会の中枢<sup>ちゅうしう</sup>に重き

をなす参謀室長の要職にあつて活躍していた。この年は、学会が過去数年間で築いた妙法の勢力を土台として、いよいよ仏法を基調とした本格的な文化活動への新展開をめざしていた。関西方面の陣頭指揮をとった池田室長は、幾度となく東京・大阪間を往復した。そして、五月、大阪支部は一万一千百十一世帯の大折伏を成し遂げ、広布史に不滅の金字塔を打ち立てたのである。この奔流<sup>ほんりゅう</sup>のごとき勢いは、ついに不可能とされた参議院議員選

拳・大阪地方区の大勝利をもたらし、世間を驚倒せしめたのである。きようとう

一方、池田室長の病魔との戦いも常に続いていた。戸田城聖会長の信頼を一身に受けて、どうほんせいそう東奔西走する日々は、一人立つ若き勇者として、身の休まる暇もない激動の日々であつた。

昭和三十三年（一九五七年・二十九歳）——昭和二十六年五月三日の戸田第二代会長就任以来、七年目を迎え、戦後における広宣流布の第一期の締め括りくわに当たる。広宣流布の多角的進展とともに、三障四魔の嵐もいやまして強く吹き荒れた。五月には「炭労問題」が起き、さらに七月になると、その年、四月に行われた大阪参議院補欠選挙の戸別訪問教唆きようさうさの容疑で、無実の池田室長が捕らえられるという「大阪事件」が起きている。（なお、この事件は、四年半後の昭和三十七年一月二十五日、大阪地裁により無罪判決が下り、学会の正義が証明されたことは当然である）

しかし、学会の怒濤どとうの前進はいささかもゆるがず、池田室長の毅然きぜんたる指揮は、一日も休むことなく続けられていった。こうして十二月二十五日、七年前には夢のように思われていた、念願の七十五万世帯を見事に完遂かんすい。まさに驚異的發展であつた。

昭和三十三年（一九五八年・三十歳）——三月一日に総本山で大講堂落慶法要、そして三月十六日には、青年部六千人が総登山して「広宣流布の記念式典」が行われた。びようしやう病床に

あった戸田会長も、総本山において最後の指揮をとり、「創価学会は宗教界の王者である」と宣言。

ここに、戸田会長が就任時に掲げた三大目標、すなわち①七十五万世帯の達成、②王仏冥合の展開、③総本山に本門大講堂の建立寄進、はすべて成就されたのである。

四月二日、戸田城聖第二代会長は、すべての願業を成就し、一身を広布に捧げ、五十八歳の怒濤のごとき生涯を閉じた。そして遺<sup>のこ</sup>された創価学会の一切の責任は、愛弟子<sup>またでし</sup>である池田室長に託されたのであった。

一か月後の五月三日、第十八回本部総会が開かれた。正面には、恩師戸田第二代会長の遺影とともに団結の二字が大きく掲げられていた。その席上、池田室長は堂々たる雄姿で「七つの鐘」と呼ばれる創価学会の長期ビジョンを発表。全学会員に次の前進への、大いなる希望と勇気を与えたのである。

すなわち、昭和五年から昭和五十四年までを七年間ごとに区切り、第一の鐘から第七の鐘をめざして、広宣流布の総仕上げをしていくとの構想であった。ちょうど恩師戸田会長の逝去<sup>せいぎよ</sup>は第四の鐘の終了に当たり、この総会を起点として、新たに第五の鐘を打ち鳴らしつつ、恩師の七回忌をめざして、なお一層団結して前進することを誓い合ったのである。



六月、池田室長は総務に就任。事実上、創価学会の最高責任者となった。世間からは戸田会長亡き後、「創価学会は空中分解するだろう」と批判されながらも、池田総務の陣頭指揮によって、広宣流布の歩みは止まるどころか、着実な進展をみせたのである。

昭和三十四年（一九五九年・三十一歳）——「黎明の年」と銘打たれた。これは、池田総務の発案により、その年の目標を明確に意義づけたのである。

昭和三十五年（一九六〇年・三十二歳）——「前進の年」であった。

恩師の三回忌法要を終えた五月三日、全学会員の大歓喜のうちに、待ちに待った第三代池田会長が誕生したのである。青年会長は、烈々たる気迫で叫んだ。「若輩ではございませうが、本日より、戸田門下生を代表して、化儀けぎの広宣流布をめざし、一步前進への指揮をとらせていただきます」と。恩師の七回忌までに、①三百万世帯の達成、②大客殿の建立、③宗教界の革新、との三大目標を発表した。こうして、学会員の喜びは会内に横溢おういつし、その後、わずか二年半で、第五の鐘の七年間の目標である三百万世帯を達成するといふ、驚異的成果をもたらすのである。

\*

この「若き日の日記」は、昭和三十五年（一九六〇年）五月、著者が創価学会第三代会長に就任し、恩師戸田城聖先生の後継者として、壮大な広宣流布実現を目指して、本格的

に第一步を踏み出したところで終わっている。恩師に師事した期間は生前、死の直前までの約十年間であるが、以後三十年を越える今日に至るまで、ひたすら弟子の道を貫き、師の遺命をことごとく実現するとともに、二十一世紀の人類の平和を築く世界広布への道を走り続けている。

創価学会は、強い師弟の道に貫かれている。これこそ学会精神の真髓しんずいであり、誇りである。そして、そこにこそ強靱きやうじんな信仰心の源泉がある。学会の歴史をかえりみると不思議に符節を合わせたように、牧口常三郎初代会長が四十九歳の時に、戸田城聖第二代会長は二十歳で巡り会っており、また戸田第二代会長が四十七歳の時に、十九歳の著者が運命的な出会いをしている。共に二十八、九歳の年の開きであった。

今日、著者が仏法の人間主義、生命主義を基調に文化、教育、平和のために世界を駆け行動する原形が、人生の師を求め師と共に戦ったこの青春の日々の記録の中に綴つづられている。いふなれば、現在そして将来の創価学会のすべての原点が、この書のなかに刻み込まれているといってもよいだろう。この書から学ぶものはきわめて多いと信ずるものである。

# 池田大作全集 第三十七卷 日

発行日 一九九一年五月三日

著者 池田 大作

発行者 秋谷栄之助

発行所 聖教新聞社

●一六〇 東京都新宿区信濃町一八

電話〇三―三三三三―六一一一（大代表）

振替口座 東京五―七九四〇七

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 牧製本印刷株式会社

\*

定価はケースに表示してあります

© 1991 D.Ikeda Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします